

中国の少数民族ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の文化：
黒竜江省同江市・街津口村における魚の利活用に基づく生活文化

2024年9月

千葉大学大学院 融合理工学府
創成工学専攻 デザインコース

孔春

(千葉大学審査学位論文)

中国の少数民族ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の文化：
黒竜江省同江市・街津口村における魚の利活用に基づく生活文化

2024年9月

千葉大学大学院 融合理工学府
創成工学専攻 デザインコース

孔春

要旨

本論文は、中国黒竜江省同江市街津口村におけるホジェン族の伝統的服飾魚皮衣に着目し、それに関する生活の諸側面の調査に基づき、その文化的特質を明確化することを目的としたものである。加えて、内発的発展論の観点から、魚皮衣文化を活用する地域振興の指針を導出することを目指した。

調査・考察の結果とそこから得られた知見は、概ね以下の通りである。

第一章では、ホジェン族の伝統的な服飾魚皮衣に着目し、それらに関する文献調査ならびに現地調査を通して、当該地域の特有の地理的環境、民族、信仰、魚皮衣の歴史的発展段階、変容、発展の現状を俯瞰した。

第二章では、現地調査により収集した147点の魚皮衣の実物や写真資料の中から、48点が日常生活で使用される伝統的な魚皮衣と小物類であることを確認した。これらの魚皮衣と小物類について、形態、使用方法、素材、紋様などの要素を整理し分析することで、日常生活におけるホジェン族の人びとが使用する伝統的な魚皮衣の特質を明らかにした。

第三章では、現地調査により収集した25点の魚皮衣の神服の実物や写真資料のうち15点が非日常生活でシャーマンが使用される伝統的な魚皮衣の神服であることを確認した。これらの神服に関して、構成、形態、紋様、使い方などの要素を整理し分析し、さらに、伝統的な魚皮衣の神服の特質を明らかにした。

第四章では、ホジェン族の伝統的な服飾である魚皮衣の制作における素材の入手に関連する一年間の活動について、文献調査と現地調査から把握し記録した。そして、これらの活動における素材の入手方法をまとめた上で、その特質を明確にした。

第五章では、現地調査および聞き取り調査に基づき、伝統的な服飾魚皮衣の素材の貯蔵や事前の加工、その縫製、修繕などの一連の制作工程を記録した。また、魚皮衣の制作技術を把握するとともに、その特質を明確にした。本章では、主に女性が着用する袖あり上着とズボンの制作技術を取り上げた。

上述した調査・考察の結果、伝統的服飾「魚皮衣」は、ものづくりの素材としての循環的使用のみならず、ホジェン族のさまざまな生活の知恵を世代間で伝承するための媒体となっていることがわかった。また、当該地域固有の人と自然と神との共生・共存の生活様式を築く媒体でもある。そして、ホジェン族の全員の参画に基づき形成された魚皮衣は、ホジェン族の民族的・文化的アイデンティティを反映するものであり、人びとのコミュニティへの帰属意識をより強固なものとした。魚皮衣は、関連する「ものづくり」「生活づくり」「人間関係づくり」「生活空間づくり」の知の相互作用は、今後も持続可能な「資源循環型の社会」を維持する上で重要な要素である。終章では、当該地域における住民78人のアンケート調査に基づき、人びとの「魚皮衣文化」を巡る地域振興の認識を分析し、まとめた。さらに、得られた知見を通じて、今後、ホジェン族が中心となって構築される魚皮衣文化を活用した地域振興の方策を導出し、それらを実施した。そして、自律的地域づくりを持続的に進めるために、提案の実施中に得られた評価をまとめた上で、今後の方策を導出した。

Abstract

This study focuses on the traditional fish-skin clothing of the Hezhe people in Jiejinkou Village, Tongjiang City, Heilongjiang Province, China, aiming at clarifying its cultural characteristics by investigating various aspects of its life. In addition, from the perspective of endogenous development theory, it proposes guidelines for utilising the culture of the fish skin clothing for regional development.

The results of the survey and expedition and the knowledge gained are broadly as follows:

In Chapter1, through a literature survey and fieldwork on the traditional dress of the Hezhe people, we provide an overview of the region's unique geography, ethnicity, beliefs, the historical development stages of fish-skin clothing, as well as its changes and current development.

In Chapter2, of the 147 pieces of physical and photographic data of fish skin clothing collected through field surveys, 48 pieces were identified as traditional fish skin clothing and accessories used in daily life. By collating and analysing the form, method of use, material, pattern and other elements of these fish skin clothing and small items, the qualities of the traditional fish skin clothing used by the Hezhe people in their daily lives were clarified.

In Chapter3, of the 25 pieces of physical and photographic information on fish-skin clothing collected through the field survey, 15 were confirmed to be traditional fish-skin clothing sacred garments used by shamans during festivals such as rituals. By collating and analysing the elements of the composition, form, pattern and method of use of these sacred garments, the characteristics of the traditional fish skin clothing sacred garments were further clarified.

In the Chapter4, activities related to acquiring materials for making traditional clothing, fish skin clothing, during the year for the Hezhe people are documented through literature surveys and fieldwork. At the same time, the methods of acquiring materials in these activities are summarised and their qualities are clarified.

In Chapter5, through fieldwork and interviews, a series of production processes such as storage of materials, processing, sewing and repairing of traditional fish skin clothing were documented. It also grasped the techniques of making fish skin clothes and clarified their qualities. This chapter mainly examined the production techniques of sleeved tops and trousers worn by women.

Through the investigation and study mentioned above, it is concluded that the traditional clothing 'Fish Skin Clothes' are not only recycled as materials, but also a medium for passing down the wisdom of various life styles of the Hezhe people. In addition, it is also a medium to build a lifestyle of coexistence between humans and nature, and between humans and gods in the region. The fish-skin clothing reflects the ethnic and cultural identity of the Hezhe people and enhances their sense of belonging to the community. The interaction between the knowledge of 'manufacturing', 'creation of lifestyle', 'relationship building' and 'creation of living spaces' involved in the fish-skin clothing is important for the future maintenance of sustainable livelihoods. The final chapter analyses and summarises people's perceptions of the revitalisation of areas related to the 'fish-skin clothing culture' through a questionnaire survey of 78 residents. Based on the knowledge gained, the final chapter

proposes and implements measures to promote the revitalisation of the region through the construction of a fish-skin clothing culture centred on the Hezhe people. The evaluation of the implementation process is summarised, and future strategies are proposed for the continuous promotion of self-regulatory district building.

目次

第一章：序章.....	1
1. 研究背景と動機	2
2. ホジェン族の服飾文化に注目した経緯	3
3. 研究目的	4
4. 研究方法	4
5. 街津口村地域の概要	5
5.1. 街津口村地域の地理的環境	5
5.2. 街津口村地域の民族	6
5.3. 街津口村地域の信仰	7
6. 先行研究	7
7. 現地調査	9
7.1. ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の変容	9
7.2. 伝統的服飾「魚皮衣」の伝承を取り巻く現状	9
7.2.1. 伝統的服飾「魚皮衣」に対する保護・伝承政策	9
7.2.2. 伝統的服飾「魚皮衣」に対する伝承現状	10
8. アンケート調査	12
注および参考文献	13
図の出典	14
第二章 日常生活にみられるホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の特質.....	15
1. はじめに	16
2. 先行研究	16
3. 研究方法	16
4. 日常生活にみられる魚皮衣	18
4.1. 袖あり上着	20
4.2. 袖なし上着	21
4.3. 長袍	23
4.4. ズボン	24
4.5. 靴	25
4.6. 脚絆	25
4.7. 手袋	26
4.8. 煙荷包	26
4.9. 火鎌袋	28
5. 魚皮衣の素材	30
5.1. 魚皮衣の素材にみる魚資源の利活用	30
5.2. 魚皮衣の素材にみる動物資源の利活用	32
6. 魚皮衣の紋様	32
6.1. 魚皮衣の紋様に基づく分類	32

6.2. 魚皮衣の紋様の種類と意味	33
7. 魚皮衣の特質に関する考察	35
7.1. 日常生活からみた魚皮衣の特質	35
7.1.1. 生者が物故者に祈願の伝達の媒体	35
7.1.2. 多様な暮らし方の形成への促進の媒体	35
7.1.3. 「互敬互愛」の人間関係の構築への促進の媒体	35
7.2. 素材からみた魚皮衣の特質	36
7.2.1. 「人と自然との共存・共生」の集団意識の構築への促進の媒体 ..	36
7.3. 紋様からみた魚皮衣の特質	36
7.3.1. 長寿、健康、豊漁、豊猟、厄除け、子孫繁栄、生命の転生、強 い生命力などの願い媒体	36
8. おわりに	37
注および参考文献	38
図の出典	39
第三章 ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の神服の特質	40
1. はじめに	41
2. 先行研究	41
3. 研究方法	41
4. ホジェン族のシャーマンの概況	42
5. 神服の形態的・意味的特質	45
5.1. 神帽	45
5.2. 神衣	47
5.3. 神裙	50
5.4. 神腰帯	52
5.5. 神靴	53
5.6. 神手袋	53
6. 神服の紋様	53
6.1. 神服の紋様に基づく分類	53
6.2. 神服の紋様の種類と意味	54
7. 非日常生活にみられる神服	57
7.1. 「踊鹿神」祭り・求子式	58
7.2. 葬儀	59
8. 魚皮衣の神服の特質に関する考察	61
8.1. シャーマン用の神服からみた神服の特質	61
8.1.1. ホジェン族の世界観への反映媒体	61
8.2. 神服の構成・紋様からみた神服の特質	61
8.2.1. 「神服」と「神」「シャーマン」「死者」「病人」との関係づくり	61
8.2.2. 「神服」と「神像」の関係づくり	62
8.3. 非日常生活にみられる神服の特質	63

8.3.1. 踊鹿神祭り・求子式からみたシャーマンとホジェン族の「生」と「死」の運命の共同体の関係づくり	63
8.3.2. 葬儀からみた「魂の存在・不滅・転生の思想」「人の生死の循環の思想」	63
8.3.3. 葬儀からみた「生者と死者との関係づくり」	63
9. おわりに	63
注および参考文献	64
図の出典	64
第四章 ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の素材の入手方法の特質	65
1. はじめに	66
2. 先行研究	66
3. 研究方法	66
4. 魚皮衣の素材と特徴	66
5. 魚の捕獲に関する一年間の活動	68
5.1. 四季と伝統漁	70
5.2. 伝統的漁具	71
5.2.1. 銚	71
5.2.2. 樺皮船	75
5.2.3. 漁網	78
5.2.4. 他の漁具	79
5.3. 適度の漁獲	79
5.4. 伝統的祭祀	80
5.4.1. 山の神祭り	80
5.4.2. 川の神祭り	81
5.4.3. 鮭の神祭り	81
5.5. 宗族の協同作業	81
5.5.1. 漁の前	81
5.5.2. 漁の最中	83
5.5.3. 漁の終了後	83
5.6. 禁忌の遵守	83
6. 素材の入手の特質に関する考察	84
6.1. 「ものづくり」	84
6.2. 「ことづくり」	84
6.3. 「人間関係づくり」	85
6.4. 「生活空間づくり」	86
6.4.1. 現世空間と霊的空間づくり	86
6.4.2. 「聖」と「俗」の空間づくり	86
7. おわりに	86
注および参考文献	88

図の出典	88
第五章 ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の制作技術の特質	89
1. はじめに	90
2. 先行研究	90
3. 研究方法	90
4. 魚皮衣の制作技術	91
4.1. 事前の魚の貯蔵(禁漁期以外の月)	92
4.2. 魚皮の加工(5月-12月)	92
4.2.1. 事前の準備作業	93
4.2.2. 魚皮の剥ぎ	93
4.2.3. 魚皮の洗浄	94
4.2.4. 魚皮の乾燥	94
4.2.5. 魚皮の鞣し	96
4.2.6. 魚皮の裁断	97
4.2.7. 魚皮の組合せ・縫合	97
4.2.8. 魚皮の染色	99
4.3. 魚皮衣の縫製(12月-来年2月)	101
4.3.1. 魚皮衣の縫合	101
4.3.2. 紋様の制作・裁断・貼り	102
4.4. 魚皮衣の修繕・保存(通年)	103
5. 魚皮衣の制作の特質に関する考察	104
5.1. 魚皮衣の制作・修繕・保存にみる魚皮衣づくりの特質	104
5.1.1. 「ブリコラージュ」に基づく生活の知恵	104
5.2. 魚皮の加工にみる魚皮衣づくりの特質	105
5.2.1. 人びとの「五感」の体得、「体温」と「環境温度」の利活用の知恵..	105
5.2.2. 自然崇拝、自然との一体感	105
5.3. 魚皮衣の制作の全工程にみる魚皮衣づくりの特質	105
5.3.1. 人間関係づくり、コミュニケーション機会の創出	105
5.3.2. 「自然」「人」「神」「住宅」が一体化した生活空間との強い結びつき	105
6. おわりに	106
注および参考文献	108
終章	109
1. 伝統的服飾「魚皮衣」の文化的特質の考察	110
1.1. 伝統的魚皮衣の制作の特質.....	110
1.1.1. 男女共同参画社会の構築媒体	110
1.1.2. 宗族男性が主体となる人・自然・神・住宅が一体化した臨時的な生	110
活空間の構築媒体	110
1.1.3. 宗族女性と家族全員が主体となり、人・自然・神・住宅が一体化し	112
た固定の生活空間の構築媒体	112

1.1.4. コミュニケーションが活性化し、社会全体の一体感が醸成された生活空間の構築媒体	113
1.2. 伝統的魚皮衣の使用の特質	113
1.2.1. 地域のアイデンティティを構築する媒体	113
1.2.2. 地域内の社会的な結びつきが強化される媒体	114
1.2.3. 人・自然・神との共生に基づく資源循環型社会の構築媒体 ...	114
1.3. 考察結果	116
2. 伝統的服飾「魚皮衣」の文化の重要性	116
3. 伝統的服飾「魚皮衣」の文化の現状	117
3.1. 分析方法	118
3.2. 調査結果	118
3.3. 結論	133
4. 内発的發展論に基づく今後の指針の導出.....	133
4.1. デザインの提案の導出・実施	134
4.2. デザイン提案の試行評価および考察	149
4.3. 提案の実施評価に基づく今後の方策の導出	153
4.3.1. 第二段階の方策の導出	154
4.3.2. 第三段階の研究課題の導出	158
謝辞	160
付録	163
1. 第一章の付録	164
2. 第二章の付録	167
3. 第三章の付録	183
4. 第四章の付録	188
5. 第五章の付録	198
6. 終章の付録	206
7. 本審査発表の原稿	236
8. 本審査発表スライド	249

第一章：序章

1. 研究背景と動機

「都市と農村の経済格差の拡大」という社会問題があらわとなっている今日の中国においては、急速な都市化の進展に伴い、農村地域[注1]では毎年、約1000万の人口が都市に移住している(徐乾良、2024)。中国国家统计局によると、農村地域の人口は1998年の8.75億人から2020年には4.9億人に減少した。2035年までに、農村地域における人口が3.5億人まで減少すると予測されている。農村人口の急激な減少に伴い、中国の自然村の消滅は加速している。毎日約80の村落が自然消滅している(馮驥才、2012)。また、農村人口の高齢化、伝統的な生活文化の衰退などの問題も現われている。このような状況は、中国の農村における地域づくりにおいて、回避できない社会的課題の1つである。

1978年の改革開放以来、中国で都市と農村の経済格差を縮小するために、外部依存型の発展理論を主導とした農村社会の近代化の発展対策が実施されているが、2021年以来、農村の急速な消滅に伴い、中国の習近平総書記は、「農村の貧困地域の発展は、内在的力(潜在力)に依存する必要がある。」という観念を提唱した[注2]。同年の4月に「中華人民共和国農村振興促進法」が全国人民代表大会常務委員会で成立し、6月1日から施行された。この法律の適用は、農村振興戦略の全面的な実施、農村の文化振興、生態振興などの促進の活動を含む。農村振興の促進は、優秀な伝統文化の伝承発展等の面での特有の機能を十分に発揮させるべきであることを基本としている。また、今後、地域住民の主体性と意向を十分に尊重し、人と自然が調和共生することを保障することを制定した[注3]。しかしながら、2023年1月以前に、新型コロナウイルス感染症の影響下で、中国の各地域で都市封鎖の対策が行われ、当該地域住民と外部者との接触が禁止されたため、農村地域振興に基づく政策実施の展開に影響した。中国の農村地域振興が注目される今日では、今後、農村地域の社会、文化、資源などの実情に合わせ、内発的発展論を基礎として、地域住民を主体とする農村の地域づくりの適切な対策を導出することが、重要である。

以下では、「内発的発展論」について概説してきたい。内発的発展とは、1970年代になって定着してきたとされ(宮本憲一、1989)、スウェーデンのダグ・ハマーショルド財団が1975年の国連経済特別総会で、報告した「なにをなすべきか」という報告書において提起された「もう一つの発展」のことである。この原則として以下の5点がある。(1)Need-oriented. すなわち、発展の目的が地域やコミュニティの基本的なニーズに向けられていること。発展の目標が、人間の基本的な物質的・精神的な生活を充実させること。(2)Endogenous. すなわち、内発的であること。それぞれの地域やコミュニティに適した多様な発展のあり方を尊重すること。(3)Self-reliant. 自立的であること。(4)Ecologically sound. 生態学の視点から健全であること。(5)Based on structural transformation. 経済社会構造の変化に依拠していること[注4]。その後、1976年に、日本の社会学者の鶴見和子によって「内発的発展」の概念が提唱された[注5]。内発的発展の考え方は、地域住民を主体とし、地域の固有の社会秩序に適応し、自然との共生を尊重するものである。そしてそれとともに、当該地域の固有の知識、伝統的文化、資源などの要素を統合して活用することで、地域の伝統的・個性的な文化を維持し、持続可能的に発展する道を推進することに焦点を当てている。すなわち、内発的

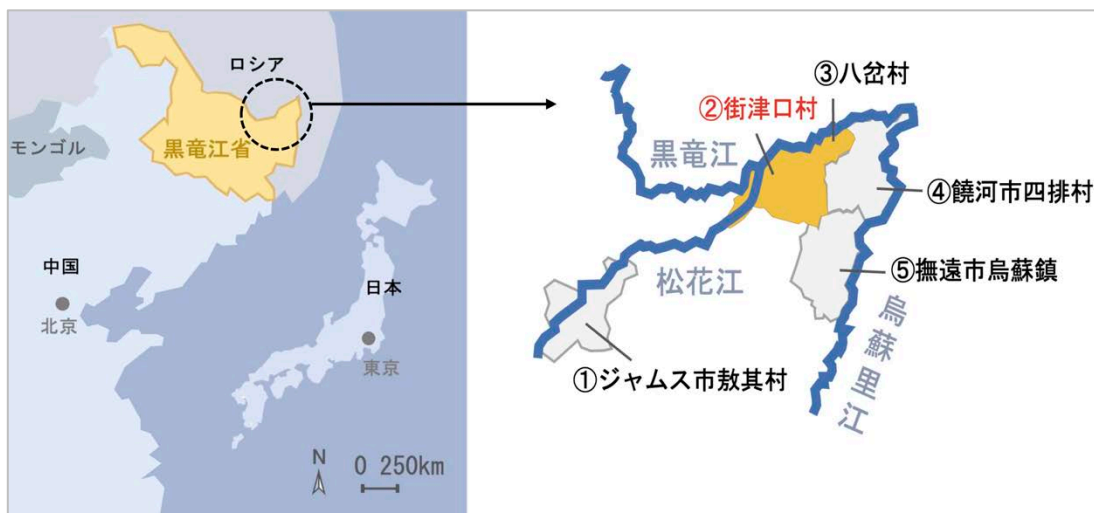


図 1-1 ホジェン族の人口の地域分布

発展は、地域主義であり、地域・文化の振興を支える理論となっている。

2. ホジェン族の服飾文化に注目した経緯

本研究で取り上げる「ホジェン(赫哲)」族は、中国の少数民族のうち、人口が極めて少ない民族の一つである。約 5,000 人の人口をもつホジェン族は、かつて、中国北東部の黒竜江、松花江、ウスリー川流域で漁獵生活を営んでいた北東アジアツングース系民族の一派であった。この地域は、「農耕が行われていない荒涼な地域」として知られる「北大荒」[注 6]に位置し、その存在は西漢時代(紀元前 202 年～)の「山海経」にも記述されている。また、ロシアと中国の国境にあり、戦争や疫病が多発する地域でもあった。1663 年ごろ、人びとは松花江下流と黒竜江下流の南岸で生活を送っていたために、「ホジェン族」と呼ばれる(『吉林通志』と『聖武記』の記述により)。ホジェン族の意味は「川の下流に住む人びと」である。このような厳しい自然・社会環境のなかで、この地域に住むホジェン族の人口は 1945 年、300 人までに減少した[注 7]。

現在、ホジェン族の定住地は主に中国黒竜江省のジャムス市敖其村、街津口村、八岔村、饒河県四排村、撫遠県烏蘇鎮の五つの地域に分布している(図 1-1)。そのうち、街津口村は、古くから「魚皮部落」として知られている[注 8]。その理由は、かつて、ホジェン族が長期間にわたって魚の皮を活用し、服飾をつくる生活を送っており、地域外の人びとから「魚皮部落」と呼ばれていたためである。このことから、街津口村における「魚皮服飾」が地域資源として存在していることがわかる。「魚皮」は、ホジェン語で「イマハ・ナサニ」と呼ばれた。魚皮を使用して制作する服飾は、地域外の人びとに中国語で「魚皮衣」と呼ばれる[注 9]。この名称は現在でも、地域内のホジェン族の人びとに使用されている。ホジェン族の人びとが長い歴史のなかで魚皮衣を着用していたため、その地域に特有の魚皮衣文化が形成されていった。また、2006 年に、ホジェン族の魚皮衣の制作技術が国务院の第一批国家級非物質文化遺産名録(番号Ⅷ-85)に批准し登録された。

しかしながら、近年、街津口村では、ホジェン族の学齢児童の約97%〔注10〕は同江市の学校に通い、若者は同江市に出稼ぎに行くようになった。現在、同村におけるホジェン族の人口は、約548人まで減少しており、全村の人口数12%に過ぎない〔注11〕。この「若年層の流出」という社会現象が著しくなり、ホジェン族の世代を超えた交流機会が減少し、長い間この地域で育まれてきた服飾魚皮衣文化の交流、共有、継承が途絶え始めている。このような状況が続くと、その土地固有の服飾文化が衰退し、文化的アイデンティティが失われ、家族間の結託意識や帰属意識が弱まる可能性がある。一方、若者たちは郷土の伝統的服飾である魚皮衣への関心を著しく低下させている。

このような状況において、今後、街津口村におけるホジェン族のくびとが長年にわたって育んできた生活文化を維持し、継承し、持続的に発展させるために、当該地域の伝統的な魚皮衣の文化的特質を明らかにすることが、本研究の焦点となろう。

3. 研究目的

本論文は、中国黒竜江省同江市街津口村を研究の対象地とし、文献調査および現地調査を通じて、ホジェン族の伝統的な魚皮衣の文化的特質を明確にすることを目的とする。さらに、内発的発展論の観点から、魚皮衣文化を活かす地域振興の方策を導出することを目指す。

4. 研究方法

本論文の研究方法は、以下の通りである。

- (1) 文献調査 「魚皮衣」に関する史書、書籍、学術論文を通して、ホジェン族の特有の魚皮衣の文化が形成された要因を把握した。また、魚皮衣の歴史的発展段階を俯瞰した。
- (2) 現地調査 2016年9月から2024年3月にかけて、計5回延べ109日におよぶ現地調査を行った。調査対象数は、合計31人である。日常生活で使用する147点の魚皮衣と小物類、および非日常生活に着用する25点の魚皮衣の神服の実物や写真資料を収集した。また、ホジェン族の伝統的な魚皮衣の変容と現状を把握した。
- (3) 聞き取り調査 79回の聞き取り調査により、収集した魚皮衣のうち、48点が日常生活に使用される伝統的な魚皮衣・小物類、25点が非日常生活に使用される伝統的な魚皮衣の神服であることを明らかにした。さらに、ホジェン族の使い手とつくり手を主な対象として、聞き取り調査を行い、伝統的魚皮衣とその神服の類型、形態、使用方法、素材、紋様、素材の入手方法、制作技術などを調査し、把握した。
- (4) 魚皮衣の文化的特質の抽出 (1)～(3)に基づき、魚皮衣とその神服、素材の入手方法、その制作技術の特質を明確にするとともに、得られた魚皮衣の制作と使用の2つの側面の知見に基づいて、伝統的な魚皮衣の文化的特質を明らかにした。
- (5) アンケート調査 ホジェン族の魚皮衣文化に対する認識を把握するために、2019年9月～10月に、当該地域の住民への1回目のアンケート調査を実施した。さらに、ホジェン族の魚皮衣の紋様とその文化を再認識してもらうことを目的として、2023年12月～2024年1月に、2回目、3回目のアンケート調査を実施した。

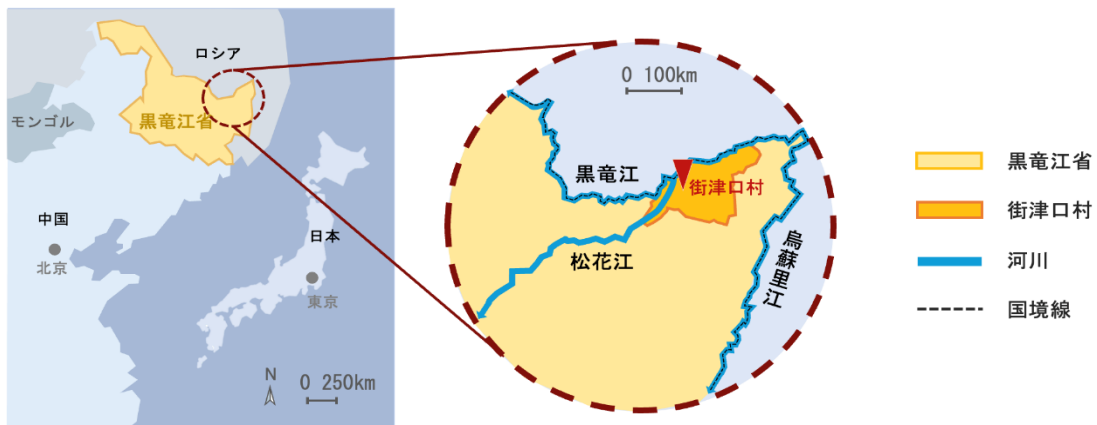


図 1-2 街津口村地域

(6) 地域振興の方策の導出 (4)～(5)に基づき、内発的発展論の視点から、魚皮衣文化を活用する今後の地域振興の方策を導出した。

5. 街津口村地域の概要

5.1. 街津口村地域の地理的環境

街津口村(E132° 50'、N47° 56')は、図 1-2 のように、中国東北部における黒竜江省の黒竜江とその中流部である松花江の二つの河川が合流する厳寒地である。中ロシアが隣り合う地域に位置し、黒竜江を隔ててロシアと相対する。現在、ホジェン族の五つの定住地のうち一つである。当該地域の総面積は 43 万㎡であり、そのうち、耕地面積 12.48 万㎡、山林の面積 25.5 万㎡、水域面積 8.2 万㎡である。



図 1-3 ホジェン族の定住生活区域と漁獵生活区域

当該地域は、四季の変化に富んでいる。気候区分は亜寒帯であり、季節風の影響を受け降水量が多くかつ蒸発量が少なく、豊かな樹木が繁茂し森林が形成され、水源の涵養に有利である。同村は西・南・東の三方が街津口山に囲まれ(図 1-3)、北部には永久凍土と季節凍土の層が存在し、融雪流出水による水資源がきわめて豊富である。当該地域の水系は、黒竜江と松花江の支流水系に属し、当該地域を流れる黒竜江は、長さ約 4,000km で世界 9 位を誇り、オホーツク海に注ぐ[注 12]。村落の北部を流れる黒竜江とその最大の支流である松花江の合流部には、さまざまな淡水魚、チョウザメと鮭の遡河性回遊魚などの良好な生息環境が形成されている。

街津口村は、ホジェン語で「ガイジン」と呼ばれ、「黄金で敷き詰められた場所」の意味である。地名の由来について、古くから、当該地域では豊富な魚資源の他に、ジンセン、マンネ

ンタケ、テン(学名:ケナガイタチ)、鹿、ノロなどの貴重な動植物も存在していた。このような豊富な資源が「黄金」のような「宝」になるため、「街津口村」の名が誕生したと考えられている[注 13]。街津口村の服飾文化は、いうまでもなく現地特有の地理的・自然的環境から影響を強く受けて構成されたものである。こうした環境も、ホジェン族の服飾の生地に使われる素材、服飾づくりの道具などに大きな影響を与えたと考えられる。

以下、『松花江下流的赫哲族』(1990年)[注 14]による街津口村地域の服飾づくりの素材のホジェン語に関する記載を取り上げたい。

- 魚皮：イマハ・ナサニ
- カワウソ皮：チュウカイ・ナサニ
- テン皮：サブ
- シカ皮：コマカ・ナサニ
- ノロ皮：カイオチン・ナサニ
- 豚皮：ウルイガイア・ナサニ
- イノシシ皮：イカタエ・ナサニ

以上のことから、街津口村地域の服飾づくりの素材は、魚皮、カワウソ皮、テン皮、シカ皮、ノロ皮、豚皮、イノシシ皮などがあったことが確認できる。

表 1-1 異なる時代に形成された異なる民族の名前

時期	前 2128-2025 年	前 21-221 年	前 770-221 年	202-265 年	420-589 年	581-904 年	907-1125 年	1115-1234 年	1271-1368 年	1368-1644 年	1636-1911 年
時代	上古	先秦	春秋戦国	漢魏	南北朝	隋唐	遼朝	金朝	元朝	明朝	清朝
民族の名前	息慎	肅慎	古東夷	挹婁	勿吉	靺鞨	生女真	斡改	兀的哥	野女真	ホジェン族

5. 2. 街津口村地域の民族

ホジェン族は、約 4 千年の歴史を有するツングース系民族[注 15]の一つの部族であり、狩猟、漁撈を生業とし、シャーマニズムを信仰している。表 1-1 で示したように、上古時代(紀元前 2128～紀元前 2025 年)から清朝時代(1636～1911 年)までの間で、この民族の名称は変遷を辿り、先秦時代には「肅慎」、漢魏(かんぎ)時代には「挹婁」、南北朝時代には「勿吉」、隋唐時代には「靺鞨」、明朝時代には「野人女真」と呼ばれ、そして、清朝時代から、「ホジェン族」と呼ばれたことが確認されている[注 16]。この地域は中国とロシアの国境地帯に位置し、かつては戦争が多発する地域だった。戦乱の影響で、当該地域のホジェン族が絶滅の危機に瀕していた。たとえば、1860 年 11 月に「北京条約」によって、ロシアに割譲された地域には約 2 万人のホジェン族(現在は「ナナイ族」と呼ばれている)が住んでいたため、中国でのホジェン族の人口は約 4000 人に減少したとされる[注 17]。1940 年頃には、戦乱の影響で、この民族は約 300 人まで減少した。1949 年に戦乱が終わった後、ホジェン族は漢民族や満州族など他民族との通婚率が 80%以上になり、地域の民族構成が大きく変化した。1950 年以前に、「北大荒」(農耕がない地域)と呼ばれたこの地域では、人びとは長らく集落生活を送っていた。1963 年に、この地域は「街津口公社」と呼ばれるようになった。ホジェン族の人びとは長い歴史のなかで当該地域にて集落生活を送っていたために、1984 年 3 月に、中国政府に「街津口

ホジェン族の郷」という村名で認定されるようになった。このことから、当該地域は、かつて、ホジェン族を主要民族としていたことがわかる。

このように、街津口村地域は、古くから辺境地帯に位置し、農耕が行われず、ツングース系民族であるホジェン族が居住してきたことが、この地域で特有の服飾文化が形成された要因の一つと考えられる。

5.3. 街津口村地域の信仰

当該地域のホジェン族は、古くからずっと北東アジアツングース系民族の古い宗教であるシャーマニズムを信仰してきた。最も早くには、『晋書』(646年)に、シャーマニズムが、中国の北部の「白山黒水(長白山、黒竜江の意)」に分布していたことが記載されていた[注 18]。そこには現在の街津口村地域も含まれた。当該地域には、ホジェン語があり、文字が存在しないために、文化や信仰の継承について、人びとが口頭で交流したとされる。同時に、「イマカン」と呼ばれる語りなどによって神話、英雄叙述詩などを伝承していた。ホジェン族の人びとは、毎年、特定の時期に美しい魚皮衣を着用し、祭主であるシャーマンとともに、「開江祭り」という川の神祭り、踊鹿神の祭りなどのホジェン族特有のさまざまな年中行事を行ってきた。神と交信する行事が数多くあることから、シャーマニズムが街津口村地域の社会形成、魚皮衣づくり、伝説そして年中行事などに大きな影響をもたらしたことがわかる。

6. 先行研究

先行研究について、史書資料 20 冊、書籍資料 36 冊、学術論文 24 篇を収集した。そのうち、魚皮衣に関する史書資料 20 冊、書籍資料 4 冊、学術論文 5 篇を参考文献とした。

近現代の書籍資料において、1930 年以降、魚皮衣に関する美学、技術、芸術の側面からの研究が進展した。具体的には以下のような領域が注目された。一つ目は、魚皮が衣服の素材として持つ自然紋理の芸術研究である。二つ目は、美学的な表現手法による抽象的装飾、芸術的手法に関する研究である。また、1998 年から 2017 年までの学術論文においては、魚皮衣は主に二つの視点から分析されている。一つ目は美学や芸術学の視点であり、観光業や現代建築などにおける魚皮衣の芸術的応用に焦点を当てている。二つ目は民族学や民俗学の視点であり、魚皮衣の工芸や紋様、保護、伝承などに関する分析が行われている。しかし、生活や文化の面から伝統的な魚皮衣を研究し、分析する書籍と論文は管見の限りでは見当たらなかった。

また、魚皮衣に関する史書資料(付録・史書資料、pp. 161~162)によると、伝統的な魚皮衣文化は春秋時代(紀元前 770 年)から現代にかけて、およそ 2700 年の歴史を有している。そしてこれらを 3 つの発展段階に大別することでその諸特質が明確した。つづいて、その魚皮衣の 3 つの発展段階にみられるホジェン族の伝統的魚皮衣の姿を概観したい。

(1)「魚皮衣」の習得期(紀元前 770~1537 年)にみる魚皮衣の姿

紀元前 770 年から 1537 年までの約 2300 年間には、人びとは川や海岸で漁をし、狩猟をして生計を立て、移動生活を送り、四季を通して魚皮衣を着用していた。その後、川沿いに定住し、家禽を飼い始め、馬や豚などの家禽の皮と魚皮を服の材料として使用するようになって

た。また、戦乱の時代には、魚皮で甲冑をつくるようになった。1537年までに、「魚皮衣の形が直筒であり、冬にカワカマスの皮で服をつくる」という服飾の初期形が形成された。

(2)「魚皮衣」の成長期(1537～1689年)にみる魚皮衣の姿

1537年から1689年までの約152年間には、人びとは家族単位で川沿いに住んでいた生活から、徐々に集落生活へと移行していった。この過程で、人びとは牛の皮のように暖かい魚皮服飾を着用し、漁や狩猟を行い、同時に犬を使って船を漕いでいた。地域外の人びとはこれらの人びとを「魚皮部族」または「魚皮国」と呼んでいた。これにより、魚皮衣は、当該地域で人びとが集落生活のなかで象徴的な文化となった。

(3)「魚皮衣」の繁栄期(1689～1936年)にみる魚皮衣の姿

1689年から1936年までの約247年間には、人びとは自身の生活の知恵を用いて、魚の皮を加工し、柔らかくし、服に模様をつくり、それを染色して装飾した。衣服だけでなく、魚の皮の靴もあり、使用される材料にはスズキなどが含まれていた。1805年頃から、魚皮衣はロープのスタイルになり、服の端にはカラがある布が使われていた。これらは銅製の小鈴で服に装飾した。このことから、当該地域では布が伝わっていたことがわかる。1822年には、まだ海辺に住んでいて魚皮衣を着ている人びとがいた。1833年頃から、衣服は制度のように、袖に紫の魚皮を使って装飾されるようになった。1886年、初めて書籍に魚皮衣という言葉が登場した。また、魚皮衣を着た人は、漢族人には「魚皮達子」と呼ばれた。人びとは漁を主な生業とし、銚や木の棒で漁をし、漁網を使わず、魚の皮はテント、袋、靴の素材とし、鞣した魚の皮は綿や獣の皮のように柔らかく丈夫であった。魚皮靴は雲の模様で彩り、赤に染めた。時には、鹿の皮で服をつくった。また、木で祖先を彫刻して供養した。このような生活は1936年頃まで続き、人びとは木の棒で鮭を捕り、鮭の肉を塩漬けにして半年分の食糧を得ることができた。一部の鮭は馬、犬、豚の飼料にした。

なお、1990年には『松花江下游的赫哲族』にも「魚皮衣」という言葉も登場した。以下では『松花江下游的赫哲族』[注19]による街津口村地域の服飾のホジェン語に関する記載を取り上げる。

衣：タラガラ

獵衣(狩猟服)：カチキ

神衣(神服)：シキ

衫(袖あり上着)：ガハラ

短衫(袖なし上着)：マクアツ

長袍：オモギオン・チャムチ

腰帯(ベルト)：ヤウダレイ

馬褂(ウエスト)：マクアツ

背心(チョッキ)：カイダイアイ

女肩掛け：タレイタク

ズボン：ヘッキ

套褲(ズボンカバー)：オヤクキ

帽子：アフアホ
靴：タタマ
靴下：ドカタオ
脚絆：ティッパー
手袋：カチマ

以上のことから、ホジェン族の「魚皮衣」はホジェン語で「イマハ・ナサニタラガラ」などと呼ばれていることが確認できた。また、魚皮衣は、単に魚の皮で作られた衣服だけではなく、異なる種類や用途があることが明らかになった。多様な魚皮衣のなかで、狩猟服と神服の用途からみると、魚皮衣がホジェン族の過去の漁猟生活や宗教信仰との緊密な関係があることがわかった。つまり、ホジェン族の魚皮衣文化は、街津口村地域の特有の生活様式、信仰などの影響を受けることによって構成されたものである。

7. 現地調査

2016年から2024年にかけて、計5回、街津口村地域を訪問し、実物資料と聞き取り調査を実施した。具体的な時期、調査対象、調査内容、実物資料の写真の一部は、付録に添付する(付録・中国黒竜江省街津口村におけるホジェン族の魚皮衣文化に対する現地調査、pp. 162～203)。次に、現地調査により把握したホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の変容と現状を概観したい。

7.1. ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の変容

現地調査から現在のホジェン族の魚皮衣の変容が明らかになった。1966年の文化大革命以降、宗教そのものが攻撃対象となった影響で、街津口村地域における生活様式、価値観と信仰体系も大きな影響を受けた。その結果、ホジェン族では、シャーマン用の魚皮衣である神服の姿が消失しつつある。さらに、当該地域の野生動物が保護の対象となり、狩猟が禁止されたことで、ホジェン族の伝統的な狩猟生活と狩猟の際に使用された魚皮衣の儀礼服も徐々に消滅していった。加えて、当該地域に布が導入され、魚皮衣に置き換えられたことで、魚皮衣文化も次第に消滅している。さらに、近年、若者が都市へ移住することで、後継者不足を招いている。最近の街津口村では、全村の総人口は3909人であり、ホジェン族の人口は548人まで減少している。すなわち、ホジェン族の人口は全村の総人口の12%を占めるのみである(2018年)。また、工業化の急速な進展に伴い、当該地域の自然資源が破壊され、かつて染色に用いられていた植物も徐々に消失している。これは魚皮衣の制作技術の伝承に大きな影響を与えている。

当該地域においては、信仰体系から生活様式、服飾文化、そして魚皮づくりに用いられる素材までが次第に消失し、さらには若者の大量流出があり、これにより地域の伝統的な生活文化が徐々に消滅している。若年層の流出により、当該地域の伝統的服飾魚皮衣文化の維持と伝承が困難になっているといっても過言ではない。

7.2. 伝統的服飾「魚皮衣」の伝承を取り巻く現状

7.2.1. 伝統的服飾「魚皮衣」に対する保護・伝承政策

5回の現地調査を通じて、以下の伝統的魚皮衣に対する保護・伝承政策が確認できた。

(1)文化遺産登録：2006年に、ホジェン族における伝統的な魚皮衣の制作技芸が國務院の第一批国家級非物質文化遺産名録(番号Ⅷ-85)に批准され、登録された。

(2)伝承者の認定：2007年5月には、尤文鳳氏がホジェン族における伝統的な魚皮衣の制作技術の代表的な伝承者として国家級の非物質文化遺産名録に推薦された。いわゆる伝承者とは、中国政府が認めた魚皮の制作技術の代表的な伝承者のことである。現代まで、国、省、市、県の四段階に分かれている。国家級伝承者が尤文鳳氏の1人、省級伝承者が任媛氏と尤文蘭氏の2人、市級伝承者が楊英琴氏、高亜榮氏の2人、県級伝承者が董継紅氏、王洪姍氏、王華氏、張芹氏、李秀香氏の5人である。

(3)関連部門の支援：同江市の非遺産文化展示館が伝統的な魚皮衣の制作技術の継承や保護、広報に向けた支援を提供している。この展示館は2006年に建設が始まった。2018年に完成・使用開始され、無料で一般公開されている。現在は中国最大のホジェン族無形文化遺産の展示館であり、小中学生の修学旅行教育の場でもあり、無形文化遺産の知識と国民文化を宣伝し、普及させるために重要な位置を占めている。なお、管理責任者は2人である。2023年から展示館の屋内は展示、教授、体験の3つのエリアに分けられている。

7.2.2. 伝統的服飾「魚皮衣」に対する伝承現状

現地調査から、近年、新型コロナウイルス感染症の影響下において、ホジェン族では、人と人と、人と自然との関わりが非常に希薄になっており、街津口村の魚皮衣文化が存続の危機に直面していることがわかった。また、魚皮衣の文化継承において、以下の6つの変化が確認された。

(1)ホジェン族の伝承者が高齢化し、後継者が不足している

現在2024年3月11日、当該地域の伝承者は10人で、平均年齢は50歳を超え、最高齢は84歳である。たとえば、取材した尤文蘭氏などは、高齢と脳萎縮などの病のため、今年は訪問できなかった。同時に、村のホジェン族は600人に満たないため、若いホジェン族の多くはすでに同江市に移り住み、魚皮衣の文化への関心は薄くなり、その結果、魚皮衣の継承は後継者不足の問題に直面している。

(2)ホジェン族の若者は魚皮衣文化に対する認識が低い

現代の同江市街津口村に生活しているホジェン族の若者にとっては、伝統的魚皮衣文化を深く理解することは困難であろう。その理由として、以下の三点が挙げられる。①現地における生活文化の変容から、生活を支えるものづくりや、祭祀、行事、および信仰も消失してしまっている。たとえば、以前は毎年、地域内で狩猟の際に山の神祭りや鹿の神祭りなどを開催していたが、「文化大革命」時期以降、狩猟生活が禁止され、山の神祭りや鹿の神祭り、シャーマン信仰などが徐々に消失してしまった。②魚皮衣に使用される素材は、魚の皮から化学繊維などに変わり、また、自然環境と生活環境は急速に変化した。たとえば、近年、魚の乱獲により当該地域の漁業資源が減少し、昔の自給自足の生活様式も変化している。このような状況では、漁業人口の減少と地域からの人口流出も著しくなる。さらに、自然環境の汚染により、染料として利用されていた当該地域の植物も徐々に消えていった。③新世代のホ



図 1-5 同江市展示館の屋外風景



図 1-6 国家級伝承者氏である尤文鳳が 2020 年に展示館で発表した魚皮衣の継承活動事例



図 1-7 尤文鳳氏が魚皮衣の制作方法を伝習した様子



図 1-8 2023 年に展示館で開催した魚皮衣づくりの伝承活動の様子

ジェン族の人びとの意識が変化している。たとえば、魚皮衣の制作は、地域の生活の中に欠かせないものであったが、現在では、若者の間で地域のものづくりへの関心が薄れている。

(3) ホジェン族外継承の現象が著しい

伝承者尤文鳳氏への聞き取り調を通して、市や県レベルの伝承者の中に 5 人の漢民族がおり、彼らも尤文鳳氏から魚皮衣づくりの技術を学んだことがわかった。すなわち、近年、魚皮衣の文化的継承は、徐々にホジェン族外継承の傾向を示していることが明らかになった。

(4) 継承の方法が変わり、育成活動が不足している

以前は家族単位での伝承だったが、現在は伝承者が同江市の非物質文化遺産展示館(図 1-

5)と協力し、展示館で魚皮衣づくりの伝承教室を実施している。しかし、新型コロナウイルスの影響を受けて、このような伝承活動は2020年と2023年の2回しか行われなかった(図1-6、図1-7、図1-8)。これらのイベントでは、口頭伝達と体験デモンストレーションが主な伝達方法であった。

(5)都市部で知識の普及がより広まった

伝承者と展示館の連携により、同江市地域における住民、小中高生、大学生、各地域のメディア関係者、ロシア人をはじめとする外国人の参加が促進された(図1-9)。

(6)魚皮衣の展示の場と講師の固定化

当該地域の展示館の館長が伝承者の協力により、同江市の人びとに魚皮衣を展示する場と講師を提供した。

これらを踏まえると、2020年から、伝承者と展示館との間に連携が存在する。それは市中心におけるホジェン族の若者たちに魚皮衣を展示する場を提供し、地域住民、学生、外国人、メディア関係者などの魚皮衣文化への関心を高めている。しかし、このような連携体制にもかかわらず、伝承活動の不十分さ、教材不足、地域内での伝承者の高齢化とホジェン族の後継者不足などの問題も顕在化している。そのため、魚皮衣という地域資源に対するより多くのホジェン族の関心と継承意識をいかに喚起していくかを考える必要があるだろう。

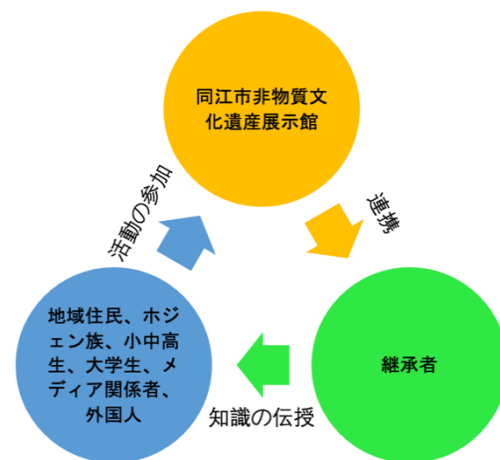


図1-9 魚皮衣文化の伝承活動の推進図

8. アンケート調査

これまで現地調査により得られたホジェン族の魚皮衣文化に対する認識を把握し、今後、内発的発展論の観点から、魚皮衣文化を活用できるデザインを提案するために、アンケート調査を行った。

- ①中国黒竜江省街津口村におけるホジェン族の魚皮衣文化に対する認識調査(2019年)、
- ②伝統的な魚皮衣の紋様に関する認識の調査(2024年)、
- ③魚皮衣文化に対する再認識の調査(2024年)。

注および参考文献

- 1) 中国の地方行政区画は、国・中央、省、市、県、郷鎮の5つに分かれており、県と郷鎮は農村地域にあたる。中国国家统计局が発表した「十三・農業統計(15)」によると、農業統計の範囲には、農家や農業生産経営単位が行う農、林、牧、漁業の生産活動、および農、林、牧、漁の専業と補助活動が含まれる(中国語：農業統計範囲包括農戸和農業生産経営単位从事的農、林、牧、漁業生産活動、以及農、林、牧、漁専業及補助性活動)。
- 2) 2021年、中国の習近平総書記は、「農村の貧困地域の発展は、内在的力(潜在力)に依存している。ただ救済を施して新しい村をつくり、村の外観を単純に変えるだけでは内在的活力が不足し、労働力が戻らず、持続的な経済的収入源がない場合、この地域のさらなる段階の発展には問題が残る」と話した。(中国語：习近平深刻指出：“贫困地区发展要靠内生动力、如果凭空救济出一个新村、简单改变村容村貌、内在活力不行、劳动力不能回流、没有经济上的持续来源、这个地方下一步发展还是有问题。)
- 3) 百崎賢之：第4章 中国—「次の百年」への最初の年、内外多難の中、食の安全保障と郷村振興を強調—、農林水産政策研究所 [主要国農業政策・貿易政策] プロジェクト研究資料、第10号、21、2022
- 4) ダグ・ハマーショルド財団、『Another Development: Approaches and Strategies』、1977
- 5) 鶴見和子・川田侃：『内発的発展論』、東京大学出版会、13~15、1989
- 6) 「北大荒」という言葉は、最初に『山海経』の原本に見られ、中国の東北部の大荒野を指していました。長い進化の過程を経て、「北大荒」の範囲は黒龍江省の松嫩平原と三江平原周辺の古代の荒野に縮小された。
- 7) 国家民委：赫哲族簡史、48、2009
- 8) 北京服装学院の楊源先生が作成した2000年に街津口村で行われた現地調査の資料による
- 9) 凌純聲：松花江下游的赫哲族、15、1990
- 10) 街津口村における赫哲族郷中心学校の刘蕾氏による
- 11) 2016年の街津口村の人口統計の調査による
- 12) 高橋敏正：ロシア、アムール川での夏サケ調査紀行、さけ・ます資源管理センター技術情報、47、2000
- 13) 前掲11)
- 14) 前掲9)、265
- 15) 中国のツングース系民族には満族、シボ族、ホジェン族、エベンキ族、オロチョン族など5つの民族が含まれ、ロシアには8つの民族が含まれている。王辰、「ツングース文化と日本文化との比較研究—宗教信仰を中心に」、作新学院大学経営学研究科博士後期課程、61、2016
- 16) 前掲7)、54~116
- 17) 郝慶雲、紀悦生：赫哲族社会文化変遷研究、221、2016
- 18) 前掲9)、69
- 19) 前掲9)、264、274

図の出典

- 1) 図 1-5、: 同江市展示館の館長である李鼎仁氏から提供
- 2) 図 1-6、図 1-7、図 1-8 : 尤文鳳氏から提供

第二章

日常生活にみられるホジェン族の
伝統的服飾「魚皮衣」の特質

1. はじめに

本研究で取り上げる中国の黒竜江省同江市街津口村は、「ホジェン族の故郷」とも呼ばれ、今日に至るまで代表的な居住地域の一つである。当該地域のホジェン族は、古くから、中国の東北部とロシアの国境を流れる黒龍江と、松花江、烏蘇里江の3つの河川が合流する平野部を中心とした地域において漁獵・狩獵生活を送ってきた人びとである[注1]。顔師古らが636年に編纂した『隋書・契丹伝』によると、当時すでに、ホジェン族の人びとは、中国語で「魚皮衣」[注2]と称される服飾を身につけており、今日までに少なくとも約1400年以上の歴史を有していることがわかる[注3]。1860年頃に勃発した中国とソビエト連邦[注4]の国境紛争の影響で人びとは分断を余儀なくされ、中国国内のホジェン族の人口は約20,000人から約4,600人へと大きく減少した[注5]。

しかしながら、2016年の統計によると、中国国内のホジェン族の人口は、全村でわずか約500人まで減少している[注6]。また、近年の急速な近代化・都市化に伴い、伝統的な魚皮は化学繊維に置き換わり、人びとが培ってきた魚皮の活用の文化は消失しつつある。そのなかでも、本章では、ホジェン族の伝統的服飾かつ魚皮の代表的な活用方法である魚皮衣文化に焦点を当てている。魚皮衣は、厳しい自然環境や寒冷な気候、そしてそのなかで営まれる生業に適応するために、漁獲した魚の皮を主な素材として、それらを縫製することによって制作され、縁起の良い魚皮の模様で装飾するものである。魚皮衣を長く着用することで、柔らかく、体に馴染み、着心地が良いと認識された。長年にわたって魚皮衣が着用されてきたことから、当該地域は地域外の人びとから「魚皮部落」とも称されてきた[注7]。2006年には、魚皮衣が国家級非物質文化遺産[注8]に指定され保護されるようになったものの、身近な魚を日々の生活のなかで利活用することで構築されてきたホジェン族の特有の魚皮衣文化の消失が危惧されている。

本章においては、日常生活にみられる魚皮衣に着目し、その特質を明らかにすることを目的とした。なお、本研究では、ホジェン族の人びとの認識を踏まえ、魚皮衣に、手袋や煙荷包[注9]、火鎌袋[注10]などの小物類も含むものとする。

2. 先行研究

ホジェン族の伝統的服飾である魚皮衣は、636年から1883年にかけての5つの文字史料ならびに絵画資料である『皇清職貢図』に確認することができる。それらの形態、素材、染色、加工、制度の側面からまとめたものが表2-1である。また、近現代の書籍『松花江下游的赫哲族』[注12]、『文飾図案和造形芸術・赫哲族卷』[注13]、学術論文「赫哲族伝統的魚皮服飾特色和创新設計研究」[注14]などにおいては、魚皮衣について、それぞれ、民俗学、美学、芸術学の観点から一連の考究がなされている。しかしながら、これまでの研究では、魚皮衣に関連する生活文化には注目していなかった。本章においては、日常生活にみられる魚皮衣を調査・研究対象とした。

3. 研究方法

表 2-1 魚皮衣に関する記載がある史書・絵画とその内容

年	著作	著作者	原文	訳文
636	隋書・契丹伝	顔師古など	俗皆衣以魚皮	魚皮で服をつくる習俗がある。
1537	遼東志・卷九	任洛	着直筒衣、暑用魚皮、寒用狗魚	人びとは直筒型の服を着る。夏、魚皮で服をつくる。冬、カワカマスの皮で服をつくる。
1660	寧古塔山水記	張縉彦	以魚皮为衣服、暖如牛皮	魚皮衣は牛皮の服のように暖かい。
1721	寧古塔紀略	吳振臣	其所衣魚皮极软、熟可染五色	魚皮衣はとても柔らかく、鞣した後に5色の紋様を染めることができる。
1805	皇清職貢図	傅恒など	衣服多用魚皮、而縁以色布、辺綴銅鈴	服は魚皮でつくられ、色つきの麻布で縁取りをする。裾には銅製の鈴が飾られている。
1883	西柏利東偏紀要	曹廷傑	衣服亦悉如制度、惟喜用紫色、袖口束以花帶二三寸	魚皮衣には一定のルール(制度)がある。人びとは紫色を愛用し、袖口には約6cmの紫色の縁取りが付されている。

表 2-2 使用方法を基準に分類した日常生活における魚皮衣

番号	分類	着用者	使用時期	素材	個数
1	袖あり上着	老若男女	通年	鮭・チョウザメ・コイ・カワカマス・スズキ・鯰・コクレンの皮、シカの筋	9
2	袖なし上着	子ども・女性	夏	鮭・鯰の皮	5
3	長袍	既婚の女性	通年	鮭・ポウウオ・ソウギョ・コクチマスの皮	5
4	ズボン	老若男女	通年	鮭・コイ・コクレン・カワカマス・鯰の皮	9
5	靴	老若男女	通年	鮭・チョウザメ・鯰・レンギョの皮	5
6	脚絆	男性	通年	鮭・鯰の皮	5
7	手袋	男性	冬	鮭・ノロの皮・シカの腹の毛	5
8	煙荷包	老若男女	通年	鮭・スズキの皮	3
9	火鎌袋	老若男女	通年	鮭の皮	2
計					48

本章で用いる研究方法は、以下の通りである。

- (1) 文献調査 『皇清職貢図』『漁家絶技・赫哲族魚皮的制作技芸』などの絵画資料ならびに書籍資料に基づき、日常生活における伝統的な魚皮衣に関する使い方の概略を把握した。
- (2) 現地調査 2016年9月から2021年1月にかけて、計4回延べ45日におよぶ現地調査を



図 2-1 実物寸法の測定



図 2-2 日常生活における伝統的な魚皮衣

行い、147 点の魚皮衣の実物を収集し、それらの寸法(図 2-1)、使用者、素材、紋様、制作年、使用開始年などを記録した。また、当該地域の生活者、なかでも、魚皮衣の制作技術を受け継ぐ尤文鳳氏らへの聞き取り調査により、147 点の魚皮衣の写真資料の内 48 点が日常生活にみられる伝統的な魚皮衣であることが明らかになった。

(3)魚皮衣の分類 上記(1)～(2)で得られた 48 点の日常生活にみられる魚皮衣を、素材および紋様の観点から分類し、さらに、その使用方法と特徴、意味などを把握した。

(4)日常生活における魚皮衣の特質の抽出 上記(1)～(3)に基づき、日常生活における魚皮衣の特質を明らかにした。

4. 日常生活にみられる魚皮衣

現地調査によって得られた 48 点の魚皮衣(図 2-2)は、子どもから既婚者、高齢者までの異なる年齢層の人びとが着用したものである。それらは、袖あり上着(9 点)、袖なし上着(5 点)、長袍(5 点)、ズボン(9 点)、靴(5 点)、脚絆(5 点)、手袋(5 点)、煙荷包(5 点)、火鎌袋(2 点)の 9 種類に分類できた(表 2-2)。それぞれについて概観していきたい。

表 2-3 48 点の魚皮衣の分類と素材・紋様・使用実態(年齢は調査時)

番号	分類	使用者			素材	紋様	制作年	使用開始年	調査年
		名前	性別	年齢					
1	袖あり上着	王淋瑶	女	7	鮭・カワカマス・チョウザメの皮	雲	2012 年	2013 年	2020 年
2		孫玉民	男	55	鯰の皮	波	1971 年	1971 年	2016 年
3		趙宝芹	女	57	鮭の皮	雲	1981 年	1982 年	2018 年
4		李勤医	男	57	鮭の皮	波	2001 年	2001 年	2020 年

5		孫玉林	男	59	コイの皮	波	2002年	2002年	2018年
6		呉福勝	男	60	カワカマス・コクレンの皮、シカの筋	雲、葉	1997年	1997年	2018年
7		付占明	男	60	スズキの皮、シカの筋	なし	1956年	1978年	2020年
8		尤秀云	女	65	鯰の皮	巻草、胡蝶	1996年	1996年	2016年
9		尤文鳳	女	67	鮭の皮	波	1983年	1984年	2019年
10	袖なし 上着	王淋瑶	女	7	鮭の皮	波	2012年	2013年	2016年
11		付思彤	女	12	鮭の皮	波	2006年	2007年	2016年
12		趙宝芹	女	61	鮭の皮	雲、胡蝶	1995年	1996年	2018年
13		尤秀云	女	65	鯰の皮	雲、波	1958年	1959年	2016年
14		尤文鳳	女	66	鮭の皮	雲、魚	1955年	1956年	2018年
15	長袍	楊英琴	女	41	鮭の皮	波	1999年	2000年	2019年
16		孟繁春	女	51	鮭の皮、ボウウオの皮	雲	1995年	1996年	2016年
17		呉彩云	女	56	鮭の皮	雲、葉	1979年	1980年	2016年
18		尤秀云	女	64	鮭の皮、ソウギョの皮	雲、波、葉	1982年	1982年	2016年
19		尤文鳳	女	68	鮭の皮、コクチマスの皮	雲、波、魚	1969年	1969年	2020年
20	ズボン	王淋瑶	女	7	鮭の皮	なし	2012年	2013年	2020年
21		孫玉民	男	55	鯰の皮	波	1971年	1971年	2016年
22		趙宝芹	女	57	鮭の皮	巻草	1981年	1982年	2018年
23		李勤医	男	57	鮭の皮	シカ	2001年	2001年	2020年
24		孫玉林	男	59	鮭の皮、コイの皮	波	2002年	2002年	2018年
25		呉福勝	男	60	コクレンの皮	魚	1997年	1997年	2018年
26		付占明	男	60	カワカマスの皮	波	1956年	1978年	2020年
27		尤秀云	女	65	鮭の皮	雲	1996年	1996年	2016年
28		尤文鳳	女	67	鮭の皮	雲	1983年	1984年	2019年
29	靴	趙書伟	男	38	鯰の皮	雲	1998年	1998年	2016年
30		孫玉林	男	56	鮭の皮	なし	1978年	1979年	2016年
31		尤士柱	男	65	鮭の皮	シカ	1985年	1985年	2020年
32		尤文鳳	女	66	レンギョ、チョウザメの皮	なし	1987年	1987年	2018年
33		吳占山	男	67	鮭の皮	雲	1983年	1984年	2020年
34	脚絆	許国	男	55	鮭の皮	なし	1983年	1984年	2020年
35		孫玉林	男	58	鮭の皮		1958年	1980年	2018年
36		尤延軍	男	58	鮭の皮		1944年	1944年	2020年
37		何鋭鋼	男	61	鮭の皮		1975年	1976年	2020年
38	吳宝財	男	65	鯰の皮		1943年	1983年	2019年	
39	手袋	孫玉林	男	58	鮭の皮	葉	1981年	1981年	2018年
40		呉福勝	男	60	鮭の皮	葉	1983年	1983年	2018年
41		吳宝臣	男	60	鮭の皮、ノロの皮、シカの腹の毛	なし	1990年	1990年	2020年
42		尤俊生	男	61	鮭の皮		1991年	1991年	2016年
43		吳文華	男	65	鮭の皮、ノロの皮、シカの		1979年	1979年	2019年

					腹の毛				
44	煙荷包	孫玉林	男	58	鮭の皮	なし	1976年	1977年	2018年
45		斎艳華	女	62	鮭の皮	巻草	1975年	1975年	2020年
46		孫玉琴	女	71	スズキの皮	胡蝶、巻草	1968年	1968年	2020年
47	火鑷袋	尤萍	女	64	鮭の皮	なし	1965年	1969年	2018年
48		尤兵	男	65	鮭の皮		1973年	1974年	2019年

注：各実物のなかで、同じ素材、または、同じ紋様が2回以上登場しても、1回の出現回数で集計した。出現回数の統計によると、素材は合計で62個の要素、紋様は合計で44要素であった。各種の素材と各種の紋様の出現率を、それぞれ、表2-4、表2-6に示した。



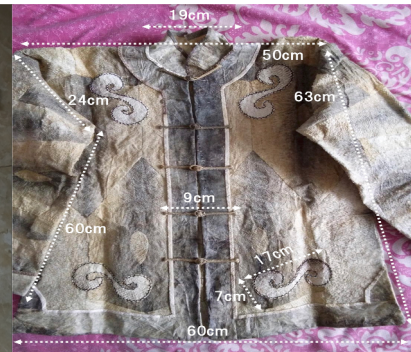
1) 李勤医氏所有 2020年撮影



2) 王淋瑶氏所有 2020年撮影



3) 趙宝芹氏所有 2018年撮影



4) 孫玉民氏所有 2016年撮影

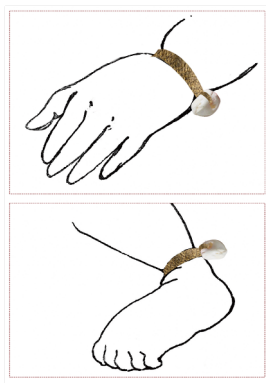
図2-4 袖あり上着(男性用・女性用)

4.1. 袖あり上着

聞き取り調査(表2-3)によると、袖あり上着は、ホジェン語で「ガハラ」と呼ばれ、老若男女が日常的に着る衣服であった。収集した9点の実物資料は、いずれも開襟で男性用の襟は左右対称であるが女性用の襟は斜襟で非対称である(図2-4)。

この袖あり上着と当該地域の人びとの関係は深く、母親は、新生児が生まれると、自身が着古した服を材として、新生児のために、袖あり上着を縫製して着せることが習いとされてきた。当該地域の自然環境は極めて厳しく、子どもが天然痘などの病気にかかり命を落とすことが少なくなかった。それゆえ、当該地域の人びとは、子どもの健やかな成長を何よりも願った。生後3日目から、天然痘などの疾患を予防するために、大人は乳児を氷水に入浴させる。乳児には魚皮衣を着せることはなく、代わりに魚皮や他の動物の毛皮で掛け布団をつくった。そして、生後100日以内に、子どもの健康な成長を祈願するために胎児服を埋める儀式が行われた。着古した服は柔らかく着心地が良くそれを着用した子どもは健康に育つと考えられてきたため、子どもには生後100日以後から7歳なるまで四季を通じて袖あり上着を着用させた。さらには「シウ」(図2-5)という鮭の耳石でつくったお守り[注15]を身につけさせた。鮭の耳石は、鮭が回遊する際に方向感覚を制御する重要な部分と考えられ、赤子が歩行の練習などをする際に安全を守るものであるとされている。

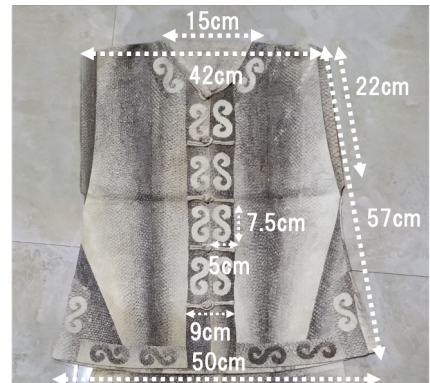
図2-4-4)は、1971年頃から1995年頃まで、孫玉民氏が漁の際に着用していたものである。幅10cm×長さ26cm程度の鯰の皮が61枚繋げられたもので、襟元(幅19cm程度)、身頃(幅60cm×長さ63cm程度)、袖(幅24cm×長さ60cm程度)の3つの部分から構成される。前身頃には鯰の腹部の皮を用いた幅7cm×長さ17cm程度の波紋が左右対称に飾られている。他の部分の縁取りは4cm程度で材質は本体の素材と同様である。前身頃にある幅1cm×長さ4.5cm程度のボタン受けとボタンは5対あり、鯰皮を円筒状に巻いてつくられたものである。袖あり上着に付された紋様には、上述した波紋の他にも、雲紋、葉紋、巻草紋、胡蝶紋があり、また、魚皮の材質は鮭、スズキ、カワカマスなどもある。



赤子の手足に付けたシウのイメージ



1) 尤秀云氏所有 2019年撮影



2) 付思彤氏所有 2016年撮影

図2-5 シウ

図2-6 袖なし上着(子ども用・女性用)

4.2. 袖なし上着

袖なし上着(図2-6)は、ホジェン語で「マクアツ」と呼ばれ、子どもと女性が着用する夏服である。収集した5点の実物資料は、いずれも、筒状の身頃で、襟がなく、前開きで縁取りがあり、着丈が股上までの形状である。その形は、かつてはシカの皮でつくった防寒ベストが変化したものであるという[注16]。なお、この袖なし上着は、男性が着用することはなかった。それは、男性は山や川辺で労働するため、その際に身体が露出すると神霊への不敬と

みなされたためである。

子どもが7歳[注17]になると、漁猟・狩猟や魚皮衣づくりなどの暮らしを支えるための技術を両親から学ぶ必要がある。そのため、ホジエン族の人びとは、子どもが7歳を迎える夏となると、兄や姉、または年上の女性が着られなくなった袖なし上着を着用させ、両親の夏の仕事の手伝いをさせた。子どもたちは、親の背中を見て、親のような人になりたいという気持ちが芽生えたものだという。たとえば、男子は父と共に漁に行き漁法を学び、女子は母と共に家事や魚皮衣づくりを学んだ。また、男子は、親から聞いたモニゲンの物語[注18]に語られた英雄のように、漁や狩猟の技術などに精通した人になることを望んで、この袖なし上着を着用するようになった。子どもの魚皮衣は、一般的に両親が着られなくなった服からつくるものであった。年長の子どもの体が大きくなった場合、彼らの服を年少の子どもが受け継いで着用した。兄弟がいなければ、母親が大人の服をつくりかえて着用させた。人びとは、それらを結婚年齢となる17歳頃まで着続け、結婚後は、その古着を自身の子どもたちに着用させた(図2-7)。つまり、子ども用のすべての魚皮衣が、両親や年長の兄弟が着られなくなったものをそのままあるいは手を入れて再利用したものであった。こうしたなかにも、自然からのいただきものを無駄なく利活用する人びとの生活の知恵がうかがえる。

なお、たとえば、図2-6-2)は、2007年頃から2016年頃まで、付思形氏が、夏の間日常的に使用していたもので、尤文鳳氏(付氏の祖母)が制作したものである。幅15cm×長さ58cm程度の鮭の皮10枚を繋げたもので、幅50cm×長さ57cm程度の前身頃と後ろ身頃から構成される。襟幅は約15cmで、肩幅は約56cmである。前身頃には鮭の皮を用いた幅4.5cm×長さ9cm程度の波紋が左右対称に飾られている。他の部分の縁取りは6cm程度で材質は本体の素材と同じである。前身頃にある幅1cm×長さ5cm程度のボタン受けとボタンは4対あり、鮭の皮を円筒状に巻いてつくられたものである。袖なし上着に付された紋様には、上述した波紋の他にも、雲紋、胡蝶紋、魚紋があり、また、魚皮の材として鯨も用いられることがあった。

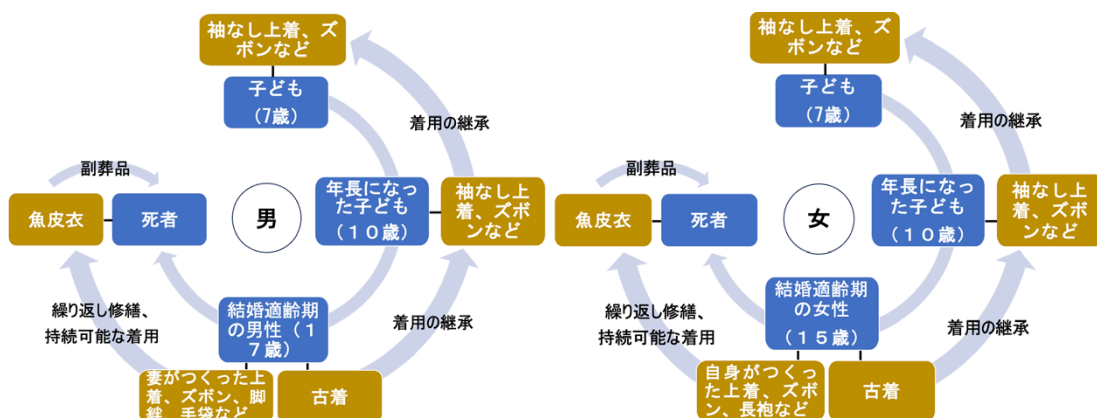


図2-7 魚皮衣のライフサイクルを示す図



楊英琴氏所有 2019年撮影

図 2-8 長袍(既婚女性用)



図 2-9 「皇清職貢図」に描かれた長袍

4.3. 長袍

収集した点数は5点で、いずれも、斜襟で、直筒の袖、腰の下部が扇形で膝の下の方まで届いており、また、袖口、前身頃、裾には縁取りがある。長袍(図 2-8)はホジェン語で「オモギオン・チャムチ」と呼ばれ、既婚女性が着用するものであり労働服でもあった。

1805年に描かれた『皇清職貢図』には、長袍を着た女性らが魚皮を鞣す作業をしたり、犬ぞりに乗る姿が描かれている(図 2-9)。その絵図によると、1805年頃に、服は魚皮でつくられ、麻布で縁取りがなされている。裾には銅製の鈴が飾られていたことがうかがえる。かつては、新婚の女性は新しい家庭で100cm以上の魚皮を用いて長袍をつくり、それを一生涯に渡って修繕しつつ使用したという。長袍の由来は『百魚衣』の伝説に伝えられている。その伝説によると、ある新婚の女性が当該地域の意地悪な男性にいじめられ、100枚の魚の皮を使って1日で長袍をつくるように言われた。翌日、新婚の女性は縫製し仕上げた服をその男性に贈った。その男性は、この服を着用した後、死んでしまった。100枚の魚皮によって縫製された服が、100匹の魚に生まれ変わった。その男性は、生まれ変わった100匹の魚に食べられたというものである[注 19]。それ以来、既婚女性だけが長袍を着ることができるようになり、長袍は既婚女性であることを示すものとされた。また、魚の皮でつくった服には霊的な力があるとされ、魚の皮でつくった服を着用すれば、悪事さえしなければ魚の神の庇護を受けることができると信じられてきた。さらに、人が亡くなったら、生前に着用した長袍などの魚皮衣は、死者とともに埋葬された(図 2-7)。このような行為は死者の尊厳を守るとともに、死後の世界でも生前と同じように魚の庇護を受け、幸せな生活を送れるように祈願するためのものであったと考えられる。

図 2-8 は、2000年頃から2018年頃まで、楊英琴氏が日常的に使用していたもので、1999年頃に、楊氏が村内の近所の女性と共に姑(尤文鳳氏)から魚皮衣の制作技術を学んだ後、自身でつくったものである。幅13cm×長さ50cm程度の鮭の皮が44枚繋げられたもので、襟元(幅20cm程度)、身頃(幅80cm×長さ105cm程度)、袖(幅22cm×長さ45cm程度)の三つの部分から構成される。前身頃には鮭の皮を用いた幅6cm×長さ11cm程度の波紋が左右対称的に飾

られている。他の部分の縁取りは5 cm程度で材質は本体の素材と同様である。前身頃にある幅1 cm×長さ7 cm程度のボタン受けとボタンは5対あり、鮭の皮の切れ端を円筒状に巻いてつくられたものである。長袍に付けされた紋様には、上述した波紋の他にも、雲紋、葉紋、魚紋があり、また、魚皮の材質としてポウウオ、ソウギョ、コクチマスも用いられることがあった。



図 2-10 ズボン(男性用・女性用)

4.4. ズボン

ズボン(図 2-10)は、ホジエン語で「ヘッキー」と呼ばれ、老若男女が日常的に着る衣服でもあった。収集した9点の実物資料は、いずれも、形は男女を問わず、腰から裾にかけてほぼ平行の二つの円筒から構成され、腰にはズボンの緩みを防ぐために、3本の魚皮の紐が取り付けられている。

なお、生まれたばかりの赤子は、ズボンをはかず、子どもが3歳頃になり歩けるようになると、母親は家族の古着を利用してズボンをつくり履かせた。成長するにつれて、子どもは兄や姉、または両親が着られなくなったズボンを着用した。結婚後、重労働をする際には、動きやすくするために、丈夫で壊れにくいシカの筋糸で縫製した緩やかなズボンや上着などを着用した。また、冬に男性が山の猟場で宿泊する際には、カワカマスの皮でつくったズボンや上着などを防寒着として着用した。

たとえば、図 2-10-2)は、1984年頃から2019年頃まで、尤文鳳氏が日常的に使用していたものである。幅7 cm×長さ38 cm程度の鮭の皮を16枚繋げたもので、直筒状を成している。総丈は76 cm程度、ウエストは88 cm程度、腰部に縫製した鮭の皮を用いた幅1.5 cm×長さ7 cm程度のベルトループが3本ある。材質は本体の素材と同様であり、縁取りには鮭の皮を用



1) 吳占山氏所有 2020年撮影

2) 尤文鳳氏所有 2018年撮影

図 2-11 靴(男性用・女性用)

いた幅 5 cm×長さ 10cm 程度の雲紋が飾られている。ズボンに付けされた紋様には、上述した雲紋の他にも、波紋、巻草紋、シカ紋、魚紋があり、また、魚皮の材質として鯰、コイ、コクレン、カワカマスも用いられることがあった。

4.5. 靴

靴(図 2-11)は、ホジエン語で「タタマ」と呼ばれ、日常的に履かれたものである。収集した 5 点の実物資料は、いずれも、底、甲、筒の 3 つの部分からできている。

漁の際には、人びとは滑り止めや湿気防止のために、鞣していないチョウザメの皮でできた靴を愛用した。チョウザメの皮は非常に硬い菱形の板状で、曲がった刺がある硬鱗が 5 列縦列に並んでいる。さらに、表皮部分が非常に粗いため、強力な滑り止めの効果があるとされてきた。履く前に水に浸して柔らかくし、履いた後は屋内にぶら下げて陰干した後に、虫除けの効果がある特製の樺皮の箱に入れて保管した(吳占山氏、尤士柱氏)。靴の中には必ず水際に生えているウラ(学名：シラカワスゲ)という草を入れた。この草は保温、湿気や汗の吸収、汚れが落ち易いなどの機能があるため、女性が採取し細長いウラ草を木の棒で数十回叩いて、綿のように柔らかくした後、靴に入れた。男性は山での狩猟の際にそれを履いて雪道を数時間も歩いたものだが、足が温かく、壊れても魚やシカの皮で修繕できたという(孫玉琴、孫玉民氏)。

たとえば、図 2-11-2)は、1987 年頃から 1993 年頃まで、尤文鳳氏が冬の間日常的に使用していたものである。幅 12cm×長さ 20cm 程度のチョウザメの皮 1 枚(底の材質)と、幅 7 cm×長さ 20cm 程度のレンギョの皮 7 枚(甲と筒の材質)がレンギョの皮の糸で繋がれたもので、幅 12cm×奥行 23cm×長さ 23cm 程度である。靴の甲には紋様はなく、足首の部分には靴の緩みを調節するためのレンギョの皮を用いた幅 2 cm×長さ 52c 程度の靴紐がある。上記の靴には紋様が付されていないが、靴に付けされた紋様には、雲紋、シカ紋があり、また、魚皮の材質として鯰、鮭も用いられることがあった。

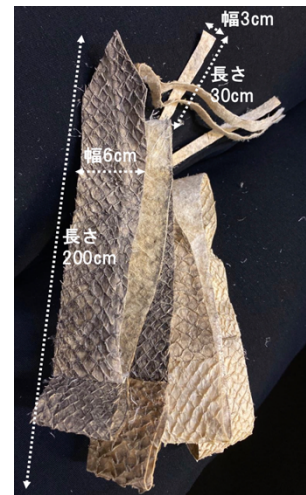
4.6. 脚絆

脚絆(図 2-12)は、ホジエン語で「ティッパー」と呼ばれ、男性が四季を通じて山へ狩りに行

く際に使ったものである。収集した5点の実物資料は、いずれも、形は帯状(約170cm×9cm)で、一端は平らで、もう一端は尖っている。尖った方の一端に縫いつけられた2本の紐を足首に結び、つるまき状にふくらはぎに巻き付け、最後に平らな方の一端に付された紐で固定する。

脚絆は、長時間にわたる歩行の場合、ふくらはぎを保護するのみならず、蚊や風雪から防ぐことができた。また、危険に遭遇した際には坂を登る際の牽引縄、あるいは包帯などとしても使われた。

たとえば、図2-12は、1980年頃から1989年頃まで、孫玉林氏が山でキジや野兎などを捕る際に使用していたものである。幅13cm×長さ49cm程度の鮭の皮が5枚繋げられたもので、幅6cm×全長200cm程度の帯状を成している。それぞれの魚皮は、繊維方向に沿って、鮭の皮の繊維を撚ってつくった糸によって縫い合わされており、長さ方向の引っ張りに極めて強くなっている。帯状の部材の両端に付けられた紐は、幅3cm×長さ30cm程度で、材質は本体と同じ鮭の皮である。なお、紋様は施されておらず、それは他の脚絆も同様である。



孫玉林氏所有 2018年撮影

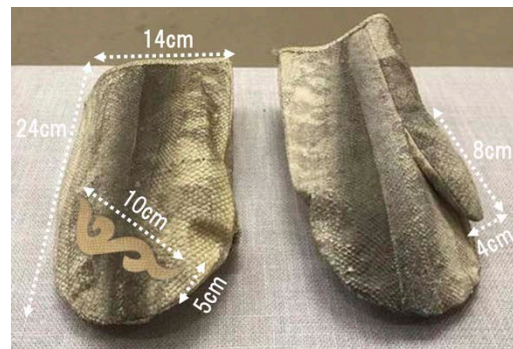
図2-12 脚絆

4.7. 手袋

手袋は、冬期(12月～翌年3月)に男性に不可欠な防寒手袋であり、ホジェン語で「カチマ」と呼ばれる。収集した5点の実物資料は、いずれも、親指用の筒と他の指用の筒の2つの部分からなる。

手袋は、毎年12月、年配の男性が結氷した河川で銚で魚を捕る際に用いてきたものである。また、手袋は、正月5日から2月までのイタチとノロ(ノロジカの標準和名)の狩りの季節に、男性が銃の引き金などの道具を制作する際に用いたものである。狩猟後、「キアテキ」と称されるスキーのような道具を用いて家に戻る際にも使用された(尤士柱氏)。

たとえば、図2-13は、1981年頃から2000年頃まで、孫玉林氏が、冬の漁猟と狩猟の際に使用していたものである。幅15cm×長さ50cm程度の鮭の皮が2枚に繋げられたもので、2つの長方形の筒から構成される。1つの筒は、平らな状態にすると幅14cm×長さ24cm程度であり、もう一方は、幅4cm×長さ8cm程度である。手袋の正面には鮭の腹部の皮を用いた幅5cm×長さ10cm程度の葉紋が飾られている。手袋に用いられる材としては、上述した魚皮の他にも、ノロの皮、シカの腹の毛もある。



孫玉林氏所有 2018年撮影

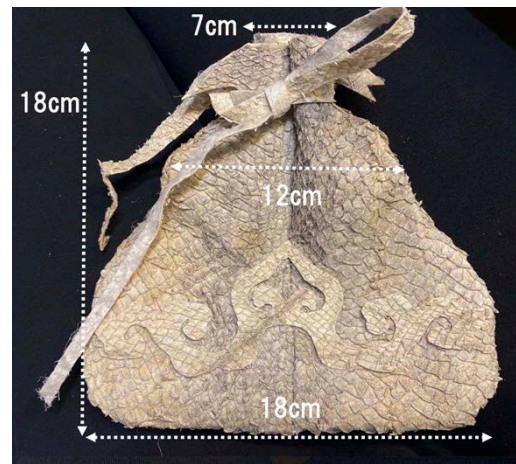
図2-13 手袋

4.8. 煙荷包

煙荷包(図 2-14)は、ホジェン語で「アッドゥー」と呼ばれ、たばこを入れる魚皮の袋である。収集した3点の実物資料は、いずれも、瓢箪の形をしており、上部に紐が2本付されている。

外出時に、人びとはたばこを煙荷包に入れて携帯した。たばこの匂いがする煙荷包は、蚊や毒蛇からの刺咬を予防する効果があった。また、当該地域においては、老若男女を問わず喫煙する習慣があり、男は10歳から、女は既婚以降たばこを吸うことができた。普段、人びとは家族または主客の間でたばこを煙管に詰める儀式を行う(図 2-15)。たとえば、主人は客人に「たばこ詰め」をし歓迎の意を表す。若者は高齢者にたばこを詰め敬意を表す。結婚式では結婚儀礼として舅と姑にたばこを詰めると、親孝行と見なされる。煙荷包は男女の結婚の約束の印としての贈り物でもある(尤士柱氏、尤文鳳氏)。また、結婚式で婚約者(男性)が女性にたばこ詰めをし愛を表す[注 20]。これらのことから、煙荷包は、ホジェン族の家族内外の間の緊密な交流促進の機能を有していた。

たとえば、図 2-14 は、1975 年頃から 1985 年頃まで、齊艶華氏がたばこを吸い、たばこ詰めの儀礼を行う際に使用していたものである。幅 4.5cm×長さ 20cm 程度の鮭の皮を 2 枚繋げたもので、幅 18cm×長さ 18cm 程度の瓢箪状を成している。中央には鮭の皮を用いて幅 7cm×長さ 17cm 程度の巻草紋が飾られている。上部に直径 8cm 程度の開口部が設けてあり、開口部から 4cm 程度のところに、幅 2cm×長さ 39cm 程度の鮭の皮製の紐が付されている。煙荷包に付けられた紋様には、上述した巻草紋の他に



齊艶華氏所有 2020 年撮影

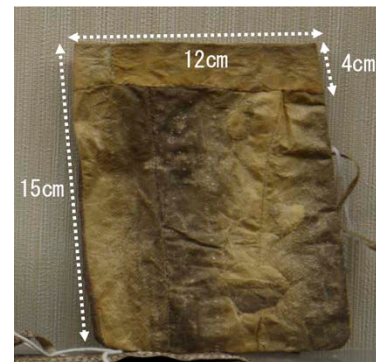
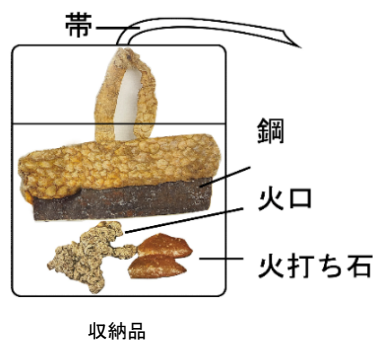
図 2-14 煙荷包



図 2-15 タバコを詰める様子



1) 尤萍氏所有 2018 年撮影



2) 尤兵氏所有 2019 年撮影

図 2-16 火鎌袋とその内容物

も、胡蝶紋があり、また、魚皮の材質としてはスズキも用いられることがあった。

4.9. 火鎌袋

火鎌袋(図 2-16)は、ホジェン語で「ユコチェン」と呼ばれ、火口、火打ち石、鋼で構成される火付け道具を収納するための袋で、ホジェン族の男性が漁猟・狩猟の際に行うさまざまな活動での必需品であった。収集した2点の実物資料は、いずれも、矩形で、小さな革袋のようなものであり、袋の口に皮の帯が1本付されている。

男性は、火鎌袋に入れた火付け道具を使用して火を点け、山や川辺で捕獲した魚などを調理したり、寒い冬には暖を取ったり、夜に火を焚くことで獣を遠ざけたり、山のなかではぐれしまった場合には火を点けた木の棒を持って仲間を探したり、火の光で合図を送ったりなどさまざまに利用した。また、喫煙や、たばこ詰めの儀式など、日常生活でも、火鎌袋は幅広く使用された。ホジェン族の火に関する約束事では、火付け道具は地面に置かず、火鎌袋に収納し身につける必要があったという(尤文鳳氏)。

たとえば、図 2-16-2)は、1974年頃から1987年頃まで、尤兵氏が野外で火を起こす際に使用していたものである。幅8cm×長さ12cm程度の鮭の皮が7枚繋げられたもので、幅12cm×長さ15cm程度の長方形を成している。上部からの4cm程度のところには開口部が設けてあ

表 2-4 48 点の魚皮衣に用いられている素材とその割合

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
袖なし上着	○	○													
袖あり上着	○	○		○	○	○	○	○				○			
長袍	○		○						○		○				
ズボン	○	○				○	○	○							
靴	○	○			○					○					
脚絆	○	○													
手袋	○												○	○	
煙荷包	○			○											
火鎌袋	○														
素材	鮭皮	鯰皮	コクチマ ス皮	スズキ皮	チヨウザ メ皮	コクレン皮	カワカマス皮	コイ皮	ソウギョ皮	レンギョ皮	ボウウオ皮	シカの筋	ノロの皮	シカの腹の毛	
実数	35	6	1	2	2	2	3	2	1	1	1	2	2	2	62
割合 (%)	56.5	9.7	1.6	3.2	3.2	3.2	4.8	3.2	1.6	1.6	1.6	3.2	3.2	3.2	100.0

全体

表 2-5 代表的な魚資源や動物資源の利活用

	肉	鱗	内蔵	白子	卵	骨	頭	皮の端材
鮭	冬の食糧	家畜や犬の餌	腎臓によい	栄養価が高い	カルシウムの補充	筋がつった場合	玩具素材、カレンダー、窓飾り	
鯰	骨	肉						
	魚毛	下肢の浮腫の治療						
カワカマス	肉	骨						
	凍魚片	玩具素材						
チョウザメ	頭	浮き袋	腹	卵	肉	全体		
	供物	天然糊	魚油	食糧		皇帝への貢ぎ物		
コイ	背骨	肉			骨	血	胆汁	
	ボタン	息切れ			下痢	口の歪み	中耳炎	
		泥で包み、火のなかで焼いた後にコイの骨と鱗を取り除き、粉にする。湯で溶き、日1回空腹時に飲む			骨を火にかけて焼き、粉にしたものを内服する		砂糖と混ぜて、外用する	
シカ	肉	皮	筋	心臓		腎	袋角	腹の毛
	食糧	チョッキ、布団、靴の修繕材	糸	咳止め効果が高い		栄養補助の材料	保温材料	

る。紋様は施されておらず、それは他の火鎌袋も同様である。

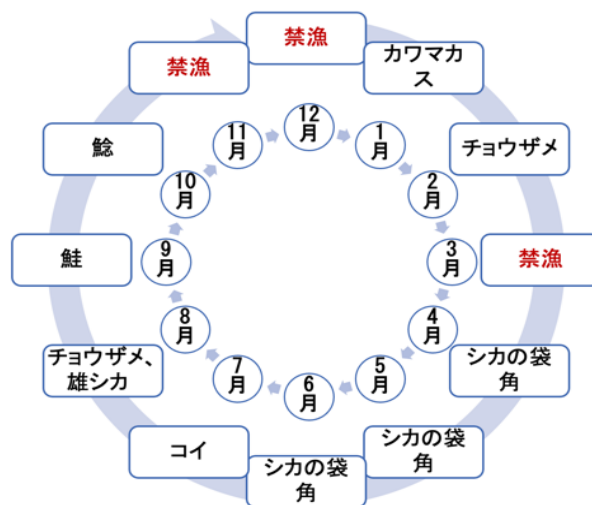


図 2-17 季節ごとに捕獲された代表的な魚資源や動物資源

5. 魚皮衣の素材

次に、日常生活における魚皮衣の特質を、用いられた素材の観点から観察する。

筆者が収集した48点の魚皮衣を素材の観点からみると、鮭、鯰、カワカマス、コクチマス、スズキ、チョウザメ、コクレン、コイ、ソウギョ、レンギョ、ボウウオ、ノロの皮、シカの筋と腹の毛の14種類が用いられていた(表2-4)。それらは11種類の魚資源、3種類の動物資源に分類することができる。また、素材ごとの出現回数の比率を表2-5に示した。

本節においては、魚皮衣の素材の使用実態に関する聞き取り調査より、代表的な魚資源や動物資源の利活用(図2-17)に基づく生活の知恵を概観していきたい。なお、魚の名称の後の括弧内に漁獲の時期を示す。

5.1. 魚皮衣の素材にみる魚資源の利活用

(1) 鮭(9月) 鮭の皮(図2-18)は、日常生活における魚皮衣の素材として使用されることが最も多い(62点中35点、約56.5%) (表2-4)。鮭はホジエン語で「ダマハ」と呼ばれる。孫茂寛が著した『関東搜異録』[注21]によると、「ダマハ」とは「定時に川に回帰する魚」または「時間を守る魚」という意味である。伝説によると、白露の頃に、ある集落で食糧不足が発生し、人びとが神に祈ったところ川辺に一群の鮭があらわれて、彼らを救ったという。この部族が現在のホジエン族であり、毎年、白露の前には、鮭の神に感謝し豊漁を祈る鮭祭りが行われてきた。このように、鮭は重要な生活資源であるのみならず、信仰の対象ともなってきた。当該地域では、成長過程と考えられる比較的小型の鮭は捕獲が厳禁とされ、9月の白露の頃に成熟した「ダマハ」のみが捕獲可能とされる。一方、他の魚の持続可能な利用を維持するために、毎年11~12月と3月は休漁期とされてきた[注22]。



図2-18 鮭の皮



図2-19 窓飾り

また、聞き取り調査によると、人びとは皮を含む鮭の全体を生活資源として無駄なく活用しており、たとえば、干した鮭の肉は冬の食糧として、鱗や内臓などは家畜や犬の栄養補給の餌として使われてきた。白子は腎臓によく、鮭の卵3粒はニワトリの卵一個の栄養価に相当するなどとされている。鮭の骨からつくった魚骨粉は、生後6ヶ月頃の幼児の食物に入れて食べさせ、カルシウム補充の方法として利用されていた[注23]。鮭の頭で煮たスープを飲むと、筋肉痛が治るとされていた。その他の鮭の魚皮も、子どもの玩具の太鼓の鼓面、暦、窓飾り(図2-19)などの生活用品の素材として利用されてきた(表2-5)。なお、窓飾りとは、人びとが新年を迎えるために、魚や波などの自然物を紋様化した魚皮の図案を窓に貼るものであった。

(2) 鯰(10月) 鯰の皮(図 2-20)は上着とズボンの最も重要な素材の一つである(62 点中 6 点、約 9.7%) (表 2-4)。鯰は、鱗がない魚で、ホジェン語で「ガイキュウ」と呼ばれ、その意味は、赤子の肌のように滑らかな肌触りの魚である。生まれてから 3 年経つと最大で全長約 2m 程度まで成長する。秋に捕獲される鯰の肉と骨は、子どもが最も好むそぼろ料理「魚毛」の素材である。また、鯰は薬の効能があり、その肉を煮ることで下肢の浮腫の治療に用いた(呉彩云氏) (表 2-5)。



図 2-20 鯰の皮

(3) カワカマス(1月) ホジェン語で「クチン」と呼ばれる。クチンとは「暴風」という意味である。当該地域に生息する魚のなかで、カワカマスは最も速く泳ぐとされている魚である[注 24]。鞣したカワカマスの皮(図 2-21)の繊維は非常に長く保温効果が高く、冬の袖あり上着とズボンの素材の一つとして用いられてきた(62 点中 3 点、約 4.8%) (表 2-4)。冬に捕獲して凍らせたカワカマスの肉は、凍魚片という料理の素材として用いられており、正月の際や来客をもてなす際に食される。カワカマスを含めたさまざまな魚の骨を組み合わせて胡蝶や熊などの形をした子どもの玩具(図 2-22)がつくられてきた(尤文鳳氏) (表 2-5)。



図 2-21 カワカマスの皮

(4) チョウザメ(2月、8月) ホジェン語で「アシン」と呼ばれるが、アシンとは「皇帝」や「首領」という意味である。現地の魚類のなかで、チョウザメは体が最も大きく、魚の首領と認識されてきた[注 25]。チョウザメの皮(図 2-23)は袖なし上着や靴の素材として使われてきた(62 点中 2 点、約 3.2%) (表 2-4)。かつて、人びとは耐水性があり腐食しにくいチョウザメの皮を愛用していた。伝説によると、ある若者が毎日重労働を繰り返してもチョウザメの皮の靴は破れなかったが、偶然に馬の温かい糞を踏んだら靴が破れたという(孫玉林氏)。チョウザメの皮が熱に弱いことを端的に表している。



図 2-22 玩具



図 2-23 チョウザメの皮

また、孫玉琴氏、何鋭鋼氏などによると、ホジェン族にとって、チョウザメは食材であるのみならず、皇帝への貢ぎ物や祭祀用の供物でもあった。たとえば、毎年、大晦日までに、朝廷の皇帝にチョウザメを貢ぎ物として献上するならわしがあり[注26]、そのチョウザメは、正月の夜に天の神を祭祀する供物として使われた。同時に、ホジェン族が家族全員の健康と幸せを祈り、新年の大漁を祈願したり、天の神などを祀る際にチョウザメの頭を供物として使った[注27]。さらに、チョウザメの腹、卵、肉、浮き袋は魚油、食糧、天然糊などとして利用されてきた(表2-5)。なお、天然糊は、魚皮製の紋様を衣服に貼る際に用いられたもので、チョウザメの浮袋を煮てつくられる。

(5) コイ(7月) ホジェン語で「ガイキュウ」と呼ばれる。ガイキュウとは、水面から約1mの高さまで跳び出すことができる魚という意味である。コイの皮(図2-24)は、袖あり上着、ズボンの素材として使われてきた(62点中2点、約3.2%)(表2-4)。大きい鱗があるコイの皮は服の紋様の素材にも使われ、背骨はボタンの素材であった。また、李勤医氏、呉宝臣氏などによると、コイは食材と服の素材のみならず、その骨や胆汁、肉、血が、下痢や中耳炎、息切れ、口の歪みの治療の民間薬として利用されてきた(表2-5)。



図2-24 コイの皮

5.2. 魚皮衣の素材にみる動物資源の利活用

(1) シカ(4月-6月、8月) ホジェン語で「クマカ」と呼ばれる。クマカとは、人びとに平穏な生活をもたらす動物という意味である。その名称は、昔、シカが人間を助けた伝説に由来する。シカの筋と腹の毛は服の糸と手袋の素材であった(表2-4)。いずれも、全体の約3.2%(62点中2点)を占めた(表2-4)。かつて、男性は4月から6月中旬にかけて、山へシカの袋角を狩りに行った。8月のシカ狩りでは、男性たちはシカ皮をまとい、白樺の樹皮でつくったシカ叫子を使い、雌シカの鳴き声をまねた音を出すことで、雄シカを惑わせて捕獲した。但し、雌シカと仔シカの捕獲は禁止されていた[注28]。シカの肉は食料、皮はチョッキや布団の素材、腎臓、雄シカの袋角は栄養補助の材料として使われた。シカの心臓から出る血は咳の治療に用いられた(尤士柱氏、呉占山氏)(表2-5)。

6. 魚皮衣の紋様

次に、日常生活における魚皮衣の特質を、施された紋様の観点から観察する。

6.1. 魚皮衣の紋様に基づく分類

本研究において収集した48点の魚皮衣に施された紋様には、雲紋、波紋、巻草紋、魚紋、シカ紋、胡蝶紋、葉紋がある(表2-6)。また、それらは、(1)自然現象(2種類)、(2)動物(2種類)、(3)昆虫(1種類)、(4)植物(2種類)に分類することができる。なお、表2-3に示された48点の魚皮衣に用いられた紋様の出現回数を集計し、その比率を表2-6に示した。さら

に、魚皮衣に施された紋様の使用実態に着目するとともに、聞き取り調査を踏まえ、紋様の種類と意味を概観したい。

表 2-6 48 点の魚皮衣に用いられている紋様とその分類・役割

番号	1	2	3	4	5	6	7	全体	
袖あり上着	○	○			○	○	○		
袖なし上着	○	○	○		○				
長袍	○	○	○				○		
ズボン	○	○	○	○		○			
靴	○			○					
脚絆									
手袋							○		
煙荷包					○	○			
火鎌袋									
類型	①		②		③	④			
	自然現象		動物		昆虫	植物			
素材	雲	波	魚	シカ	胡蝶	巻草	葉		
実数	14	13	3	2	3	4	5	44	
割合(%)	31.8	29.5	6.8	4.5	6.8	9.2	11.4	100.0	

6.2. 魚皮衣の紋様の種類と意味

(1) 自然現象(2種類)

・雲紋と波紋 雲紋は日常生活における魚皮衣の上着、長袍、ズボン、靴に施される(44点中14点、約31.8%)。波紋は、魚皮衣の上着、長袍、ズボンに施される(44点中13点、約29.5%) (表2-6)。水は空の中の雲と川を循環しているものであり、そのサイクルのなかで、ホジェン族の人びとを含めたあらゆる生命が育まれている。ホジェン族の人びとは空と川の恩恵を受けてはじめて、漁獵生活を持続的に営むことができると考え、天と川の神に感謝するために、雲紋と波紋で服を飾った。また、雲紋(図2-25)と波紋(図2-26)は、螺旋紋でもあり、生命の死亡と再生の象徴で、永遠の命という意味がある(尤文鳳氏、孫玉琴氏)。



図 2-25 雲紋



図 2-26 波紋

(2) 動物(2種類)

・魚紋 袖なし上着、長袍、ズボンに施される(44 点中 3 点、約 6.8%) (表 2-6)。ホジェン族にとって、魚紋(図 2-27)は健康と平安の象徴とされる。魚はホジェン語で「イマハ」と呼ばれる。イマハとは、食べられる魚という意味である。伝説によると、ホジェン族の至高の神である天の神(エンドウリ)は、泥土と海水で「ダイ・イマハ(大魚)」をつくり出した。また、十数体の泥人形をつくり、太陽の光の下で干した。雨が降ると、天の神はすべての泥人形が濡れることを恐れ、急いで大魚の口の中に入れた。雨が止んだ後、泥人形は人となって魚の口から飛び出したという。このイマハの伝説から、人びとは大きな魚は人間を守る存在であり、ホジェン族の先祖であると信じられてきた。そのために、人びとは魚の形を紋様化して魚皮衣に施したという(尤文鳳氏)。



図 2-27 魚紋



図 2-28 シカ紋

・シカ紋 ズボンや靴に施される(44 点中 2 点、約 4.5%) (表 2-6)。シカ紋(図 2-28)は豊漁、豊狩、厄除けという意味がある。伝説によると、猟師が山で負傷したトラを助け、トラは恩返しとして猟師に獣肉を贈った。猟師は感謝の印としてシカをトラ祭りの供物として捧げ、その後の狩猟生活が順調になったとされている。それ以来、人びとはシカの神が豊漁、豊狩をもたらすとともに厄除けとなると信じており、毎年 10 月に「踊シカ神」というシカの神の祭りをを行うようになった。この祭りにおいてシャーマンはシカの神と認識され、さまざまな神と交流する(呉福勝氏)。



図 2-29 胡蝶紋

(3) 昆虫(1 種類)

・胡蝶紋 上着や煙荷包に施される(44 点中 3 点、約 6.8%) (表 2-6)。ホジェン族にとって、ホジェン語で「ウクサリン」と称される胡蝶の 1 種であり、ウクサリンが川面に飛び出す時期は、鮭が川に回帰する時期でもある。ウクサリンは繁殖力が強く鮭が餌として捕獲すると認識されており、胡蝶紋(図 2-29)は子孫繁栄を象徴する紋様とされている(孫玉林氏)。

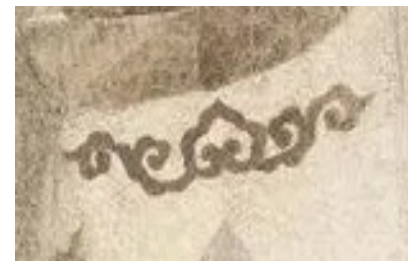


図 2-30 巻草紋

(4) 植物(2 種類)

・巻草紋 巻草紋(図 2-30)は S 型の波紋を連続的に組み合わせたもので、袖あり上着、ズボン、煙荷包に施される(44 点中 4 点、約 9.2%) (表 2-6)。ツツジはホジェン族の花の神の象徴である。かつて、ある女子が部族を救うために、ムドリという悪竜を殺すとともに自らの



図 2-31 葉紋

命を落とし、その後、その女子の墓地にたくさんのツツジが生えたという伝説がある。人びとは女子がツツジに生まれ変わったと信じ、巻草紋が生命を司る花の神の象徴と認識するようになった。したがって、人びとは巻草紋で飾られた服を着ることで、上述の女子のように生涯善行を積むと、来世で生まれ変わることができるかと信じたのである(尤秀云氏、尤文鳳氏)。

・葉紋(図 2-31) 袖あり上着、長袍、手袋に施される(44 点中 5 点、約 11.4%) (表 2-6)。植物は次々と新しい葉を出すので、葉の形を紋様化して飾り、強い生命力の象徴とした(尤文鳳氏)。

7. 魚皮衣の特質に関する考察

以上、ホジェン族の日常生活にみられる魚皮衣とその素材、紋様の 3 つの面に関わる諸相を述べてきた。本章においては、その 3 つの面からみられる日常生活における魚皮衣の特質を概観したい。

7.1. 日常生活からみた魚皮衣の特質

7.1.1. 生者が物故者に祈願の伝達の媒体

日常生活にみられる魚皮衣の観察・考察から、それらは 9 つに分類されることがわかった。また、魚皮衣は日常の労働服のみならず、人びとが亡くなった後、死者と共に土に埋葬され、自然に還された。人びとは肉体がなくなっても、その魂が死後の世界で生活を送ることができると認識しており、家族は魚皮衣の埋葬をすることで生前と同じ幸せな生活を送れるよう祈った。

7.1.2. 多様な生活の知恵の形成への促進の媒体

魚皮衣は、生活の各場面で利活用されている。たとえば、1) 子どもを健康に育てるため、大人が着古した服を素材として袖なし上着をつくり、新生児に着用させた。2) 年長の子どもが着られなくなった袖なし上着、袖あり上着、スボン、靴などは、年少の子どもの日常生活における魚皮衣として再利用された。3) 長袍は既婚の女性を象徴する服飾である。4) 狩猟や危険の際に自身の下肢を守る保護具としてのみならず、包帯や牽引縄などの用具として、男性たちは脚絆を着用した。5) 手袋は男性の冬の防寒具のみならず、狩猟の道具づくり、狩猟後に山を下りる際、冬季の漁などの際に用いた欠かせない道具であった。6) 煙草を入れる道具である煙荷包は、外出時に毒蛇や蚊からの刺咬を予防する効果があり、未婚者男女の結婚の約束の印としての贈り物でもあった。さらに、「たばこ詰め」により家族内外のコミュニケーションを促進する媒体でもあった。7) 火付け道具を収納する火鎌袋は、男性が漁猟・狩猟の際に行うさまざまな活動で利活用された。さらに、火付け道具を火鎌袋に必ず入れ身につけるなどの火に関する約束事の形成を促進した。以上のように、ホジェン族にとって、日常生活における魚皮衣の使用は子育て、既婚女性の象徴、危険の際の救済、冬の狩猟の道具の制作・使用、男女の結婚前の約束の印、家族内外での「たばこ詰め」の儀式、火に関する約束事などの生活における多様な知恵の形成を促進した。

7.1.3. 「互敬互愛」の人間関係の構築への促進の媒体

煙荷包の使い方から、煙荷包は、たばこを詰める際に用いた道具であるのみならず、主客や老若男女、嫁姑などの間の「互敬互愛」の人間関係を促進した媒体でもあった。たとえば、主人は客人に「たばこ詰め」をし、歓迎の意を表した。若者が高齢者にたばこ詰めをすることは、親孝行とされた。結婚式では男性が女性に「たばこ詰め」をし、愛を表した。舅と姑には「たばこ詰め」で、尊敬を表した。このように、煙荷包を用いてたばこを詰める行為そのものが、ホジェン族の人間関係を深める重要な手段であったのである。

7.2. 素材からみた魚皮衣の特質

7.2.1. 「人と自然との共存・共生」の集団意識の構築への促進の媒体

日常生活における魚皮衣の素材から、魚皮衣の生地に使用される素材は 14 種類で、その内、魚資源は 11 種類、動物資源は 3 種類であった。四季の移り変わりのなかで、魚資源や動物資源を季節ごとに適量採取し、持続可能な利活用がなされてきた。たとえば、鮭の鱗と内臓、白子と卵、骨、頭は家畜や犬の餌、滋養のつく食べ物、幼児のカルシウム補充、民間薬として利活用されてきた。特に、鮭のすべては無駄なく利用された。凍らせたカワカマスの肉は正月の時や客をもてなす際の料理であり、骨は玩具として利用された。チョウザメの全体を皇帝への貢ぎ物として、その頭、腹、卵、肉、浮き袋を祭祀用の供物、魚油、食糧、天然糊として利用されてきた。コイの骨や胆汁、肉、血も下痢や中耳炎、息切れ、口の歪みの治療などの民間薬として利用されてきた。雄シカの肉、皮、腎臓、胎盤、袋角、心臓の血、肩甲骨を食材、チョッキや布団の素材、栄養補助の材料、薬の効用、占いの道具としても使用された。ホジェン族は、魚やシカなどの自然資源を日常生活の各方面で重要な生活資源として無駄なく利活用してきたのである。

人びとは魚や動物を持続的に利用する生活を構築する上で、成熟期の魚のみを捕獲し、また小魚の捕獲を禁止した。4月から6月まではシカの袋角のみを採取し、8月は雄シカのみを捕獲し、雌シカと子シカを捕獲しないという約束事が生み出され、人びとはそれを遵守してきた。また、自然の恵みに感謝して、毎年9月の鮭の神祭りや、10月のシカの神祭りなどを行う。すなわち、ホジェン族にとって、魚皮衣の素材である身近な鮭などの魚やシカなどは、生活資源のみならず、信仰の対象でもあった。ホジェン族の人びとが自然を無駄なく利用し、自然を守り、自然を感謝する行為を通して、「人と自然との共存・共生」という集団意識を構築してきたことが理解された。

7.3. 紋様からみた魚皮衣の特質

7.3.1. 長寿、健康、豊漁、豊狩、厄除け、子孫繁栄、生命の転生、強い生命力などの願いの媒体

ホジェン族は、古くから、五穀を植えずに、川と山から手に入れる魚や野生動物を食糧などの生活資源として用いてきた。人びとは、痘瘡や悪瘡、浮腫などのさまざまな病気に対し、また漁猟・狩猟を行う過程でのさまざまな危険に対し、願望を込めて、身の回りの自然現象、動植物、昆虫をホジェン族の美意識と融合しつつ紋様化し、それらを魚皮衣に施した。たとえば、魚皮衣に施した雲紋と波紋は、不老長寿への願いを象徴していた。魚紋は、健康と平安の象徴であり、シカ紋は豊漁、豊狩、厄除けの象徴であった。胡蝶紋は、子孫繁栄を象徴

する紋様とされ、巻草紋は生命の転生の象徴として、手袋に施した葉紋も同様に考えられた。つまり、日常生活における魚皮衣には、長寿、健康、豊漁、豊猟、厄除け、子孫繁栄、生命の転生、強い生命力などの生活に対する人びとの深い祈りが込められていたことがわかる。

8. おわりに

本章では、中国黒竜江省同江市街津口村において、ホジェン族の日常生活にみられる伝統的服飾である魚皮衣を対象とし、その特質を考察してきた。得られた知見は、以下の通りである。

(1) 日常生活における魚皮衣は、単に労働服としてのみならず、副葬品として物故者に祈願を伝達するとともに、自然に還してきたことから、ホジェン族の資源循環型の生活を構築した重要な要素の一つであったといえる。

(2) 日常生活における魚皮衣の構成要素の多様性は、子育て、魚皮衣の再利用、既婚女性の身分の象徴、自力救済と道具の制作、未婚男女間の贈り物、家族間の互敬互愛、火に関する約束事など、生活における多様な知恵の形成を促進するものであった。

(3) 人びとは身近な鮭、コイ、チョウザメなどの11種の魚、シカ、ノロの生息や形、各部位などのさまざまな特性を観察し、それらの特性によって魚皮衣の各要素の異なる部分に利活用した。残った各部位も生活用品の素材として無駄なく利活用した。とりわけ、鮭などの魚、シカは魚皮衣の素材のみならず、信仰の対象として守り、感謝するものであることから、魚皮衣は、人と自然との共存・共生に基づく社会的秩序を構築する必要な媒体であったといえる。

(4) 人びとは身の回りにみられる雲や波の自然現象、動物、昆虫、植物などの自然物の形や生態などを観察し、それらを紋様化し、魚皮衣に、伝説や自然物の特性などから、長寿、健康、豊漁、豊猟、厄除け、子孫繁栄、転生、強い生命力などの意味を与えた。すなわち、日常生活における魚皮衣は、ホジェン族の人びとの精神的な営みを豊かにする媒体であった。

日常生活における魚皮衣は単に「モノ」であるのではなく、物質的・精神的な営みを豊かにしていく媒体として存在しているものである。また、魚の利活用に基づく資源循環型の生活を構築する重要な媒体でもある。

注および参考文献

- 1) ソビエト連邦(1922年から1991年までユーラシア大陸北部に存在した社会主義国家)の解体後、ロシアはその後継国家として現在に至っている。現在、ロシアで暮らしているホジェン族は「ナナイ族」と呼ばれている。
- 2) 張敏杰、王益章：漁家絶技・赫哲族魚皮の制作技芸、黒竜江人民出版社、8、2008、1860年に中国清朝政府が締結した『中俄北京条約』の影響で、ホジェン族の一部の居住地はロシアに割譲され、中国領土内におけるホジェン族の人口は約2万人から4600人に減少した。
- 3) 筆者が2016年に現地調査の際に当該地域の政府から提供を受けた「街津口村の人口統計」の文書資料から得たデータである。
- 4) 凌純聲：松花江下游的赫哲族、上海文芸出版社、72、1934、魚皮衣とは、漢語に翻訳し、漢字で表したものである。
- 5) 前掲2)、2
- 6) 楊賓：柳辺紀略、1707
- 7) 国家民委：赫哲族簡史、民族出版社、11、2009
- 8) 日本における国指定無形文化財と同様の位置付けである。
- 9) 煙荷包、タバコを入れる魚皮の袋。
- 10) 火鎌袋、火起こし道具を入れる魚皮の袋。
- 11) 平原かや子：アムール川汚染報道に関する一考察、環東アジア研究センター年報、130、117、2010
- 12) 前掲5)
- 13) 劉玉亮：文飾図案和造形芸術・赫哲族卷、黒竜江教育出版社、2008
- 14) 閃爍：赫哲族伝統的魚皮服飾特色与創新設計研究、沈陽航空航天大学、修士論文、2015
- 15) 前掲5)、75
- 16) 前掲2)、67
- 17) 数え年で7歳という意味である。
- 18) モニゲンの物語、かつて、部族の中に銜で10cm程度の小さな魚でも捕える巧手があり、その男がみんなを連れて漁に行くと大漁となった。このように銜で魚を捕える巧手をホジェン族の人びとでは英雄として「モニゲン」と呼んだ。
- 19) 国家民委：中国少数民族古籍目提要・赫哲族卷、中国大百科全書出版社、154、2010
- 20) 前掲2)、40
- 21) 王世卿、王積信、呂品：赫哲族魚文化、黒竜江教育出版社、12、2010
- 22) 孔春、植田憲：中国少数民族ホジェン族にみられる鮭の一物全体活用：魚資源活用に基づく生活文化、日本デザイン学会研究発表大会概要集67、323、2020
- 23) 前掲22)
- 24) 孔春、青木宏展、植田憲：ホジェン族の魚の呼称に表出する生活の知恵：実態調査に基づいて、アジアデザイン文化学会研究発表概要論文集、89-92、2022

25)前掲 22)

26) 于学斌、孫雪坤：赫哲族漁獵生活、黒竜江美術出版社、55、2006

27)前掲 22)

28)前掲 5)、88

図の出典

1) 図 2-8：傅恒等：皇清職貢図、1751

2) 図 2-15：2010 年、街津口村にて肖殿昌氏撮影

第三章

ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」
の神服の特質

1. はじめに

筆者は、前章「日常生活にみられるホジェン族の伝統的服飾『魚皮衣』の特質」[注1]において、収集した48点の日常生活における魚皮衣を取り上げ、その素材、紋様などを分析・分類し、その特質を考察した。さらに、魚の利活用に基づき形成された魚皮衣が、日常生活において、ホジェン族の資源循環型の村落社会づくりを促進する重要な要素の一つであることを明らかにした。本章で取り上げるのはホジェン族のシャーマンが、非日常生活において祈祷師として着用する魚皮衣の神服である。

中国においては、1966年に始められた文化大革命を契機として、伝統的な宗教的活動が全面禁止され、中国黒竜江省同江市・街津口村に居住するホジェン族も例外ではなく、以来、長年にわたり形成されてきた特有の人生儀礼や祭りなどの非日常的な生活様式が消失の危機に直面している。加えて、近年、急速な都市化に伴い、身近な魚の皮などを利活用することで構築されてきたホジェン族の伝統的服飾である魚皮衣と、それに関連する日常生活および非日常生活の文化の維持・存続が危ぶまれている。

本章においては、魚皮衣のなかでもシャーマンのみに制作・使用が許された神服の特質を明らかにすることを目的とした。なお、本章では、前章と同様魚皮衣に神服のみならず、神手袋などの含むものとする。

2. 先行研究

文化大革命の影響で、ホジェン族の非日常生活における伝統的服飾である魚皮衣に関する書籍や論文などの文献資料は極めて少なく、現在までに3件が確認されるのみである。『松花江下游的赫哲族』[注2]においては、結婚式などに使用された魚皮衣が紹介されている。『赫哲族薩滿的服飾与神具』[注3]においては、ホジェン族とロシアのナナイ族[注4]のシャーマン用の魚皮衣の比較検討が行われている。「赫哲族薩滿服飾中的神帽・神衣・神裙」[注5]においては、シャーマン用の神帽と神衣の特徴をまとめて紹介している。これらの先行研究に対して、本研究においては現地調査を行い、ホジェン族の伝統的服飾である魚皮衣の神服の構成や使い方、紋様の分類などを明らかにした。

3. 研究方法

2016年から2023年にかけて5回の現地調査を行い、呉福勝氏、尤文鳳氏など8人への聞き取り調査(表3-1)を行った。

(1) シャーマンの概況 聞き取り調査により、ホジェン族の各居住地におけるシャーマンの人数などの情報(表3-2)を収集し、さらに調査地である街津口村におけるシャーマンの概況などを把握した。

(2) 神服の分類 現地調査により、非日常生活における魚皮衣の実物や写真資料25点を収集し、それらの寸法、使用者、素材、紋様、制作年、使用開始年など(表3-3)を記録した。また、シャーマンである呉福勝氏と付安学氏の家族の尤文鳳氏の2人、村民たち6人への聞き取り調査により、25点の魚皮衣の写真資料の内15点が非日常生活における伝統的な魚皮衣の神

表 3-1 聞き取り調査対象者(年齢は 2023 年調査時)

番号	名前	年齢	性別	担当
1	尤文鳳	72	女	シャーマンの付安学氏の妻であり、シャーマンの尤徳庫氏の孫娘で、神服が制作できる
2	尤秀云	72	女	ホジェン族民族文化村展示館のツアーガイドで、魚皮衣が制作できる村民である
3	呉玉梅	67	女	結婚式と葬儀の省級伝承者である
4	呉福勝	65	男	シャーマンで、祭りなどの主任祭司
5	呉宝臣	63	男	イマカン(語り物)や伝説などに関する伝承者
6	尤軍	63	男	省級秋鮭捕獲技芸伝承者
7	趙宝芹	62	女	呉福勝の妻で、神服が制作できる
8	孫玉林	62	男	漁獵・狩獵が得意な村民である

表 3-2 ホジェン族の各居住地におけるシャーマンの人数の統計(2023年の聞き取り調査より)

ホジェン族の居住地・人口		シャーマンの個人情報			
居住地	人口	番号	名前	年齢	性別
同江市街津口村	516 人(2022 年)	1	呉福勝	65	男
		2	付安学	64(2014 年没)	男
同江市八岔村	364 人(2022 年)	3	付智利	61	女
撫遠市	893 人(2021 年)	4	尤軍	63	男
饒河四排村	155 人(2022 年)	5	葛玉霞	64	女
		6	尤雪村	50	男
敖其村	326 人(2019 年)	7	呉明新	87(2023 年没)	男

服であることが明らかになった。それらを、構成および紋様の観点から分類し、さらに、各構成要素の装飾物の役割、紋様の意味などを把握した。

(3) 非日常生活にみられる神服 聞き取り調査により、神服と関係がある人生儀礼や祭りをまとめ、それらにおける神服の使い方を把握した。

(4) 魚皮衣の神服の特質の抽出 (1)～(3)に基づき、魚皮衣の神服の特質を明らかにした。

4. ホジェン族のシャーマンの概況

ホジェン族は、中国の黒竜江、松花江、烏蘇里江の3つの河川の流域に居住してきた。ホジェン族にとって、生活している現世空間は、上(天界)、中(地界)、下(地下界)の三界に分けられ、地下界に宿る神は「ブシュク」と呼ばれる(尤秀云氏、呉玉梅氏)。霊界でも上、中、下の三つの空間領域が存在しているという。また、人類などの魂は3種類に分けられ、1つ目は、

表 3-3 街津口村で収集した 15 点の神服の分類と素材・紋様・使用実態(年齢は調査時) 6 銚の柄と刃は離すイメージ図

番号	分類	使用者		素材	紋様	制作年	使用開始年	調査年
		名前	年齢 性別					
1	神帽	呉福勝	62 男	鮭皮、綿布	なし	1994	1994	2020
2		付学安	64(2014年没)	鮭皮	太陽、波、雲、魚、熊、龍、蛇、トカゲ	1989	1989	2020
3		尤文鳳	71 女	鮭皮、綿布	鳩	2010	2010	2022
4		呉福勝	62 男	鮭皮	魚、波、雲	1994	1994	2020
5	神衣	付学安	64(2014年没)	鮭皮	波、ハリネズミ、鷹、巻草	1989	1989	2020
6		尤文鳳	71 女	鮭皮	鳩、波、巻草、龍、熊、トカゲ	2010	2010	2022
7		呉福勝	60 男	鮭皮	波	1994	1994	2018
8	神裙	尤文鳳	65 女	鮭皮	鹿、巻草	2010	2010	2016
9		呉福勝	62 男	鮭皮		1994	1994	2020
10	神腰帯	付学安	64(2014年没)	鮭皮	なし	1989	1989	2020
11		尤文鳳	65 女	鮭皮		2010	2010	2016
12	神靴	呉福勝	62 男	鮭皮	亀	1994	1994	2020
13		付学安	64(2014年没)	鮭皮	カエル	1989	1989	2020
14		呉福勝	62 男	鮭皮	トカゲ、亀	1994	1994	2020
15	神手袋	付学安	64(2014年没)	鮭皮	なし	1989	1989	2020

注：各実物のなかで、同じ素材、または、同じ紋様が2回以上登場しても、1回の出現回数で集計した。
統計によると、素材は合計で17要素が含まれている。そのうち、素材としての鮭の皮の出現率は、全体の88.2%(15/17)を占めた。
紋様は合計で29要素であった。各種の紋様の出現率を、図3-12に示した。



図 3-1 神服

図 3-2 神像が彫刻できるシャーマン付安学氏

死後肉体から離れた「オラン」と呼ばれる魂、すなわち、「生命の魂」である。人が亡くなった後、魂送の儀式が行われるが、この儀式で屋内から屋外に送られる魂が「生命の魂」である。2つ目は、病気で一時的に肉体から離れる「ハニ」と呼ばれる魂、すなわち、「思想の魂」である。人が病気になる要因は、悪霊が人の「思想の魂」を一時的に持ち出すためと考えられている。病気を治すために、シャーマンは魂を招くための儀式を行う必要がある。3つ目は、埋葬後に生まれ変わることができる魂であり「フアヤンク」と呼ばれる[注6]。

シャーマンは男女とも存在しており、ホジェン族の「祈祷師」として人びとと万物の霊魂との交流・交信をする役割を果たしている。普段は、一般の人びとと同様、漁猟・狩猟生活を送っており、魚皮製の日常服を着用している。祭りなどでは祈祷師としてホジェン族の精神的支えとなっており、疫病・伝染病・精神病などの治療、魂招、魂送、葬儀、祭りなどの際には、魚皮を用いた神服(図 3-1)を着用する(尤文鳳氏、呉福勝氏)。神服は、ホジェン族における人生儀式や祭りなどにシャーマンが必ず着用する神聖な力を持つ衣服である。シャーマンは神霊を招く際、神霊のために霊界から人間への一定の道筋を創造する必要がある。この道筋は、細い帯のようなものを媒介として現世と霊界の道が繋がると信じられている。そして、シャーマンが神霊に祈る際、シャーマンの身体は天と地の間立ち、細い帯のようなものとなり、同様に神霊のために人間への道を案内すると認識されている。神服に施された細い帯のような装飾品も、同様に神や魂が人間と霊界の間の道案内をするのに役立っているのだという(呉福勝氏)。なお、魚皮は衣服の材料としてだけでなく、前報で述べたように、悪霊を追い払いのためにも使われており、人間を守ることができる。すなわち、シャーマンは人間と霊界の間に道筋をつくらない限り神霊を招くことができず、人びとを癒し、加護を祈り、

魂を送る手助けができない。なお、悪霊の妨害を防ぐために、シャーマンは魚皮を利用することで、心身を守ることができる。以上に述べたことから、シャーマンは神服との関係が極めて深いことがわかる。また、非日常的な生活における魚皮衣の神服はシャーマンと同様、人間と霊界の道が繋がる媒体として使用され、すなわち、神服はホジェン族の時空で存在している霊界との深い関係がある。

シャーマンの伝承方法は、家族・氏族シャーマンと大シャーマンの二つに分類できる[注7]。聞き取り調査(表 3-1)によると、シャーマンは 2023 年 9 月 10 日で 5 名である。街津口村に居住する。シャーマンは呉福勝氏と付安学氏の 2 人である(表 3-2)。呉福勝氏と、2014 年頃に死去した付安学氏(図 3-2)は、家族・氏族シャーマンであり、呉氏が祖父と父の技能を継承したが、付氏は母の技能を継承し、母が生前に着用した神服を遺物とした。

表 3-4 構成を基準に分類した神服

番号	分類	素材	紋様	個数
1	神帽	鮭皮、綿布	鳩、太陽、龍、波、雲、魚、熊、蛇、トカゲ	3
2	神衣	鮭皮	鳩、龍、鷹、波、雲、魚、巻草、熊、トカゲ、ハリネズミ	3
3	神裙	鮭皮	鹿、巻草、波	2
4	神腰帯	鮭皮	なし	3
5	神靴	鮭皮	亀、カエル	2
6	神手袋	鮭皮	トカゲ、亀	2
計				15

5. 神服の形態的・意味的特質

本節では、現地調査によって得られた 15 点の神服(表 3-3)を取り上げる。いずれもシャーマンが人生儀礼や祭りの際に着用したものである。それらは、主に鮭の皮を用いてつくられ、神帽(3 点)、神衣(3 点)、神裙(2 点)、神腰帯(3 点)、神靴(2 点)、神手袋(2 点)の 6 種類に分けられる(表 3-4)。それぞれについて概観していきたい。

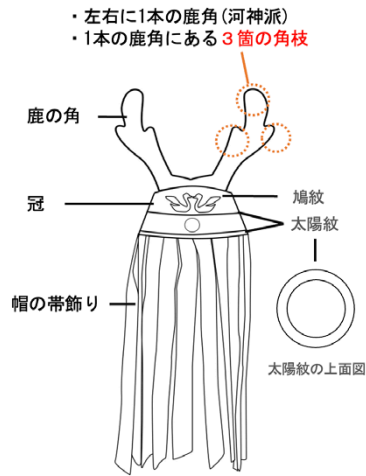
5.1. 神帽

神帽(図 3-3)は、ホジェン語で「フジキ」と称され、鹿角の形の帽子という意味である(呉福勝氏)。収集した 3 点の実物資料は、いずれも、鹿の角、冠、帯飾りの 3 部分から構成される。特徴として、帽子の上に鹿の角が飾られている。それらの形は 2 種類があり、左右に鹿の角が 1 本ずつ、角ごとに 3 つの尖があるもの、もう一つは、左右に鹿の角が 3 本ずつ、角ごとに 9 つの尖があるものである。冠の中央に小銅鏡が 1 枚、帽子の縁から、数十本の帯飾りが垂れ下がり、それらの長さは胸に達する。

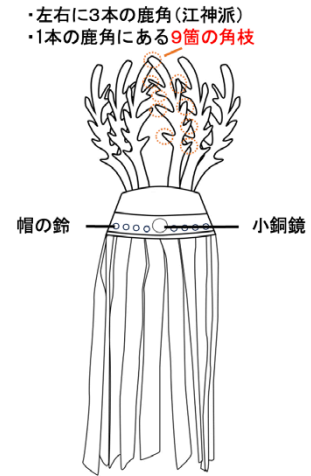
神帽に飾られる鹿角、小銅鏡、帽の鈴、帽の帯飾りの装飾物は、シャーマンにとって異なる役割があるという(呉福勝氏、尤文鳳氏)(表 3-5)。次に、それらを概観したい。



1) 尤文鳳氏所有



尤文鳳氏所有の神帽の正面図

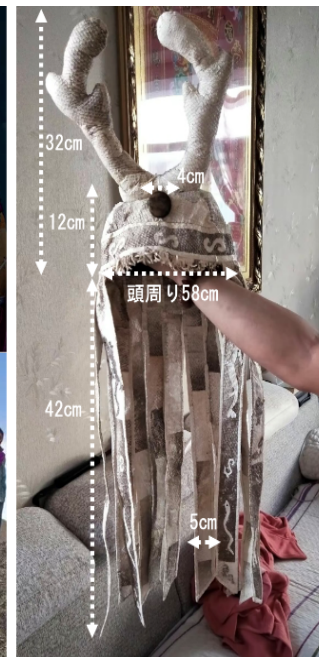


呉福勝氏所有の神帽の正面図

(1) 鹿角 神帽の上部に飾られている鹿角は、シャーマンが天界の諸神を招くために付すとされる。鹿の角の本数によって、河神派、神獣派[注8]、江神派の3つの派閥に分かれている[注9]。付安学氏の母の神帽は左右に鹿の角が1本ずつで、河神派の神帽である。呉福勝氏の神帽は、江神派であり、左右に鹿の角が3本ずつついている。なお、神帽に2本ずつの角があるのは、神獣派の神帽だという[注9]。一般的に、神帽の装飾物とし



2) 呉福勝氏所有



3) 付安学氏所有 2020年撮影

図 3-3 神帽

て使用される鹿の角は、鹿枝の分岐が3箇から7箇である。呉福勝氏によると、神帽に3、5、7、9、12、15 箇の角枝が施されていたという。鹿の角枝の数で、シャーマンの地位、等級がわかる。15 箇の角枝を施した、神帽を着用するシャーマンが最高級とされた。また、最高級のシャーマンとなるためには、40年から50年かかるとされる。

(2) 小銅鏡 神帽の冠の中央に飾られている1枚の小銅鏡は、シャーマンが霊界に行き死者などの魂を送る際に、道を照らす役割があるとされている。

表 3-5 神帽の装飾物の役割

装飾物	1) 鹿角		2) 小銅鏡	3) 帽鈴	4) 帽の帯飾り	
対象	シャーマン		天界の神	死者	三界の神	
役割	派閥	等級	神の魂の寄宿地	魂送	魂招	神の道案内
						継承者有無

表 3-6 神衣の装飾物の役割

装飾物	1) 銅鏡		2) 神袋	3) 衣鈴	4) 衣の帯飾り
対象	シャーマン	三界の神	三界の神		
役割	心身の保護	神の道照らし	神の寄宿地	神の魂招	神の道案内

(3) 帽鈴 神帽の冠の縁に鈴が飾られており、シャーマンが三界の神を招く役割があるという。

(4) 帽の帯飾り 三界の神には、霊界を往来する固有の道があると認識され、神帽の冠の縁に飾られている帯飾りは、その道の象徴であるとされる。神の魂に道案内をする役割があるという。また、帯飾りに結び目がある場合は、シャーマンの伝承者が存在していることを意味している。

図 3-3-3) は、尤文鳳氏が 1989 年頃に縫製し、1989 年頃から 2012 年頃まで夫の付学安氏が踊鹿神祭りの際に使用していたものである。幅 9 cm×長さ 27cm 程度の鮭の皮 28 枚からつくられ、頭周りが 58cm×高さ 12cm 程度の椀型で、鮭皮により太陽紋と波紋、加えて直径 4 cm 程度の銅鏡が飾られている。上部には、長さ 22cm 程度の 2 本の鹿の角が飾られ、各々 3 つの尖がある。帽子の縁には 12 本の帯飾りが飾られ、各々幅 5 cm×長さ 42cm 程度で、帯飾りには鮭皮を用いた蛇、波、龍、熊などの紋様が縫いつけられている。

5.2. 神衣

神衣(図 3-4)は、ホジェン語で「シケ」と称され、鷹の神が着用する衣服という意味である(尤軍氏)。収集した 3 点の実物資料は、いずれも、日常着の長袍の形状と似ており、腰の下部が扇型で前開きである。男性用の神衣は対襟で、女性用の神衣は斜襟である。前身頃の胸部には 1 つの大銅鏡と数個の小銅鏡が飾られており、またその下部には数個の神袋がある。神袋には数十個の鈴が飾られている。裾の縁には帯飾りがある。

なお、図 3-4-1) の神衣の使用者であった呉福勝氏によると、以前に着用した神衣には銅鏡や鈴などの装飾物が飾られていたが、近年、神服を使うこと自体がなくなり、装飾物もほぼ失われたという。かつて、この神衣の前身頃の胸の位置には、大銅鏡と 6 つの小銅鏡があり、それらの銅鏡の下には魚皮の神袋 6 個があり、それぞれに 3 つの鈴が飾られていた。これらは儀式に欠かせない装飾品であったという。

神衣には、銅鏡、神袋、衣鈴、衣の帯飾りの装飾物(図 3-5)があり、それぞれの役割(表 3-6)について述べる(呉福勝氏、尤文鳳氏、尤軍氏)。

(1) 銅鏡 前身頃にある銅鏡は、大銅鏡と小銅鏡に分けられる。大銅鏡は、太陽の象徴であり、小銅鏡は月と星の象徴である。どちらも祭りなどの際にお守りとして用い、シャーマンの心身を保護する。三界の神への道を照らし、神の魂を送る役割があるという。

(2) 神袋 前身頃に飾られている神袋は、木製の各種動物の神像を収めるためのもののみなら

ず、三界の神の宿るところでもある。なお、これらの神像は、動物の魂が宿るところとされている。聞き取り調査(表 3-1)により、シャーマンが使用する動物神像について、表 3-7 を作成した。16 種類の神像があり、それらは禽鳥、哺乳類、爬虫類、水生動物、そして想像上の動物の 5 つに分類できる。それらのうち、想像上の動物と禽鳥が天界の神、哺乳類と水生動物が地界の神、爬虫類が地下界の神である。また、それらの神像を紋様化して神服の装飾とした。それらの紋様と神像は、いずれも、ホジェン族が諸神に対する信仰観念から表象されているものであるという。たとえば、病人の魂を探す役割があるトカゲの神像は、トカゲの神の象徴とされた。そして、尤文鳳氏所有の神衣にあるトカゲの紋様も、トカゲの神像と同様で、トカゲの神の象徴である。以上で述べたことから、神服の紋様は、神像の表像であることがわかる。各シャーマンの習得技能に差異があるため、使用する神像や、神服に施された紋様が異なる(尤文鳳氏、呉福勝氏)。また、それらの神像の役割は、雨乞い、諸神との交流、死者の魂送、山などの自然の保護、魔除け、シャーマンの保護、シャーマンが水なかで祈る際の補助、病気の治療の支援などの役割がある。

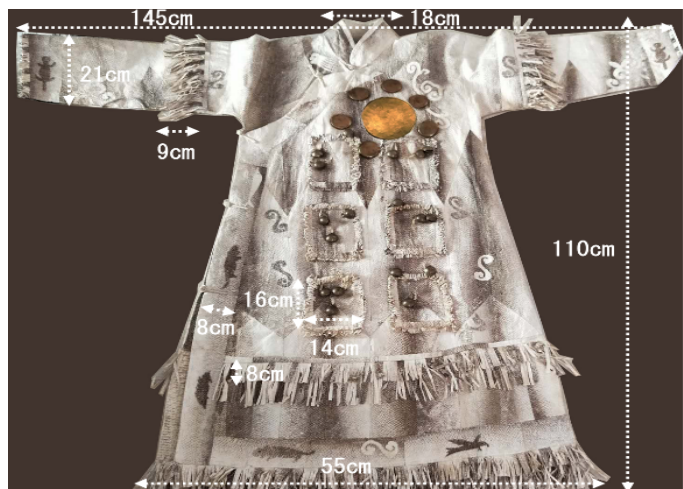
(3) 衣鈴 前身頃に飾られている鈴は、三界の神を招く役割がある



1) 呉福勝氏所有 2020 年撮影



2) 付安学氏所有 2020 年撮影



3) 尤文鳳氏所有

図 3-4 神衣

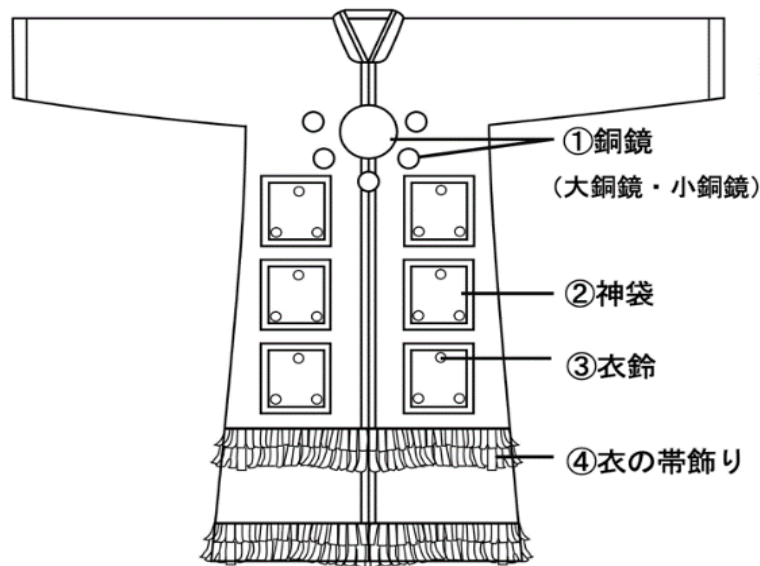


図 3-5 尤文鳳氏所有の神衣の正面図

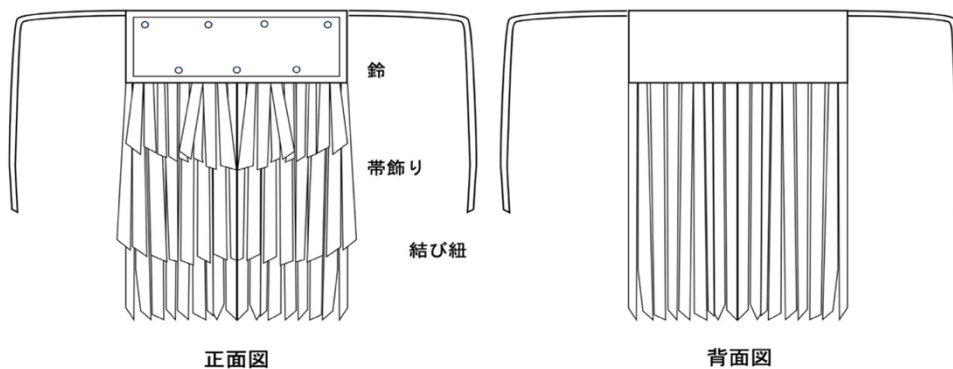
という。

(4)衣の帯飾り 裾にある帯飾りは、三界の神へ霊界を往来する道とされるという。

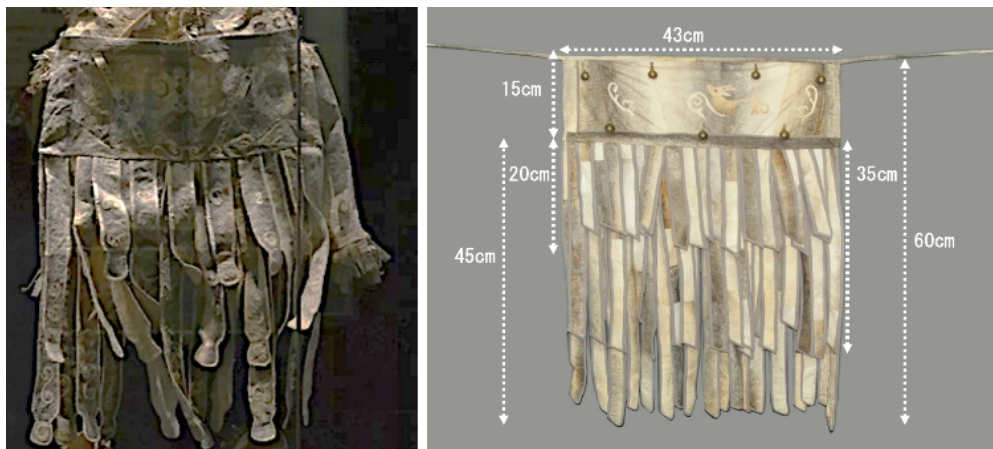
図 3-4-3)は、1989 年頃から 2012 年頃まで、付学安氏が踊鹿神祭りなどの際に使用していたものである。幅 16cm×長さ 47cm 程度の鮭の皮が 78 枚使用されたもので、襟元(幅 18cm 程度)、身頃(幅 55cm×長さ 110cm 程度)、袖(幅 20cm×長さ 50cm 程度)の 3 つの部分から構成される。前身頃には鮭の皮を用いた波、巻草、鳩、龍、鷹、トカゲ、ハリネズミの紋様が飾られている。袖の縁取りは 8 cm 程度で、材質は本体の素材と同様である。裾と袖には幅 2 cm×

表 3-7 シャーマン用の動物神像の種類とその役割

	類型	神の名	ホジェン語	役割
天界	1) 想像上の動物	龍の神	モエンドリ	雨、水を管理し、魔を除ける
	2) 禽鳥	かっこうの神 鷹の神	カックー クーリー	魂を招き、諸神と直接交流・伝言できる 死者の魂を送るための道を案内する
地界	3) 哺乳類	狼の神	ブーヤン	死者の魂を送るための道を案内する
		豹の神	ヤリカ	山を守る
		熊の神	ガニエケ	魔除けする
		野良猫の神	マリイン	シャーマンの使者として神霊と交流する
		虎の神	タシッハ	各種の野生動物の神の魂を招く
		ハリネズミの神	ヘンジ	シャーマンを保護する
	4) 水生動物	川獺の神 チョウザメの神	ズカン アシン	シャーマンが水中に潜り、祈りを助ける シャーマンが水中に潜るのを助ける
地下界	5) 爬虫類	鯨の神	ジョンムール	悪霊を鯨の腹に追い込み、血に変える
		蛇の神	ムイジ	病人の魂を探す
		トカゲの神	イシエネン	
		亀の神	アヨン	病気の原因を探す
		カエルの神	ハライ	諸神や魂との交流ができる



尤文鳳所有の神衣の正面図と背面図



1) 呉福勝氏所有

2) 尤文鳳所有

図 3-6 神裙

表 3-8 神裙の装飾物の役割表

装飾物	1) 裙鈴		2) 裙の帯飾り		
	対象	三界の神	シャーマン	三界の神	
役割	魂招	等級	等級	魂を招く能力の強弱	神の道案内

長さ 9 cm の帯飾りが数百本ある。前身頃の胸部には直径 10cm 程度の大銅鏡が 1 つと直径 6 cm 程度の小銅鏡が 6 つ飾られている。また、幅 14cm×長さ 16cm 程度の神袋が 6 つある。各神袋には直径 3.5cm 程度の鈴が 3 個飾られている。前身頃には幅 1 cm×長さ 4.5cm 程度のボタン受けとボタンが 5 対あり、鮭皮で円筒状に巻いてつくられている。

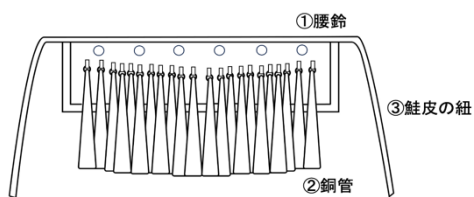
5.3. 神裙

神裙(図 3-6)は、ホジェン語で「ツーセプティ」と称され、鷹の神の羽という意味である(尤文鳳氏)。収集した 2 点の実物資料は、いずれも、長方形で、腰から膝までの長さで、スカート部分、紐から構成される。スカート部分は数十個の帯飾りが付けられている。

神裙に飾られている鈴は三界の神の魂を招く、帯飾りは神の魂が地界と霊的な世界の間を往来する道とされる。また、鈴や帯飾りの数量は、シャーマンの等級によって決まり、シャーマンが三界の神の魂を召喚する能力の強弱の反映である(呉福勝氏)(表 3-8)。たとえば、

1 等級のシャーマンの神裙には 36 個の帯飾りと 1 個の腰鈴が飾られる。最高級のシャーマンの神腰帯に 51 個の帯飾りと 15 個の腰鈴が飾られる。伝承者は、1 年目からその技能を繰り返し学び、2～3 年で 1 等級ずつ昇進する。およそ 45 年間にわたる修練を通じて、最高級、15 等級に到達できるという。

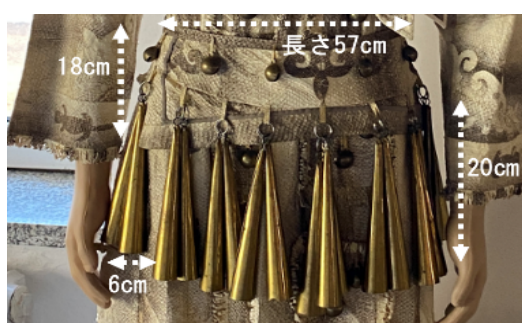
図 3-6-2) は、そのつくり方を伝承された尤文鳳氏が 2010 年頃に縫製し、2017 年頃に同江市赫哲族博物館で展示されたものである。幅 15cm×長さ 50cm 程度の鮭の皮 26 枚からつくり、正面から見ると、形は長方形である。幅 15cm×長さ 43cm 程度の鮭皮の、数十個のストライプ状の帯飾りを縫い合わせた幅 45cm×長さ 43cm 程度のスカート部分、2 つの紐から構成される。ウエストベルトには、直径 3.5cm 程度の鈴 7 個と、鮭皮の鹿紋などが飾られている。その両側には幅 3cm×長さ 54cm 程度の紐がある。その下部にあるスカート部分は、二重の鮭皮を用いた幅 4cm、それぞれの長さ 20cm、35cm、45cm の帯飾りで飾られている。



1) 尤文鳳所有の神衣とその正面図



2) 呉福勝氏所用 2020 年撮影



3) 付学安氏所用 2020 年撮影



図 3-8 腰鈴と銅管

図 3-7 神腰帯

表 3-9 神腰帯の装飾物の役割

装飾物	1) 腰鈴		2) 銅管		3) 鮭皮の紐
対象	シャーマン	悪霊	シャーマン		
役割	心身の保護	魔除け	魔除け	心身の保護	魂の保護

5.4. 神腰帯

神腰帯(図 3-7)は、「ジョーダー」と称され、シャーマンの生命と関係がある腰帯という意味である。シャーマンの腰に巻かれ、腰鈴や銅管などの装飾品が掛けられる神聖な道具である。収集した3点の実物資料は、神腰帯に掛けられた装飾品が多く重くなるため、いずれも、鮭皮2枚を重ねてつくられており、正面から見ると、形は長方形である。神腰帯には、縁取り、腰鈴、10本以上の円錐形の銅管、鮭皮の紐が施されている。

神腰帯にある腰鈴、銅管(図 3-8)、鮭皮の紐の装飾品は、それぞれ異なる役割を持っている(尤文鳳氏、趙宝芹氏)(表 3-9)。

(1) 腰鈴 シャーマンは祭りの際に体を回しながら踊る。ドラムのリズムに合わせて腰帯に取り付けられた重さ数十キロにも及ぶ腰鈴などが鳴り響く。この音はシャーマンの守護神であるアイミ神を呼び起こす力があり、また悪霊を追い払う役割があるという。

(2) 銅管 腰鈴と同様で、悪霊を追い払う役割があるという。

(3) 鮭皮の紐 神腰帯には約4mの長さの鮭の皮の紐がつけられ、シャーマンの生命に深く関わる重要な役割を果たしている。シャーマンの魂が霊界から地界に戻る際に、村の人びとはシャーマンの後ろで、この紐をつかみ続けることで、シャーマンの魂が地界に戻ることができるという。

図 3-6-3)は、1989年頃から2012年頃まで、付学安氏が踊鹿神祭りの際に使用していたものである。幅10cm×長さ36cm程度の鮭の皮6枚でつくられたもので、幅18cm長さ57cm程度の長方形である。神腰帯には縁取りと10個の腰鈴が飾られ、裾には直径6cm×長さ20cm程度の16個の銅管が掛けられている。



1) 付学安氏所用

2020年撮影

2) 呉福勝氏所用

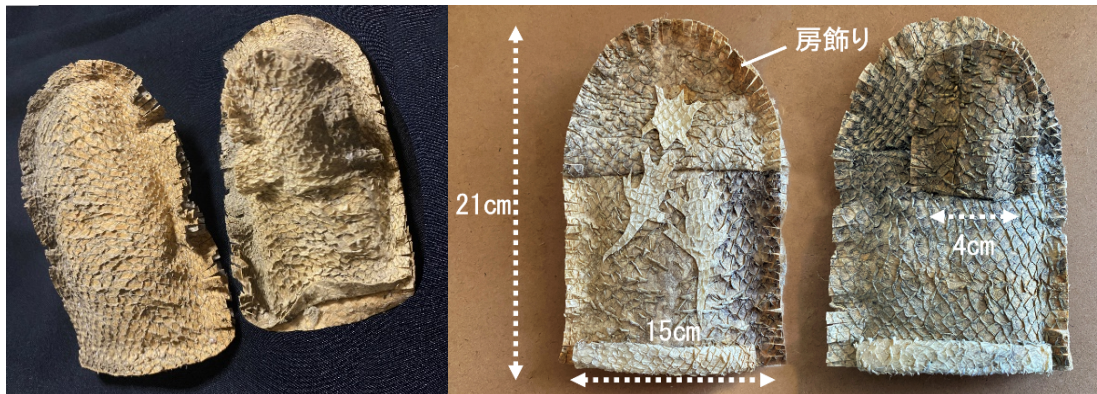
2020年撮影

図 3-9 神靴

5.5. 神靴

神靴(図 3-9)は、「ワクチャーアンタ」と称され、鷹の神が履いた「飛ぶことができる靴」という意味である。収集した2点の実物資料は、いずれも、日常着の靴に似た形であり、底、甲、筒の3つの部分から構成されるが、神靴には靴の先端に鈴や紋様が施されている。呉福勝氏によると、靴鈴は、地下界の諸神の魂を招く役割があるという。シャーマンが履いた神靴は、唯一地面とつながっている部分であり、シャーマンと地下界の諸神との連携は、神靴を通して行われると認識されている。

図 3-9-2)は、1994年頃から2015年頃まで、呉福勝氏が開江祭りなどの際に使用していたものである。幅10cm×長さ50cm程度の鮭の皮6枚からつくられたもので、幅13cm×奥行23cm×長さ26cmである。靴の甲には直径3cm程度の鈴と、鮭の皮を用いた幅2cm×長さ3cm程度の亀紋がある。足首の部分には鮭の皮を用いた幅2cm×長さ58cm程度の靴紐がある。



1) 呉福勝氏所用 2020年撮影

2) 付安学氏所用 2020年撮影

図 3-10 神手袋

5.6. 神手袋

神手袋(図 3-10)は「カチャヤマ」と称され、冬に用いる神手袋という意味である。収集した2点の実物資料は、いずれも、日常着の手袋の形と似ているが、神手袋には房飾り(図 3-11)が飾られている。なお、神手袋にある房飾りは、地界・地下界の神の魂に道案内をする役割があるという(呉福勝氏、趙宝芹氏)。

図 3-10-2)は、1994年頃から2015年頃まで、呉福勝氏が開江祭りなどの際に使用していたものである。幅11cm×長さ53cm程度の鮭皮を3枚繋げ、幅15cm×長さ21cm程度に仕上げ、4cm程度の縁取りと房飾りがある。手袋の正面は鮭の皮を用いた幅4cm×長さ7cm程度のトカゲ紋と幅4cm×長さ4cm程度の亀紋が飾られている。

6. 神服の紋様

次に、魚皮衣の神服の特質を、用いられた紋様の観点から観察する。

6.1. 神服の紋様に基づく分類

本研究において収集した15点の神服に施された紋様には、太陽、波、雲、鳩、鷹、龍、熊、

表 3-10 神服に用いられている紋様とその分類・割合

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	全体	
神帽	○	○	○	○	○		○			○		○			○		
神衣		○	○	○	○	○	○		○			○		○	○		
神裙		○						○						○			
神腰帯																	
神靴											○		○				
神手袋											○	○					
類型		①		②		③		④			⑤			⑥	⑦		
		自然現象		水生動物		禽鳥		哺乳類			爬虫類			植物	想像上の動物		
紋様	太陽	波	雲	魚	鳩	鷹	熊	鹿	ハリネズミ	蛇	亀	トカゲ	カエル	巻草	龍		
実数	1	5	2	2	2	1	2	1	1	1	2	3	1	3	2	29	
割合 (%)	3.4	17.2	6.9	6.9	6.9	3.4	6.9	3.4	3.4	3.4	6.9	10.3	3.4	10.3	6.9	100.0	

鹿、ハリネズミ、蛇、トカゲ、亀、カエル、魚、巻草の紋様がある(表 3-10)。また、太陽紋以外、それらは、①自然現象(2種類)、②水生動物(1種類)、③禽鳥(2種類)、④哺乳類(3種類)、⑤爬虫類(4種類)、⑥植物(1種類)、⑦想像上の動物(1種類)に分類することができる。また、素材ごとの出現回数の比率を表 3-10 に示した。

本章においては、神服に施された紋様の使用実態に着目し、紋様に関する伝説、シャーマン神像(表 3-7)と請神歌の歌詞(表 3-11)などに関する聞き取り調査により、紋様の種類と意味を概観した。そのうち、波、雲、魚、鹿、巻草の紋様には、「不老長寿、健康と平安、豊漁・豊狩・厄除け、生命の転生」という意味があることは前報「日常生活にみられるホジェン族の伝統的服飾『魚皮衣』の特質」で既に報告した通りである。

6.2. 神服の紋様の種類と意味

・太陽紋(図 3-11) 太陽紋は、神帽の冠の縁の近くに施される(29 点中 1 点、約 3.4%) (表 3-10)。

また、太陽紋は太陽の神の象徴で、邪気を祓ったり、魔除けの役割を果たす。3羽の火の鳥の伝説によると、昔、ホジェン族が居住する地域に3羽の火の鳥が飛来し、気温が上昇し暑く。ある老獵師は、2羽の火の鳥を矢で射ち落とし、1羽の

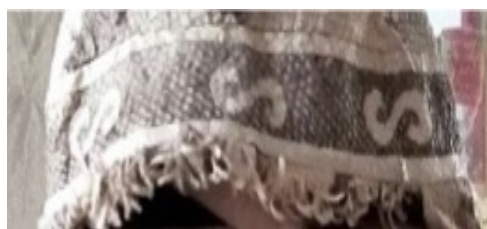


図 3-11 太陽紋

表 3-11 シャーマンの請神歌[注 10]の歌詞(呉福勝氏による)

訳文
<p>…(省略)…、 八尺(約 240cm)の長さの「アシン・セウエン」(チョウザメの神)、 三尺(約 91cm)の長さの「ズカン・セウエン」(カウウソの神)、 鉄製の「カオリ」(霊界の道を案内する神)、 力の強い「チャクテン」(禿鷲の神)、 15 個の胸にある「タオリ」(銅鏡)、 10 個の背中にある「タオリ」(銅鏡)、 15 個の「トロ」(鈴)、 9 つの「カクカー」(ツツジの神)、 噴火することができる「タスヒ」(虎の神)、 綺麗な「ガニエケ」(熊の神)、 激しい「マリイン」(野良猫の神)、 激しい音がする「ハジュン」(腰鈴)、 風を起こすことができる「ツーセプティ」(神裙)、 九つの尖がある「フジキ」(神帽)、 四尺(約 120cm)の「シリイアフエン」(神刀)、 温厚な「アイミ」(守護神)、 神様は、いらっしゃいましたか? (XX さんが病気になったなど)ために、神様を招いて、 …(省略)…、 諸神様が自身の神力を使って私を手伝ってください。</p>

火の鳥が残り太陽となった。この太陽は、毎日、雄鶏が鳴く前にしか昇らず、天地は分離し、鬼神は追放された。したがって、神帽には太陽紋が飾られており、それを太陽の神の力と考えた。なお、太陽紋は神服にしか付すことが許されていない紋様であるという。

(1) 自然現象(2 種類)

・波紋と雲紋：波紋(図 3-12)は、神帽の冠、神衣の前身頃、神裙の帯飾りに施され(29 点中 5 点、約 17.2%) (表 3-10)。一方、雲紋(図 3-13)は神帽の帯飾りや神衣の前身頃に施される(29 点中 2 点、6.9%)。波紋と雲紋は、天の神と川の神を象徴し、天の神と川



図 3-12 波紋

の神などの祭りに、不老長寿に関する祈願を祈る際の補助の役割を持つ(孫玉林氏)。

(2) 水生動物(1種類)

・魚紋(図 3-14) 神帽の冠、神衣の前身頃に施される(29 点中 2 点、約 6.9%) (表 3-10)。魚の神の象徴であり、川の神や鮭の神の祭りに、健康と平安に関する祈願を祈る際の補助の役割を持つ(呉福勝氏)。



図 3-13 雲紋

(3) 禽鳥(2種類)

・鳩紋(図 3-15) 神帽の冠の中央や神衣の前身頃に施される(29 点中 2 点、約 6.9%) (表 3-10)。また、鳩の神であるカクーン(クワ)の象徴とされ、魂を招き、諸神の魂や死者の魂と直接交流や伝言をする役割を果たす(趙宝芹氏)。



図 3-14 魚紋

・鷹紋(図 3-16) 神衣に施される(29 点中 1 点、約 3.4%) (表 3-10)、鷹の神である「クワリ」の象徴であり、死者の魂を送るための道を案内する役割があるという。



図 3-15 鳩紋

(4) 哺乳類(3種類)

・熊紋(図 3-17) 神帽の帯飾り、神衣に施され(29 点中 2 点、約 6.9%) (表 3-10)、熊の神である「ガニエケ」の象徴で、魔除けする役割を持つという。



図 3-16 鷹紋

・鹿紋(図 3-18) 神裙に施される(29 点中 1 点、約 3.4%) (表 3-10)。鹿の神の象徴であり、豊漁・豊狩・厄除けに関する祈願を祈る際の補助の役割を持つという(呉福勝氏)。



図 3-17 熊紋

・ハリネズミ紋(図 3-19) 神衣に施され(29 点中 1 点、約 3.4%) (表 3-10)、ハリネズミの神である「ヘンジ」の象徴であり、死者の魂を守る役割を果たしている。また、ハリネズミは生き残るために熊との戦いに勝ち、その後熊の洞窟をシェルターとして占有したという伝説がある。人びとはハリネズミのような小さくて力の弱い動物でも、生きるための方法を見つける能力を持っていると考えたのである(趙宝芹氏)。



図 3-18 鹿紋

(5) 爬虫類(4種類)

・蛇紋(図 3-20) 神帽の帯飾りに施され(29 点中 1 点、約 3.4%) (表 3-10)、ホジェン語で「ムイジ」と称される「蛇の神」の象徴であり、シャーマンを助けて病人の魂を探す役割がある。ホジェン族の伝説によると、蛇の神は、天地や万物の創造者であり、天界から地界へ自由に往来することができる(尤軍氏、孫玉林氏)。



図 3-19 ハリネズミ紋

・亀紋(図 3-21) 神靴や神手袋に施される(29 点中 2 点、6.9%) (表 3-10)。ホジェン語で「アヨン」と称される「亀の神」の象徴である。病気の原因を探す役割がある(呉福勝氏、尤文鳳氏)。



図 3-20 蛇紋

・トカゲ紋(図 3-21) 神帽の帯飾りや神衣、神手袋に施される(29 点中 3 点、約 10.3%) (表 3-10)。ホジェン語で「イシエネン」と称される「トカゲの神」の象徴である。トカゲの尻尾の再生能力から、シャーマンに協力して病人の魂を探す役割があるという(呉宝臣氏)。



図 3-21 亀紋・トカゲ紋

・カエル紋(図 3-22) 神靴に施される(29 点中 1 点、約 3.4%) (表 3-10)、ホジェン語で「ハライ」と称される「カエルの神」の象徴で、諸神や死者の魂と交流する役割がある(趙宝芹氏、尤文鳳氏)。

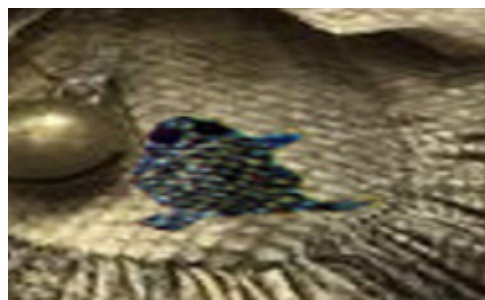


図 3-22 カエル紋

(6) 植物(1 種類)

・巻草紋(図 3-23) 神衣、神裙に施される(29 点中 3 点、約 10.3%)。花の神の象徴であり、死者の魂を転生する役割を持つという(表 10)。



図 3-23 巻草紋

(7) 想像上の動物(1 種類)

・龍紋(図 3-24) 神帽の帯飾りや神衣に施され(29 点中 2 点、約 6.9%) (表 3-10)。雨と水を管理する「モエンドリ」と称される龍の神の象徴である。龍紋は、シャーマンが雨乞いの儀式に使用する紋様で、魔よけの役割がある(尤文鳳氏)。

7. 非日常生活にみられる神服

聞き取り調査(表 3-1)によって、神服(シャーマン)に関するホジェン族の非日常生活(表 3-12)は、踊鹿神の祭り、開江祭り、鮭の神祭り、求子式、葬儀、病気の治療のための魂招儀式などの祭りと



図 3-24 龍紋

表 3-12 ホジェン族の祭りや人生儀礼と神服(シャーマン)の関係

祭り	日時	人生儀礼	
踊鹿神の祭り	旧暦 3 月 3 日、 旧暦 9 月 9 日	求子式	娘娘神の祭り
開江(川の神)祭り	新暦 4 月谷雨	結婚式	天の神・先祖祭り
鮭の神祭り	新暦 9 月白露	葬儀	
		病気の治療の儀式	

人生儀礼がある。本章では、代表的な踊鹿神の祭り、求子式、葬儀における神服の使い方を概観したい。

7.1. 「踊鹿神」祭り・求子式

クマカ・セウエンと称される鹿の神の伝説によると、人びとは鹿の神を祀った後に、鹿の神が人びとに豊漁、豊狩、厄除けをもたらしてくれると信じてきた。そのため、毎年旧暦 3 月 3 日の「祈願」と旧暦 9 月 9 日の「願解き」の日に、ホジェン族の人びとは「踊鹿神」祭りを行ってきた。踊鹿神祭りは、「太平神」祭りとも呼ばれ、毎年の旧暦 3 月 3 日は、全村の病魔を追い払い、子授けを祈禱するために、人びとはシャーマンと共に村全体で踊鹿神に祈りを捧げる。旧暦 9 月 9 日の踊鹿神の祭りでは、翌年の大漁・大狩・平安などを祈願する。この祭りには、神を招き交流し、線香を焚き、神を祀り神を送るまでの一連の流れがあり、妊娠中の女性以外の村人全員が参加した(呉福勝氏、孫玉林氏)。当日の朝、シャーマンは神服を着て、家屋内の西面のオンドルに置いたアイミ神[注 13]に祭拝した後、家屋外の日没の方向、すなわち、「西方に位置する霊界」から出発し、

一軒一軒回りながら、神太鼓を打ち、鹿神踊を踊り、「請神歌」を歌い、神衣に付いた鈴で諸神の魂を地界へ招き寄せる。次に、シャーマンは踊りながら、「請神歌」を歌うことで、諸神の魂を、神帽にある鹿の角に呼び寄せる。また、シャーマンの神腰帯に付いた鈴が鳴ると、諸神と交信できるという。シャーマンと諸神との交信が妨げられないように、シャーマン以外のホジェン族の人びとは、協力してシャーマンの神裙に縫い付けられている長さ約 4m の紐を引っ張る(図 3-25)。さもないと、悪霊によってシャーマンの魂が霊界に留まる可能性があるためである。それは、すなわち、シャーマンの死を意味する。なお、後ろで踊っている男性は、長い紐を引っ張りながら、漁猟の平安と大漁などの願いを祈願する。また、30 歳を過ぎた女性は、自然妊娠できなければ不妊症であるとされ、不妊症の女性は転生できない魂を有すると考えられていたため、紐を捕まえ、神に子授けを

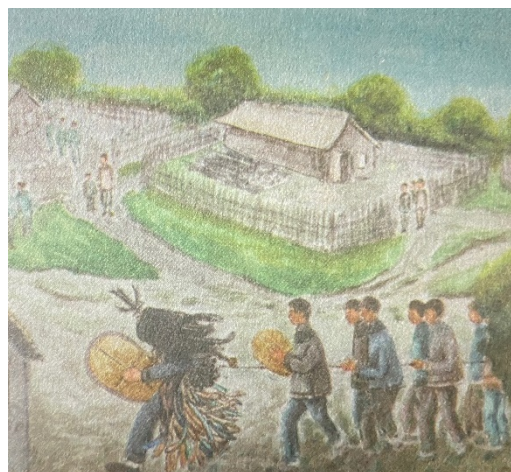


図 3-25 踊鹿神祭り 民俗画

の魂が霊界に留まる可能性があるためである。それは、すなわち、シャーマンの死を意味する。なお、後ろで踊っている男性は、長い紐を引っ張りながら、漁猟の平安と大漁などの願いを祈願する。また、30 歳を過ぎた女性は、自然妊娠できなければ不妊症であるとされ、不妊症の女性は転生できない魂を有すると考えられていたため、紐を捕まえ、神に子授けを

祈願しながら、シャーマンの神裙にある紐に結び目をつけた。これにより、子授けの祈願はシャーマンに伝達されたのである(尤秀云氏)。

祭りが終わると、シャーマンは太陽が上がる東方から自宅へ戻り、屋内の西面のオンドルに置いた「送子娘娘」の神(子授けと安産の神)の後ろに、1本のヤナギの木を立て、それらの枝に鳥の巣を張って、子どもの魂の入り口とする。次に、「送神歌」を歌い、祈り、送子娘娘の神を霊界に送る。それに対して、霊界から鳥の魂が地界へ戻り、そうすることで、その魂は、子授けを祈願する家庭で生まれ変わって幼児になる(呉福勝氏)。

表 3-13 葬儀の種類と死因の関係

番号	種類	死因
1	土葬	老衰による死亡者
		不慮の事故による死亡者
		溺死者
2	影葬	溺死者の遺体を見つけられなかった場合
3	樹葬	10歳以下で夭折した子ども
4	樹・土葬	狩猟の際に不慮の事故による死亡者
5	火葬	天然痘、疫病などの病気による死亡者

表 3-14 土葬の流れの概況

土葬の流れ	土葬の各流れの概況
出魂	遺体を安置し、魚や水、煙荷包を供え物として捧げ、遺体を西向きのオンドルに供養し、シャーマンによって霊界を入れ、故人の名前を書くことで故人の魂が霊界に入籍し、出魂をする
埋葬	遺体を運搬し、墓地を選び、墓穴を掘り、副葬品を置き、棺に入れ、故人に敬意を表すために酒を捧げ、家屋に先祖の神偶を供え、祭祀する
送魂	先祖の神偶祈り送魂、家族の故人の魂と交流する

7.2. 葬儀

ホジェン族の人びとは、死後、人の魂は生まれ変わると考えており、死因に応じて異なる葬儀が行われる。表 3-13 で示したように、葬儀は土葬、樹葬、混葬、火葬、影葬の5種類に分けられる。子どもの魂は、鳥の魂に生まれ変わると考えられており、10歳以下で若死にした場合は樹葬を行う。土葬すると、子どもの魂は土から出てくることができず、生まれ変わることができないのだという。狩猟中に不慮の死を遂げた場合、当日、残った仲間が、白樺の幹を切り下ろし、樹幹に死者を入れるための棺をつくり、棺を埋めるための穴を掘る。その棺に遺体を入れ、その樹皮で縛って約3m離れた木に掛け、樹葬される。2～3年を経て、家族は遺骨に結婚服[注 11]をまとわせ、直接土葬する。疫病による死亡者は、疫病の蔓延を防ぐため、直接火葬を行う。溺死者が見つからなかった場合は、影葬が必要である。影葬とは、シャーマンが選定した墓地内に故人が生前に用いていた衣や物を置き、シャーマンがつくる樺皮人形と一緒に埋葬することである。溺死、不慮の死、老衰の場合は、土葬する必要

がある(孫玉林氏、呉玉梅氏)。

シャーマン主導の葬儀を行わないと、故人の魂は悪霊になるという。土葬の場合は、魂は不滅で、故人の魂(生命の魂)は、生前住んでいた部屋に留まるとされる。したがって、シャーマンによって、出魂、埋葬、送魂の一連の儀式を行う必要がある(表 3-14)。儀式の全過程は、神服を着用したシャーマンの導きで、一連の約束事や禁忌に従って、家族全員の協力で行われた。



図 3-26 土葬(埋葬儀) 民俗画

たとえば、出魂式の前に、シャーマンは、鷹の神の衣服に象徴される神衣を身に付け、鷹の神の姿になって霊界に飛び立ち [注 12]、故人が霊界に行き生まれ変わることができるように、神衣にある鳩紋や亀紋を通して故人の魂と交信し、故人に家族が葬儀を行うことを伝える。また、現世において、故人の遺体を生前に用いたオンドルに、頭を東に足を西に向けて安置する。こうすることで、故人の魂が霊界への入口を探すことができる。糸の両端に銅銭を縛って、1枚は故人の口の中に、1枚は頭の前に置いた碗の中に入れる。故人の魂が食事をしていることを表すのだという。故人は7日間人間に留まり、生前の経験を思い出す。7日後、シャーマンは霊界に行き、埋葬の儀式の前に故人の名前を霊界に入籍させる。埋葬時、家の青壮年の者が棺を担ぎ、シャーマンが道案内し家族が従う。墓地ではシャーマンが祈り、男性は長方形の穴を掘り、白樺の樹幹で家屋のような壁を建てる。故人に死装束として婚服[注 12]を着せ、白樺の皮で包み、生前用いた「樺皮船」の中に入れ墓に安置し、土中に埋葬し、自然に還す(図 3-26)。そうすることで、故人の魂が婚服にある鳥紋に宿り、生まれ変わることができるとされていた。この鳥紋(図 3-27)は、魂鳥(ハニンチューキャン)とも呼ばれ、子どもの魂の生まれ変わりとされた。一方、結婚式で着用する婚服の装飾である鳥紋の個数は、希望する新生児の数を表し、新郎新婦が二人で決め、女性が縫製・装飾したものである(呉宝臣氏)。このことから、シャーマンが祭司したホジェン族の結婚式と葬儀に

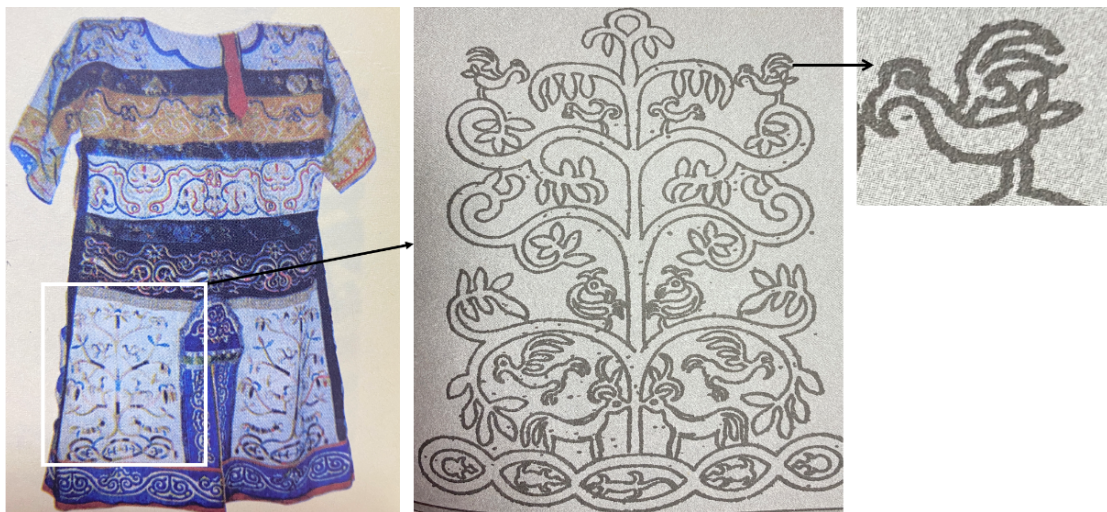


図 3-27 婚服(女性用)に施された生命樹紋、鳥紋など

は、「子の誕生から死後の転生まで生と死が循環する」というホジェン族の「死生観」が反映されてきたことがわかる。このように、神服は、シャーマンの神具としてホジェン族の「死生観」に大きな影響を与えてきたのである。

埋葬後、故人が遺恨を残さず、また、平穏に生まれ変わるために、シャーマンは鳩紋で鳩の神を召喚し、鳩の神が故人の魂と交流しシャーマンに伝え、これにより家族が故人と交流できた。そして、木製の人形をつくり、故人が生前用いていた西側のオンドルに安置した。毎日3回供養し、故人が早く転生するように祈った。故人も家族の無事を祈ることができると考えられており、供養の後、家族は日常的な生活に戻り、食事も普段通りのものとなった。一方、妊娠している女性は不浄であるとされていたので、故人の尊厳のために、葬儀のすべての儀式に妊娠している女性は参加できなかった。上記で述べたように、神服の紋様はシャーマンにより神具として利用され、生者と故人の交流を図る媒体となっていた。また、生者が妊娠している女性が葬儀に参加できないなどの約束事で、死者への尊敬を表した。葬儀を除いた結婚式や狩猟などの祭事では、妊婦以外の家族の全員が、木製の人形を先祖の魂として祀る必要がある。このような約束事は、ホジェン族の祖霊信仰を反映している(呉福勝氏、呉玉梅氏)。

8. 魚皮衣の神服の特質に関する考察

以上、ホジェン族の神服とその構成、紋様、使い方などを述べてきた。ここでは、それらからみられる魚皮衣の神服の特質を概観したい。

8.1. シャーマン用の神服からみた神服の特質

8.1.1. ホジェン族の世界観への反映媒体

非日常生活において、魚皮衣の神服が、シャーマンの魂が霊界に往来し神の魂などとの交流のための媒体であるとされる。また、霊界とは魂が存在している空間であるとみなされている。魂は、神と生き物の魂に分けられる。それらは、神の魂として上界、地界、地下界の3つ空間で存在しているのみならず、生き物の魂としては病気の際の「思想の魂」、死後の「生命の魂」、来世の「転生の魂」という時間軸にも存在している。すなわち、神服は、ホジェン族の「霊界の空間・時間の存在」という世界観を反映した。

8.2. 神服の構成・紋様からみた神服の特質

8.2.1. 「神服」と「神」「シャーマン」「死者」「病人」との関係づくり

神服は、表3-15に示したように、6つの類型から構成され、各部分に飾る装飾物と紋様は異なる役割がある。それらは、さらに、鹿角、小銅鏡などの15種類の装飾物に分けられる。それらの装飾物は、天界、地界、地下界という三界の神の魂招・魂送・道案内・寄宿地、シャーマンの心身・魂の保護、シャーマンの派閥・等級・伝承者の有無・神の魂招の能力の象徴、魔除けという役割がある。神服に施された紋様は、太陽紋を除き、7つに分類することができる。表3-16で示したように、神服の各部分にある紋様は、太陽、波、雲、魚などの15種類がある。それらの紋様は、神と死者の魂との交流、死者の魂送・魂の保護・転生、病人の魂探索しとその病気の原因探索しなどの役割がある。

表 3-15 「神服」の装飾物の役割からみた「神服」と「神」「シャーマン」との関係

類型	神帽				神衣				神裙		神腰帯			神靴	神手袋							
	1) 鹿角	2) 小銅鏡	3) 帽鈴	4) 帽の帯飾り	5) 銅鏡	6) 神袋	7) 衣鈴	8) 衣の帯飾り	9) 裙鈴	10) 裙の帯飾り	11) 腰鈴	12) 銅管	13) 鮭皮の紐	14) 靴鈴	15) 房飾り							
装飾物	派閥	等級	天界の神の寄宿地	神の魂送	神の魂招	神の道案内	伝承者有無	心身の保護	神の魂送	神の寄宿地	神の魂招	神の道案内	神の魂招	神の道案内	心身の保護	魔除け	魔除け	心身の保護	魂の保護	地下界の神の魂招	地・下の案	界地界神道内

表 3-16 「神服」の紋様の役割からみた「神服」と「神」「死者」「病人」との関係

類型	自然現象			水生動物	禽鳥		哺乳類			爬虫類			植物	想像上の動物	
	1) 太陽	2) 波	3) 雲	4) 魚	5) 鳩	6) 鷹	7) 熊	8) 鹿	9) ハリネズミ	10) 蛇	11) 亀	12) トカゲ	13) カエル	14) 巻草	15) 龍
紋様	魔除け	不老長寿		健康・平安	神・死者の魂との交流	死者の魂送	魔除け	豊漁・豊狩・厄除け	死者の魂の保護	病人の魂探	病気の原因探し	病人の魂探し	神・死者の魂との交流	死者の転生	魔除け

上述したように、神服を構成する各部分にあるさまざまな装飾物や紋様は、異なる役割を果たす。それらの役割から、神服の装飾物や紋様の存在は、神、シャーマン、病人、死者を紐付ける。

8.2.2 「神服」と「神像」の関係づくり

ホジェン族の神服に施された 10 種類の野生動物の紋様の役割を考察することで、それらはホジェン族の野生動物をかたどって創作した神像と関係があることが明らかになった。ホジェン族には 16 種類の野生動物の神像がある。それらはシャーマンの神衣にある神袋に収められている。これらの役割から、紋様の同様の役割以外、雨を祈り、自然を守り、シャーマンが水なかで祈ることを助けるなどの役割があることがわかる。つまり、神服は、野生動物の紋様を飾る場所であるにとどまらず、野生動物の神像を収納する場所でもあった。さまざまな野生動物の紋様で飾られた神服は、野生動物の神像と同様、神聖なもので、シャーマンに欠かせないものである。

8.3. 非日常生活からみた神服の特質

8.3.1. 踊鹿神祭り・求子式からみたシャーマンとホジェン族の「生」と「死」の運命の共同体の関係づくり

踊鹿神祭り・求子式において、村全員の協力が必要であり、シャーマンの魂を保護するために、神服は欠かせないものである。特に、祭りの際に、シャーマンの魂が霊界から戻るために、村民たちが後ろに神裙にある長い紐を保持し続けることや、村民たちの良い生活と、子孫の繁栄、魔除け、転生などへの祈願は、シャーマンの祈りととの緊密な関係がある。総じて、神服は媒体として、シャーマンと、ホジェン族とその各家族、出産できない女性など、全ての祈りを込めた人びとを互いに結びつける媒体であった。集団生活のなかで、シャーマンとホジェン族の人びとは「生」と「死」の運命共同体であったと言える。

8.3.2. 葬儀からみた「魂の存在・不滅・転生の思想」「人の生死の循環の思想」

神服は、単純にシャーマンにさまざまな神力を与える服飾だけではなく、ホジェン族の霊魂の存在・不滅・転生の思想をも体现している。たとえば、土葬儀式のうちの魂送儀式は、死後の「生命の魂」が現世から離れるための儀式である。また、埋葬の儀式は、「転生の魂」が宿す儀式である。埋葬の儀式で故人の魂が転生するために、シャーマンは、着用する神服にある鳥紋などの紋様を通じて諸神と交流し、故人の魂を死装束としての婚服の鳥紋に宿させて転生させる。これらのことから、神服はシャーマンの神具として、ホジェン族の「死生観」に大きな影響を与えてきたことがわかる。

8.3.3. 葬儀からみた「生者と死者との関係づくり」

土葬の儀式の最後、家族が亡くなった人の魂と交流し祝福を交わすために、シャーマンは死後の人の魂と交流する必要がある。そこで神服が、シャーマンによる生者と死者の関係づくりを助ける神具として媒介的役割を果たした。

9. おわりに

本章では、ホジェン族の伝統的な魚皮衣の神服の特質を明確化した。調査・考察から、次の知見を得た。

(1) 神服は、ホジェン族の「霊界の空間・時間の存在」という世界観を反映し、6つの部分から構成されている。各部分にある装飾物と紋様は、それぞれ、「神」「シャーマン」「病人」「死者」の間を密接に関連づける役割を担ってきた。また、野生動物の神像と同様、神聖なものを象徴していると考えられる。

(2) 神服は、シャーマンにとって神力を付与するのみならず、自身の生命(心身・魂)を守るものである。また、シャーマンとホジェン族の「生」と「死」に関する運命の共同体の関係を構築する媒体でもある。

(3) 神服の使い方から、神服には、ホジェン族の「霊魂の存在・不滅・転生」という社会的思想、「人の生の死の循環」という死生観、「生者と死者の関係づくり」が反映されている。

総じて、非日常生活における魚皮衣の神服は、ホジェン族の現世と霊界の間に関係をつくる媒体であり、また、ホジェン族の「人間の生と死の循環質」の追求の反映媒体なのである。

注および参考文献

- 1) 孔春、青木宏展、植田憲：日常生活にみられるホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の特質、デザイン学研究[投稿済掲載予定]
- 2) 凌純聲：松花江下游的赫哲族、上海文芸出版社、1990
- 3) 張嘉賓：赫哲族薩滿的服飾与神具、1994
- 4) 1860年の『中ロ北京条約』によって、ロシアへ割譲された中国領土内におけるホジェン族である。現在、主にロシア国内のトロイツコエ村などに居住している。
- 5) 李崇源：赫哲族薩滿服飾中的神帽・神衣・神裙、当代芸術、2010
- 6) 前掲2)、102
- 7) 家族・氏族シャーマンは、家族集会で選出され認証される成員で(人選)、大シャーマンは、神霊の憑依や神霊の統制能力の獲得など、特定の病の発症と関連した能力によって選ばれる成員である(神選)。
- 8) 国家民委：赫哲族簡史、民族出版社、46、2009、神獣派、「神獣」という言葉は、ホジェン族のかつての「舒(シュ)」という苗字に由来しており、これの完全な苗字は「シュムルハラ」で、その意味は「神獣」である。尤文鳳氏は、舒(シュ)の苗字を持つ人びとの祖先の中には、かつて家族がシャーマンであった可能性があるかと推測している。したがって、舒(シュ)の苗字を持つシャーマンが神獣派を創造したと推測される。
- 9) 前掲2)、106
- 10) 于学斌、孫雪坤：赫哲族漁獵生活、黒竜江美術出版社、147、2006、請神歌とは、シャーマンがホジェン族の人生儀礼や祭りなどを司る際に、神の魂を招くために歌う歌である。
- 11) 王英海、孫熠、呂品：赫哲族伝統図案集錦、黒竜江教育出版社、61、2010
- 12) 烏丙安：神秘的薩滿世界、三連書店上海分店出版、99、1989、伝説によると、世界で最初のシャーマンは、鷹の神と人間の結合から生まれたとされ、シャーマンは鷹の神の化身になれると信じられている。
- 13) アイミ神とは、シャーマンを守り、魔除けする役割があり、5つ以上の尖のある鹿の角で飾る神帽をかぶっているシャーマンのみが使用できる。

図の出典

- 1) 図 3-2：2012年、街津口村にて肖殿昌氏撮影
- 2) 図 3-3-1)、図 3-6-1)：呉福勝氏提供
- 3) 図 3-3-3)、図 3-4-3)、図 3-7-2)、図 3-7-3)：尤文鳳氏提供
- 4) 図 3-25：劉玉亮：中国北方狩獵民族・紋飾図案与造型芸術、黒竜江教育出版社、27、2008
- 5) 図 3-26：張琳：赫哲族魚皮芸術、ハルピン工程大学出版社、48、2013
- 6) 図 3-27：王英海、孫熠、呂品：赫哲族伝統図案集錦、黒竜江教育出版社、60、64、2010

第四章

ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」
の素材の入手方法の特質

1. はじめに

近年、中国では急速に都市化が進展する一方で、農村地域社会における文化的アイデンティティと伝統的な暮らし方が消失しつつある。したがって、各地域の文化的特質を再発見・再認識することは極めて重要である。第四章では、これまでの章に引き続き、街津口村における伝統的な服飾魚皮衣を対象とした。第二章と第三章では、収集した48点の日常生活における魚皮衣と15点の魚皮衣の神服を調べ、その素材が11種類あることを確認し、それらの文化的特質を考察した。しかし、近年、「若年層の流出」という社会現象が著しい街津口村では、若者の間で魚皮衣の素材である魚の入手方法に対する認識度が低下している。このような状況が、漁業を急速に衰退させている。それとともに、現地の固有の服飾文化、すなわち魚皮衣の文化と密接に関連している、魚の捕獲といった魚の利活用の文化が消失の一途を辿っている。

本章では、現地調査を踏まえ、ホジェン族の伝統的服飾魚皮衣の素材の入手方法を具体的に記録するとともに、その特質を明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究

ホジェン族の漁獵生活を取り上げた先行研究には、『松花江下流的赫哲族』、『鷄林古聞録』、『赫哲族魚文化』、『赫哲族漁獵生活』など、管見の限り9つの書籍資料が確認できる。これらの書籍資料においては、ホジェン族の漁獵生活に関して民族学及び民俗学の2つの側面から研究し、漁に関するさまざまな民謡・物語、禁忌などが記録されている。しかしながら、これらのなかで、ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の素材の入手方法にみられる魚の捕獲を踏まえた生活面について扱った研究は存在しなかった。

3. 研究方法

本章における研究方法は以下の通りである。

(1) 文献調査 『松花江下游的赫哲族』[注1]、『鷄林古聞録』[注2]、『赫哲族魚文化』[注3]、『赫哲族漁獵生活』[注4]といった書籍資料により、ホジェン族の魚の捕獲に関する禁忌を把握した。

(2) 現地調査 2020年11月から2021年1月にかけて、計1回延べ12日におよぶ現地調査を行った。また、村民たち12人への聞き取り調査(表4-1)を通して、収集した63点の伝統的な服飾魚皮衣とその神服の素材の種類と特性、一年にわたる素材(魚)の入手に関する活動を把握し、それらの活動によって素材の入手方法をまとめた。

(3) 魚の捕獲の特質の考察 上記(1)、(2)に基づき、素材の入手方法の特質を明確にした。

4. 魚皮衣の素材と特性

現地調査により、中国東北部に位置する黒竜江省の黒竜江地域には、およそ200種の魚類が生息している。そして、現地で収集した伝統的な魚皮衣の実物や写真資料に関する調査・分析により、その中下流域に位置する街津口村において、魚皮衣の素材として加工される魚

表 4-1 聞き取り調査対象者(年齢は 2020 年調査時)

番号	調査対象	年齢	性別	職業
1	尤文鳳	68	女	伝統的な魚皮衣の制作技術に関する伝承者(政府が認定された国家級)
2	尤士柱	59	男	材料の採取や道具の制作、漁法が巧みになる漁民
3	尤軍	60	男	鮭を捕獲する技術に関する伝承者(省級)
4	孫玉民	59	男	自身の生活経験をもとに散文を書く民間作家
5	孫玉林	62	男	魚皮画・魚骨・神人形が制作できる伝承者(省級)
6	孫玉琴	77	女	漁獵生活を送っている漁民
7	呉福勝	61	男	シャーマンであり、儀式の司会者である。
8	呉宝臣	60	男	「イマカン」という物語の歌いに長ける伝承者(国家級)
9	呉彩云	64	女	婚礼、葬礼などの人生儀礼に関する伝承者(市級)
10	呉占山	68	男	材料の採取、道具の制作、漁法に練れる漁民
11	李勤医	57	男	魚皮画ならびに生活道具の制作技術に長ける漁民
12	徐国	59	男	妻の父である孫有財氏が制作した各種の神人形が保存・継承した

表 4-2 魚皮衣に使われる魚の種類と習性

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
中国語	大馬哈魚	鯉魚	懷頭魚	鯉魚	胖頭魚	哲羅魚	犬魚	鱸魚	草魚	細鱗魚	鱧条魚
日本語	鮭	チョウザメ	鯰	コイ	コクチマス	コクレン	カワカマス	スズキ	ソウギョ	レンギョウ	ボウウオ
分類	海水回遊魚	淡水回遊魚	大型魚	冷水魚	淡水回遊魚	半回遊魚	冷水魚	海水回遊魚	半回遊魚	冷水魚	大型魚
漁獲の時期	9月	2月、8月	9月	7月	7月	10月	10月	9月	7月下旬～8月上旬	4月	5月

の種類は鮭、コイ、鯰、チョウザメ、カワカマス、コクレン、ソウギョ、レンギョウ、ボウウオ、コクチマスの 11 種である(表 4-2)(図 4-1)ことが判明した。それらは、零下 30 度以下の寒冷地に適応できる冷水魚、オホーツク海から松花江中下流へ 1 か月程度をかけて遡る回遊魚、川底に長年生息する大型魚の 3 種類に分けられる。これらの魚の皮は比較的大きくて厚く、皮の繊維は十字に交差した構造になっており密度も高い。ホジェン族の人びとはそれぞれの魚類の生息習慣を理解していることから、これら 3 種類の魚の皮は寒さを防ぎ、磨耗に強い特性があると考えられている。なかでも、鮭の皮は、古くから、主に衣服の材料として使われ続けてきた。また、鞣したカワカマスの皮は比較的繊維が長く厚いため、カワカマスの皮で作った冬用の服は保温性が高い。チョウザメの皮は甲冑のように丈夫で、靴の靴底や甲をつくるのに相応しい材料とされる。コイの皮のうろこ紋は比較的大きく美しく、服の袖口や襟をつくるのに適している[注 5]。

また、それぞれの魚の部位ごとでも、使用用途が異なる。たとえば、コイの背骨は衣服のボタンや帽子の飾りに使われる。ナマズの小骨からは魚骨針がつくられる[注 5]。以降、本研究においては、魚皮衣の素材の入手に関する一年間の活動について述べる。



図 4-1 魚皮衣の素材

5. 素材の入手に関する一年間の活動

漁の節気歌についての聞き取り調査により、ホジェン族の人びとは、魚皮衣の素材としての魚を捕獲するために、二十四節気に、または、陽暦ごとにさまざまな活動を行っていた(表 4-3)。たとえば、人びとは3月の山の神への祈りから始まり、銚と網の材料の採集と制作、船の修繕、4月の開江祭り、5月の春の漁、6月の船の制作、7月の夏の漁、9月の鮭の神祭り、秋(鮭)の漁、12月～1月の銚の修繕・保存、2月の冬の漁までの活動を行っていた。その捕獲過程には、少なくとも11の工程があり、主に山、川、漁場、および家屋の4つの空間で行われ、大変な手間がかかるため、一人だけでその工程を完了することはできなかった。諸活動の関係者は、村の全員である。そのうち、男性と15歳以上の男子は、一年にわたる魚の捕獲に関するすべての活動を担う。シャーマンは、開江祭りといった祭事を司る祭祀師である。女性と17歳以上の女子は、さまざまな祭事に飲食物や、線香といった供え物の制作などを担う(孫玉琴氏)(表 4-4)。このように、素材の入手に関する一年の諸活動は、ホジェン族の生活に欠かせないことになってきたため、ホジェン族の全員が積極的に参加・貢献していた。次に、魚皮衣の素材としての魚を捕獲するための伝統的な諸活動を概観したい。

表 4-3 ホジェン族における一年間の素材(魚)の入手に関する諸活動

月	①漁の節気歌の訳文による諸活動		②現地調査による諸活動	
1月	小寒 大寒	漁具を保管する。	漁具の保管	
2月		魚楼に魚の肉をいっぱい詰めると、正月を迎える。	冬の漁	
	立春 雨水	木の棒でノロを捕る。 ひさごで魚をすくう。		
3月	啓蟄 春分	網づくりに追われる。 船を補修する。	鈷・網の材料の採集 と制作、船の修繕	山の神祭り
	4月	清明 谷雨	川辺に草の芽が生える。 (開江)川面の氷が完全に融解した。	開江祭り
5月	立夏 小満	魚の群れはしゃぐ。 魚がそろってくる。	春の漁	
	6月	芒種 夏至	魚が産卵する。 コイが水面に飛び出す。	
7月	小暑 大暑	コクチマスが川の中に跳ぶ。 コイが川の中に泳ぐ。	夏の漁	
	8月	立秋 処暑	漁網をまく。 チョウザメの肉が新鮮である。	
9月	白露 秋分	鮭が回帰する。 鮭が産卵する。	秋の漁(鮭の漁)	鮭の神祭り
	10月	寒露 霜降	コクレンが水面に飛び出す。 魚が極めて少ない。	
11月	立冬 小雪	掛網を修理する。 川面が凍る	網の修繕	
	12月	大雪 冬至	漁具を修繕する。	鈷の修繕

表 4-4 素材の入手に関わる諸活動・その関係者・利用する空間

節気	番号	諸活動	関係者			利用する空間
			男性・男子	女性・女子	シャーマン	
小寒、大寒	1	漁具の保管	●			家屋
啓蟄、春分	2	山の神祭り	●			山
	3	鈷・網の材料の採集と制作	●			
	4	船の修繕	●			
清明	5	開江祭り	●	●	●	川、漁場
谷雨、立夏、 小満	6	春の漁	●			
芒種、夏至	7	船・食器の制作	●			
小暑、大暑、 立秋、処暑	8	夏の漁	●			
白露	9	鮭の神祭り	●	●		
秋分	10	秋の漁(鮭の漁)	●			
立冬、冬至	11	網、鈷の修繕	●			

表 4-5 漁具・道具の制作に用いられた季節に適した各種の木の各部位

諸道具の各部位	各種の木の各部位	季節(月)
漁網	柳の樹皮	春の3月
船の制作に使用された縄		
船の制作に使用された釘、活柄の鋸の柄	柞の樹幹	夏の6月
連柄の鋸、船の柁	白樺の樹幹、枝	
船の体、網の浮き	白樺の樹皮	
椀	白樺の樹皮	通年
飲用水	白樺の樹液	

5.1. 四季と伝統漁

四季の漁に男性は、気候や自然環境、川に生息している魚種ごとの特性によって異なる漁具を用いていた。たとえば、春の谷雨(4月頃)になると、川面の氷が徐々に溶け始める。すると、大きな流氷の間で小掛網や旋網などを用いてコクチマスをはじめとした魚が捕れるようになる。かつて、春の魚の捕獲量は、人びとの半年分の食糧に達したという。なお、伝統的には毎年3月の啓蟄から、父子二人は協力して、漁具制作の材料を準備しておく必要がある。作業中、父は子に、季節ごとに対応した各種の樹木の成長特性を共有しつつ、それぞれの季節に適当な素材の選択と捕獲の方法などを教授する(表 4-5)。たとえば、3月頃に成長するホジェン語で「モンガマ」と呼ばれる柞や「カトンマ」と呼ばれる柳の樹幹繊維の靱性は高いため、それらの樹皮や樹幹の部位は、網、縄及び釘の制作のための素材として非常に丈夫である。

夏季の小暑(7月頃)になると、浅い川でコイをはじめとした魚が多くなる。夏に、河川の水温が上昇するため、柳などの皮の繊維で編んだ網が水に長時間浸されると腐りやすいため、男性は鋸や椀皮船などの漁具を用いてコイやチョウザメなどの魚を捕る。なお、初夏になると、成長期である白樺の樹皮や樹幹、枝は、剥がれやすく、腐敗を防ぎ、虫食いを防ぎ、虫を追い払う特性があるため、船や鋸、網の浮きなどをつくるのに適している。なお、山で木材の採集や狩猟をしているとき、人びとは喉が渇くと白樺の樹液を採取し、飲用水として飲むことがあった。李勤医氏により、白樺の樹液は飲むと柞の液よりも甘く、苦みがないとのことである。また、白樺の樹皮でつくられた椀に水を盛ると、水にわずかに甘みがあった。夏季に山で狩猟し野宿する際、人びとは白樺の樹皮を使って床板を地面に敷いた。このように、人びとが身の回りにみられる多様な木とその各部位を必要な生活資源に見立て、漁具の制作工程において素材として最大限に活かしていた。

秋の白露(9月頃)は、鮭の遡上時期である。鮭の群が水草や川虫を食べることができる小川に生息しているため、鋸で捕るのに適している。かつて、鮭の捕獲量は人びとの年間の漁獲総量の半分の量に達したという。そのため、肉を乾物にし、冬や狩猟の際に欠かせない食糧として使用し、皮を服飾の材料として利用していた。

小雪(11月頃)になると、川面が全面凍結する。カワカマスやチョウザメなどの魚群は川の小さな水流の区域に集まって生息する傾向がある。氷の下面に水草が多くなる場合、氷面の色は青色になる。したがって、これは、その区域に魚類が多いことを示している。1月～2月の冬の漁になると、年配の男性は、氷面の色を見分けて、魚群の集まる場所を探し、そして直径約1mの穴を掘り、銚でカワカマスなどの魚を捕る。または、成年の男性3人以上は、協力して大きな掛網を使用し魚を捕る(尤士柱氏、尤軍氏)。男性たちは通常、正午に網を下ろし、翌日の午後に網を引き上げる。網を下ろした後、網口の横に枯れた木を使って目印をつける。他の漁師がこの目印を見ると、この場所に既に誰かが網を下ろしていることを知り、他人の網を取り出すことを避けるために別の場所に網を下ろす。

5.2. 伝統的漁具

ホジェン族の間で、魚の捕獲に用いられた漁具は銚、樺皮船、漁網などであった。時代により使用された漁具は異なるという。清朝時代の皇清職貢図の記録によると、1636年以前に、すでに銚や樺皮船が使われていたことがわかる。孫玉林氏によると、かつてのホジェン族は、最初は、手で身近な鹿などの動物の骨や木を素材として用いて、銚をつくったが、漢族から鉄と製鉄技術が伝わった後、銚の先端や鉤を鉄でつくるようになっていった。時には、シナノキ、柳の皮内層の柔らかい皮の繊維でつくる漁網も用いていた。そして民国時代(1912年頃)に麻でつくる網が漢族から伝わってきた。また、1930年頃に、白い綿網がホジェン族へ伝わった。1960年頃にはナイロン糸などの漁網が普及し始め、その一方で、銚を使う機会が減少した。

本節では、伝統的な銚、樺皮船、漁網などについて、それぞれを概観する。

5.2.1. 銚

①銚の制作

「銚」は、ホジェン語で「ズウオブウホオ」と呼ばれ、代表的漁具の一つとされ、「活柄の銚」と「連柄の銚」の二種類(図4-2)に分けられる。「活柄の銚」は、白樺の樹幹でつくった銚の柄と、鉄製の銚刃の二つの部分を組み合わせたものであり、主な使用者は成人男性である(図4-3)。鉄



図4-2 二種の銚



図4-3 銚の使用者(孫玉林氏)

製の銚の先端にさらに3つの先端があり、それぞれに小さな返し針(図4-4)がついている。この小さな返し針は、魚が銚に刺されたときに抜け出すことができないようにする。銚で鮭、コイ、コクチマス、チョウザメなどの中型・大型魚を捕獲する際に、慌てて逃げようとする大魚に水中に引きこまれないように、銚の柄と刃は分離することができるが、両者の両端は麻

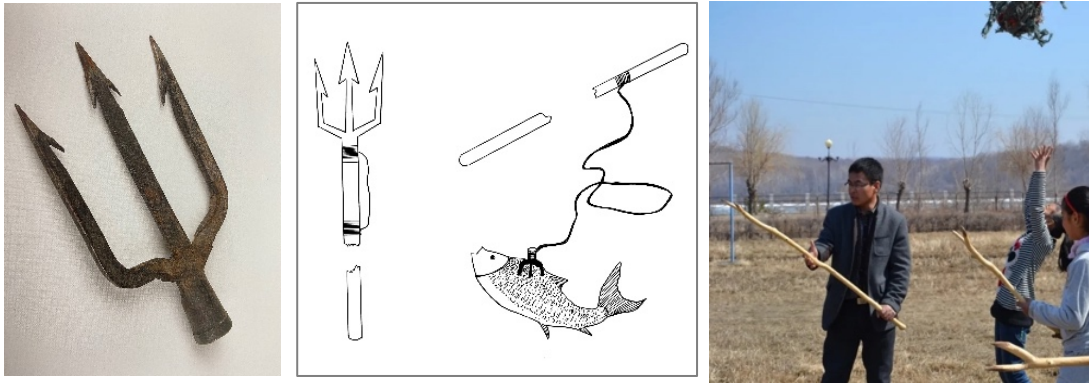
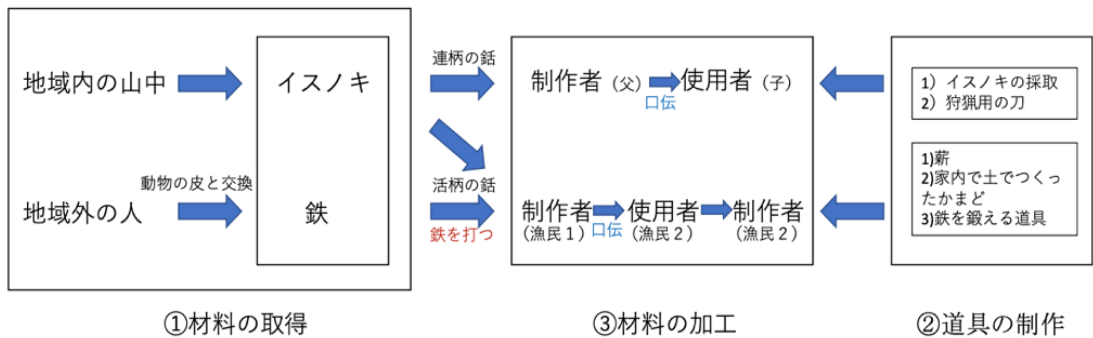


図 4-4 返し針

図 4-5 銛の柄と刃は離すイメージ図

図 4-6 連柄の銛



①材料の取得

③材料の加工

②道具の制作

図 4-7 銛の制作

縄でつながっている(図 4-5)。「連柄の銛」(図 4-6)は、自生する木の枝の Y 字部分を利用したものである。これは 7 歳以上の男子が漁法を学ぶ際に、父が子のために制作する道具である。このように、かつてホジェン族は漁猟生活のなかで身のまわりの自然物を合理的に活用して、銛を制作してきた。

銛の制作については、材料の取得・加工、道具の制作等、一定の順序と方法があり、人と人との交流に基づき銛の制作の技術が受け継がれてきた(図 4-7)。たとえば、鉄製の銛刃の制作では、制作できる男性は、できない男性と互いに銛の制作方法についてコミュニケーションをとるとともに、制作できない男性にその制作方法を教えることがあった。さらにその男性が技法を習得した後は、同様にして他の人に制作方法を教えることもあった。つまり、こうして互いに学び合い、銛の制作方法を通して交流し、助け合いながら生活を送ってきたのである。また、男性は銛を最大限に使用できるように、それを繰り返し修繕していた。銛の先端の鉄錆をとるために、男性は「川に浮かぶ石」という意味の「江石磨子」で研磨を行った。さらには鉄に熱い桐油をかけることにより錆の発生を予防した[注 6]。

②銛の使用

銛の使用はホジェン族の男性の生涯の仕事(図 4-8)であったといえる(表 4-6)。それは、生計のためのみならず、次世代を育成するためにも重要な媒体であった。男子は 8 歳の頃から父親とともに漁猟に赴いたが、その際、時として父親のやり方を真似し、時として父親が話す「ムルゲン」の物語を聞くなど、父親がまさに身をもって手本を示したことで銛に関心を抱

表 4-6 ホジェン族の男性の一生と銛の使用との関係

男性の一生	銛の使用との関係
8 歳	父から銛で鮭を捕る技術を学ぶ。
17 歳	成人式(開江祭り)に銛を供物として使用される。
	結婚式の前に両親が娘に婿を選ぶのに、銛を使用する巧者は、大切な要件の一つである。
25 歳以後	子に銛で鮭を捕る技術を教える。
65 歳以前	家族のうちの労徳瑪発として鮭の捕獲、配分などの活動を担当する。
65 歳以後	銛で鮭を捕る経験者としての冬の漁を行う。
魂(なくなつた以後)	葬儀に、亡くなった男性がもう一つの世界で生前のように同じ漁獵生活を送るために、銛を副葬品として使用される。

いた。父親は息子のために連柄の銛、草球、樺皮船といった道具をつくり、父親と漁獵をする時だけでなく、漁閑期に他の子どもと銛で草球を突く遊びの時も、銛の技術を常に磨くことができたという(図 4-9、図 4-10)。「ムルゲン」とはホジェン語で「有能な人」という意味である。伝説によると、かつての部落生活で、銛で魚を捕える巧手がおおり、その男が皆を連れて漁に行くと、大漁となったという。また、彼は1日に銛で魚を少なくとも100匹捕獲し、10cm程度の小さい魚でも捕えることができたので、英雄として崇拜されていた。また、ホジェン族の諺の中に、「銛に触れていないと正確な技法が身に付かない。槍は使わないと錆び易い。魚は川の恵みに頼り、鳥は山の恵みに頼り、人の道は自分で決め、勤勉によって人生の豊かな経験を積む。川に漁に行くと魚の習性を知り、狩猟に行くと鳥の言葉を知る」という言葉がある(尤軍氏、孫玉氏氏による)。この諺から、銛はホジェン族のより良い生活に欠かせない道具であるだけでなく、人びとが勤勉に練習したり、鋭い観察を通じて魚や鳥などの動物の習慣を深く理解し、捕獲技術を把握するための媒体となっていたことがわかる。尤軍氏によると、彼らが銛で鮭を捕る際には、それぞれの魚の泳ぎ方と習性によって、水面に異なる波紋が生じることを把握するとともに、波紋の形と大きさによって魚の種類と大きさを判断できる。

男子の17歳、女子の15歳は、結婚適齢期である。両親が娘に婿を選ぶにあたって大切な



図 4-8 銛で魚を捕獲する様子



図 4-9 銛で魚を捕獲する子ども



図 4-10 銛で草球を突く遊ぶ様子



図 4-11 銚の使い方の伝授



図 4-12 「坐蹲庫」

要件の一つは、男性の漁獲技術である。結婚後、男性が漁をする際には、自身の父のように、子の育成のために、子に漁法を教える(図 4-11)。男性は 65 歳以上になると、年を取って川へ漁に出ることができなくても、冬には川に張った氷に穴を開けて銚で魚を捕えた。この漁法はホジェン族の伝統的な漁法の一つであり「坐蹲庫」と呼ばれる(図 4-12)。また、亡くなった男性がもう一つの世界で生前のように同じ漁獵生活を送ることができるように、葬儀(図 4-13)で銚を副葬品として祀る。



図 4-13 ホジェン族の葬儀

古くから銚は、日常生活のみならず、非日常生活でも使用されてきた。たとえば、毎年4月中旬に行われる川の神を祀る開江祭りは、ホジェン族の伝統的な大漁と漁獵の安全を祈る儀式である。男子が正式な漁労民となった際には、他の男性とともに開江祭りに参加することができる。また、銚や漁船等の漁具は、神器と同様、祀られる神への供物として儀式で使用されたという。毎年、漁獲シーズン終了後の太陰暦9月9日の鹿神の祭りでは、男性が大漁を神に祈る行事を行った。男性は銚を神聖なものとして手に持ち、シャーマンの後方について神の歌を歌い、祈りを捧げ



図 4-14 大漁を神に祈る行事

ながら「温吉尼」を村の端から家々を巡りながら舞った。神に祈りたい男性は後ろから舞について行った(図 4-14)。行事が終わると、男性は水で銚をきれいに洗って魚楼[注 7]に保管した。このように、銚は神聖なものと考えられており、妊娠中の女性は決して触れてはいけないという。また、漁場では、男性でも銚などの漁具を跨いではいけなかった。漁具を跨ぐと、その日には魚が捕れなくなるという。つまり、銚は、村内でも、漁場でも、家でも常に神聖なものとして扱われてきたのである。

5.2.2. 樺皮船

① 樺皮船の制作

「樺皮船」(300cm×70cm×50cm 程度)(図 4-15)とは、魚の捕獲・運搬に不可欠な道具である。ホジェン語で「ウーモーウリーチェン」と呼ばれ、主に白樺の樹皮でつくられた。船の制作過程には、材料の採集・加工(図 4-16、図 4-17)から、船の制作(図 4-18)まで、三週間程度かかり、少なくとも二人の男性が協力して手作業で行う必要がある。一般的に親子で行うことが多い。



図 4-15 「樺皮船」

まず、樺皮船の素材として、白樺の樹皮を使用する。夏に行われ、白樺の樹皮の獲得は、男性の間で十分な協力と信頼が必要である。その獲得過程において、男性らは多種多様な木の特性を手、目、体で実感し把握してから、それらの樹木の異なる部位を船の各部位の材料として使用する。また、一般的には父親が息子に素材の採集の仕方を教える。まず、樹幹は太く、まっすぐで、手で触ると樹皮の表面が滑らかである白樺を選ぶのが一番良い選択である。次に、剥ぎ取りたい樹皮の高さを男性の背の高さから目で測量していく。高いところの白樺の樹皮を切り取るために、その

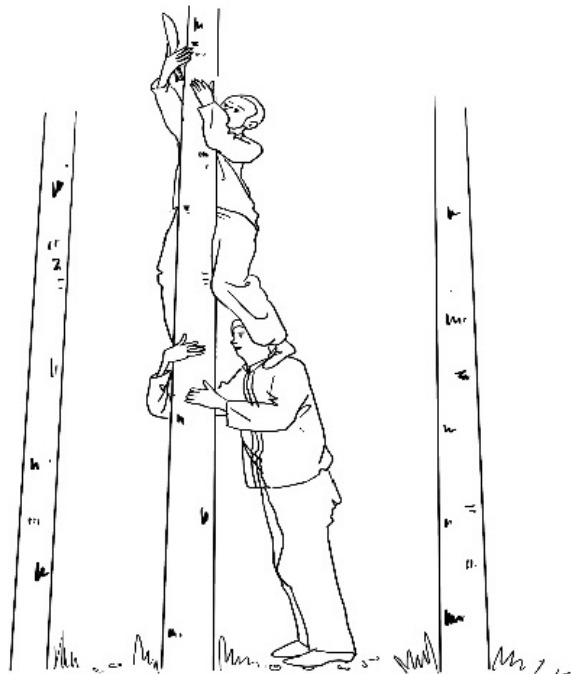


図 4-16 採取のイメージ図

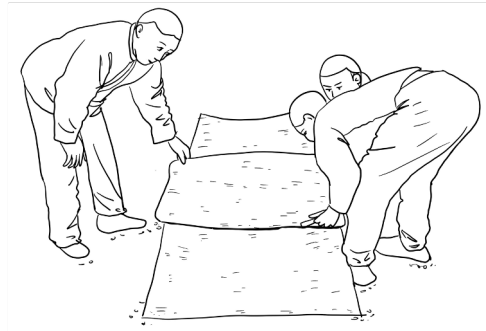
うちの一人の肩は梯子として使われる。樹幹の皮の上端と下端を一回りずつナイフで切り分ける。そして、樹幹の上端から下端まで縦の方向に沿ってその樹皮を切り裂く。その樹皮を



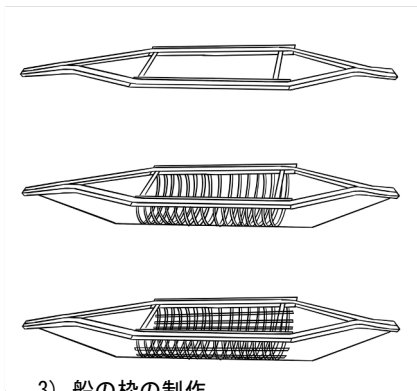
図 4-17 「樺皮船」の材料の採取



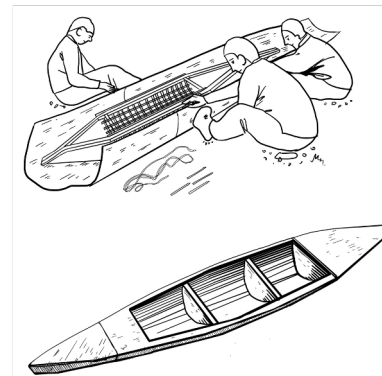
1) 釘などの道具の制作



2) 白樺の樹皮の接合・貼り合わせ



3) 船の枠の制作



4) 船の枠と白樺の樹皮の接合部の固定・縫合い

図 4-18 「樺皮船」制作の流れ

剥がし、表面の硬い皮を取り除いた後、火で焼いたり、水で煮たりして、樹皮を柔らかくするように加工する。樹皮を煮る際に、色が黄色から黄赤色に変わった場合、その樹皮は船をつくるのに適当な材料になる。

次に、樺皮船の素材としての釘と縄の制作についてである。材料の選択においては、柞の樹幹が密度も硬度も高いため、釘の材料として適している。長さ 3m 程度の船をつくるには、10cm ごとに 1 本の釘で固定し、船体を囲う白樺の樹皮と樹皮の接合部も釘で固定する必要がある。そこで少なくとも計 90 本の釘を要する。また、縄を幾重にも巻き付けて船体を補強する必要もある。柳の根で編んだ縄を用いて船を補強する手作業には、150m 程度の縄をつくる

必要があり、最低でも二週間を要する。縄を編むときには、水に柳の根を浸してから、繊維になるまで叩く必要がある。そして、その繊維を編んで縄をつくる。

さらに、樺皮船の制作において、まずは材料の選択である。白樺の靱性は非常に高く、曲げられるため、その樹幹で船の枠をつくる。船の枠をつくるための材料の選択について、切った白樺の樹幹の断面から見て、その年に成長した部分である最も外層の年輪を切り取り、残った次の二層(昨年と一昨年成長した部分)が最も丈夫で、靱性も大きいため、船の枠をつくるのに適当な材料となる。次に、その層の木の繊維の方向に沿って、直径3cm程度の板切りにする。さらに、最低10枚以上の板を組み合わせて船の枠を作成して、釘で固定する。船の底の枠を作り終えた後、上部の柳の葉の形の枠をつくる。最後に樺の皮で底と上部の枠を囲み、柳の根で編んだ細い縄と、柁の樹幹でつくった釘で固定する。船の体と船の枠を縫合する際には、一人は船の一端に白樺の樹皮を固定し、もう一人は船の另一端に樺の樹皮を固定する。三人は、釘を打って固定する。さらに、浸水を防ぐために、穴のあるところに松根油を塗る。また、制作された「樺皮船」は少なくとも3年間使用でき、破損したところがあれば、男性が新しい白樺の樹皮を獲得し交換して、修繕後、使用し続ける。

②樺皮船の使用

樺皮船は、白樺の樹皮でつくられた船で重量が極めて軽く(約1.8kg)、船を漕ぐ際に立てる音も非常に小さい。したがって、男性は小川でその船を使った場合、銚で鮭を捕りやすくなる。男性は樺皮船に座り、魚が泳ぐ際に生じる水紋を観察し、魚の種類やサイズを見分けて銚を投げてその魚を捕えた。その船は一人しか乗れないが、180kg程度の重さの鮭に耐えられる。かつて、人びとは自身でつくった船しか使用しなかった。自身でつくることによって、船の具体的な骨組みの位置を理解することができる。そのため、使用する際には足を踏み外して樺皮船を破損させ、落水することはない。漁の終了後、直接肩に担ぐことができ、帰宅する。

また、先述の通り男女の結婚適齢期は男性17歳頃、女性15歳頃で、両親が子どものために配偶者を選んだ。夏の花嫁を迎える儀式では、樺皮船で花嫁を迎えた。花嫁を迎える人数は奇数で、花嫁の実家に里帰りする際に偶数になることで、縁起が良いとされていた。冬の花嫁を迎える儀式では、犬ぞりで花嫁を迎え、人数は同様である。一方、葬儀には、死者の遺体を可能な限り完全で無傷の状態に保存するために、虫よけ、防腐の効果がある「樺皮船」が棺として使われていた。そして棺として「樺皮船」を用いるもう一つの理由は、ホジェン族の世界観と関係がある。彼らは靈魂不滅の説を信じている。人が亡くなった場合、魂は別の世界で暮らしを送ると考えている。そのため、死者が生前と同じ生活を送れるように、墓地に穴を掘って、白樺の樹幹で生前に住んだ木造の家屋をつくり、生前使った漁具、狩猟具、衣服などを副葬品として一緒に埋葬する(図4-13)。このような土葬方法は、自然からの恵みである白樺などでつくった漁具などの生活用品を自然に還していくことだと考えられる。すなわち、ホジェン族の男性らは、身の周りの木などの自然物を利用し、目的にかなった道具につくりあげていき、その道具の寿命が尽きたところで、それを自然に返す知恵を持っていた。

5.2.3. 漁網

①漁網の制作・使用

かつて、男性は主に手で漁網をつくった。男性が春に採集した柳の樹皮繊維を一枚一枚剥ぎ取り、溝の水に一日漬け込み、さらに表の皮を除いて裏の皮の繊維を用い、全体の大きさが異なり、網の目の大きさも異なる長方形の漁網を編んだ。漁網の縁に、夏に採集した白樺の樹皮でつくる約長さ6cm×幅3cm程度の浮きを繫いだ。普段、漁の際に、漁網は長い間水に浸したあとは適切に干さなければ腐りやすいため、男性は3日間の漁をすれば、2日間網を干す必要がある。そうしなければ、漁師は、仲間から勤勉でない人とされる。すなわち、ホジェン族の人びとは、使用した漁網などの道具を大切なものとして、適宜修繕することを非常に重視していた(孫玉民氏、孫玉林氏、吳占山氏)。

現地調査により、漁網は、拉網、扒網、待河網、絲掛網、旋網、趟網、鼓動網、鈴網、抬網、円錐網、圈網、張網の12種類があった。かつて、男性は、魚の棲息習慣と大きさによって、異なる漁網を使用した。たとえば、①川の流れが緩やかな場所で2人以上が協力して「小拉網」を制作し、水中に吊るして、水の中に壁を立てるようにする。網起こしの際に、一人が網の上端を引き、一人が網の下端を引く。そうすることで、魚が逃げられず、すべて網のなかに収めることができる。②春と秋には、魚類は、水深10m以上の川の流れが速くない水域に生息している。そのため、「扒網」本体の一部を川の中に下ろし、一部分は船内に残して船首の小さな釘にぶら下げる。二人で船を魚の渦に漕いだ後、網をすべて下ろして川底に沈め、魚を捕獲するために、ゆっくりと網を持ち上げる。③水深の深い急流に「待河網」を下ろし、水中にある網口の両側を木の棒でつなぎ河口を塞ぐ。そうすることで、魚が泳いでくる際に、魚が必ず水に沿って下流へ泳ぎ、網の中に入る。なお、網の口を木の棒で川底に押し込み、しっかりと縛り、網の末端に「脈線」をつける。人びとは、船に「脈線」の他端を手を持って魚が網に入ったと感じた時、急いで川底に押し込んだ木の棒をほぐし、木の棒を浮かせると、網の口を閉じて魚を捕る。④冬、魚が川底を泳いでいる際に、男性は川の流れが安定した場合、氷面の穴を掘って「絲掛網」を川底に沈むように用いる。⑤冬、川の流量の多い水域で「鼓動網」を使用した。⑥洗い流された崖の下に川の水が形成した渦で、「旋網」を使用した。⑦小型魚を捕る際に「抬網」を使用した。男性は網の中に餌を入れ、4本の棒で広げ、魚が抬網に入ると、すぐに網を持ち上げる。

これらの漁網は、使用終了後に柳の枝で叩いて、水とともに網の中に入ってきた草の根や葉などのゴミを叩き落とす。そして、柳の皮の繊維で網を修繕する。修繕できなくなった漁網は、「草球」の制作の素材として使用される。「草球」とは、壊れた漁網を網袋に編んで、その網袋に川辺の「大葉樟」という草を入れて制作したものである。それぞれの家庭において、子どもが銚子を投げ、草球を刺して、銚子の使い方を訓練する際に欠かせない道具の一つでもある。今日、人びとは植物繊維でつくる網を使わなくなったが、使用する合成繊維の漁網が壊れて修繕できなくなった時にも、子どもたちに漁法を学ばせるために、それを草球の制作の素材として用いた。なお、冬には、魚楼に保存しておく魚などの食糧を動物に盗まれないために、人びとは壊れた網を魚楼の外に掛けて使用していた。

5.2.4. 他の漁具

漁網の他に、男性は手づくり氷穿子、氷崩子、穿通棒、水線、鉤などの道具を用いる必要がある。たとえば、冬季に網で魚を獲るためには、氷面に少なくとも2つの穴を開ける必要がある。その際に、氷穿子(氷を砕く棒)が使用された。これは冬に河川の氷を砕く道具である。鉄製の先端と木の柄から構成され、柄は柞の木でつくられる。氷崩子は、砕いた氷をすくい上げるための道具で、円形の鉄製の網と白樺の木の柄からなる。その後、網につながれた水線を最初の穴から通し、氷の下を通して2番目の穴に入れる。この作業には、長さが約2～3メートルの白樺や柳、竹などの木でつくられた穿通棒が必要である。同時に、少なくとも2人の協力が必要である。水線とは、氷の表面に露出している約2メートルの紐である。網の両端に結ばれ、一方の端には石が結びつけられている。これは冬に網が水中に沈まないようにする役割を果たす。

鉤は、チョウザメ鉤(図4-19)、快鉤(図4-20)、三齒曳鉤、快当鉤、大掠鉤、底鉤、浪当鉤、鯰鉤、ヒラワオ鉤、コイ鉤、打鉤、漂鉤、蹶鞆鉤、毛毛鉤、刻格勒鉤の15種類ある。主に鉤の針や鉤の縄、鉤の柄、鉤の庫、鉄の輪の部分から構成され、鉄や鉛、榆、エンジュ、柞、白樺などの樹幹、シナノキや柳の皮の繊維、麻などの素材から制作されていた。これらの鉤は、異なる種類の魚を捕る際に使用するものであった。たとえば、チョウザメ鉤は、銚でチョウザメをとる際に使用する補佐型の鉤である。銚で鯰などの大型魚を捕った後に、快鉤や大掠鉤で魚を鉤で引っ掛けて逃げないようにする。蹶鞆鉤の形は、小魚の形と似ている。その本体は餌として使われ、川の中に置いて、鉤をつないだ糸をしきりに震わせて、鉤が小魚ツメのように泳ぐようにした。そうすることで、大型魚を釣る。



図4-19 チョウザメ鉤



図4-20 快鉤

5.3. 適度の漁獲

第二章「日常生活にみられるホジェン族の伝統的服飾『魚皮衣』の特質」で概観したように、魚は、ホジェン語で「イマハ」と呼ばれ、「人間を守る魚」という意味である。同時に、毎年、当該地域に魚が継続的に繁殖できるようにするために、ホジェン族の人びとにはそれぞれの月に異なる魚を漁獲する約束事があった。たとえば、9月の白露は鮭を捕獲する季節である。その頃、母川に回帰した一部の鮭がその下流で繁殖し、生まれた幼魚は翌年の春から海に戻

る。したがって、男性が大量の鮭を捕ることは禁じられ、小さな鮭が捕れた場合、放流する約束事があった。なお、さまざまな魚の産卵期により、毎年6月、10月下旬、12月の冬至～1月には、禁漁期が設けられていた。つまり、ホジェン族の人びとは、鮭の育成・保護意識を持っていたのみならず、ほかの魚の育成・保護意識も持っていた。このような制約の下で、男性は、漁獵生活のなかで魚類を持続可能的に利用するために、魚の育成・保護に対する共通認識を構築できたと考えられる。

5.4. 伝統的祭祀

5.4.1. 山の神祭り

中国語に翻訳したホジェン族の「下江敬江神、入山拜山神」という諺から、男性は川を下る前に川の神を祀り、山に入る前に山の神を祀る必要がある。ホジェン族にとって、山の神は、山のすべての「もの」や「こと」を支配する。そのため、漁具制作の素材の採集や狩猟の前に、山の神に祈りを奉げる必要がある(尤軍氏、吳彩云氏)。人びとは、古木を山の神の化身として信じ、年長者で狩猟の経験豊かな男性が、事前に古木に小刀で山の神の顔を彫刻した。毎回、山に入る前に、男性は儀礼服(付録、pp. 171を参照)を着用し、動物の攻撃から身を守るために、儀礼服の後ろ身頃に先祖や野生動物の顔の紋様を装飾していた。そうすることで、山の神祭りの場所へ安全に到着し、山の神を祀ることが可能だと考えられていた。そして、捕獲した秋の鮭の干し肉と、香としてのツツジの枝3本を供え、さらに三度拝礼を行う。儀式の終了後、魚皮の日常着に着替え、狩猟に行った。また、樹幹を道具づくりの素材として適量分量を採り、残った古木の切り株は、山の神が休憩の際に座る場所とした。人びとが山で偶然に木の切り株を見つけた場合には、それを拝む必要がある(尤文鳳氏、吳宝臣氏)。このように、ホジェン族の人びとは、古くから、子孫が自然から持続的に恩恵を受けられるように、木の根元を山の神の席として信仰し、守るという約束事を設けていた。



図 4-21 生命樹の紋様

また、古木の形から生命樹の紋様を作り出し、婚服に飾った(図 4-21)。この生命樹の紋様は、「氏族繁栄、多子多福などの「縁起が良い」という意味が付与されていた。さらに、ホジェン族にとって、世界は上(天界)、中(地界)、下(地下界)の三界に分けられるという共通認識があり、婚服の生命樹の紋様には三界が描かれ、鳥の紋様で装飾されたところが「天界」、鹿の紋様で装飾されたところが「地界」、トカゲと亀の紋様で装飾されたところが「地下界」とされた。なお、人びとは生涯で2回のみ婚服を着用し、1回目が結婚式で、2回目が葬儀で

ある。この鳥紋は、魂鳥(ハニンチューキャン)とも呼ばれ、子どもの魂が生まれ変わる とされた。結婚式で着用する婚服の装飾である生命樹紋の鳥紋の個数が、希望する新生児の数を表し、新郎新婦が二人で決めたものである。葬儀では、故人に死装束として婚服を着せると、故人の魂が生まれ変わるとされた。その大前提として、人びとは普段、ホジェン族の全員における共通認識としての、「人」「自然」「神」と緊密な関係があるさまざまな約束事や禁忌などを守った。約束事や禁忌を犯した場合、死後、カワラヨモギの茎に生まれる虫瘤になって、永遠に人に生まれ変わらないという(尤文鳳氏、呉宝臣氏、徐国氏)。

5.4.2. 川の神祭り

伝説によると、ホジェン族のある年配者は松花江へ漁に行ったところ、突然、強風が吹いて、高い波が巻き起こり、船が転覆した。それゆえ、「川の神様、無事を守ってください」と祈った。頭を下げて礼をしていると、川から巨大な亀が4匹出てきて、川の水面はすぐに穏やかになった。そしてその年配者は無事に家に帰れた。翌朝、年配者は、大きなチョウザメを捕まえ、その肉で殺生魚というホジェン族の最高の料理をつくった。川の神に感謝するために、チョウザメの頭、殺生魚、酒などを供え物として川辺に置き、川の神を祀った。このように、人びとは川の神はカメが変化したものだと認識した。また、川の神の許可がなければ魚が捕獲できず、漁の前に川辺に川の神に祈る必要がある。なお、毎年4月の穀雨になると、ホジェン族のすべての男性は、大漁と漁猟の安全を祈るために、漁の前に川の神を祀るという「開江祭り」を開く。

男性は、川辺に白樺の樹幹でつくった約15cmの川の神の人形を神位として立て、チョウザメの頭と骨、そして女性が家で作った「稠李子餅」[注9]という正月のお節料理を並べて奉納する。この儀式は、神を招く歌を歌うシャーマンが司会をする。まず男性はシャーマンに従い、川の神に祈りを捧げる。次に、シャーマンは神鼓を叩き踊りながら祈る。男性はシャーマンの後ろに付いており、銚を持ちながら踊る。そして、川の神に大漁と無事を祈る。

5.4.3. 鮭の神祭り

9月の白露になると、鮭漁の時期を迎える。男性が鮭を捕れるかどうかは、鮭の群れが回遊するルートに大きく依存している。なお、水の神は鮭の回遊ルートを司ると認識されていたので、鮭の旬には鮭祭りを行う必要がある。鮭祭りとは、主に水の神を祀る行事である。張嘉賓氏が著した『黒竜江赫哲族』の記載によると、毎年9月頃、男性はまず家で水の神(タム)に祈る。そして、木の板に刻まれた水の神を川辺に置き、祀る。さらに、「水の神様、我々は貴方に食べ物を捧げ、乾いた鮭の尾を供えるため、私たちの大漁をお守りください」と祈る。祈りが終わると、事前に用意した貢ぎ物や米飯を水の神像の口に塗り、残りの貢ぎ物や米飯を木製盆に入れ、その木製盆を川に置く。木製盆がすぐに川に沈むと、水の神が供え物を受け取って、喜んだという意味である。儀式が終わると、男性は空いた盆に水をたくさん入れ、家に持ち帰って、家族に飲ませる。この水は、水の神が一人一人に分け与えた幸運な水であると認識され、それを飲めば、無事に大漁になる(李勤医氏、呉福勝氏)。

5.5. 宗族の協同作業

5.5.1. 漁の前

ホジェン族において、男性が川を渡って魚を捕るには、心を合わせ協力する必要があるといった。また、漁をする前に、家族のなかで漁獵の経験が豊富で、最年長の男性は、ホジェン族の共通認識として「勞徳瑪發」と呼ばれた。「勞徳瑪發」は経験者として、男性それぞれの任務を分配し、漁の監視をした。現在の共同漁業の管理方式と同様であるといえる。また、男性が漁の豊作と平安のために、川辺で神事が行われた。そして、



図 4-22 「イマ・カン」を歌う様子

漁の前に一同に川辺で座り「イマ・カン」を歌った(図 4-22)。「イマ・カン」(表 4-7)は、ホジェン族の人びとに口頭で伝承された英雄の事跡に関する叙事詩で、語りの部類に入る歌謡でもある。モルゲンという英雄の物語、シャーマンの物語などがある。歌い終わると、彼らは歌が最も上手な人を選出する。選出された人の歌が川の神を喜ばせることで、その日は豊漁になると考えられた。その日の漁が終了後、もし誰かが大きな魚を捕まえた場合、歌が上手な人にその返礼として、捕獲したチョウザメなどの大型の魚の頭部と上身を贈るという約束事がある。なお、夜になると、女性は家で夫が帰ってくるのを待っている際に、夫の無事の帰りを祈るために、「イマ・カン」を歌うこともあった(孫玉琴氏、吳宝臣氏)。このことから、「イマ・カン」を歌うことは、漁場で必ず守るべき約束事だけではなく、人びとがより良い漁獵生活を送るために、共通の祈り方として存在していたことがうかがった。

表 4-7 「イマ・カン」に関する歌詞

歌詞 1	歌詞 2
<p>マンゲム・モルゲン (中国語：滿格木莫日根)</p>	<p>神の銛・スブゲ (中国語：神叉蘇布格)</p>
<p>マンゲム・モルゲンの父親が敵に殺された。マンゲムは義父に育てられ、勇敢な莫日根になった。父親の仇を自らの手で討ち、仇を果たした。シャーマンの能力に精通した滿格木は、神の力に驚くべきものがある。彼は人との闘いで千斤の鉄牛を持ち上げたことがある。また、大きな野猪や鯉の精を殺したことがあり、ホジェン族の間で有名な伝説の英雄であった。</p>	<p>ある年、川で魚が一匹も見つからなくなった。魚を捕る巧手であるため、「神の銛」と呼ばれるスブゲは怒り、生計を立てるために水中に潜り龍王を見つけ、魚を返してくれるように要求した。龍王は「スブゲ」の勇気を称賛し、彼の要求を受け入れた。それ以来、「スブゲ」は故郷に戻り、川でたくさんの魚を捕り、村人たちも彼に従ってたくさんの魚を手に入れた。翌年、またしても川の魚が姿を消した。「スブゲ」は龍王のせいではないと考えた。ある時河口を見つけ、そこで生息する大きな鮭をすべて食べてしまう二匹の白熊の精がいるのを発見した。そこで、「スブゲ」は銛を振り回し、白熊の精の体に刺し、白熊の精を倒した。その後、白熊精が魚を食べなくなったおかげで、鮭の群は川に無事戻ることが可能だ。</p>
<p>注：マンゲムは、「柞の木のような硬いもの」という意味である。</p>	

5.5.2. 漁の最中

漁の際に、ある人物が重さ 20kg 以上の大魚を捕獲した場合には、大魚が重いため、銚の柄が銚の先端から落ちる可能性がある。すると、大魚が鉄の銚鉤を引いて逃げ出すが、縄とつながった他端の銚の柄が水面に浮かぶため、それを浮標として、魚が逃げていく方向が見える。男性は魚を追かけながら、近くのほかの男性らに助けを求める。彼らはすぐに船を漕いで手伝う。魚が疲れて泳げなくなった際に、一同に鉤で浅瀬に魚を引っ張り出し捕獲する。このように、男性が互いに協力する行為は、漁の際に行われた重要な活動でもある。

5.5.3. 漁の終了後

魚の配分(図 4-23)について、一人一人の漁獲量は、平均分配の原則に従う。「勞徳瑪発」は、担当者として、魚を平均に分配する責任を負っている。漁場で食事や雑事だけを担当していた未経験者や高齢者・障害者でも、分配によって魚を手にすることができる。平均分配の方法には、一人一人が背を魚に向け、手を後ろへ差し出す。担当者は他の人が自身で手の中に用意しておいた柳の枝を取ってから、無作為にそれらを捕獲した魚の体に置いていった。そして彼らが魚の方を向き、自身で事前に用意した枝を見分け、枝の下に置かれた魚を取り出す。また、魚を運搬しやすくするために、川に生えた「大葉樟」という草を縄のようなものに編んで、魚の鰓から口まで通し、さまざまな魚を縄につなぐ。なお、家族のなかに孤児、寡婦、身体障害者がいる場合には、「勞徳瑪発」が皆の代表者として、彼らの家を訪れ、一部分の魚を彼らに配布する[注8]。このことから、ホジェン族の人びとは、互いに信頼・



図 4-23 魚の配分

尊重し、助け合う協同精神を持っていたのである。

5.6. 禁忌の遵守

ホジェン族の人びとは、靈魂の存在を信じたため、漁場では、さまざまな神や禁忌が産み出された。これらの禁忌は、単に人びとの行動規範を束縛するものだけではなく、人びとが自然を利用しながら、諸神や精霊に敬意を払うための感謝の表現方法でもある。たとえば、漁場の神聖さを守るため、妊娠した女性は不浄だと扱われ、漁場に行くことを禁止されていた。漁場に行った場合、川の神などの諸神への不敬行為である。家族が亡くなったばかりの男性が漁

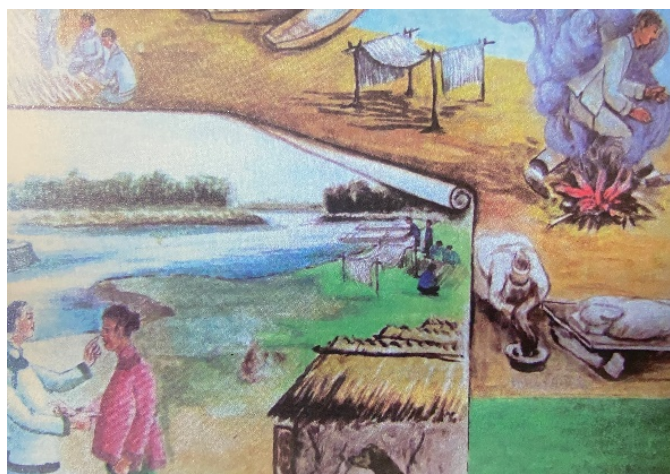


図 4-24 漁場での禁忌に関する絵

に行くと、漁場で焚き火を跨がなければならない(図 4-24)。そうすれば、身体に付いた不浄なものを取り除き、漁をすることができると考えられてきた。若い男性は経験不足なので、漁場で冗談を話した場合、川や鮭などの神に対する不敬行為とされる。たとえば、「どうして鮭がたくさん捕れたのか」とか、「どうして鮭が捕れないのか」という話は禁止された。また、さまざまな禁忌のなかでは、「魚を捕える巧手は、自身の銚などの漁具がいいとすることができない」というものもあった。人びとは銚で魚の浮き袋の部分を刺してはいけない。そうしなければ、次回の漁は、大漁ではなくなる。上記のように、これらは諸神への不敬行為である。また、漁場で労働ができない高齢男性は、食事を担当しているが、臨時に建てた家屋で料理をつくる際にもさまざまな禁忌がある。たとえば、吊鍋を叩いてはいけない。鋭いナイフで料理を炒めてはいけないなど。これらを破れば、人びとが火の神などの諸神から恵まれた好運がなくなってしまう(呉彩云氏、呉福勝氏)。

こういった禁忌は、人びとが漁猟生活を営む上での重要な生活規範として守られてきたものといえる。ホジェン族にとって、漁場は神聖な空間である。漁猟生活で行われた各種の活動の担い手ごとに、それぞれ異なる禁忌がある。特に、妊娠した女性や家族が亡くなったばかりの男性などは、漁場で不浄なものとしてされた。神聖な空間である漁場を守るために、さまざまな禁忌を通じて、浄と不浄を分ける生活空間を構築した。すなわち、これらの禁忌は、浄なる場所と俗なる場所を隔てるために用いられていた。また、聞き取り調査によると、「女性はどこにあっても男性の漁具、狩猟用具に触ることができない」、「家で先祖祭りなどを祈る際に、女性は参加できない」などという禁忌も存在していた。このことから、ホジェン族の社会では、女性が特定の場合に不浄視され、排除されたと推察される。

6. 素材の入手の特質に関する考察

以上、ホジェン族における魚皮衣の素材の入手方法に関する一年の諸活動の営みを概観してきた。本章では、そこからみられる素材の入手の特質を概観したい。

6.1. 「ものづくり」

ホジェン族の人びとは、現地固有の地形や気候・風土のなかで生活しており、身の回りのさまざまな魚の生息習慣を観察し理解することで、そのうちの 11 種類の魚の皮が衣服をつくるのに適した素材であると認識していた。また、それらの魚の皮を衣服の各部位の素材として利用していた。人びとは季節ごとに川の異なるところに生息している魚類の体型の特徴や生息習慣などを観察・理解するとともに、異なる季節に山から採集した白樺、柳、柞などの木の樹幹や樹皮などの各部分を漁具の素材として利活用しており、2 種類の銚、樺皮船、12 種類の漁網、15 種類の鉤などの多様な漁具を制作してきた。このように、それぞれの「ものづくり」は、ホジェン族の人びとがより良い漁猟生活を寄与するために構築されてきた必要な要素であるといえる。

6.2. 「ことづくり」

最も重要な漁具の一つとされてきた銚や樺皮船、漁網、鉤は、生計を維持するために使用された「もの」であるだけでなく、人びとの生活基盤の構築に必要な要素でもある。これらの

漁具で漁をすることは、魚や白樺などの自然物に対する理解や、次世代の育成、人びとの生活における儀式や祭祀などを行うためにも重要であった。草球づくり、伝説、諺、行事、約束事、禁忌等の、漁具に関わる各種の文化的な要素は、日常生活および非日常生活において、人と漁具、人と自然、人と人びとと神の親密な関係づくりを促進した。これによって、人びとの生活は豊かになった。

6.3. 「人間関係づくり」

魚皮衣の素材の入手には、少なくとも11の工程があり、一年を通じて、家族の全員が参加する重要な活動である。全村の漁猟生活のなかで、男性と男子は主要な役割を果たし、女性と女子は補助的な役割を担い、シャーマンは祭事の際に諸神と交流できる祈祷師とされる。また、経験の豊かな男性、経験の浅い若い男性、年配の男性、身体の病で労働できない男性、家族が亡くなったばかりの男性、妊婦、子ども、約束事や禁忌を守らない人なども、漁猟生活において、さまざまな役割を担っていた。たとえば、ホジェン族の男性は、魚皮衣の素材を入手するために漁具の素材の採取から制作、使用、修繕までの一連の活動を行った。これらの活動は主に男性の一生涯の手仕事であった。男性は、7歳頃から父親に連れられて漁場でこれらの活動を学ぶ。学びの過程のなかで、父親はモルゲンという英雄物語を通じて魚を捕る知識を息子に伝えた。男子が魚を捕る技術を身につけると、川の神祭りの儀式に参加する資格が与えられる。適婚齢になると、女性は男性の捕魚能力に基づいて結婚相手を選ぶ。結婚後、男性が集団的な漁猟生活の中で親族の他の男性と一緒に魚を捕る際、経験不足の男性はさまざまな約束事や禁忌に従う必要があった。また、労働ができない高齢男性、家族が亡くなったばかりの男性、妊婦などもさまざまな約束事や禁忌に従う必要があった。男性たちは漁の前に、経験豊富な長老である労徳瑪発の指導のもと、共同で山や鮭の神の祭りに参加し、イマカンを歌うことで豊漁を祈った。漁具を制作する際には互いに助け合い、その制作方法などを共有し合った。漁場では約束事や禁忌を遵守し、大型魚を捕る際には互いに助け合った。さらに、魚の配分の際には平等な分配が求められた。そのため、彼らは魚を捕る巧手になるまで練習を重ねた。年齢と経験の積み重ねにより、男性は次第に経験豊富な「労徳瑪発」となった。経験者の男性は、尊敬を集め、親族の男性の川渡り、祭祀、魚の捕獲、魚の分配などの活動を担当した。また、老人や病人、障害者などに対しても、漁獲した魚を分配するという約束事がある。魚の捕獲ができなくなる年齢になると、男性は船での漁はできないが、冬の漁には伝統的漁法「坐蹲庫」で魚を捕獲した。彼らが亡くなった時には、一生涯、亡くなくても、来世で前世のような生活を続けるために、家族によって生前に使用した道具と共に土に埋葬された。同時に、家族は死者に対する尊敬を示すために、シャーマンに死者の神像の制作を依頼し、死者を祖先として祭った。

ホジェン族のシャーマンは、日常的に漁猟に参加するが、川の神祭りなどの際に諸神と交流できる祈祷師とされ、一年間の素材の入手活動において重要な役割も果たした。女性は漁猟には参加せず、家族の一員として魚皮衣の素材の入手に役割を果たした。女性たちは漁場での約束や禁忌を守り、祭りの際に供え物を準備し、家で「イマカン」を歌い、漁に行った男性らが無事に戻ることを祈った。総じて、ホジェン族の人びとは魚皮衣の素材の入手を通し

て、「全員協業」「互勉互助・相互約束」「互敬互助・互愛」という緊密な関係を築いてきた。

6.4. 「生活空間づくり」

6.4.1. 現世空間と靈的空間づくり

人びとは、一年にわたって山、川、漁場、家屋の4つの生活空間で一連の素材の入手に関する活動を行った。そのうち、魚の捕獲の前には、川の神を祀る必要がある。川などの神祭りの際に、漁具は神聖なものとして供物としても利用された。人びとはこれらの漁具を最大限に活用し、保護し修繕する。道具の寿命が尽きた場合に、土すなわち自然に還すことは、ホジェン族の資源循環型の社会的生活の秩序を表している。魚の皮でつくる服飾も同様である。人びとは、漁獵に関する約束事や禁忌を守りながら、特定の季節に異なる魚を捕獲し、毎年6月、10月下旬、12月の冬至～1月の禁漁期も設けた。捕獲した魚の皮で服飾をつくり、着用し、葬儀で死装束として故人の遺体と共に土に還した。また、生前に使用された生活用品を副葬品として埋葬することも、故人が死後の靈的世界で生前と同じ生活を送れるようにとの思いを込めた。また、人びとは、現世で川や山などの神祭りを行う必要がある。たとえば、漁具の制作の際に、山で山の神祭りと素材の収集を行い、魚の捕獲の際には、川辺や漁場で臨時家屋を建て、川の神祭りや鮭の神祭りなどを行った。総じて、このような人間の共通認識から、ホジェン族の人びとは、現世で資源循環型の生活空間と、靈的生活空間を構築してきたことがわかる。

6.4.2. 「聖」と「俗」の空間づくり

人びとは魚皮衣の素材の入手に関する一連の活動を行う際に、その身分により、たとえば、山や漁場などの生活空間で、魚の捕獲の経験者(男性)、経験が不足な若い男性、家族が亡くなった男性、労働できない高齢男性、妊娠中の女性などに対してそれぞれさまざまな約束事や禁忌がある。たとえば、山で男性は、山の神が座る場所とされた木の切り株に座ってはいけけない。さもないと、山の神に対する不敬と見なされることがある。妊娠中の女性は、不浄な存在と見なされ、漁場へ行けけない。また、先祖を崇敬するために、女性は固定の家屋で先祖の祭りに参加できず、男性の漁具の上に座ってはいけけない。なお、人びとは現世でこれらの約束事や禁忌を守らなければ、死後に魂が転生できないという。つまり、人びとは漁獵生活のなかで良好な生活秩序を維持するために、自然の規則に従い、それに対してさまざまな約束事や禁忌を創造し、生活規範として守っている。また、山や川、家屋などの生活空間では、神聖な場所を確保するために、さまざまな約束事や禁忌を守ることによって、「聖」と「俗」の領域を区別する結界を形成してきた。

7. おわりに

本章では、ホジェン族の伝統的服飾である魚皮衣の素材の入手方法の文化的特質を明らかにした。そして、これまでの調査・考察から下記の知見を得た。

(1) ホジェン族にとって、魚皮衣の素材を入手することは、人びとが身の回りの動植物のそれぞれの成長規律の特性を認識し習得するための媒体であった。また、白樺などの植物の各部位をさまざまな漁具の素材として利用し、漁具を制作した。そして、生活を支えるその漁具

は単なる「もの」ではなく、神から授かったもので、川などの神に祈る際に供物として使用した後、漁場で多様かつ持続可能な使用方法で利活用し修繕した。さらに、最終的には葬儀で故人の副葬品として土に還すことで、「ものづくり」「ことづくり」に関わる資源循環型の暮らし方を構築してきた。このような豊かな暮らし方は、人びとと「漁具」「自然」「人」「神」との密接な関係を築き上げてきた。

(2)人びとは、世界に存在する川、山、鮭をはじめとしたもの全て神から授かったものであると信じている。さらに、それらのものには魂が宿っていると考えている。したがって、物質的な「もの」を大切にするホジェン族の人びとは、川、山、鮭などのものを信仰の対象として、それらを感謝するために、素材を入手する一連の作業工程において、特定の日に祭祀を行い、神やものを怒らせないように、さまざまな約束事や禁忌を共通認識として生み出した。それらの行動規範を守るとともに、「全員協業」「互勉互助」「互敬互愛」「互約束」の共同認識に従って、宗族と民族間の緊密な人間関係を築いていた。このように、ホジェン族の集落共同体の一員として、人びとは素材を入手する過程には、共通の約束事や禁忌と親密な人間関係を守って、現世と霊的の生活空間、「聖」と「俗」の生活空間を自ずから形成してきた。

(3)素材の入手は、ホジェン族の人びとの自給自足の生活に不可欠な資源であり、人びとの「ものづくり」「ことづくり」「関係づくり」「生活空間づくり」に関する生活の深い知恵が宿っていた。したがって、それらの生活の知恵は、ホジェン族の内発的地域づくりに重要な要素となってきたといえる。

総じて、かつてのホジェン族の人びとは、(1)～(3)のような社会秩序の下で、魚や白樺などの動植物の利活用に基づき資源循環型の社会を構築してきた。

注および参考文献

- 1) 凌純聲：松花江下游的赫哲族、上海文芸出版社、1934
- 2) 魏声和：鷄林旧聞録、吉林日報社、1913
- 3) 王世卿、王積信、呂品：赫哲族魚文化、黒竜江教育出版社、224、2010
- 4) 于学斌、孫雪坤：赫哲族漁獵生活、黒竜江美術出版社、23、2006
- 5) 孔春、植田憲：中国の少数民族ホジェン族にみられる「魚皮」の加工技術：黒竜江省同江市街津口村における魚資源活用に基づく生活文化(2)、日本デザイン学会研究発表大会概要集 68、146-147、2021
- 6) 孔春、青木宏展、植田憲：中国の少数民族ホジェン族の伝統的漁具「鈔」の文化的特質：黒竜江省同江市街津口村における内発的地域づくりに向けて、第 69 回アジアデザイン文化学会概要集、89-92、2021
- 7) 魚楼とは、ホジェン族が捕獲した魚を貯蔵するために、白樺でつくった倉である。
- 8) 前掲 4)、38
- 9) 稠李子餅とは、ホジェン語で「ディブシケテ」と呼ばれ、ホジェン族人びとが 8 月頃に採集したセアノサスの果実と特製の魚毛(魚の肉でんぶ)でつくった伝統的なハレ食である。

図の出典

- 1) 図 4-3、図 4-10：孫玉林氏から提供
- 2) 図 4-9：于学斌、孫雪坤：赫哲族漁獵生活、黒竜江省美術出版社、96、2006
- 3) 図 4-8、図 4-15：尤文鳳氏から提供
- 4) 図 4-12：尤軍氏から制作、提供
- 4) 図 4-13、図 4-19、図 4-20、図 4-24：黒竜江省博物館にて筆者から撮影
- 5) 図 4-17：前掲 2)、115
- 6) 図 4-23：前掲 2)、22

第五章

ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の 制作技術の特質

1. はじめに

近年、急速な都市化に伴って、中国の農村では、長年にわたって形成されてきた地域の伝統的な生活文化が消失しつつある。このような地域の個性・特徴が失われる現象は、中国では「千城一面」[注1]と称され、本章で取り上げるホジェン族が生活する黒竜江省同江市・街津口村も例外ではない。当該地域において、ホジェン族が長い歴史のなかで、漁獲した魚の皮を用いて服飾を縫製することで、伝統的服飾である「魚皮衣」の文化が形成されてきた。しかし、近年、伝承者の高齢化、後継者の不足に加え、若い世代の関心・認識が極めて低下しており、非物質文化遺産である魚皮衣の制作技術についての存続が危惧されている。筆者は、第四章「ホジェン族の伝統的服飾『魚皮衣』の素材の入手方法の特質」において、ホジェン族の魚資源の利活用に基づく生活の視座から、ホジェン族の伝統的服飾魚皮衣の制作技術の一環としての魚の捕獲の特質を考察した。本章では、魚皮衣の制作手順を詳述するとともに、その制作技術の特質を明確にすることを目的とした。

表 5-1 魚皮衣の制作に関する史書・絵画とその記述内容

番号	年	著作	著作者	確認できる内容
1	1721	寧古塔紀略	呉振臣	魚皮衣は鞣された後に5色の紋様で染めることができる。
2	1722	遼左見聞録	王一元	魚皮衣にはさまざまな色の紋様がある。
3	1805	皇清職貢図	傅恒など	木製の道具で魚皮を鞣す。
4	1883	西柏利東偏紀要	呉振臣	人びとは紫色を愛用し、袖口には約6cmの紫色の縁取りが付されている。
5	1891	吉林通誌・赫哲屋土記	長順修など	女性の魚皮靴は魚皮素材で、雲紋で飾られており、赤色で染色されている。

2. 先行研究

表 5-1 で示したように、魚皮衣の制作に関する文字史料、絵画資料、書籍で古いものでは、『寧古塔紀略』（1721年）、『遼左見聞録』（1722年）、『皇清職貢図』（1805年）、『西柏利東偏紀要』（1883年）、『吉林通誌、ホジェン屋土記』（1891年）などが挙げられる。それらには魚皮衣の鞣しとその道具、紋様の染色、魚皮衣や魚皮靴の紋様や装飾について確認できる。近年の書籍では『松花江下遊的赫哲族』（1934年）[注2]、『漁家絶技・赫哲族魚皮制作技芸』（2008年）[注3]において、男女の魚皮衣に施される紋様は紫、黒、青、赤、黄の5色であることが示されている。他方「赫哲族あ魚皮服飾及制作工芸的伝承・発展」（2009年）[注4]では、魚皮衣の制作への調査に基づき、魚皮衣の保護・伝承案を提言している。本章においては、魚皮衣の制作技術に着目し、そこから導出される特質についての研究を行ったものである。

3. 研究方法

本研究の方法は、次のように進めてきた。

(1) 現地調査 2016年9月から2022年9月にかけて、黒竜江省同江市・街津口村において、計5回の現地調査を行った。また、現在、当該地域に在籍しているホジェン族が、およそ500

表 5-2 聞き取り調査対象

番号	調査対象	年齢	性別	担当
1	尤文鳳	71	女	2007年に魚皮衣の制作技術の国家級の伝承者と認定され、魚皮衣を制作できる
2	楊英琴	44	女	尤文鳳氏の次男の婿であり、魚皮衣を制作できる
3	尤秀云	71	女	ホジェン族文化博物館のツアーガイドであり、魚皮衣が制作できる
4	孫鳳華	61	女	魚皮衣を制作できる
5	孟繁春	57	女	魚皮衣を制作できる
6	趙宝芹	61	女	魚皮衣を制作できる
7	吳福勝	64	男	趙宝芹氏の夫であり、魚の皮鞣し技術を習得済み
8	吳彩云	62	女	魚皮衣を制作できる
9	王麗	46	女	魚皮衣を制作できる
10	孫玉林	62	男	魚の採取、魚の皮鞣しなどの技術を習得済み
11	尤軍	62	男	尤文鳳氏の親族であり、魚の採取、魚の皮鞣しなどの技術を習得済み
12	吳占山	69	男	魚の採取、魚の皮鞣しの技術を習得済み

人(約 23 戸)であり、魚皮衣を制作している家庭が、およそ 10 戸が残ることを把握した。
 (2)聞き取り調査 その 10 戸に出向き、住人である尤文鳳氏、尤秀云氏、趙宝芹氏をはじめ 40 歳以上の村民ら 12 人への聞き取り調査(表 5-2)を行い、年間を通し、時期に応じた日常生活における魚皮衣として女性用の袖あり上着とズボンの制作手順を具体的に記録した。また、写真 1154 点を収集し、映像約 21 分を記録した。
 (3)魚皮衣の制作技術の特質の抽出 上記(1)～(2)に基づき、魚皮衣の制作技術の特質を明確化することに努めた。

4. 「魚皮衣」の制作技術

魚皮衣の制作は、1 年を通じて、その素材としての魚の入手と魚皮の加工、魚皮衣の縫製、修繕、保管など多くの手順が必要である。それらの手順は、行うべき季節、順序をはじめ、さまざまな約束事が存在し、家族全員の参加、協力の下に行われてきた。第四章では、伝統的服飾魚皮衣の制作の一つの工程である素材(魚)の入手方法を把握したが、本章においては、伝統的服飾魚皮衣の制作工程の中の素材の入手後の魚の貯蔵と魚皮の加工、魚皮衣の縫製、修繕、保管などの方法を概観する。なお、各手順の後の括弧内に行うべき時期を示す。

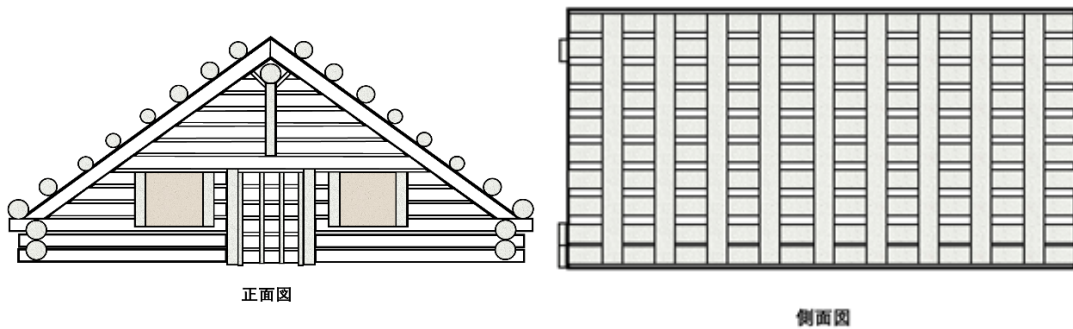


図 5-1 臨時の家屋「地窖子」のイメージ図

4.1. 事前の魚の貯蔵(禁漁期以外の月)

第四章では、山の神祭りから、木材の採取、木材の運搬、道具や臨時の家屋「地窖子」などの制作、川や鮭の神祭り、魚の捕獲、魚の運搬までの一連の作業と各種の道具を把握し記録し、魚皮衣の素材である魚の入手の特質が考察したが、本節では、臨時の家屋での素材(魚)の貯蔵について略述する。

「地窖子」とは、ホジェン語で「フリープー」と呼ばれ、伝統的な家屋の一つで、男性が漁の前に漁場で建てる一時的な家屋で深さ1m程度の半穴居である(図5-1)。大きさは幅6m×奥行5m×長さ6m程度である。材料は、第四章で考察した連柄の銚や船の材料と同様、防虫効果を有する白樺の樹幹である。主に山の南側に建てられ、北を背に、真正面が南に向く。一室で3～4人が

居住できる(図5-2)。内部の構造は、オンドル(幅6m×長さ4m程度)、竈門(幅60cm×長さ60cm程度)、暖房(幅6m×長さ4m程度)、貯蔵(幅90cm×長さ60cm程度)の四つの機能を持ち、石と土でつくるオンドルは竈門、暖房と一体化することで、煮炊きの際に発生した煙をその内部に通し、オンドルを暖める。煙がオンドル内を流れ、熱を均一にするべく、内部には幅30cm、長さ4～5m程度の3つの仕切りの壁がある。煙は竈門からオンドルの内部を流れ、最終的に煙突から屋外までに排出される。この独特な構造は当地の自然条件と気温に適応し、冬暖かく夏涼しいという特徴を持っている。捕った魚を一時的に安全に保管するため、家屋の床下にさらに深さ1m程度の穴が掘り、魚を貯蔵し、後に定住の家屋に持ち帰る(呉彩云氏、孫玉林氏)。たとえ男性が将来ここで漁をしなくても、同世代の人びとが使用し続けるため、そこに臨時の家屋を残し、壊さないという。

4.2. 魚皮の加工(5月～12月)

魚皮の加工工程としては、事前の準備作業(皮の選別など)、皮の剥ぎ取り、皮の洗い(脂肪の削り取り)、乾燥、鞣し、裁断、縫合、染色の8つがある。各工程には、ホジェン族の人びとが自身で手づくりのさまざまな道具を使用する必要があったという(尤文鳳氏、孫玉林氏な

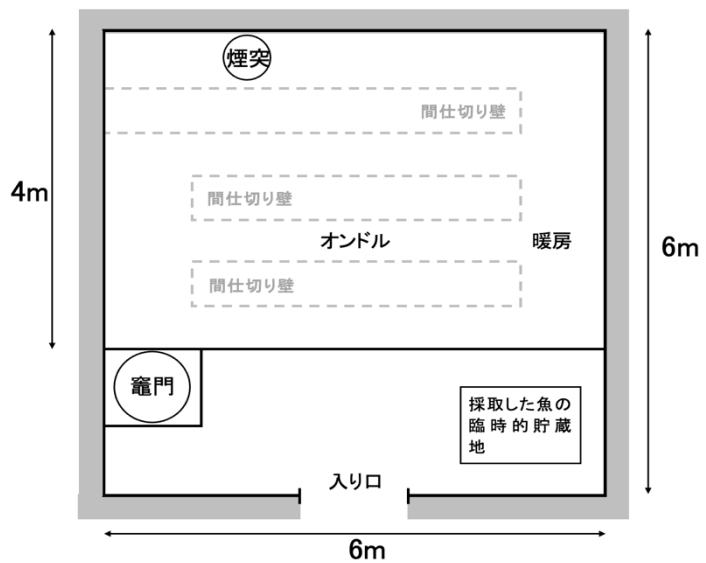
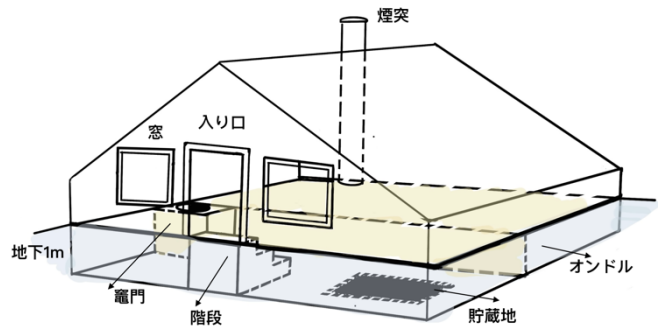


図5-2 「地窖子」の内部の構造のイメージ図

ど)。

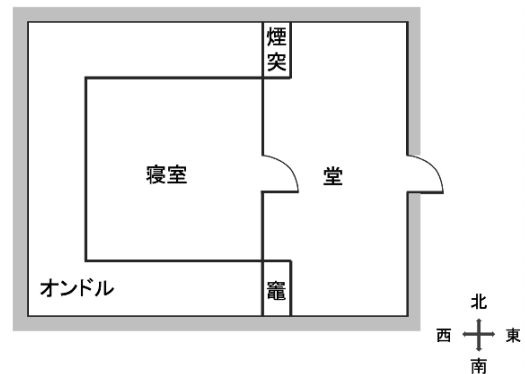


図 5-3 固定の家屋「馬架子」(左)とその内部配置のイメージ図(右)



図 5-4 「魚毛」料理



図 5-5 「殺生魚」料理



図 5-6 木刀

4. 2. 1. 事前の準備作業

秋の白露の頃になると、男性が外で魚を捕り、女性は固定の家屋「馬架子」(図 5-3)の室内外でその皮を加工する。一着の服の素材を加工するには多大な手間がかかるため、どの家庭でも、女性は近隣の親戚同士で互いに自発的に手伝うことが慣いとなっていた[注5]。毎年9月中旬頃は、鮭の旬で、女性が鮭の皮を加工する時期である。魚皮衣として使用する際の柄としてよく、体型が大きい鮭を選び出し、その皮剥ぎ作業を行う。残った肉は、棚で干し、冬の食糧とする。多くの脂肪を含む鮭の肉を炒めて魚毛(図 5-4)という料理にした(尤文鳳氏)。なお、作業初日の昼食時になると、女性は親族へ感謝として、皮を剥いたばかりの新鮮な魚の肉で、「殺生魚」(図 5-5)という料理をつくり、親族をもてなす。忙しくない女性は、2日目も鮭の皮剥ぎなどを手伝いにやって来る。こうして互いに助け合い、魚皮づくりを通して交流し、学び合いながら暮らしてきた[注5]。

4. 2. 2. 魚皮の剥ぎ

かつて、ホジェン族の女性は魚の両面の皮を一気に剥ぐ技術を習得保持していたが、今日では、その技術を有する者はおらず、一面ずつ剥ぐことしかできない。この作業で使用される道具は、かつては狩猟用の刀と白樺の樹幹でつくった木刀であった[注5]。この木刀(長さ21cm×横幅7cm×縦幅2.5cm程度)(図 5-6)とは、硬くて腐蝕しにくい4月に採取される白樺

や槐の樹幹を用いて男性がつくる。使用後は、木刀の表面に魚脂が付着し、防水・防湿の効果が得られ、耐食性に優れるという。また、魚の皮と肉や脂をほぼ完全に分離でき、しかも魚皮を傷つけにくい非常に優れた道具でもある(尤文鳳氏)。図5-6の木刀は尤文鳳氏が10年以上使っているもので、白樺でつくられている。魚皮の剥ぎには、まず狩猟用の刀で腹部から尾部までを切断し、背骨部分の皮と肉をさらに分割するため、背中尾部から頭部まで切る(図5-7) [注5]。次に、皮を破かないよう、専用の木刀で魚皮と魚肉を分ける(尤文鳳氏、孟繁春氏)。

4.2.3. 魚皮の洗浄

刀の峰で皮から残った肉を取り除いた後(図5-8)、うろこを取るために、手で円を描くように皮を洗う(図5-9)。次にその魚皮を、「木灰水」を入れた液の中に侵し、油分等を取り除き、清潔な水で三度洗う。この木灰水とは、アルカリ性の天然洗剤水である。自生する白樺の枝や皮は、四季の調理や冬の暖を取るための薪のみならず、オンドルにも用いられる[注5]。多くの木灰が生成され、女性たちはこれを、水と共に30分ほど加熱し、洗剤水をつくる。この木灰水は、魚皮や食器、髪の毛などを洗う際に広く使われ、とても効果的であったという(尤秀云氏)。また、水で皮を洗う際に、人びとは魚皮の生臭さの程度によって清潔度を判断する。これは十分に洗うことで虫などに食われることを防ぐためである。除去した魚のうろこは、カルシウムが含まれており、家畜の飼料として使用されるという(孟繁春氏)。

4.2.4. 魚皮の乾燥

秋の9月からは、虫が少なくなり、室内の温度も魚皮の陰干しには最適となる。干すために家屋内にある木扉や壁(図5-10)が魚皮干しの道具として利活用された(尤文鳳氏)。魚皮

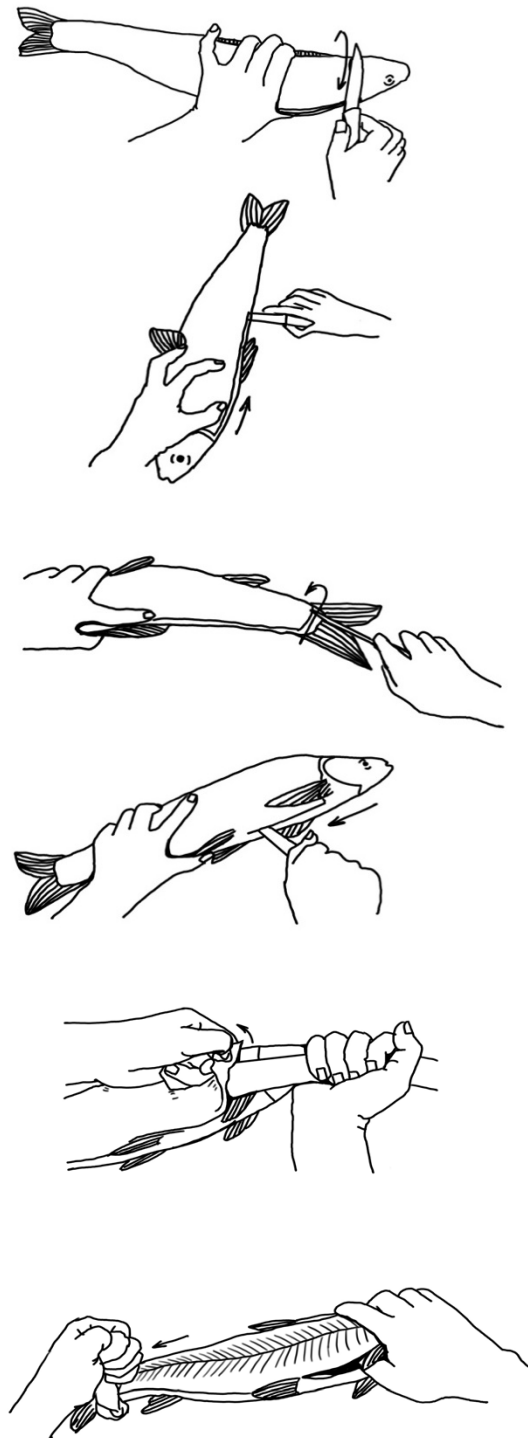


図5-7 魚皮の剥ぎ

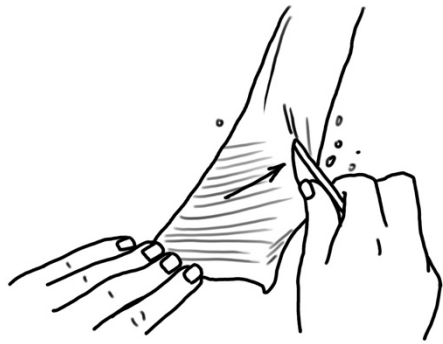


図 5-8 残った肉の取り除き



図 5-9 魚皮の洗浄



図 5-10 木の扉や壁に魚皮を干す様子

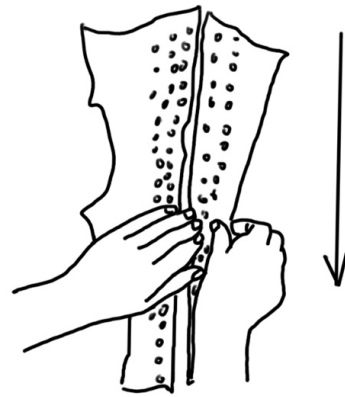


図 5-11 魚皮の乾燥



図 5-12 木槌と槌床



図 5-13 孟繁春氏が使用する「木鋸刀」

の乾燥は屋内の木扉、壁及び木の板に皮を貼り付けることで行う。まず片手に魚皮を一枚取り、エラ部から切り取った皮を上端として木扉や壁面などに平らに固定する。次に、片手で魚皮を下方に向かって少しずつ貼っていき、もう一方は片手で引っ張りながら平らにする。末端に至るまで少しずつ同じことを繰り返す、完全に魚皮を貼り付ける。平らにするのは、魚皮をしっかり形づくるためである(王麗氏)[注5]。剥いだばかりの魚皮は 柔軟性と粘着性がある。最大限的に魚皮を利用することができるように、魚皮を貼る場合は、濃い灰色の

鱗紋のついた背骨部の片側を中心軸とし、片側の魚皮は上から下に向かってできるだけ地面に垂直になるようにする必要がある(図 5-11)。そうすることで、魚皮を裁断する際に、魚皮の切れ端は少なくなる(趙宝芹氏)。約 2 日間乾燥させた魚皮は、紙のように薄く、光が透過するほどになる。秋と冬に屋内で魚皮を乾かす利点は、変色を防ぎ、虫が付かないことである[注 5]。しかし、今日では、若者が魚皮の干し方の要領に対する認識が薄いため、冬に屋外で干すことが少なくなく、その場合、気温が低い状態で急速に乾燥させることとなり、魚皮は屋内に干したものより何倍も鞣しにくいものとなる[注 6]。



図 5-14 トウモロコシ粉

4.2.5. 魚皮の鞣し

およそ 400 年前から、ホジェン族の人びとは木槌(コンク)(幅 16m×長さ 22cm 程度)と槌床(ハリカン)(幅 16m×長さ 50cm 程度)からなる鞣し道具を用いている(図 5-12)。これは 8 月に採取される白樺の樹幹で制作され、一人で一回に一枚の魚皮しか鞣すことができないが、修繕できる利点があるという(楊英琴氏)。なお、「昔、ある男性が漁を終え、家に帰ってきて妻と口論になった。妻は怒って木の棒で何度も男性の背中を叩いたが、その後、男性は木の棒で叩かれた背中部分の魚皮衣が柔らかくなったことを偶然に見つけた。それ以来、女性は、魚皮衣が柔らかくなるように木の棒で魚皮を叩くようになった」という民話がある(尤文鳳氏)。およそ 1950 年以降、魚皮鞣しの作業能率を良くするために、二人用の皮揉し道具「木鋸刀(カチャク)」(図 5-13)が登場した。木鋸刀は男性が採取した 8 月に採取される白樺の樹幹を少なくとも 10 日間干した後に一週間かけてつくったものである。その大きさは、家族それぞれの背丈を考慮して決めたものであり、家族全員で使用し、また、修繕することで 10 年以上は使用できる(趙宝芹氏)。たとえば、図 5-16 の木鋸刀は、1998 年か 2016 年までに、孟繁春氏が魚皮衣の制作の際に使用していたものである。直径 30cm×長さ 100cm 程度の白樺の樹幹でつくられたものであり、これまで湿気のために壊れたこともあったが、精巧に修繕されてきた。近年、使う機会が少なくなり、孟氏がそのまま物置で保管しているが、彼は、子孫たちが魚皮鞣し道具を継承していつてくれることを願っている。なお、かつて、毎年 9 月下旬に、女性は魚皮表面の油を取り除くために、魚皮を鞣す際に漁獲した秋鮭の卵で油を吸い取っていたが、およそ 1950 年以降は、トウモロコシ粉(図 5-14)を使用し始めた。トウモロコシ粉は、魚皮に含まれる油脂を吸着するだけでなく、皮鞣しの作業をも効率化する。また、魚皮衣表面の脂や汚れを除去すること

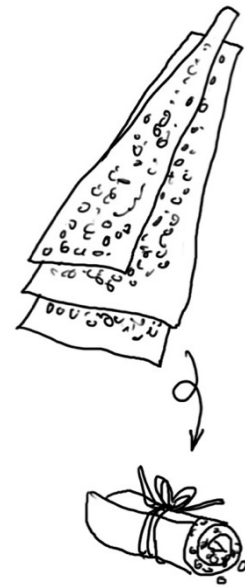


図 5-15 皮を重ね巻きつける作業

ができ、再利用可能である(尤文鳳氏)。

約一月間半を要する鞣しは、家族全員の団結と絶えざる努力が必要であり、重労働ではあるが世代間での伝承の最も重要な過程の一つである。また、各魚の皮は種類によって硬さや脂の程度がすべて異なる。たとえば、チョウザメとコクレンの皮は硬く、鯉の皮は脂が多い。なお、近年では、チョウザメの皮は一般的に鞣さずに、そのまま靴の甲をつくるために使われる[注7]。鞣しの手順は、まず、1枚ごとにトウモロコシ粉をまぶし、数枚(3枚~10枚)の皮を重ね巻きつけた後(図5-15)、ひもで結ぶ。これは、処理過程で数枚の皮がばらばらにならないようにするためである。次に、白樺の樹幹でつくった「木鋸刀」で、2名で協力して皮の繊維を鞣す(図5-16)。オンドルの上に置いた魚皮は、オンドルの温度の影響を受けて、鞣しやすくなる。父もしくは子女が木鋸刀のレバーを上下させる担当になり、母が丸めた魚皮を両手で持ち木鋸刀の鋸状の溝に差し込み、レバーが上下する度に少しずつ回転させ、角度を変えつつ魚皮全体を均等に鞣す。この作業は、一枚の魚皮に対して数十回を行う必要があり、1着の魚皮衣を作成するために長さ60cmの魚皮を少なくとも60枚以上使用するため、鞣す作業だけでも1ヶ月程度を要した[注8]。



図5-16 魚皮の鞣し

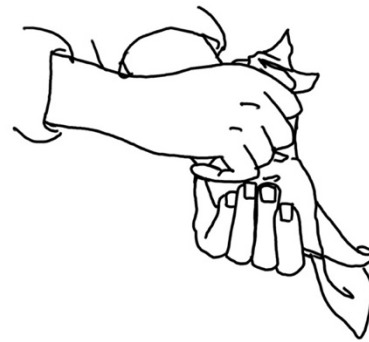


図5-17 魚皮を揉む作業

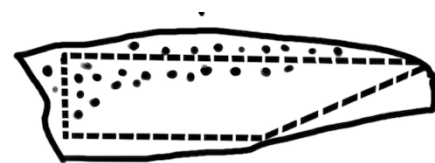


図5-18 魚皮の裁断

最後は、女性たちが、手の暖かさを利用して皮を揉む(図5-17)。魚皮が木綿布のように柔らかくなるまで服を縫うことはできず、要領を得れば、手は痛めることはないという[注8]。そうしなければ、魚皮衣に虫が付いてしまうのだという。魚皮が柔らかくなればなるほど揉む音も小さくなり、また、人びとは鞣している魚皮の表面に手を触れて皮の脂が除去されているかを確認する(楊英琴氏)。

4.2.6. 魚皮の裁断

魚皮の形状は各個体によって異なるため、縫合のために、直線に切る必要がある。苦勞して入手した魚皮を最大限に利用するために、魚皮の周囲の約0.5cm程度の皮を切り落とし、直線状にする(図5-18)。残った魚皮も捨てずに、伝統的な曆(図5-19)[注9]などの生活用品の制作に用いる(王麗氏)。

4.2.7. 魚皮の組合せ・縫合



図 5-19 伝統的な曆

図 5-20 鹿の筋の糸

図 5-21 対称式の縫合

多様な魚皮衣のなかで袖あり上着とズボンは組になっており、少なくとも 60cm という長さの魚皮 60 枚～100 枚ほどが使用される。たとえば、9 歳くらいの子どもが着る袖あり上着とズボンには、最低 60 枚、成人女性が着るものには最低 90 枚、成人男性が着るものには最低 100 枚の魚皮が必要である。かつて、年配の女性は家屋内の南面のオンドルの上で魚皮の縫合作業を行った。作業する前に、女性は事前に成熟した鯰の小骨を磨いて針をつくり、鯰の皮や 8 月に採取された鹿の筋で糸をつくった。長さ 60cm 以上の鯰の皮を細く切り、糸にする。または、捕獲した鹿の筋を採取し、室内で干す。その筋を約 60cm の長さに切る。長さ約 60cm の鹿の筋の糸 200～300 本から、少なくとも 4 着の魚皮衣を縫うことができる。鹿の筋の糸(図 5-20)は、非常に丈夫であり、綿糸の何倍もの強度がある。たとえ魚皮衣が破れたとしても、鹿の筋の糸は切損しにくいという(尤秀云氏、尤文鳳氏)。

また、魚皮の有効な利用をはかり、不規則な形の魚皮でも工夫を加え、およそ 1950 年以降、対称式の縫い方(図 5-21、図 5-22)が考案された。尤文鳳氏の母親(尤翠玉氏)は対称式の縫い方を使う代表的人物の一人である。尤文鳳氏によると、魚皮の縫合工程には、まず、鱗の色や図柄が似ている 2 枚の魚皮を選択する。1 枚の魚皮の背中にある黒い紋様と他の 1 枚の背中にある黒い紋様が平行になるように注意しなければならない。さらに、それらを裏返し、重ねて、縁からおよそ 0.2cm のところで縫合を行う。縫合したところが平らになるように、縫い目の間隔は固定で、同じ長さにする(図 5-23、図 5-24)。縫い上げた魚皮に座りなが

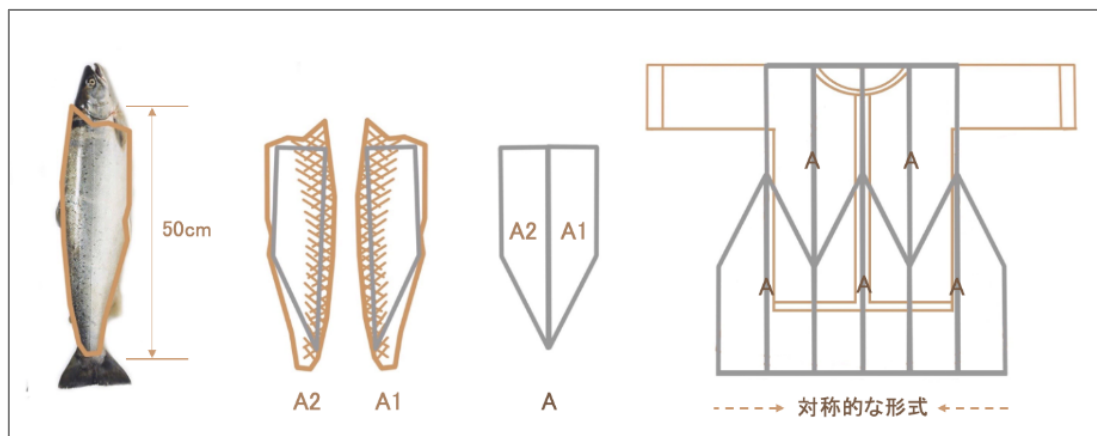


図 5-22 対称式の縫い方



図 5-23 魚皮の縫合



図 5-24 魚皮の組み合わせ

ら作業を進めることは、現代のアイロンがけ作業と似ており、体温、体重及びオンドルの温度を利用して、魚皮を平らにする(尤文鳳氏、楊英琴氏)。

4.2.8. 魚皮の染色

かつて、魚皮衣の紋様の色は、黄、黒、赤、青、紫の5種類があったと推定された。染めの手法には、主に草木染である。用いられる植物は、ホジェン族の女性が、毎年5月から9月にかけて、採取した「クカタ」と称されるキワダ、「ブルトフ」と称されるクヌギ、「ケクイラガニ」と称されるアザレア、「カーキーケ」と称されるブルーベル、「トクフシクト」と称されるセアノサスなどである。そのうち、黄色と黒色の紋様は、それぞれ、主にキワダの皮とクヌギの椎茸を煮出した液に、魚皮を入れて染める。それ以外の赤色、青色、紫色の紋様は、アザレア、ブルーベル、セアノサスで魚皮を直接塗り、染める(図 5-25)。

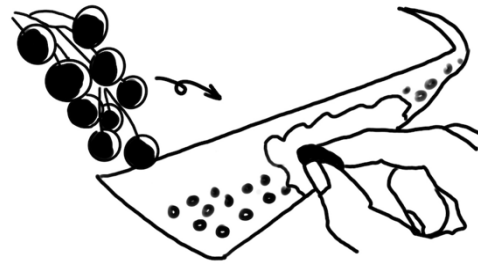


図 5-25 魚皮の染色(セアノサスの果実)

また、それらの色を使用する人びとの年齢層と使用環境を確認することはできなかったが、ホジェン族の信仰や伝説などについての聞き取り調査により、魚皮の5色の由来は解明できた。各色の魚皮は主に魚皮衣の紋様をつくる素材である。表 5-4 で示したように、人びとは身の回りで良く見られる星、水(黒竜江)、太陽、空、紫貂(テン属に属する哺乳類)などの自然現象、自然物の色合いを観察し、5色を抽出した。この5色は、特別な意味が込められている。たとえば、5月頃に採取したキワダの皮で染めた黄色の紋様は、純潔の象徴とされる。

尤文鳳氏、尤秀云氏によると、黄色は自然物である星の色合いだけではなく、天の神の目の色でもあり、神聖な信仰対象「吉星神」の象徴とされる。「吉星神」は、ホジェン語で「オドマファ」と呼ばれ、ホジェン族で最も純潔なものなので、女性や子どもが触ってはいけない。家族のなかで誰かがけがをしたら、吉星神を怒らせるような行為をしたと考えられるため、患者は吉星神への祈り、許しを乞わなければならない。快癒後に、星空に向けて、患者は豚を供物として、吉星神を祭祀する。儀式が終わったら、親戚や近所の人びとに豚肉を振る舞う必

表 5-4 紋様の5色の植物染め・その由来と意味(文献ならびに聞き取り調査による)

採取時期	動植物の名称	色	紋様の色の由来	色の意味付け
5～6月	キワダの皮	黄色	かつて、ホジェン族は黄色が星の色のみならず、天の神の目の色でもあったと考えていた。吉星神を象徴する。	純潔
9月	クヌギの椎茸	黒色	長い間に黒竜江の恩恵からの水は、ホジェン族にとって生命の源であるため、水がなくなったら、人間の精神的世界はその頼りを失うと認識されている。したがって、人びとは黒竜江を敬い、水(川)の神とみなしており、黒色は水(川)の神を象徴する。	勇猛
5～6月	アザレアの花	赤色	太陽(の炎)の色で、火の神を象徴する。	吉祥
7月	ブルーベルの花	青色	空の色で、天の神を象徴する。	吉祥
8～9月	セアノサスの果実	紫色	ホジェン族で最も貴重な紫色のテンの皮毛から抽出する色である。	富貴

要があるが、月経期の女性は参加できない。夜が明けるまでに、全てを食べきれなかったら、女性と子どもが触れないように、土の中に埋めておく。招待者のなかで、主人と親族関係がない人は、家に帰る前に煙荷包、帽子などの持ち物を訪問先に残しておき、翌日に取りに戻ってくる。そうしないと、縁起が悪くなる。

9月頃に採集したクヌギの椎茸で染めた黒色紋様は、「バイリヒ」と称される川(黒竜江)の神の象徴とされ、毎年4月頃に神を祀る。黒い龍と黄色い龍の伝説[注10]によると、黒い龍は勇猛のみならず、黒竜江を司る龍であり、黒竜江は黒色の川と見なされている。人びとは長年黒竜江の恩恵を受けるため、それを生命の源(水)と認識していた。



図 5-26 工業顔料で染色した魚皮

また、人びとは川の神を崇拝しており、毎年4月頃に川の神を祀る。したがって、黒色は、勇猛の象徴とされた(呉彩云氏、尤軍氏)。5月頃に採集したアザレアの花で塗って染めた赤色紋様は、太陽と炎の色で、火の神を象徴する色である。火の神はホジェン語で「フアーリアンママ」と称され、3羽の火の鳥の伝説[注11]によると、太陽は火の神であるため、赤色は、吉祥の色として火の神の象徴とされ、毎年正月1日～5日に、火の神祭りが行われる。7月に採集したブルーベルの花で塗って染めた青色紋様は、空の色で、天の神を象徴する。天の神は、ホジェン語で「エンドリ」と称され、人びとが最も崇拝している神であり、家々にも祀られ、家族の平安を守る神である。したがって、人びとは空の色を吉祥の色として天の神の象徴とした(呉占山氏)。8月頃に採集したセアノサスの果実で塗った紫色紋様は、テンの毛皮の色である。ホジェン族では、毎年旧暦10月から12月までのテンの毛皮の質が最も良く、雪のなかで紫色になっていることから、「紫貂」と呼ばれていた。また、非常に滑らかで、毛

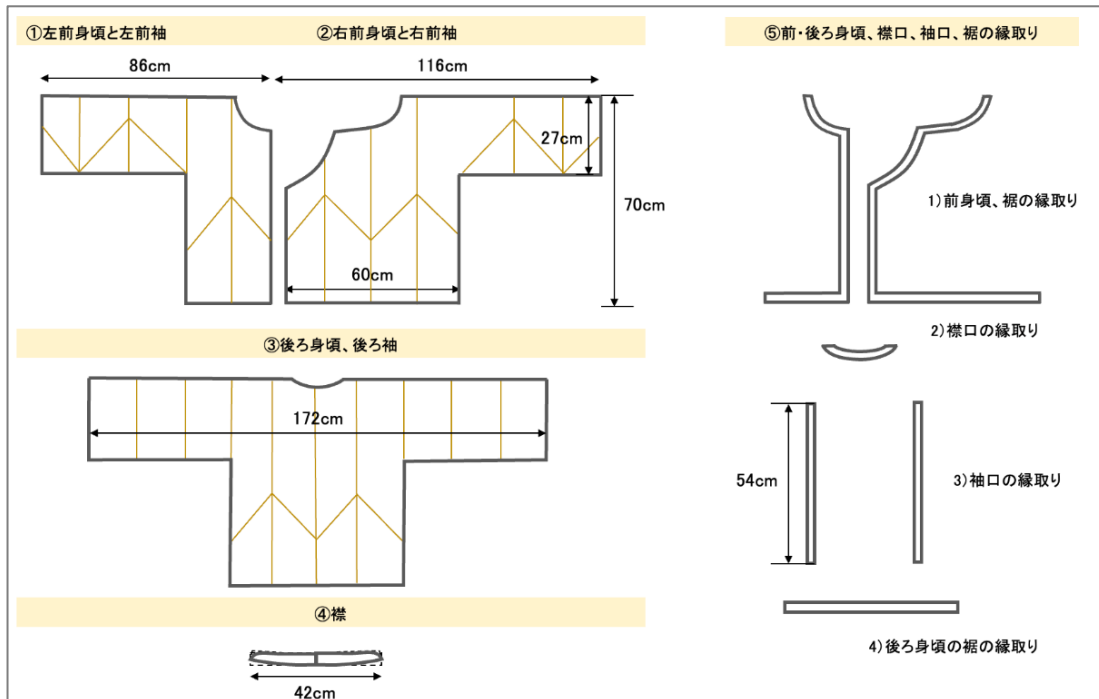


図 5-27 袖あり上着の縫製の流れ図(①~⑤) (尤文鳳氏への聞き取り調査による)

深い紫色の皮毛を持つテンは、手触りが良く上質で、一方、疎らな紫黒色の皮毛を持つテンは評価が低い。上質のテンは、朝廷に献上する貢ぎ物であり、その他のテンは、対外貿易の重要な商品の一つであった(呉彩云氏)。『光緒三姓志』の記載によると、1875年頃貢ぎ物としてのテンの毛皮は2398枚、貿易用は248枚であった[注12]。このように、ホジェン族で紫色は、富貴の象徴とされた[注13]。また、結婚式で黄、黒、赤、青の4色の紋様は婚服に用いられ、新婚夫婦への幸せの願いの象徴とされるが、今日では、代わりに工業染料が使われるようになり(図5-26)、伝統的染色技術は消失しつつある。

4.3. 魚皮衣の縫製(12月~来年2月)

魚皮衣のなかでも、特に代表的な袖あり上着とズボンの縫製方法を取り上げ、説明する。

4.3.1. 魚皮衣の縫合

女性はまず、鹿の筋や魚皮などでつくった糸を用いて家族一人一人の服のサイズを測る。魚皮は弾力性が少ないため、男性が漁の際に着用・動きやすいように、緩やかな直筒型の魚皮衣とする必要がある。袖あり上着を縫合するときは、図5-27で示したように、まず縫い合わせた魚皮を①左前身頃と左前袖、②右前身頃と右前袖、③後ろ身頃と後ろ袖、④襟、⑤前・後ろ身頃、襟口、袖口、裾の縁取りの形に切り出し、それぞれを縫合する。ズボンの縫製は、図5-28で示したように、まず縫い合わせた魚皮を①腰帯の縁取り、②左ズボン、③右ズボン、④左裾口の縁取り、⑤右裾口の縁取りの形に切り出し、それぞれ縫い合わせる。尤文鳳氏によると、魚皮は厚いため、縫製技術が未熟な人には難しく、平らにならないという。尤文鳳氏は13歳の時に、オンドルで母の口伝と共に魚皮衣の縫い方を学習した。初めて縫製した服は縫い目の間隔も、幅も不揃いだったため縫い直すこととなった。縫い目が悪いと、昼は糸

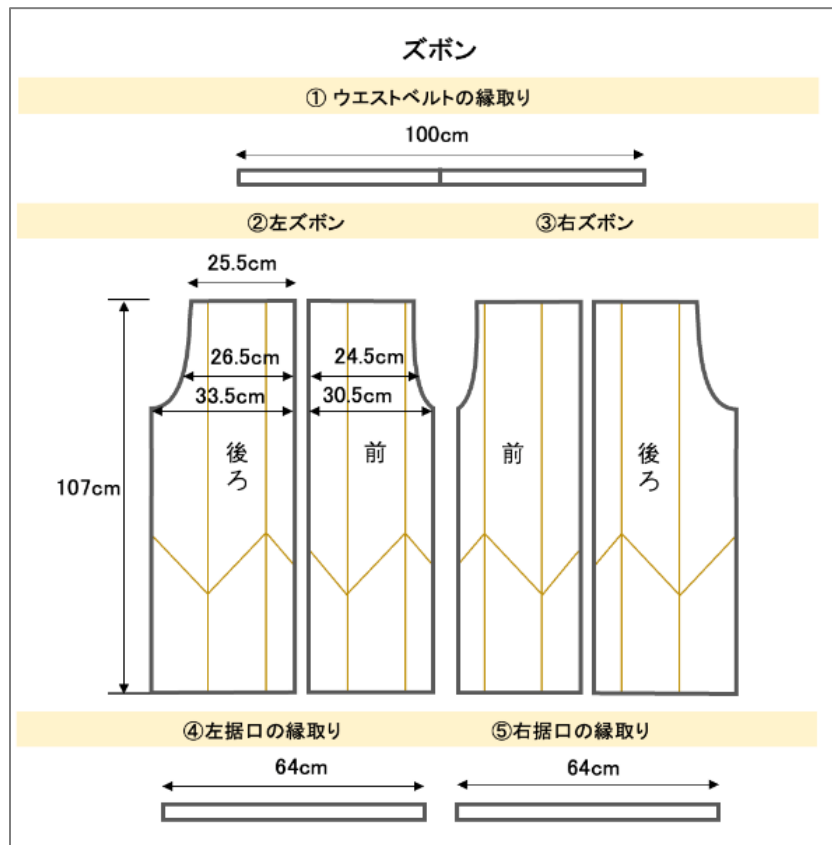


図 5-28 ズボンの縫製の流れ図(①~⑤)



図 5-29 魚皮の背中中の黒い部分でつくった紋様

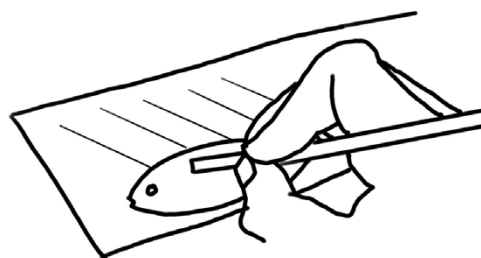


図 5-30 魚皮の裏面に紋様を描く作業

をはずし、夜には再び縫い、何度もやり直した。このような一心不乱な仕事ぶりは、子が魚皮衣の制作技術をうまく習得し、受け継いでほしい尤文鳳氏の母親の願いであった。また、手づくりの時代において、これは生活者の匠人精神といえる。

4.3.2. 紋様の制作・裁断・貼り

紋様の制作・裁断・貼りの工程では、魚皮衣の黒の紋様を貼る場合、まず鞣した魚の腹の部分にある白い魚皮を選ぶ必要がある。逆に白い紋様を貼る場合、脊柱の黒い部分を選ぶ必要がある(図 5-29)。炭で魚皮の裏面に紋様(図 5-30)を描き、紋様に沿って裁断する。最後、紋様を貼る工程には、前述したチョウザメ糊を口に入れ、少し溶かしてから、紋様を貼り付

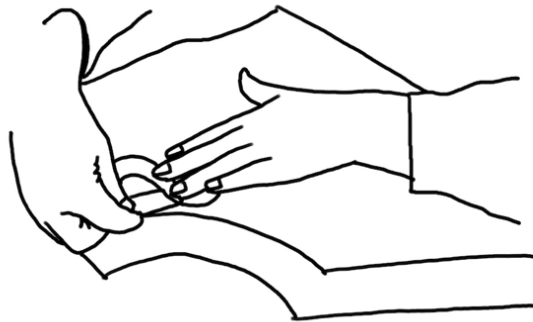


図 5-31 紋様を貼る作業



図 5-32 チョウザメ糊



図 5-33 魚皮衣の修繕



図 5-34 樺皮箱



図 5-35 神像

ける(図 5-31)(楊英琴氏)。チョウザメ糊(横幅 2cm×縦幅 1cm×長さ 16cm 程度)(図 5-32)とは、ホジェン族の男性が採取した 8 月のチョウザメの浮き袋を長時間煮込んだものであり、魚皮衣に紋様を貼る際に欠かせない材料である。その制作は、まずチョウザメの浮き袋を鉄の皿に乗せ、焚き火の上で液状になるまで加熱後、放置する。ある程度、糊が冷え固まった後に横幅 2cm×縦幅 1cm×長さ 15cm のほどの棒状に切る。切った柔らかい糊を、形を崩さないように板に固定し、完全な固体になるまで乾かす(尤文鳳氏)。この糊は接着力が優れ、また、腐食しにくいために、樺皮船をつくるのに適している。しかし、今日、この糊の制作方法を知っている人が極めて少ない(孫鳳華氏)。

4. 4. 魚皮衣の修繕・保存(通年)

漁撈の際に、魚皮衣が破損したら、破れた部分の魚皮を取り外し、新しい魚皮と交換して縫い合わせる。服が短くなったら、新しい魚皮を縫い足して着用する。また、綿が少ない時には綿服が短くなったら、女性が魚皮で袖をつぎ足して着用していた。男性が銛で魚を刺す際に魚皮に小さな穴ができたなら、女性はその穴を縫い合わせた(図 5-33)。また、大人が着なくなった魚皮衣は、子どもが継続して着用した(尤秀云氏)。子どもの魚皮衣も同様に、弟、妹が継続し着用した。加えて飢饉の際には、魚皮衣は食料として命を救うことがあった(尤文鳳氏)。

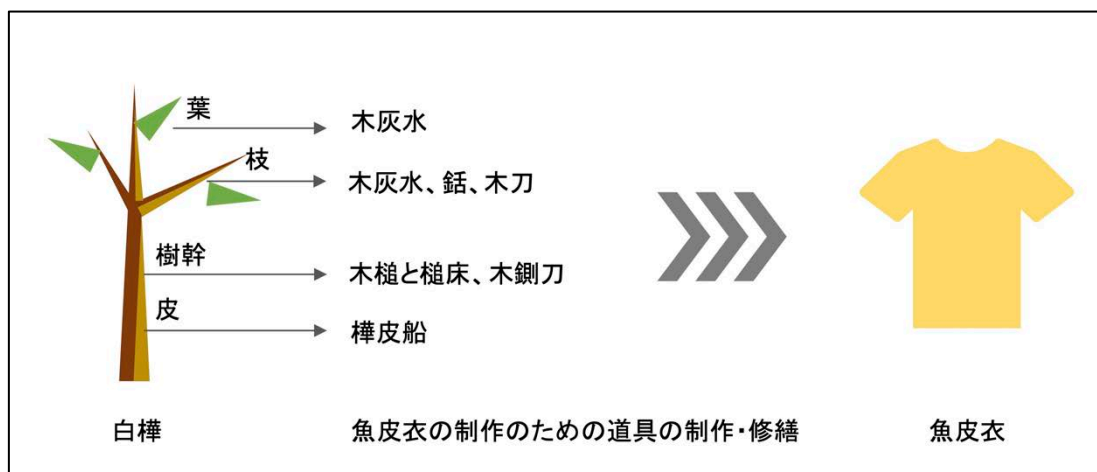


図 5-36 魚皮衣の制作にみる白樺の一物全体活用の知恵

なお、魚皮衣は、通常、西面のオンドルの近くにある虫除けの効果がある樺の皮でつくられた箱(図 5-34)に収納された。箱の中には白樺の樹幹でつくられた約 48 種類の神像も収納されている。四季を通して、昼には神像(図 5-35)を奉納し、夜には箱に入れて保存する。ホジェン族にとって、魚皮衣は、神像と同様に神聖で最も貴重なものであった(孫鳳華氏、呉福勝氏)。

5. 魚皮衣の制作の特質に関する考察

素材(魚皮)の入手・加工、魚皮衣の縫製、魚皮衣の修繕・保存までの一連の工程から、ホジェン族の魚皮衣の制作技術を述べてきた。本章では、その工程に基づき、「事前の魚の入手貯蔵、魚皮衣の縫製・修繕・保存」「素材魚皮の加工」「魚皮衣の制作の全工程」の 3つの面における魚皮衣の制作の特質を概観したい。

5.1. 魚皮衣の制作・修繕・保存にみる魚皮衣づくりの特質

5.1.1. 「ブリコラージュ」に基づく生活の知恵

ホジェン族の人びとは一年間を通し魚皮衣づくりの生活において、身近に得られる魚を利活用するのみならず、それぞれの季節で白樺、イスノキ、槐などの木、トウモロコシ粉、鮭の卵、鯰の骨、鹿の筋、チョウザメの浮き袋などの動植物を採取し、特徴を活かし、漁具や、臨時の家屋、道具などの生活用品をつくった。居住地域による多種多様な資源は、ホジェン族の魚皮衣づくりの活動に多様な機能を提供していることがわかる。たとえば、白樺の樹幹・皮・枝・葉で「銚」や「樺皮船」「地窩子」「木刀」「木灰水」「木槌」と「槌床」「木鋸刀」などをつくり(図 5-36)、また鮭の卵とトウモロコシ粉を皮鞣し道具として使い、チョウザメの浮き袋からチョウザメ糊をつくり、道具は壊れても、修繕し繰り返し使用していた。魚皮衣も同様である。採取した魚皮を寄せ集め、加工して、着用できる柔らかい魚皮衣を縫製する。魚皮衣を修繕し、着られなくなると、子ども用とする。魚皮衣は飢饉の年に命を救うことができるのみならず、普段は、神聖なものとして神像と一緒に家屋内の樺皮箱に保管された。

ホジェン族の人びとは身近なあらゆる動植物に関心を持ち、深く理解するとともに、それ

らとその各部位の特性を最大限に生かし、魚皮衣や多種多様な道具をつくり、使い尽くすまで修繕を繰り返した。これらの事例を通し、人びとが魚皮衣づくりの過程で、「ブリコラージュ」(器用仕事)[注 14]に基づく生活内の知恵を形成してきたことがわかる。

5.2. 魚皮の加工にみる魚皮衣づくりの特質

5.2.1. 人びとの「五感」の使用、「体温」と「環境温度」の利活用の知恵

素材(魚皮)の加工は、人びとが自身の五感を駆使する。たとえば、魚皮洗浄の工程では、皮の脂を取る必要があり、魚皮の生臭さの程度によって清浄度を判断する。木鋸刀で魚皮を鞣す工程では、干した魚皮の表面に手を触れることで、皮の脂があるかどうかを確認することができる。そして、鞣している魚皮から生じる音が徐々に小さくなることで、聴覚で魚皮の柔軟度を判断する。魚皮縫いの工程では、縫い目の間隔を揃えるために、常に目で確認する。魚皮の紋様を貼る工程では、口中の温度と湿度で少しずつチョウザメ糊を溶かした後に、使用する。なお、魚皮の加工の工程では、気温のみならず、室内温度(皮干しの場合)、手の温度(皮鞣しの場合)、臀部の温度と重さ(皮縫いの場合)、オンドルの温度(皮鞣しと皮縫いの場合)も影響する。すなわち、魚皮の加工工程は、作業者の五感に加え、生活空間の温度などが出来上がりを大きく左右する。

5.2.2. 自然崇拜、自然との一体感

ホジェン族の人びとは身の回りにみられる星、水(黒竜江)、太陽、空、テンなどの自然現象や動物を崇拜の対象とし、それらの色合いから黄色、黒色、赤色、青色、紫色の5色を引き出した。また、季節ごとに採集したアザレア、ブルーベル、セアノサス、クヌギの椎茸などの植物を利用し、魚皮を5色に染め、その5色を神聖な対象である吉星神、川の神、火の神、天の神の色と、貴重なテンの皮毛の色として信仰した。そして、その5色に純潔、勇猛、吉祥、富貴などの象徴的意味を与え、それらを象徴する5色の紋様を付ける魚皮衣を着用していた。つまり、人びとが魚皮の染色工程から、人と自然との共存の一体感を創出していた。

5.3. 魚皮衣の制作の全工程にみる魚皮衣づくりの特質

5.3.1. 人間関係づくり、コミュニケーション機会の創出

魚皮衣の制作技術は、口伝と追体験で継承していくものである。春の4月から、男性らは祭りに参加し、道具の制作方法や漁法を学び合っていた。山で白樺の木などを魚皮衣づくりの道具の素材として採取し、9月白露以後、秋鮭の漁を行い、鮭を運搬・貯蔵し、家族全員で鮭などの魚の皮の加工を行った。魚皮を剥ぐことは、女性の重労働の一つであるが、親戚の女性たちは自発的に手伝い、交流を通して、魚皮づくりの技術を学び合った。冬の12月になると、魚皮衣を縫製し、母は娘に縫製技術を指導し、教育した。娘は努力を重ね縫製作業の完成に励み、新年になると、家族の新しいメンバーが新しい魚皮衣を着用した。このような年間を通した魚皮衣の制作では、「男性は外で漁をし、女性は内で魚皮衣づくり」という社会的労働分業と「相扶共済」という人間関係を構築した。また、良好な人間関係を通して、人と人との緊密なコミュニケーションの機会を創出した。

5.3.2. 「自然」「人」「神」「住宅」が一体化した生活空間との強い結びつき

図 5-37-(1) で示したように、ホジェン族の人びとは、魚皮衣づくりを、臨時の生活空間と

固定の2つの生活空間で行った。たとえば、魚皮衣素材の入手のため、①山の神祭りから、②木材の採取、③木材の運搬、④道具や臨時の家屋「地窩子」などの制作、⑤川や鮭の神祭り、⑥魚の捕獲、⑦魚の運搬、⑧臨時の家屋での魚の貯蔵までの一連の作業を行い、それらの過程では、この臨時の生活空間が重要な作業場であった。それらはまた「人」「自然」「神」「住居」が一体化した臨時の生活空間を構築した。魚皮の加工から魚皮衣の縫製までの一連の工程は、固定の生活空間である家屋の内外において、図 5-37-(2)で示したように、①魚皮剥ぎの場、②竈の隣の魚皮洗浄の場、③家屋内の扉は、魚皮干しの場として利用された。④魚皮鞣しの場、⑤魚皮衣縫製の場、⑥魚皮衣を保管する場、が行われた。なお、④～⑥はオンドルの三つの面で行われた。オンドルは上から見ると“凹型”をしており、各場所でそれぞれ異なる儀礼が行われた。冬、北面のオンドルは④魚皮鞣しの場として、また青壮年の座席や寝転ぶ所であり、若者が魚皮衣の縫製方法を学ぶ場でもある。⑤南面のオンドルは上位の高齢者の寝る場であり、高齢者の魚皮衣縫製の場でもある[注 15]。西面のオンドル⑥は、客の接待、祖先や諸神を祈る場であり、魚皮衣を神聖なものとして保管する場所でもある。すなわち、固定の家屋「馬架子」は、「人」「自然」「神」「住居」が融合した居住空間ということができ(図 5-37)、そこで行う魚皮衣の制作工程は、生活空間と強い結びつき有し、自然と共生するとともに、身近な自然資源の全てを活用する「ものづくり」を実践してきたものといえよう。

6. おわりに

本章は、ホジェン族の伝統的な魚皮衣の制作技術を研究対象として、その特質を明確化したものである。調査・考察から、次の知見を得た。

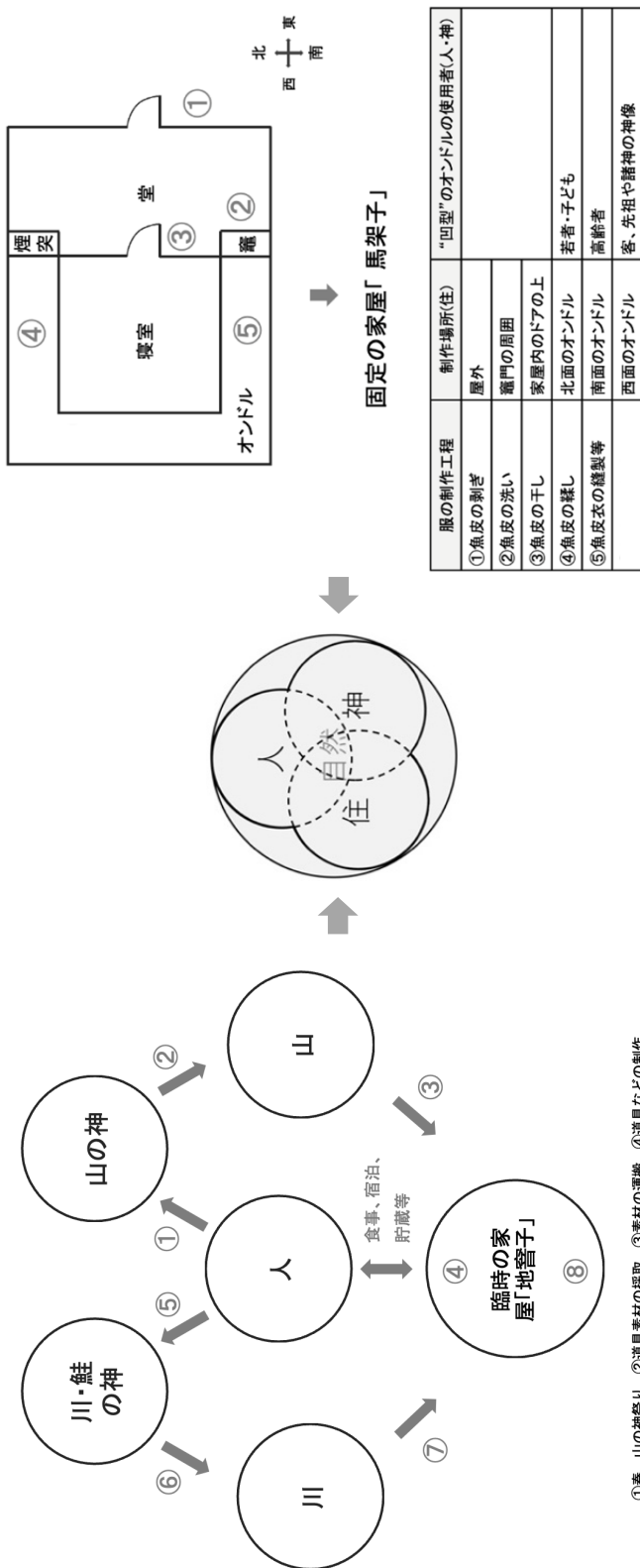
(1)魚皮衣の制作技術は、鮭、鯰、チョウザメ、鹿、テン、白樺、イスノキ、槐、トウモロコシ、クヌギ、アザレア、ブルーベル、セアノサスなどの動植物の各部位、星、川(水)、太陽(火)、空などの自然現象の色、時間、空間、環境温度、人の体温や五感の感知などの人を取り巻くさまざまな「もの」・「こと」を利活用する生活によって育かれた貴重な知恵であったといえよう。

(2)魚皮衣の制作は、ホジェン族自身の民族性を表す記号とした家族間の緊密な人間関係づくり、人と人とのコミュニケーション、自然への崇拝、人と自然と一体感、ブリコラージュに基づく暮らし方などの情報を伝達しうるものでもある。すなわち、魚皮衣の制作はホジェン族の社会集団の発展の重要な役割を担っていた。

(3)魚皮衣の制作過程においては、ホジェン族の「自然」「人」「神」「住宅」が一体化した臨時ならびに固定の生活空間が構築されてきた。

(4)(1)～(3)のようなホジェン族の社会秩序は、家族全員の参画に基づき形成されたものであり、人びとのコミュニティへの帰属感をより強固なものとした。

ホジェン族にとって、魚皮衣は神像と同様に神聖なものとして存在しているものである。その制作技術は、自然との共生に基づき、一年の間に家族全員の協働で形成されてきたものであり、世代間で多様な知恵を交流・伝承する媒体としての重要な役割を果たしてきた。



(1) 服の制作素材の入手流れにみる(臨時)住・人・神・自然との関係図 (2) 服の制作工程にみる自然・人・神・(固定)住との関係図・表

図5-37 「人」「自然」「神」「住居」が融合した居住空間の関係図

注および参考文献

- 1) 大和総研、中国経済を見る戦略キーワード(7)、都市化、
https://www.dir.co.jp/report/asia/asian_insight/20131004_007757.html、(最終閲覧日：2023年6月28日)
- 2) 凌純聲：松花江下游的赫哲族、上海文芸出版社、72、1934
- 3) 張敏杰、王益章：漁家絶技・赫哲族魚皮制作技芸、黒竜江人民出版社、23、2008
- 4) 馬曉華：赫哲族魚皮服飾及制作工藝的傳承發展、中央民族大学、黒竜江民族叢刊、2009
- 5) 孔春、植田憲：中国の少数民族ホジェン族にみられる「魚皮」の加工技術：黒竜江省同江市街津口村における魚資源活用に基づく生活文化(2)、第68日本デザイン学会研究発表大会概要集、146-147、2021
- 6) 前掲、5)
- 7) 前掲、5)
- 8) 前掲、5)
- 9) 曆とは、ホジェン族が月の満ち欠けによって年月を計算し創出したものである。ホジェン族にとって一年は12ヶ月あり、一カ月は30日である。カレンダーは上と下の2つの部分から構成され、さらに、それぞれが上下二つに分かれている。上部には月を表すために12枚の長方形の魚皮が配置してあり、下部には日を表すために30枚の魚皮が配置してある。使い方には、一日を過ぎたら、日付を表す部分の魚皮1枚を下に移動する(呉福勝氏)。
- 10) 黒い龍と黄色の龍はそれぞれ自分が全ての川を支配すると言っていた。ある日、両者は争った。そこへ、東海の龍王が調停に入り、黒色の川という黒竜江と、黄色の川という松花江を黒い龍と黄色の龍がそれぞれ管理することに決めた。
- 11) 3羽の火ノ鳥が、ホジェン族の地域に飛来したら、火事になることを恐れ、部族のなかの名手(モリゲン)は、2羽の火ノ鳥を射落とし、最後に残った1羽の火ノ鳥は太陽となった。
- 12) 郝慶雲、紀悦生：赫哲族社会文化変遷研究、学習出版社、95、2016
- 13) 閃爍：赫哲族伝統魚皮服飾特色与创新設計研究、沈阳航空航天大学、33、2015
- 14) クロード・レヴィ=ストロース(著)、大橋保夫(訳)：野生の思考、みすず書房、1976
- 15) 前掲、2)、78

終章

1. 伝統的服飾「魚皮衣」の文化的特質の考察

第2章から第5章では、伝統的魚皮衣とその神服、素材の入手方法、その制作技術を考察し、それぞれの特質を明確にした。本章では、以上の各章での検討から導出した魚皮衣の制作と使用の2つの側面の知見に基づいて、ホジェン族の伝統的服飾魚皮衣の文化的特質を考察したい。

1.1. 伝統的魚皮衣の制作の特質

第2章から第5章では、伝統的な魚皮衣の素材とその入手方法、魚皮衣の制作技術を分析することにより、それぞれの特質を概観した。まずは、以上の知見に基づいて、伝統的魚皮衣の制作の文化的特質を考察したい。

1.1.1. 男女共同参画社会の構築媒体

収集した48点の伝統的な魚皮衣と15点の神服の素材には、伝統的な魚皮衣の素材が合計で14種類あり、その中には鮭やチョウザメなどの11種類の漁業資源と鹿やノロなどの3種類の動物資源が含まれていることがうかがった。素材の類型の特徴から見ると、素材の取得がホジェン族の漁猟と狩猟の生活に関連していたことがわかった。男性は、素材である魚や鹿などのさまざまな動物の生息を一年中観察し、その形や大きさ、表皮の模様、泳ぐ速度などを月ごとに調査していた。これにより、それらの動物に対する理解が深まり、ホジェン語で名称を付けた。また、現地の自然環境に合う服の素材を選択して、人間の体を守る機能がある服を作られた。それらの素材のうち、鮭をはじめとした代表的な素材は、重要な生活資源だけではなく、生活を安定させるための信仰の対象の一つである。男性たちはそれらの動物が生息している場所で漁猟・狩猟生活を送りながら、山や川から得られる自然の恵みを受け取って生活していた。さらに、魚や鹿、白樺、柞などといった動植物の一年間の成長記録に基づいて、漁猟・狩猟の活動計画を作成していた。厳密な天文学に基づいた暦は存在しなかったものの、漁猟・狩猟生活を通じて観察した月の形の変化をもとに、一年を12ヶ月、一ヶ月を30日と定義していた。そして、魚皮の端材や柳の枝を使用した独自のカレンダーを作成し、月日を記録していた。毎月に行った漁撈活動が24節気の歌の表現形式で細かく記録され、これらの情報が宗族内で共有され、伝承されていった。

また、収集した48点の伝統的な魚皮衣と15点の神服におけるそれぞれの素材の使用回数を考察すると、鮭の皮は服の素材として広く使用されたことがうかがえる。すなわち、素材としての鮭を捕獲する作業は、男性の一年間で重要な漁猟活動の一つである。一方で宗族の女性たちは共同で鮭皮素材の制作などを行う。このように、ホジェン族における魚皮衣の制作は、男女の役割分担が明確になっており、「男は外での漁猟活動を主とし、女性は内での家事や服づくりを主とする」という「男は外、女は内」という社会構造が共同で編成されていることが示されている。すなわち、魚皮衣の素材の入手と制作過程は、男性と女性の協力関係の構築を通じて、ホジェン族の男女共同参画社会が構築されていた。

1.1.2. 宗族男性が主体となる人・自然・神・住宅が一体化した臨時的な生活空間の構築媒体

素材を入手することは、男性の一年を通じた漁猟生活に重要な作業の一つである。素材を入手するために、一年にわたってさまざまな活動が行われた。これらの活動には、山で山の

神に祈ること、適した木材を伐採し、運搬すること、銚や船、臨時の家屋の制作、漁場で川や鮭の神に祈ること、祈りの歌を歌うこと、漁具の修繕などが含まれていた。当時は、長期にわたって安定した漁猟生活を送るには、持続的な漁業活動を維持する知識や経験がなによりも重要であった。自らの手を使ってものづくりをしていた時代なので、生活を支えている自然資源が大切なものと認識されていた。たとえば、秋の白露の頃には鮭が海から遡上してきて街津口村の松花江流域を産卵場とするという特性を把握していたので、産卵期の成熟した鮭は捕りすぎない程度に捕獲し、孵化した稚魚や発育段階の小魚の捕獲は禁止していた。また、狩猟中に木の根を見かけたら、それは山の神の座る場所であると考えられていたので、その場に座ることは禁じられていた。さらに、木の根は山の神のような神聖な存在として、高い尊敬の念を表すために頭を地面につけて祈りを捧げた。これは、木の根が破壊されないかぎり、木々が自然に成長し続けるということを認識していたからであると考えられる。自然を利用しつつ尊重し、愛護して保全するという考え方を大切にして、人と自然が共生する社会を構築していたことがうかがえる。

漁の経験が豊富な年配の男性は、集団漁の指導者として宗族の男性に対して、彼らの健康状況や漁の経験などに応じて、以上の諸活動を適切に分担させた。漁に出る前に、男性は共同で漁具を制作し、そのつくり方を経験者から学んだ。また、山や川などの神に祈りを捧げ、祭祀を執り行い、「イマカン」という祈りの歌を歌って豊漁を祈願した。大魚を捕獲する際には、男性が共同で作業した。捕獲物は年配の経験者の指導のもとで均等に分配された。そして、未亡人や労働能力のない人がいる家族にも、捕獲された魚が平等に分配された。また、漁具などの制作に始まり、漁の前に歌うイマカン、大型魚の捕獲に至る一連の過程では、漁具の制作技術の熟練者と非熟練者、イマカン歌唱の熟練者と非熟練者、漁の熟練者と非熟練者、人と神といった交流関係が形成された。さらに魚の配分では、年長かつ漁の経験者と経験不足の若者や障害者といった、人と人の「互敬互愛」「互勉互助」の関係が構築されてきた。

漁場は川の神や魚の神などが存在している神聖な場所として認識された。それゆえ、川の神や魚の神などに敬意を払うために、祭祀を執り行う以外にも、個人の健康や漁の経験などの状況に応じた禁忌が生まれた。これらの禁忌を通じて、漁の経験が豊富な者、未経験者、経験の浅い男性、家族で亡くなった人がいる男性、妊娠中の女性、子どもなど、異なる状況にある人びとの間で交流することが促進された。また、これらの禁忌は、漁場で男性に関連するホジェン族全員の行為規範を互いに制約した。なお、男子が7歳になると、父から練習用の連柄の銚や船を使った漁の技術を学び始める。その学習過程で、「銚で漁をする技術が上手になる」という英雄モルガンの物語を聞く。子どもは15歳になるまでに、銚で漁をする技術を習得し、完全に身につけた後、男性と共に川の神に祈りを捧げることができるようになり、漁場で漁することが許された。このように、ホジェン族の男性は身の回りにある自然の恵みを利用し、漁場で独自の銚や船、臨時の家屋などをつくりながら、山や川から授かるものに心から感謝し、漁場でこれらを神聖化し、尊敬の念を示すためにさまざまな約束事や禁忌を共通の認識として構築し守っていた。さらに、宗族の男性は、神聖な漁場で「全員協業」「互敬互愛」「互勉互助・相互約束」という緊密な人間関係を築くことで、集団漁の秩序を維持

していた。つまり、魚皮衣の素材の入手の生活空間においては、以上のような共通認識を通して、宗族の男性が主体となった人・自然・神・住宅が一体化した臨時的生活空間が構築されていた。

1.1.3. 宗族女性と家族全員が主体となり、人・自然・神・住宅が一体化した固定の生活空間の構築媒体

一年のなかで、秋は男性が鮭を捕る季節であり、宗族の女性が共同で魚皮をつくり、家族全員が魚皮衣を制作する時期でもあった。魚皮衣の制作には少なくとも9つの工程が含まれており、各工程は人びとの分業と協力なしには成り立たなかった。魚皮制作の過程では、一部の女性が魚皮を剥ぎ、洗い、乾燥させる作業を担当し、他の女性は鮭の肉を処理し、乾燥させるか炒めることで冬季に食べられる保存食をつくった。また、女性たちは鮭の鱗を洗って炒め、子どものカルシウム補給用の食材をつくり、魚卵は塩漬けにして壺に保存し、子どもの栄養補給として利用した。つまり、自然資源である鮭を無駄なく活用するように工夫し、特有の「衣食住」の文化を形成するとともに、鮭の一物全体活用の知恵を見出してきた。

魚皮衣の制作全体には少なくとも半年の時間がかかり、各工程には手間がかかる。特に皮を鞣す工程は重労働であり、女性たちは通常、禁漁期の11月以降、男性の協力を得て家で作業を行った。子どもたちも手伝いながらこれらの工程を学んでいた。各工程において、女性は相互交流を通じて共通認識を形成していた。たとえば、素材選びでは脂肪の少ない魚が最適とされていた。皮を剥ぐ前に、魚の神への祈祷の儀式を行う。各工程では、手づくりの工具を準備することもあれば、身の回りの用具をそのまま再使用することもあった。魚皮を剥ぐには白樺の木でつくった木刀を、魚皮を洗うには木灰で煮た木灰水を、魚皮を乾燥させるには家の壁や木の扉を使用した。魚皮の鞣しには白樺の木でつくった木鋸刀とトウモロコシ粉を用い、屋内でオンドルの温もりを利用して作業した。魚皮衣を縫う時には魚の骨針と魚皮糸または鹿筋糸を使用し、紋様を貼る時にはチョウザメ糊を用いた。キワダの皮、クヌギの椎茸などの植物で、星、水(黒竜江)、太陽、空、紫貂を連想させる5色の染料をつくり、魚皮衣の紋様の色付けに用いた。魚皮を剥ぐ工程以外は全て屋内で行われるが、屋内の西側のオンドルには天の神などが奉られているため、神を怒らせないように慎重に作業した。残りの木材は火を焚くためや料理、炕を暖めるために使用され、木灰を再利用し木灰水をつくった。残った魚鱗や使用済みのトウモロコシ粉も家禽の飼料として利用された。人びとは自然資源を全く無駄なく活用して生活用品をつくっていた。さらに、魚皮衣の素材はその繊維の長短、厚さ、構造などの特性に応じて、異なる部位や種類に応用され、余った素材はカレンダーなどの生活用品に再利用された。魚皮以外の各部位も日常と非日常生活で無駄なく利用されていた。たとえば、衣食住に生活必需品、子ども用具、家禽飼料、神霊への供え物や皇帝への献上品などであった。また、さまざまな魚の部位には多様な薬用的効能もあり、これらの素材の存在は人びとの安定した生活を確保するために欠かせないものであると言える。このような魚皮衣制作の生活空間において、ホジェン族の宗族女性と家族全員が互いに協力し合い、交流を通じて、魚や白樺などの自然資源に対する畏敬と感謝の念を抱きながら、適度な捕獲や採取、そして資源の全般的かつ無駄ない活用を通じて共通認識を形成していた。

これによって、宗族女性と家族全員が主体となり、人・自然・神・住居が一体化した固定的な生活空間が築かれていた。

1.1.4. コミュニケーションが活性化し、社会全体の一体感が醸成された生活空間の構築媒体

以上で述べた内容から、魚皮衣の制作は、ホジェン族の宗族の男女が主体となった共同作業であることがうかがえる。また、この制作過程で、鮭、鯰、チョウザメなどの11種類の魚や鹿、樺、柞、柳、キワダの皮、クヌギの椎茸、アザレア、ブルーベル、セアノサスなどの自然資源の成長の法則、星、水(黒竜江)、太陽、空、紫貂などの外観や色彩といった特性に対する深い理解が求められた。また、自然から授かったものが魚皮衣の制作道具などの素材として無駄なく活用された。これらの素材は、単なるものづくりの素材に留まらず、地域の人びとが協力して行う1年間のさまざまなものづくりの活動において、社会関係を構築する重要な要素となっている。魚皮衣の制作に関連する道具や漁具以外にも、魚食、住居、神像、英雄神話、祭り、信仰、禁忌・約束事などの形成やそれに関する交流活動も行われていた。このように、人びとは互いに交流し、支え合うことを通じてさまざまな共通認識を構築した。また、人びとはそれらの共通認識や共同作業を通じて心の絆を深めることができ、地域内でコミュニケーションが活性化し、社会全体の一体感が醸成された生活空間を構築した。

1.2. 伝統的魚皮衣の使用の特質

第2章と第3章では、魚皮衣とその神服の類型、素材、紋様、使用方法を分析することにより、それぞれの特性を明確にした。そこで得られた知見に基づいて、伝統的魚皮衣の使用の文化的特質を考察したい。

1.2.1. 地域のアイデンティティを構築する媒体

収集した48点の伝統的魚皮衣と15点の神服の類型を考察すると、日常生活において使用される伝統的魚皮衣は、袖あり上着や袖なし上着、長袍、ズボン、靴などの9つの類型に分類されることがわかった。そのなかには、手袋や烟荷包、火鎌袋の3種類の小物類も含まれる。また、非日常生活において使用される神服は、神帽や神衣、神裙、神腰帯、神靴、神手袋の6つの類型に分類される。その他にも、伝統的な狩猟用の礼服と婚服(死装束)の実物や写真資料をそれぞれ1点ずつ収集した。このようにさまざまな類型に分類できることから、伝統的な魚皮衣には多様な種類が存在する。素材の観点からは、伝統的な魚皮衣と神服では、鮭の皮の使用回数が最も多いことがわかった。また、日常生活で使用される伝統的な魚皮衣では、袖あり上着とズボンに用いられる素材の種類が最も多い。素材はそれぞれの特性により、魚皮衣の異なる部位に使用される。非日常生活で使用される伝統的な神服は主に鮭の皮でつくられている。紋様を分析すると、日常生活で使用される伝統的な魚皮衣には、雲、波、胡蝶などの7種類の紋様があり、非日常生活の神服には、太陽、波、雲などの15種類の紋様がある。日常でよく使われる5種類の紋様は、神服にも使用されている。つまり、合計で17種類ある魚皮衣の紋様は、自然現象や動植物、想像上のものといった種類に分類される。現地の伝説を調査した結果、人びとは身の回りの雲や波、動植物などを紋様化し、それぞれに異なる意味を持たせ、日常と非日常生活において使用する魚皮衣を飾った。

伝統的な魚皮衣はホジェン族全体が使用するものであり、使用者は一般人とシャーマンの

2つのグループに大別される。また、それぞれに異なった使用者が想定されている。たとえば、日常生活においては、子どもや女性向けの袖なし上着、既婚女性向けの長袍、結婚適齢期の男女向けの煙荷包、男性用と女性用に分けられた袖あり上着やズボン、靴、男性が労働する際に使用する脚絆や手袋がある。非日常生活にも、シャーマンが祭祀で着用する神服、男性の狩猟用の礼服、新婚の男女が結婚式に着用する婚服、そして死装束がある。このように、日常と非日常それぞれの生活において、魚皮衣は、地域内で子どもや未婚者、結婚適齢期の男女、既婚女性、死者、漁獵・狩猟者、シャーマンなどの民族構成員の社会的役割を象徴する要素として機能した。すなわち、特定の形態や素材、紋様を有する魚皮衣は、当該地域のホジェン族のアイデンティティを象徴するものである。

1.2.2. 地域内の社会的な結びつきが強化される媒体

人びとは、日常生活において使用する伝統的魚皮衣の7種類の紋様それぞれに強い生命力、健康、子孫繁栄、長寿、豊漁、豊獵、厄除け、転生などの意味を持たせた。それらには、人びとの誕生から子育て、死、そして転生に至るまでのさまざまな時期における願いや、より良い漁獵・狩猟生活を願う意味が含まれていた。すなわち、魚皮衣

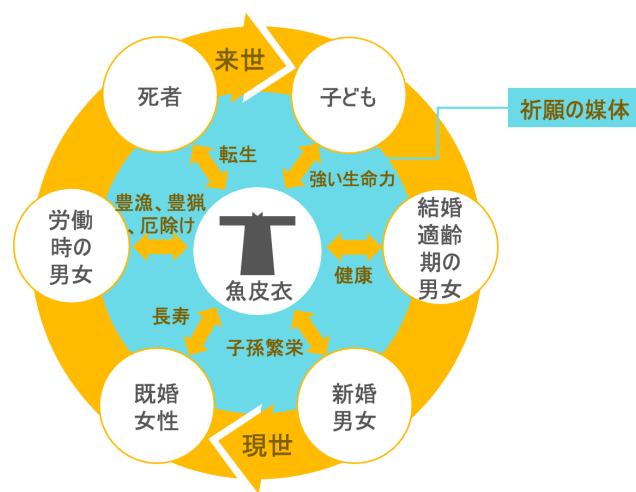


図 6-1 魚皮衣の使用にみるホジェン族の人生の循環図

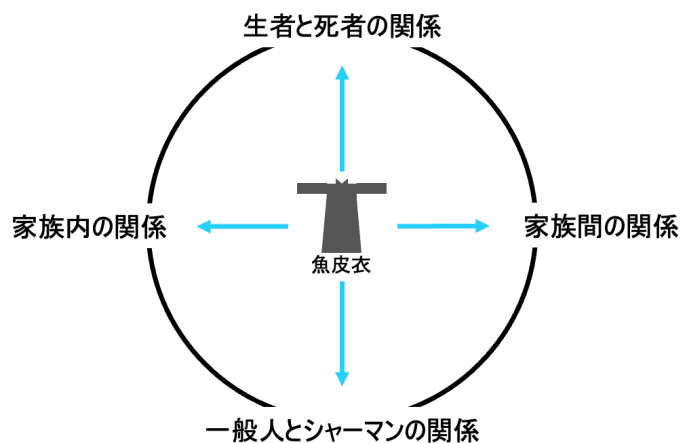
一生に欠かせないものであり、現世と来世をつなぐホジェン族の人生の循環に使用される重要なものでもあった(図 6-1)。一方、非日常生活で使用する神服の紋様の意味から見ると、ホジェン族の人びと、シャーマン、神々などとの交流に関するものが多かった。神服の多様な紋様は、ホジェン族全員の誕生、病気の治療、死、そして転生といった現世と来世をつなぐ人生の循環に重要な役割を果たした。これらの紋様は、地域内の重要な人生儀礼や祭祀などにおいて、ホジェン族が共通の祈願を込めた大切なシンボルでもあった。また、ホジェン族全員の精神的な世界の豊かさを反映していた。すなわち、伝統的な魚皮衣の紋様の使用は、ホジェン族が日常生活や非日常生活でシャーマンや神との交流を促進するとともに、ホジェン族の人びとが地域内で自身の社会的な役割を果たすことを支援していた。これにより、地域内の社会的な結びつきが強化された。

1.2.3. 人・自然・神との共生に基づく資源循環型社会の構築媒体

伝統的な魚皮衣の使用を考察すると、使用者が異なり、着用開始時期もそれぞれ異なる。たとえば、生後3日目から、天然痘などの疾患を予防するため、大人は乳児を氷水に入浴させる。乳児には魚皮衣を着せることはなく、代わりに魚皮や他の動物の毛皮で掛け布団をつくった。そして、生後100日以内に、子どもの健康な成長を祈願するために胎児服を埋める

儀式が行われた。その後、子どもは大人が着用した古い魚皮衣でつくられた袖あり上着を着始める。これは地域の慣習であり、子どもの健康な成長に役立つと考えられていた。子どもが成長するにつれて、彼らは年上の子どもが着ていた古い衣服を着るようになった。3歳になると、子どもが歩き始めるため、魚皮のズボンと靴を履くようになった。子どもの衣服には、長寿を象徴する雲や波の紋様が装飾されていた。病気がちな子どもの衣服は、生命力の強さを意味する葉紋などで装飾された。これらは家族が子どもの健康な成長を願う表現であった。7歳以上になると、子どもたちは漁や服づくりの技術を学び始め、夏の湿疹を防ぐために袖なし上着を着始める。労働服としての手袋や脚絆は、男性が漁や狩猟の技術を学んだ後の15歳前後から使用されるようになった。結婚適齢期になった女性は、好きな人に縁起の良い紋様で飾る煙荷包をつくり始め、それを贈った。相手が受け入れると、両者はさらに婚約や結婚の儀式を行うことができるとされた。結婚式は、シャーマンが主催し、両家の家族や親戚が共に参加した。女性は結婚式前に嫁入り道具として煙荷包を男性側の家族の人数に応じて用意する必要があった。結婚式当日、新婚の男女両者は両親に深い敬意と愛情を表すために、煙荷包に煙を詰める儀式を行った。結婚後、女性は自身の家族のために新しい魚皮衣を縫製した。

妊娠後、女性は古い服を使用して子どもの服をつくり始め、同時に自分のために長袍をつくった。既婚の女性や年長者は、通常、生命の転生を象徴する巻草紋を魚皮衣に飾った。この魚皮衣は、死後でも使用できるように願いを込めた副葬品であった。家族は、死者の魂が転生でき、来世でもより良い漁猟生活を



を送ることを願い、死者が生前に着用した衣服や用具を共に埋葬した。葬儀では、シャーマンが儀式を執り行い、死者の家族や親戚がシャーマンの指導のもとで葬儀の準備を行った。土葬の儀式では、家族の男性は死者が生前に使用した樺皮船を棺として使用し、生前の家屋と同様の木造の墓地を建設した。死者には一生に一度しか着用しなかった婚服が死装束として着せられた。婚服に飾られた生命樹の上にある鳥紋は、死者の魂が転生する場所と考えられていた。ホジェン族にとって、霊界は上界、中界、下界の3つに分かれていた。そして集落生活での約束事を守った人のみが転生できた。葬儀を行わなければ、魂は安らぐことができず、悪霊になる可能性があった。善行を行った者は上界に転生する可能性があった。なお、シャーマンは神服を着用すると、祭祀や子授け、病気の治療などの儀式を行うことができた。神服を着用すると、シャーマンは霊界から魂を呼び寄せることができるが、彼らの靈魂が悪霊に連れ去られるのを

防ぐために、人びとが彼の神腰帯の紐を引く必要があった。

総じて、魚皮衣の使用は、ホジェン族の生と死の循環という人生観と密接に関連しており、ホジェン族の固有の生活文化を伝承する媒体であり、家族内、家族間、ホジェン族とシャーマン、そして生者と死者の魂の交流関係を構築する媒体であった。特に、ホジェン族とシャーマンの間には生死をめぐる共同体における依存関係が存在していた(図 6-2)。ホジェン族全員が主体となって、地域内での共同作業を通じて身近な自然資源を無駄なく利活用し、共同儀式の催しや共通認識を持つことにより資源を最終的に自然に還していた。すなわち、人・自然・神の共生に基づいた資源循環型社会を実現していた。

1.3. 考察結果

上述した内容を踏まえて、伝統的服飾「魚皮衣」の文化的特質を明確にしたい。まず、指摘すべきは、特定の形態や素材、紋様を有する伝統的な「魚皮衣」が、厳しい環境下でホジェン族の体を守るだけではなく、神聖なものとして存在した祈願の媒体であったことである。これは、ホジェン族特有の「生命の循環」という人生観や「万物には霊が宿る」という自然観を反映していた。つまり、魚皮衣は当該地域のホジェン族のアイデンティティを象徴するものである。次に、伝統的な魚皮衣は、その制作・使用を通して、地域内のホジェン族の社会関係を構築し、深化させることに役立つだけでなく、コミュニケーションを活性化させる重要な要素としても機能していたことを指摘したい。また、魚皮衣はその制作・使用を通じて、地域内で人、自然、神の共生に基づく、資源循環型社会の構築においても中心的な役割を果たしていた。

地域のアイデンティティを象徴していた魚皮衣は、総じて、ホジェン族特有の人生観や自然観の形成、地域内の人間関係の構築、循環型社会の形成において重要な要素であった。この点において、かつてのホジェン族は、循環型社会の実践者であったといえよう。このように、当該地域のホジェン族が主体となって構築した伝統的な魚皮衣文化は、今後の内発的な地域づくりの重要な手段の一つであるといっても過言ではない。

2. 伝統的服飾「魚皮衣」文化の重要性

伝統的服飾「魚皮衣」文化の伝承についての実態調査によると、1960年代以降、中国における都市化・工業化が急速に進展するにつれ、ホジェン族の人びとの生活様式も大きく変容している。特に、本研究で概観してきた伝統的な魚皮衣も、その素材や色、形態、紋様、使用方法の変化とともに、そこに含意された人と自然との調和、人と人との絆、そして人の神への信仰が崩れつつある。また、近年、若者の流出に伴い、人間関係の希薄化も進んでいる。そのため、若者の伝統的な魚皮衣に対する認識も著しく不足している。

したがって、かつては保たれていた、地域の人間関係や循環型社会を再構築するためには、地域の関係を再構築するためには、地域内のホジェン族が伝統的な魚皮衣文化や、それに内包されたさまざまな生活の知恵を再認識することが必要である。特に、地域の伝統的文化への継承意識を喚起し、地域住民が魚皮衣を主体的に使用するために、ホジェン族が世代ごとに伝承されてきた魚皮衣に含まれる文化的特質を現代のホジェン族に伝えていくことが急務

であると考えられる。同時に、小物類を含む魚皮衣とその神服などが担っていた社会的役割を現代に活用することが、緊密な人間関係の構築、つまり内発的な地域づくりの重要な手段となるであろう。

3. 伝統的服飾「魚皮衣」文化の現状

上述してきたように、地域のホジェン族を主体として構築された伝統的な魚皮衣文化が、内発的な地域振興の重要な手段として位置付けられる。本研究では、現地調査を通じて、急速な都市化が当該地域におけるホジェン族の伝統的な魚皮衣文化の衰退に拍車をかけていることが明らかになった。ホジェン族の伝統的な魚皮衣文化に対する認識の現状をより詳細に把握するために、筆者は2019年9月7日から10月31日までの期間に、博士前期課程在籍時に収集し記録した魚皮衣の歴史、素材、種類、制作の流れ、紋様、使用方法などのデータを基礎とした電子質問紙を作成した(図6-3)。この質問紙をWeChatのホジェン族のチャットグループを通じて、現地のホジェン族の人びとと共有し、アンケート調査を実施した。なお、2023年12月の現地調査によると、新型コロナウイルスの影響で2020年初めから2023年5月までの間に同江市政府が街津口村で封鎖政策を実施し、伝統的な魚皮衣文化に関する交流機会がさらに減少したことがわかった。したがって、2019年に行われた78人を対象としたアンケート調査の結果は、有効なデータと言えるだろう。本節では、そのデータを使用して、ホジェン族の魚皮衣文化に対する認識について具体的に分析してみたいと考える。

「伝統的魚皮衣文化に関する認識度・関心度の調査」

(一) 被調査者の属性

1. 性別 ①男 ②女

2. 年齢 ①10代 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代

 ⑦70代 ⑧80代 ⑨90代 ⑩その他

3. 民族 ①ホジェン族 ②漢族

4. 街津口村出身 ①はい ②いいえ

5. 職業

①農、牧、漁業などの労働者 ②政府から認定された魚皮衣の制作技術の継承者 ③自営業

④学生 ⑤公務員 ⑥医者 ⑦教師 ⑧主婦 ⑨定年退職者 ⑩その他

(二) 魚皮衣の諸相に対する認識・関心

4 回の現地調査を通じて、魚皮衣の歴史、造形、色、種類、作り方、紋様、使用方法などの諸相を把握した。また、当該地域のホジェン族の若者が魚皮衣に関する知識が乏しい現象がわかった。そのため、これらの知識をホジェン族の人びとに共有する前に、項目6～項目8に基づいて調査することで、ホジェン族の魚皮衣の諸相に対する認識や関心の実態を把握したいと考えている。

6. ホジェン族の魚皮衣を知っていますか。 ①はい ②少し ③いいえ

・6で選択肢(1)、あるいは、選択肢(2)を選んだ場合、下記の質問にお答えください。

6-1). 魚皮衣の諸相のうち、どれを知っていますか(複数選択可)。

①歴史的変遷 ②造形 ③色 ④種類 ⑤作り方 ⑥模様

⑦日常生活での使い方 ⑧非日常生活(結婚式、葬儀、年中行事、祭り)での使い方

6-2). 6-1)で選択した魚皮衣の諸相について、何を介して知っていましたか。

①家族、友人 ②学校 ③博物館、民俗館 ④ネットワーク、雑誌 ⑤地域内の広報活動

⑥その他

7. 魚皮衣の諸相のうち、どれに興味がありますか(複数選択可)。

①歴史的変遷 ②造形 ③色 ④種類 ⑤作り方 ⑥模様 ⑦日常生活での使い方 ⑧非日常生活での使い方

8. 4回の現地調査を通じて、魚皮衣の紋様は、波紋と雲紋、生命樹紋、野生動物の紋様、爬虫類動物の紋様、その他の5つに分けられたが、魚皮衣の紋様の類型のうち、どれを知っていますか(複数選択可)。

①波紋、雲紋 ②生命樹紋 ③哺乳類動物の紋様 ④爬虫類動物の紋様 ⑤その他

(三) 魚皮衣の制作に対する認識

4 回の現地調査を通じて、魚皮衣の制作工程を把握した。制作工程は、魚の捕獲、魚の選別、魚の剥ぎ取り、魚皮の乾燥、魚皮の鞣し、魚皮の裁断・組み合わせ、魚皮の縫合、紋様の貼り付け、紋様の染色の9つに分けられた。さらに、詳細な制作方法を記録した。近年、当該地域では、魚皮衣文化が消滅の危機に瀕しており、若者がこの制作技術を習得できないという問題が明らかになった。今後、ホジェン族の共同知識として記録したものを皆と共有する前に、皆の魚皮衣の制作に対する認識の実態を把握するために、以下の項目9～項目15の質問内容を作成した。

9. 魚皮衣を制作できますか。 ①はい ②少し ③いいえ

・9で選択肢(1)、あるいは、選択肢(2)を選んだ場合、以下の質問にお答えください。

9-1. 魚皮衣の制作方法をだれから学びましたか。

①母親 ②姑 ③魚皮衣工芸の継承者 ④その他

・9で選択肢(1)、あるいは、選択肢(2)を選んだ場合、以下の質問にお答えください。

9-2. 魚皮衣の制作の学習は、何歳から始めましたか。

①10歳前 ②10歳頃 ③20歳頃 ④30歳頃 ⑤40歳頃 ⑥50歳頃

⑦60歳頃 ⑧その他

(四) 魚皮衣の制作などに対する関心

現地調査を通じて、街津口村において中国政府から認定された非物質文化遺産である魚皮衣の制作技術の伝承者は約5人で、その平均年齢が60歳以上であることがわかった(2018年時点)。このことから、伝承者の高齢化と後継者の不足が問題として顕在化している。そして、魚皮衣の使用には、ホジェン族の人びとが非日常生活のみ使用されており、素材には化学繊維に代わられることもある。そのために、今後、魚皮衣の制作手法への学習意欲と、使用意欲などの実態を把握するために、以下の項目10～項目15の質問内容を作成した。

10. 今後、魚皮衣の制作方法を学びたいと思いませんか。

①とてもそう思う ②どちらでもない ③学びたくない

11. 魚皮衣の制作手法などを学ぶ機会(伝習・交流会)があれば、参加したいですか。

①とてもそう思う ②どちらでもない ③参加したくない

12. 魚皮衣の制作工程のなかで、一番学びたい工程は何ですか(複数選択可)。

①魚の捕獲 ②魚皮の選別 ③魚皮の剥ぎ取り ④魚皮の乾燥 ⑤魚皮の鞣し

⑥魚皮の裁断、組み合わせ ⑦魚皮の縫合 ⑧紋様の貼り ⑨紋様の染色

13. 魚皮衣の制作手法などを学ぶ場所があれば、それはどこで開催してほしいですか。

①学校 ②博物館、民俗館 ③政府機関 ④自宅 ⑤ネットワーク上 ⑥その他

14. 魚皮衣の制作手法などを学ぶ方法について、どれを選びたいですか。

①口頭での交流・伝達や身をもって体験して学びたい。

②魚皮衣の作り方に関する資料を見ることで、自身で学びたい。

③口頭での交流・伝達や身をもって体験し、魚皮衣の作り方に関する資料を見ることで学びたい。

④ネットワークで学びたい。

15. 今後、日常・非日常的な生活のうち、どちらで魚皮衣を使用し続けたいですか。

①日常 ②非日常 ③日常と非日常 ④使用し続けたくない

(五) 魚皮衣の制作などに対する関心

ホジェン族の伝統的な魚皮衣の伝承者の高齢化と後継者の不足などの問題が顕在化している当該地域では、今後、魚皮衣を地域の伝統的文化として活用する地域振興についてのご意見・ご感想を把握するために、以下の項目16～項目17の質問内容を作成した。

16. 今後、伝統的な魚皮衣の文化への保護と伝承が必要だと思いますか。

①はい ②どちらでもない ③いいえ

17. 現地調査を通じて、魚皮衣文化は、当該地域の魚の利活用に基づく資源循環型の社会を維持する上で重要な要素であったことが明らかになった。魚皮衣文化が消滅の危機に瀕している今日において、伝統的な魚皮衣文化を継承し、活用することで内発的な地域振興が促進されると考えられる。今後、伝統的な魚皮衣文化を伝承し活用する内発的な地域振興についてのご意見は

注：中国の「非物質文化遺産法」のなかでは、伝承者の認定制度や法的責任制度などが含まれている。質問項目5の選択肢における伝承者とは「中国の非物質文化遺産項目代表性伝承人」と呼ばれ、国・省・市・県の政府がそれぞれ選別し認定する。したがって、保護の等級は国家レベル・省レベル・市レベル・県レベルの4段階に分かれている。つまり、本選択肢における「伝承者」とは、中国の各レベルの政府からによって魚皮衣の制作技術の伝承者としてを認定された人物を指す。

図6-3 質問紙

3.1. 分析方法

(1)単純集計およびクロス集計による分析 78 人が回答した内容を精査し、質問項目 1～16 に関するデータについて、Microsoft Excel Workbook と IBM SPSS Statistics26 を使用して、単純集計とクロス集計による分析を行った。そのうち、クロス集計分析により、回答者グループによってアンケートの回答に統計的な有意差が生じているかどうかを確認できる。クロス表のカイ二乗検定と対称性による類似度の結果表に基づいて、有意差が生じている質問項目を以下の通り、まとめた(表 6-1)。

(2)共起ネットワークによる分析 調査対象の伝統的魚皮衣文化を活用する地域振興に対する意見(質問項目 17 で回収した回答データ)についての総回答人数は 72 人である。その全体像を視覚的に把握できるようにするため、KHcoder 3. Beta. 07b を使用して、テキストマイニングによる分析を実施した。総回答人数は 72 人である。共起ネットワークによる分析を行った際、特徴量を顕在化させるため、出現回数が 4 回以上の語を頻出単語として分析対象とした。その結果をもとに特徴量をグルーピングした。

表 6-1 クロス表のカイ二乗検定と対称性による類似度の結果表

番号		項目 1 性別			
		X ²	P	有意確率	Cramer の V
1	項目 5 職業	19.402	0.022	**	0.50
2	項目 13 学習場所	12.913	0.024	**	0.41
項目 2 民族					
3	項目 9-1 制作学習の出所	22.761	0.004	***	0.39
項目 3 年齢					
4	項目 9-2 制作学習の時点	95.957	0.000	***	0.46
項目 5 職業					
5	項目 3 年齢	105.359	0.000	***	0.48
6	項目 6 魚皮衣に対する認識	37.981	0.004	***	0.50
7	項目 9 魚皮衣の制作に対する認識	57.792	0.000	***	0.61
項目 6 魚皮衣に対する認識					
8	項目 6-2 魚皮衣に対する認識の出所	30.845	0.002	***	0.46
9	項目 9 魚皮衣の制作に対する認識	35.433	0.000	***	0.48
項目 9 魚皮衣の制作に対する認識					
10	項目 9-1 制作に対する認識の出所	83.603	0.000	***	0.74
11	項目 9-2 制作に対する認識の時点	70.989	0.000	***	0.68
12	項目 10 魚皮衣の制作への学習意欲	10.425	0.034	**	0.26
項目 10 魚皮衣の制作への学習意欲					
13	項目 11 参加意欲	67.187	0.000	***	0.66
14	項目 14 学習方法	32.128	0.000	***	0.46
項目 11 参加意欲					
15	項目 14 学習方法	17.26	0.008	***	0.34
16	項目 15 魚皮衣の使用意欲	14.496	0.025	**	0.31

注：有意確率 *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

3.2. 調査結果

本節では、単純集計とクロス集計による分析を通じて、ホジェン族の人びとが魚皮衣文化に対する認識度と関心度などの実態を把握し、さらに、共起ネットワークによる分析を通じて、伝統的魚皮衣文化を活用する地域づくりの意見を把握した。

次に、伝統的な魚皮衣文化に対する認識に関する考察結果は、5つに分けられ、各設問の単純集計の結果とクロス集計結果は円グラフや帯グラフ、クロス集計表を通じて示されている。これらの割合を統一的に表現するために、「%」を用いた表現方法が採用された。

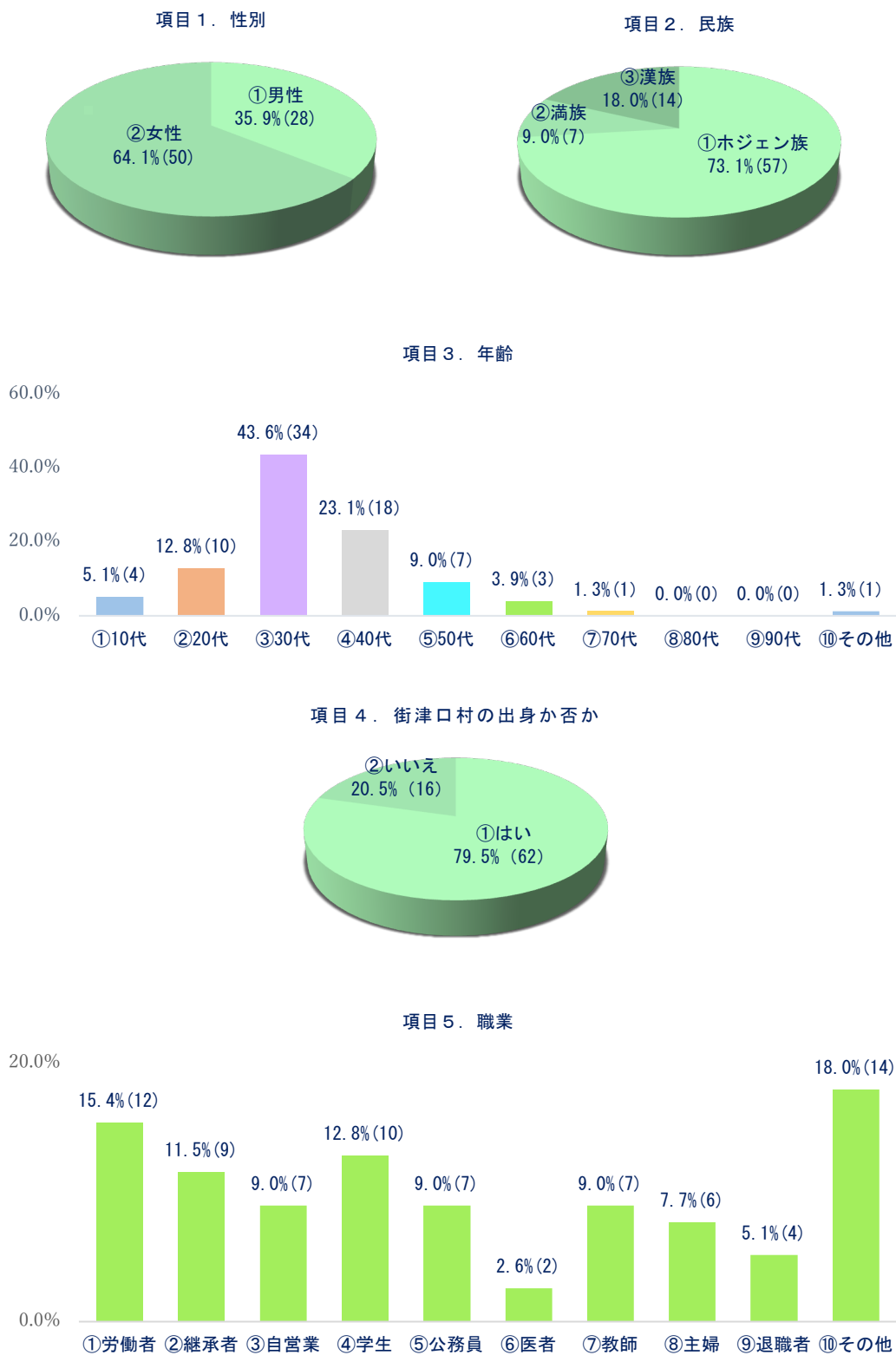
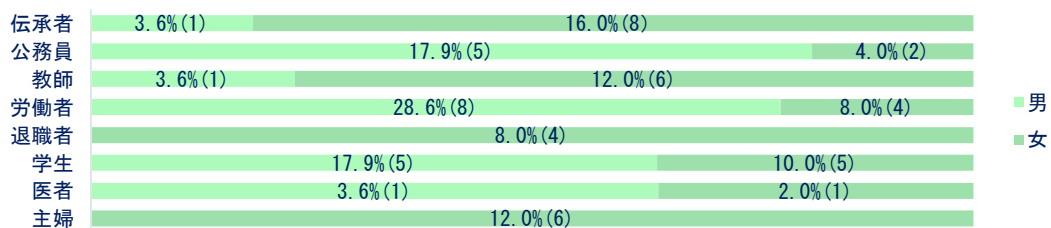


図 6-4 項目 1～5 の単純集計の結果図

(1) 被調査者の属性を図 6-4、図 6-5 に示す。

- ・性別は、女性の割合が高く、6割であり(項目1)、民族は、ホジェン族の割合が高く、およそ7割である(項目2)。ちなみに、残りのおよそ3割はホジェン族と通婚した漢族と満族の人びとであるという(尤文鳳氏より)。
- ・年齢別では、30代の人数が最も多く、全体のおよそ4割を占めており、40代的人数が2割を占めているが、50代以上的人数が極めて少ない(項目3)。
- ・出身地は街津口村の出身者の割合が高く、7割以上である(項目4)。
- ・職業では、その他を除き、漁業などを生計とする労働者、学生、伝承者の割合が高く、それぞれ人数は12人、10人、9人である(項目5)。

項目1(性別)と項目5(職業)の帯グラフ (p=0.022<0.05)



項目3(年齢)と項目5(職業)のクロス表 (p=0.000<0.001)

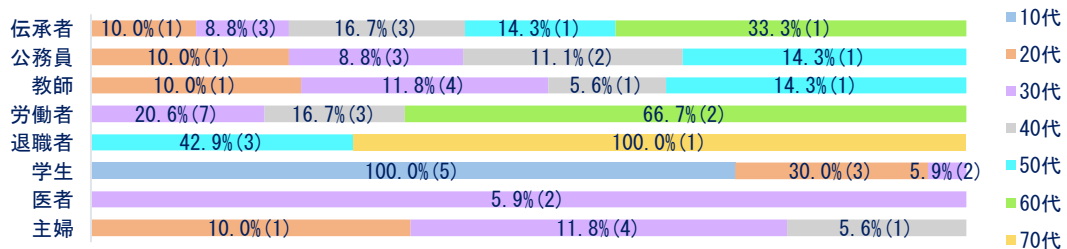
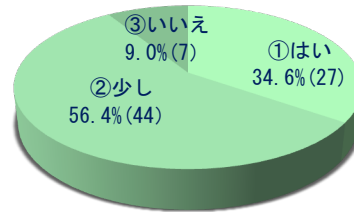


図 6-5 項目1と項目5、項目3と項目5のクロス集計結果

・項目1(性別)と項目5(職業)、項目3(年齢)と項目5(職業)のクロス集計結果(図6-5)として、職業に関しては、女性のなかで最も多いのは、政府に認定された魚皮衣の制作技術等の伝承者で、8人に上る。このなかでは30代から60代の年齢層が中心で、特に30代と40代の伝承者が最も多い。一方、男性は主に漁業などに従事する労働者で、これらは12人おり、30代、40代、60代が含まれているが、30代の労働者が最も多い。続いて、主に学生で10人おり、このなかでは10代と20代が中心で、特に10代の学生が最も多い。

以上の調査結果から、今回のアンケートは主に街津口村に住むホジェン族を対象に実施され、年齢層は30代と40代が主体であることが明確になった。女性が全体のおよそ7割を占めており、主に30代と40代の魚皮衣の制作技術などの伝承者として挙げられ、男性は主に30代の漁業関連労働者や10代の学生であることが確認された。2019年まで地方政府が魚皮衣の制作技術の伝承者の育成に対して支援を提供していたこともうかがえた。

項目 6. ホジェン族の魚皮衣を知っていますか。



項目5(職業)と項目6(認識度)の帯グラフ (p=0.004<0.01)

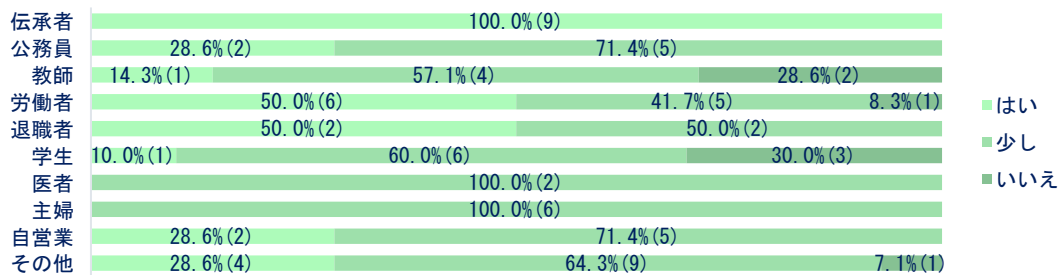


図 6-6 項目 6 の単純集計、項目 5 と項目 6 のクロス集計の結果

(2)魚皮衣の諸相に対する認識度・関心度を図 6-6～図 6-9 に示す。

・項目 6 (ホジェン族の魚皮衣を知っていますか)の単純集計結果、項目 5 (職業)と項目 6 のクロス集計結果(図 6-6)として、魚皮衣を知っている人の割合は低く、全体の 3 割程度にとどまる。これらの人びとは主に魚皮衣の制作技術などを伝承する者たちである。一方で、魚皮衣をやや知っている人の割合は 5 割以上と高く、その大部分は主婦である。魚皮衣を全く知らないと答えた人は最も少なく、1 割未満で、主に学生や教師が含まれる。これらの結果から明らかなように、伝承者は魚皮衣に関する知識が高い一方で、学生や教師は魚皮衣についてほとんど知識がないことが判明した。つまり、該当地域の学校では魚皮衣文化の普及活動が行われていなかったということが示唆される。今後は、魚皮衣文化に関心を持つ伝承者や関係者と協力し、学校での魚皮衣文化の伝承活動を実施することの重要性が提示されている。

・項目 6 で選択肢 (1)、あるいは、選択肢 (2) を選んだ場合、下記の質問にお答えください。

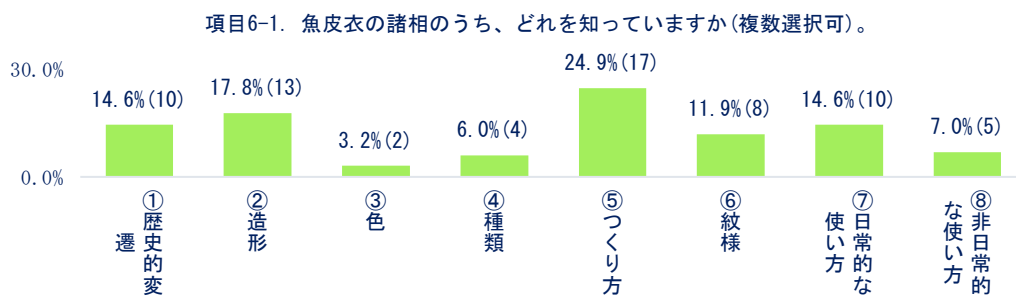


図 6-7 項目 6-1 の単純集計の結果

・項目 6-1(魚皮衣の諸相のうち、どれを知道吗)の単純集計結果(図 6-7)として、魚皮衣の諸相のうち、そのつくり方を知る人数が最も多く、17 人である。一方で、魚皮衣の色、種類、使い方、紋様、歴史を知らなかった人数が全体の 9 割を占めており、これらの知識に対する認識が不足していることがわかった。以上の結果から、被調査者の 9 割は、魚皮衣の色、種類、使用方法、紋様、歴史、使い方、造形、つくり方をほとんど知らなかったことがわかった。また、魚皮の染色技術や魚皮衣の種類が消滅の危機にある可能性が示唆されている。

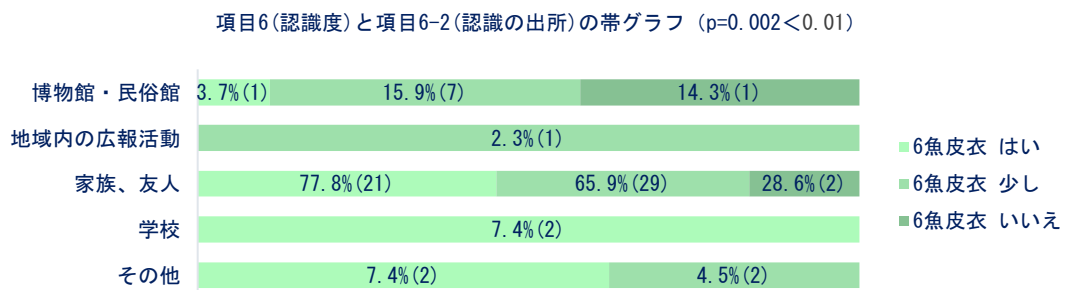
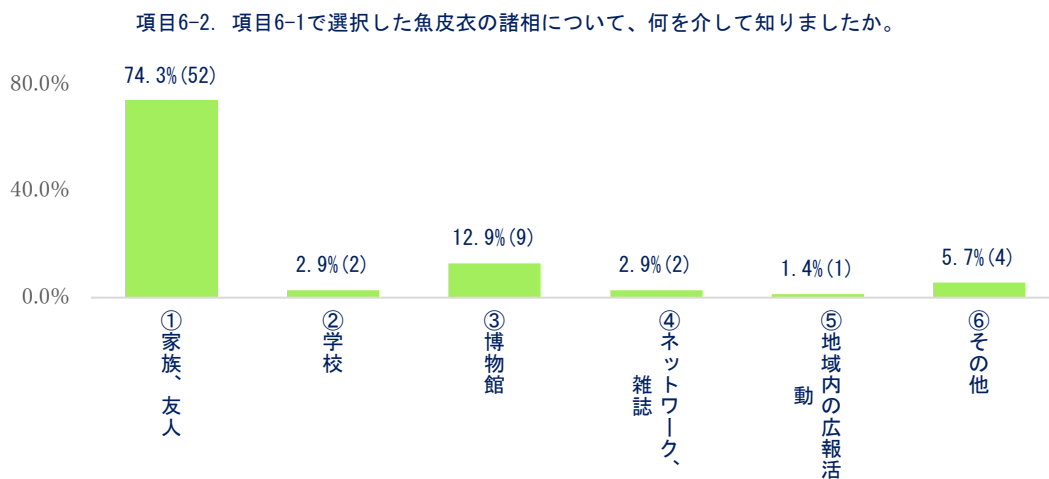


図 6-8 項目 6-2 の単純集計、項目 6 と項目 6-2 の単純集計の結果

・項目 6-2(魚皮衣の諸相について、何を介して知りましたか)の単純集計結果(図 6-8)として、回答者計 71 人では、主に家族や友人から魚皮衣の諸相を知った人数が多く、52 人である。一方で、当該地域の広報活動、学校、ネットワークと雑誌、博物館を介して魚皮衣を知っていた人数が非常に少なく、それぞれの人数は 1 人、2 人、2 人、9 人である。以上の結果から、主に家族や友人から知っていた人数が多いが、項目 6-1 で考察した魚皮衣の諸相に対する認識から見ると、家族や友人のなかで魚皮衣の諸相に関する認識が限られていたので、被調査者が家族と交流しても魚皮衣の諸相に対する認識を深めることが困難になったことがわかった。すなわち、今後、被調査者の家族や友人を含めて、魚皮衣の諸相に対する彼らの認識を深める必要がある。

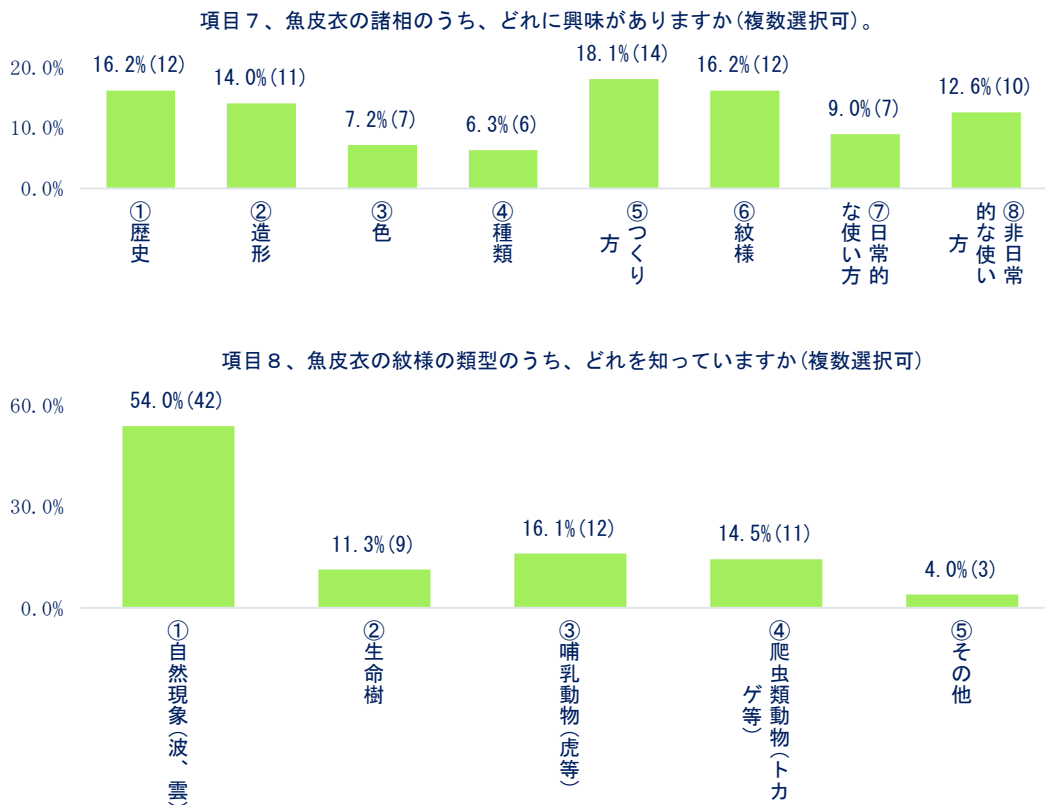


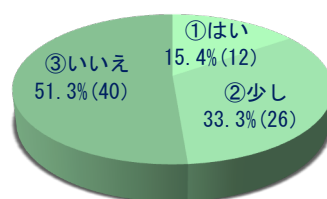
図 6-9 項目 7、項目 8 の単純集計の結果

・項目 7 (魚皮衣の諸相のうち、どれに興味がありますか)、項目 8 (魚皮衣の類型のうち、どれを知っていますか)の単純集計結果(図 6-9)として、被調査者は魚皮衣のつくり方、歴史、に対する関心度が最も高く、それぞれの人数は 14 人、12 人、12 人である。一方で、色、種類、非日常的な使い方、および日常生活な使い方に対する関心度が非常に低く、それぞれの人数は、4 人、5 人、7 人、10 人である。以上の結果から、被調査者が魚皮衣の諸相に対する関心が薄いことがわかった。なお、項目 6-1 で考察した魚皮衣の諸相に対する認識度から見ると、被調査者の認識度が深いほど関心も高まっており、逆に、認識度が薄いほど関心も低くなることがわかった。

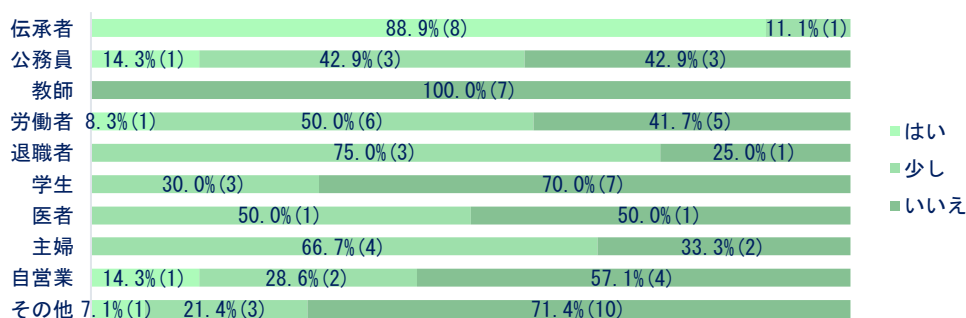
そして、魚皮衣に対する認識では、波紋と雲紋に対する認識は全体の 5 割以上を占めているが、それ以外の生命樹、爬虫類動物、哺乳動物などの紋様に対する認識度が非常に低く、それぞれの人数は、8 人、11 人、12 人である。以上の結果から、被調査者が波紋と雲紋以外の紋様に対する認識が非常に低いことがうかがえる。

つまり、9 割の被調査者において魚皮衣の歴史、素材、色、種類、紋様、使用方法などの諸相に対する認識度や関心度が非常に浅い。これらの人びとの職業は、主に学生、教師、主婦、医者である。魚皮衣の諸相に対する認識度が浅いほど、それに対する関心度も薄いことが明らかになった。今後、被調査者の家族や友人を含めて、彼らに魚皮衣の諸相を共有し、関連する認識や関心を高める必要がある。

項目9、魚皮衣を制作できますか。



項目5(職業)と項目9(制作への認識度)の帯グラフ (p=0.000<0.001)



項目6(認識度)と項目9(制作への認識度)の帯グラフ (p=0.000<0.001)

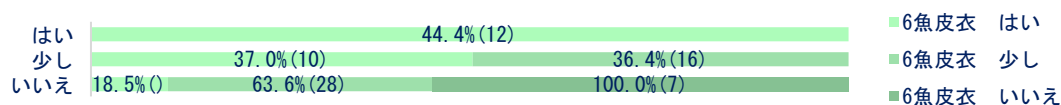


図6-10 項目9、項目5と項目9、項目6と項目9の単純集計の結果

(3)魚皮衣の制作に対する認識度を図6-10～図6-12に示す。

・項目9(魚皮衣を制作できましたか)の単純集計結果、項目5(職業)と項目9、項目6(ホジエン族の魚皮衣を知っていますか)と項目9のクロス集計結果(図6-10)として、被調査者において魚皮衣を制作できない人は最も多く、5割で、主に学生や教師である。一方で、魚皮衣を制作できる人は最も少なく、1割で、主に伝承者である。魚皮衣を少し制作できる人は3割で、主に主婦と医者である。

また、魚皮衣の制作に対する認識については、その制作ができる人は、魚皮衣を知っている。その制作ができない人は、魚皮衣を知らない。すなわち、魚皮衣の制作に対する認識と魚皮衣の諸相に対する認識は正の相関があると言える。

以上の結果から、8割以上を占める被調査者は魚皮衣の制作に対する認識が非常に低く、その職業は主に学生、教師、主婦、医者であることがわかった。また、魚皮衣文化の伝承者は、他の職業の人びとよりも魚皮衣の制作に対する認識が深い。今後、現地で伝承者と連携し、ホジエン族の人びとと、魚皮衣のつくり方などの諸相に関する知識を共有することは必要があると考えられる。

・項目9で選択肢(1)、あるいは、選択肢(2)を選んだ場合、以下の質問にお答えください。

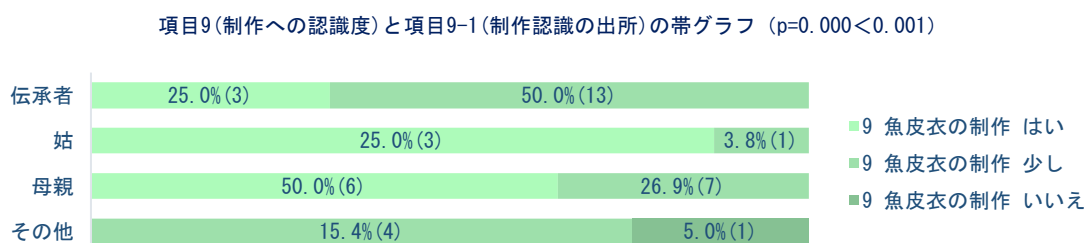
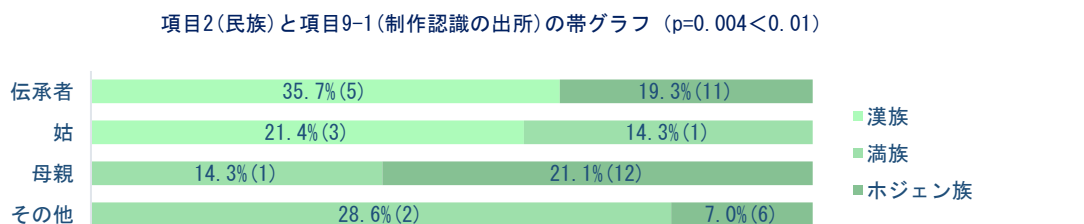
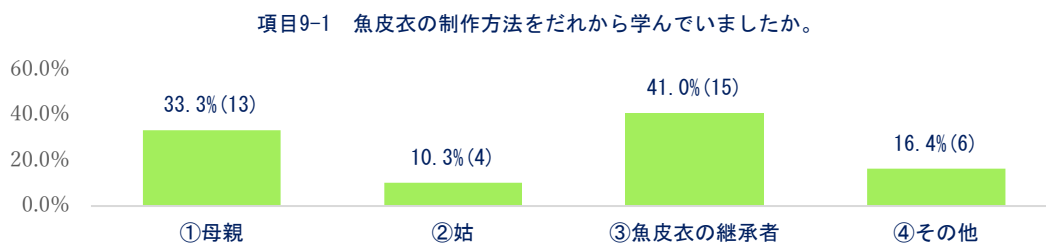
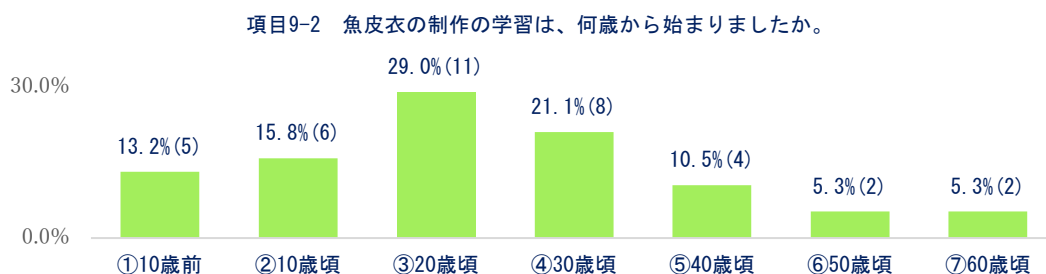
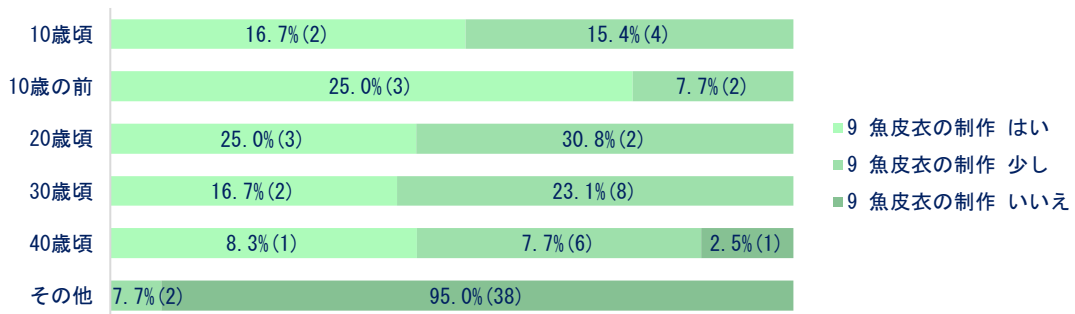


図 6-11 項目 9-1 の単純集計、項目 2 と項目 9-1、項目 9 と項目 9-1 のクロス集計の結果

・項目 9-1(魚皮衣の制作学習の出所)の単純集計結果、項目 2(民族)と項目 9-1 のクロス集計結果、項目 9(魚皮衣の制作に対する認識)と項目 9-1 のクロス集計結果(図 6-11)として、魚皮衣を少し制作できると回答した人数のうち、4割が主に伝承者からその制作技術を学んだ主に漢族である。魚皮衣を制作できる人数のうちの3割が母親から学んだ。主にホジェン族である。以上の結果から、漢族の人びとが伝承者から服の制作を学んだものの、その知識をうまく習得できなかったことが明らかになった。一方、ホジェン族の人びとが母親から服の制作を学んだ際に、その知識をうまく習得できた傾向が見られた。



項目9(制作への認識度)と項目9-2(制作学習の時点)の帯グラフ (p=0.000<0.001)



項目3(年齢)と項目9.2(制作認識の出所)の帯グラフ (p=0.46<0.5)

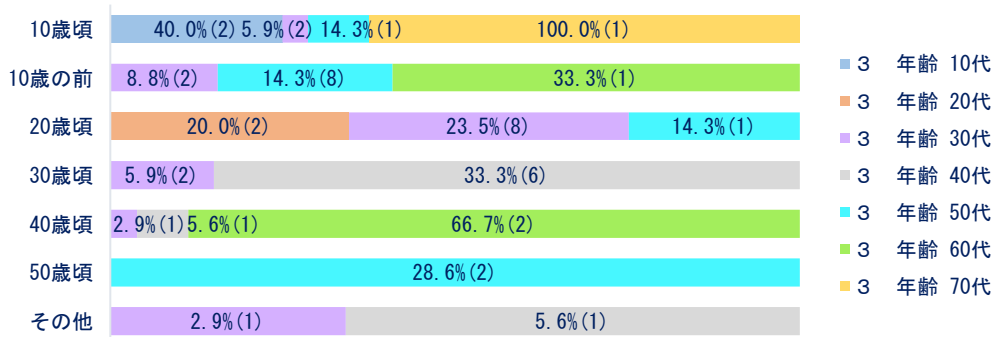


図 6-12 項目 9-2 の単純集計、項目 9 と項目 9-2、項目 3 と項目 9-2 のクロス集計の結果

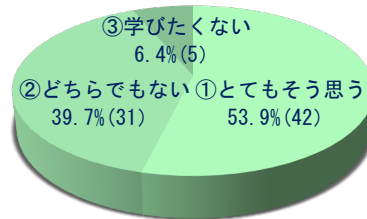
・項目 9-2(魚皮衣の制作学習の時点)の単純集計結果、項目 9(魚皮衣の制作に対する認識)と項目 9-2、項目 3(年齢)と項目 9-2 のクロス集計結果(図 6-12)として、魚皮衣を制作できる人は、主に 20 歳頃から魚皮衣の制作を学び始め、制作できる人全体の 2 割を占める。それに続くのは、30 歳頃から魚皮衣の制作を学び始めた人びとである。なお、魚皮衣を制作できる人は、主に 10 歳未満もしくは 10 歳頃、40 歳頃から魚皮衣の制作を学習し始めた。一方で、魚皮衣を少し制作できる人は、20 歳頃、30 歳頃から魚皮衣の制作を学習し始めた。

また、20 代と 30 代、50 代の人びとは、主に 20 歳頃から学び始めた。10 代と 70 代の人びとは、10 歳頃からその制作を学び始めた。40 代の人びとは 30 歳頃からその制作を学び始めた。60 代の人びとは 10 歳前からその制作を学び始めた。

以上の結果から、2020 年以前に、魚皮衣を制作できる人は主に 60 代と 70 代の高齢者で、50 年前から魚皮衣の制作を学んだ熟練技術者である。魚皮衣を少し制作できる人は、主に 20 代、30 代、50 代の人びとで、後継者として魚皮衣の制作に対する認識が不足していると言える。

総じて、被調査者の 8 割以上は魚皮衣の制作に関する認識が非常に浅い。魚皮衣の制作に対する認識が深いのは伝承者、または母親から学んだホジェン族の人びとである。この人びとは主に 60 代と 70 代の高齢者である。

項目10 あなたは今後、魚皮衣の制作方法を学びたいと思いますか。



項目9(制作への認識度)と項目10(制作への参加意欲)の帯グラフ (p=0.034<0.05)

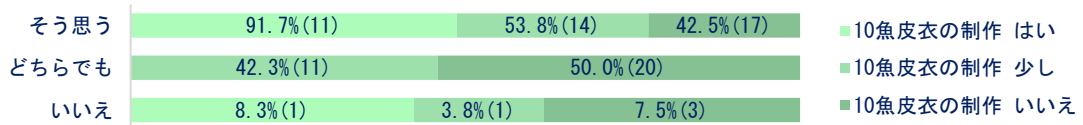
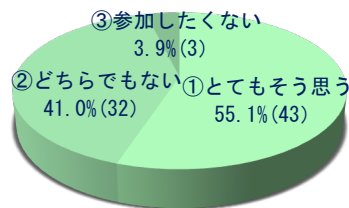


図 6-13 項目 10 の単純集計、項目 9 と項目 10 のクロス集計の結果

(4)魚皮衣の制作などに対する関心度を図 6-13～図 6-18 に示す。

・項目 10(魚皮衣の制作への学習意欲)の単純集計、項目 9 (魚皮衣の制作に対する認識)と項目 10 のクロス集計結果(図 6-13)として、今後、魚皮衣の制作方法を学びたい人の割合が高く、5割以上である。また、魚皮衣を制作できる人は、この制作方法を学習する意欲が強い。以上の結果から、魚皮衣の制作に対する認識が高いほど、学習意欲も高まることがわかったが、被調査者において魚皮衣を制作できる人は少ないため、この制作方法を学習したい人も少ない。

項目11 魚皮衣の制作方法を学ぶ伝習交流会があれば、参加したいですか。



項目10(制作への参加意欲)と項目11(制作への学習意欲)の帯グラフ (p=0.000<0.001)

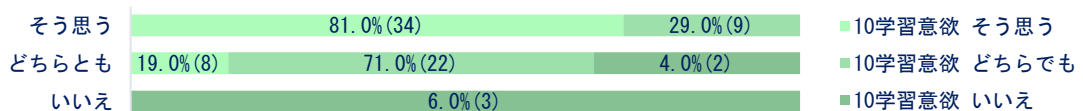


図 6-14 項目 11 の単純集計結果、項目 10 と項目 11 のクロス集計の結果

・項目 11(魚皮衣の制作学習への参加意欲)の単純集計結果、項目 10(魚皮衣の制作への学習意欲)と項目 11 のクロス集計結果(図 6-14)として、魚皮衣の制作方法に関連する学習交流の活動に参加したい人の割合が最も高く、5割である。また、参加意欲が高いほど、学習意欲

も高まる。すなわち、参加意識と学習意識は正の相関があるという結果が得られた。なお、被調査者が魚皮衣の制作学習に対する意欲を持っていることが示された。

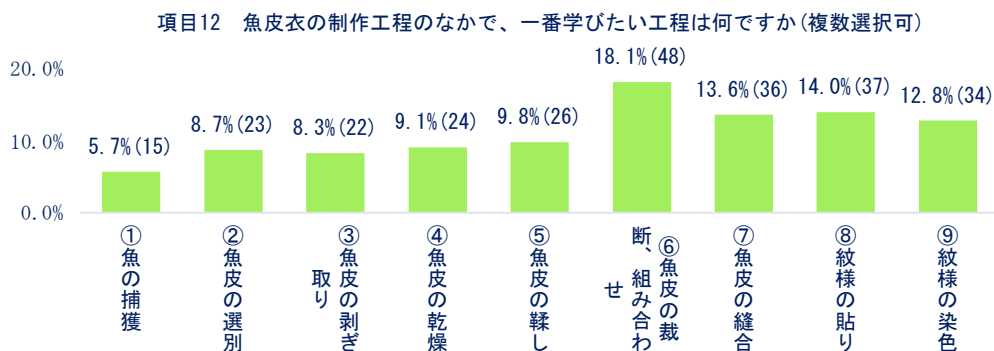
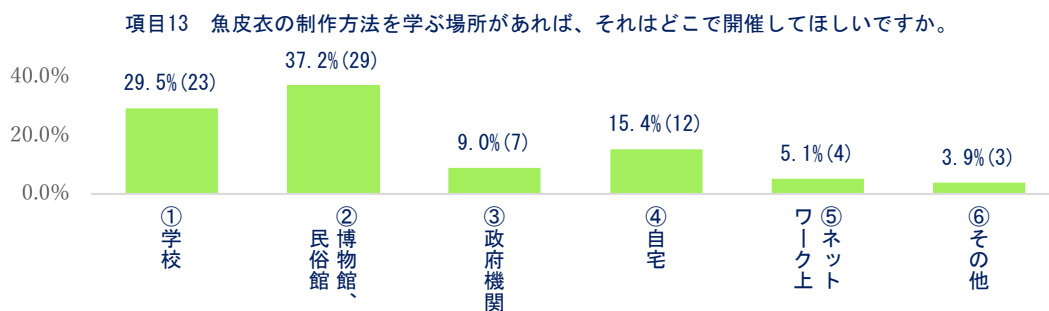


図 6-15 項目 12 の単純集計結果の結果

・項目 12(魚皮衣の制作工程に対する関心度)の単純集計結果(図 6-15)として、魚皮衣の制作工程のうち、魚皮の裁断・組み合わせ、の貼付を学びたい人が最も多く、それぞれ的人数は 14 人、10 人である。一方で、魚の捕獲方法、魚皮の選択、魚皮の剥ぎ、魚皮の乾燥を学びたい人が最も少なく、それぞれ的人数は 4 人、6 人、7 人、7 人である。以上の結果から、魚皮衣の制作工程のなかで、特に「魚皮の裁断・組み合わせ」と「の貼付」に興味を持つ人が多いことがわかった。また、「魚の捕獲方法」「魚皮の選択」「魚皮の剥ぎ」「魚皮の乾燥」といった工程に対する関心は比較的低い。すなわち、被調査者は、素材の入手、制作、加工よりも、魚皮の組み合わせ技術や魚皮衣の装飾紋様に対する関心が高いことが示されている。



項目1(性別)と項目13(学習場所への関心度)のクロス集計の帯グラフ (p=0.024<0.05)

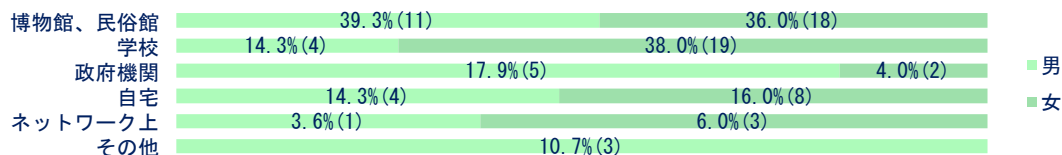
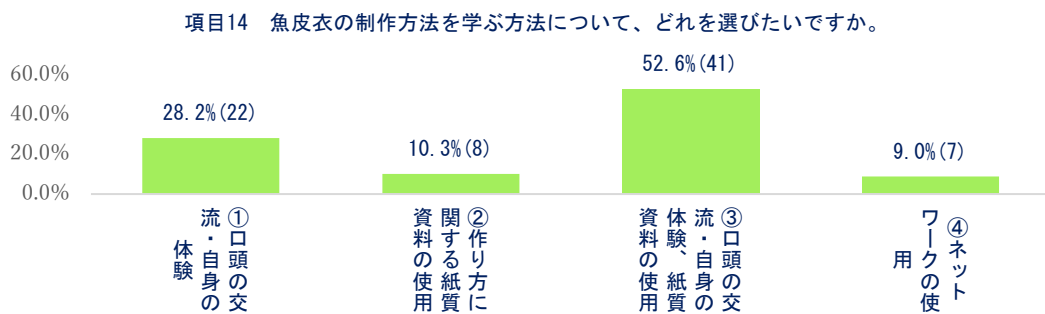


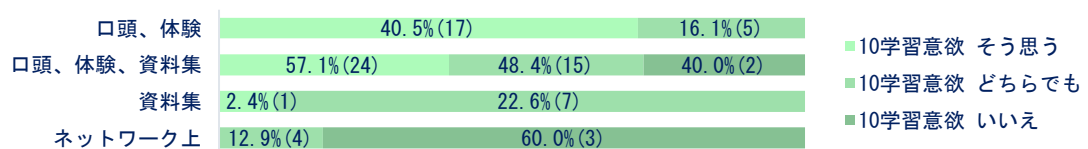
図 6-16 項目 13 の単純集計、項目 1 と項目 13 のクロス集計の結果

・項目 13(学習場所に対する関心度)の単純集計結果、項目 1(性別)と項目 13 のクロス集計結果(図 6-16)として、学習場所について、博物館や民俗館で魚皮衣の制作などを学びたい人が最も多く、29 人で、主に男性である。学校で魚皮衣の制作などを学びたい人も多く、23 人

で、主に女性である。この調査結果を踏まえ、魚皮衣の制作や学習活動を開催する場として、当該地域の学校や博物館を活用すべきだとわかった。



項目10(制作への学習意欲)と項目14(学習方法への関心度)の帯グラフ (p=0.000<0.001)



項目11(参加意欲)と項目14(学習方法への関心度)の帯グラフ (p=0.008<0.01)

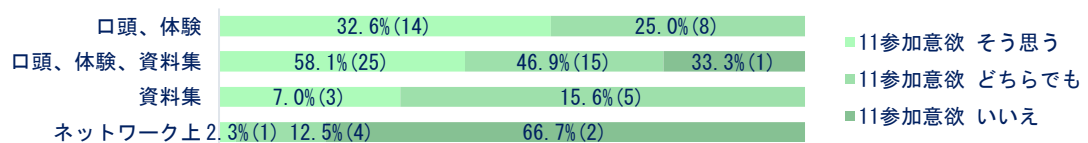
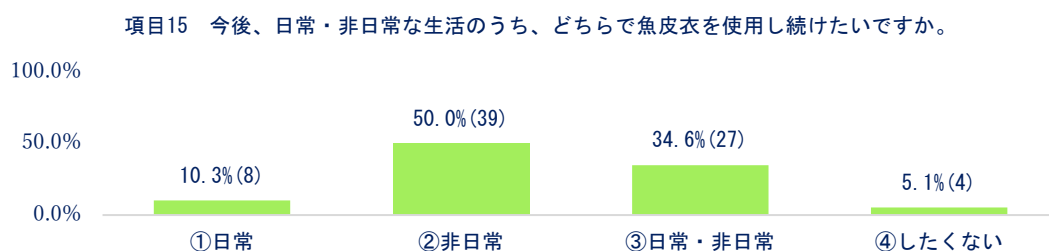


図6-17 項目14の単純集計、項目10と項目14、項目11と項目14のクロス集計の結果

・項目14(魚皮衣の制作学習方法に対する関心度)の単純集計結果、項目10(魚皮衣の制作への学習意欲)と項目14、項目11(魚皮衣の制作学習への参加意欲)と項目14のクロス集計結果(図6-17)として、学習方法について、「交流・体験でき、資料を読める」と回答した人が最も多く、41人である。そのうち、主に魚皮衣の制作など関連知識を学びたい人びとがいる。また、今後、関連学習活動に参加したいと回答した人も同様に、交流しながら体験し、関連資料を読むという方法で学びたいと彼らは考えている。そのため、全体的に見ると、交流と体験ができ、さらに関連教材を提供する学習方法が最も人気がある。



項目11(制作への参加意欲)と項目15(使用意欲)の帯グラフ (p=0.025<0.05)

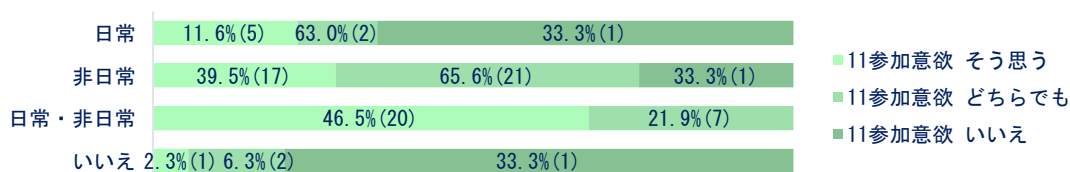


図 6-18 項目 15 の単純集計結果、項目 11 と項目 15 のクロス集計の結果

・項目 15(魚皮衣の使用意欲)の単純集計結果、項目 11(魚皮衣の制作学習への参加意欲)と項目 15 のクロス集計結果(図 6-18)として、魚皮衣の使用について、今後、非日常生活のなかで魚皮衣を使用し続けたい人の割合が高く、5割で、39人である。そのうち、関連する学習活動への参加意欲が高い人が17人である。次いで、日常と非日常生活の両者で使用したい人は、27人である。そのうち、学習活動への参加意欲が非常に高い人の人数は、20人である。すなわち、魚皮衣の使用意識が高いほど、学習への参加意欲も高まる傾向がある。

総じて、被調査者の学習意欲と魚皮衣の制作に対する認識および学習活動への参加意欲は正の相関にある。また、魚皮衣の使用と学習活動への参加意欲も正の相関にある。今後、現地で魚皮衣の制作などの学習交流活動が開催されれば、被調査者は魚皮衣の制作学習活動への参加意欲、使用への意欲をさらに持つと考えられる。したがって、ホジェン族の魚皮衣文化に対する認識と関心を高めるために、学校や博物館を学習の場とし、魚皮衣に関連する交流・体験、資料の閲覧を行う学習活動を定期的に行う必要がある。さらに、魚皮衣の使用機会を創出することも重要である。

項目16、今後、伝統的魚皮衣の文化への保護と伝承が必要だと思いますか。



図 6-19 項目 16 の単純集計の結果

(5)魚皮衣文化を継承し活かすための地域振興方策についての意見を図 6-19～図 6-20 に示す。

・項目 16 の単純集計結果(図 6-19)として、今後、伝統的な魚皮衣文化を保護し、継承すべきだと思う人数は、100.0%となった。すなわち、被調査者は魚皮衣文化の伝承意識は非常に強い。

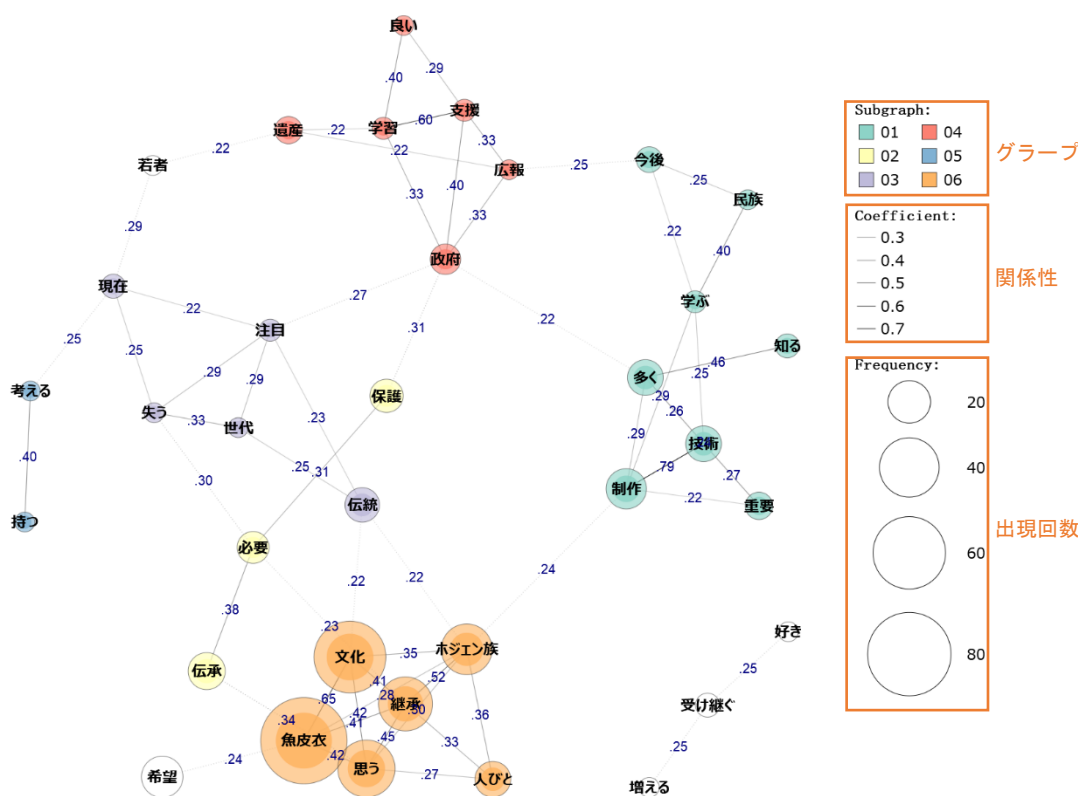


図 6-20 共起ネットワーク

次に、項目 17. 魚皮衣文化を活かすための地域振興方策についての意見を共起ネットワーク分析した。この分析を行った結果(図 6-20)、6つのグループに大別できた。そのグループを「Subgraph」とし、それぞれ 01~06 を割当てた。表 6-2 は、Subgraph ごとの代表的な意見を示したものである。総回答人数は 72 人である。出現回数が 4 回以上の語を対象とした頻出単語によって、以下の調査結果をまとめた。また、これらの頻出単語は以下の表で下線が引かれる。

表 6-2 Subgraph ごとの代表的な意見

subgraph	代表的な意見
01	<p>12、…地方政府がこれに関する記録映画を作成し、公開した。これにより、街津口村地域外に住むホジェン族の人びとが、ネットワーク上でその制作技術を学ぶことができるようになった。しかし、人と交流し、学習する機会が少ない。今後、古来より伝わる同民族の固有の文化としての魚皮衣が継承されていくことを希望している(女、ホジェン族、40代、公務員)。</p> <p>34、魚皮衣は、長い歴史を持つホジェン族の文化の重要なシンボルである。より多くの人に魚皮衣文化について知ってほしい。また、この文化や制作技術が継承されることを心から望んでいる(女、ホジェン族、40代、その他)。</p> <p>4、魚皮衣の制作過程は非常に複雑なので、私たちはその制作技術を継承するとともに、次世代にその制作方法を伝えるべきだと考えている(女、ホジェン族、20代、主婦)。</p>
02	<p>64、…、伝統的な魚皮衣文化は世代間で伝承されるべきだと考えている。また、魚皮衣の保護には、国家と人びとからの注目が必要である。伝承者を育成する必要がある(女、ホジェン族、60代、漁業労働者)。</p> <p>72、人びとの十分な保護を受ける必要があり、優れた伝承者を見つけることができれば、</p>

	ホジェン族の魚皮衣文化は消失しないと考える(男、ホジェン族、10代、学生)。
03	24、 <u>現在、伝統的な魚皮衣文化が我々の世代で失う</u> ことができないように、政府には魚皮衣文化への <u>注目</u> を一層高め、教室を設けてさまざまな活動を企画・開催することを期待している(男性、ホジェン族、40代、漁業労働者)。 66、 <u>伝統的な魚皮衣文化は保護・継承されるべきだ</u> 。現在、私は伝承者ではないが、ホジェン族の一員として、 <u>私の世代に伝統的な魚皮衣の文化を失わせる</u> ことはできない(男、ホジェン族、30代、公務員)。
04	12、 <u>政府から魚皮衣は非物質文化遺産として認定されているが、その制作方法を学ぶ広報活動が少ない</u> 。地方政府がこれに関する記録映画を作成し、公開した。これにより、街津口村地域外に住むホジェン族の人びとが、ネットワーク上でその制作技術を学ぶことができるようになった。しかし、人と交流し、 <u>学習する機会が少ない</u> 。今後、古来より伝わる同民族の固有の文化としての魚皮衣が継承されていくことを希望している。継承する前提として、 <u>まず伝承者を保護し、良い伝習空間を提供して支援し、彼らがこの仕事に集まることができるようにする</u> (女、ホジェン族、40代、公務員)。
05	18、ホジェン族の人びとがこのことにより <u>関心を持つべき</u> であり、政府もこれにより注力すべきである <u>と考える</u> (女、満族、50代、退職者)。
06	7、 <u>魚皮衣文化の伝承者について、より若い伝承者を育てる必要があると思う</u> (女、ホジェン族、70代、退職者)。 23、 <u>魚皮衣は、ホジェン族の人びとが型紙を描くことから、飾り物の制作までさまざまな制作工程を経て、自らの手で制作して仕上げしていく複雑な服飾である</u> 。そのため、これをホジェン族独自の <u>文化として継承していくべきだ</u> と思う(女、ホジェン族、30代、教師)。

(1) **魚皮衣文化に対する認識**：①ホジェン族の魚皮衣文化への関心と継承意欲では、村外に住むホジェン族の人びとは、魚皮衣の文化を学び、継承したいという願望を持っている(Subgraph01)。加えて、人びとは魚皮衣文化の交流機会を増やし、広く周知することを望んでおり(Subgraph01)、十分に保護し、世代間で伝承する必要性を感じている(Subgraph02)。また、ホジェン族の一員として、彼らは魚皮衣文化を失わせることはできないと考えている(Subgraph03)。②政府への期待と協力では、政府には、魚皮衣文化に関する関心を深め、学習教室を提供し、活動を企画・実施することを期待している(Subgraph03)。そして、人びとは政府や市民からの注目も魚皮衣文化の保護に必要であると思っている(Subgraph02)。

(2) **魚皮衣の制作技術に対する認識**：魚皮衣の制作技術を継承し、次世代に伝えるべきだと思っている(Subgraph01)。また、魚皮衣の制作方法は複雑で工夫が必要であるために、これを文化的資源として継承していくべきだと考えている(Subgraph06)。加えて、非物質文化遺産としての魚皮衣の制作方法を広く周知する活動が不足している(Subgraph04)。

(3) **伝承者の育成・保護・支援に対する認識**：伝承者を育成し、優れた伝承者を見つける必要があると考えている(Subgraph02)。そして、若い伝承者を育成するべきだと思っている(Subgraph06)。伝承者の保護と支援の必要性では、魚皮衣文化の継承を進めるためには、伝承者を保護し、適切な伝習場所を提供し、彼らが活動に集まれるような支援が必要だと考えられている(Subgraph04)。

ここから魚皮衣の文化と制作技術の保護・継承、伝承者の育成・保護の重要性が明らかになった。また、伝承活動や交流機会の不足も課題として認識された。今後は、文化教育活動の展開、技術伝承の活性化、文化および制作技術に関する宣伝活動の拡大、若い後継者の育成、伝承者の保護・支援、政府の学習施設と活動支援などが必要である。

3.3. 結論

本節においては、アンケート調査を通じて、中国黒竜江省同江市・街津口村におけるホジェン族の魚皮衣文化への認識と関心の現状とその要因を把握した。次に、それらを概観する。

魚皮衣文化に対する認識の現状として、調査結果から、被調査者は主にホジェン族の30～40歳の女性であることがうかがった。彼女たちは魚皮衣文化についてほとんど理解しておらず、特に、魚皮衣の色や種類についてはほとんど認識していない。少数の人びとが家族からいくつかの魚皮衣に関する情報を得ているが、魚皮衣文化に対する全体的な認識度は低く、魚皮衣の雲紋や波紋以外の紋様についてはほとんど認識していない。魚皮衣の制作については、全体78人の約3割が知っており、主に伝承者や年配のホジェン族の女性である。一方で、30歳以下の学生、教師などの職業のうち、ほとんどの人がこの文化を知らない。一方で、被調査者の関心度から見ると、被調査者は魚皮衣文化をよく知らないけれども伝承していきたいことがわかる。今後、非日常生活に魚皮衣を使用することを希望しており、制作の流れ、学びの場や方法、そして紋様に対しても関心を持っている。

総じて、この低い認識度の現状は、被調査者の先代が魚皮衣文化に対する認識が不十分であることが一因である。また、政府などの関係者による学習施設と文化活動の支援が不足していることも問題である。具体的には、被調査者の先代から魚皮衣文化が徐々に失われ、現在、人びとが魚皮衣の色や種類はほぼ知らなかったことが明らかになった。さらに、紋様も消失の危機に瀕している。魚皮衣を制作できる人がますます少なくなり、魚皮衣文化の伝承が困難になるという厳しい課題に直面している。すなわち、魚皮衣文化の伝承において最も重要なのは、今後、ホジェン族の人びとのなかで魚皮衣の色、種類、紋様、制作などの諸側面に対する認識と関心を高めることであると考えられる。

4. 内発的發展論に基づく今後の指針の導出

今後、内発的發展論の視点から魚皮衣文化を伝承し活用して地域振興を図るためには、まずこれまでに得られた魚皮衣文化に関する知見を体系的に保存することが不可欠である。その上で、これらの知見をホジェン族と共有するために、アンケートの調査結果を踏まえ、以下の3つの段階からなる指針を導き出した。

第一段階：魚皮衣文化に対する認識と関心を向上させる

調査結果から、ホジェン族の伝統的魚皮衣の歴史や造形、色、種類、つくり方、紋様、使い方などに対する認識が不足していることが判明した。今後、魚皮衣文化に興味を持つ伝承者やホジェン族の年配の女性を対象に、魚皮衣文化への関心と認識を高めるためのデザイン提案を考案し、実施することが重要である。

第二段階：若者の魚皮衣文化の継承意識を喚起する

調査結果から、30歳以下の学生、教師といった人びとの大部分が、魚皮衣文化についての知識がほとんどないことが明らかになった。これにより、将来の魚皮衣文化を担う若い世代の継承者を育成するための支援策を策定することが必要である。この取り組みは中期的な目標であり、次の3年間で具体的なデザイン提案を実施する予定である。

第三段階：魚皮衣の使用を通じて地域の資源循環型の生活づくりの再構築と認識の向上を促す

調査結果から、魚皮衣を非日常生活で使用したいという希望が多く、一方で日常生活での使用を希望する人が少ないことが明らかになった。この結果を踏まえ、魚皮衣の使用を通じて、地域の資源循環型の生活づくりを再構築することへの認識を向上させる取り組みが必要である。それゆえ、ホジェン族の魚皮衣の使用に関する認識を深めるための長期的な方策を検討することが重要である。

4.1. デザインの提案の導出・実施

本節では、ホジェン族の魚皮衣文化に対する認識・関心を高めるという第一段階の指針と、アンケート調査における各質問項目の結果を踏まえ、内発的発展論の視点から以下の四つのデザイン提案を提示する。

- (1) 魚皮衣文化の共有の「場」の創出・活用(項目 6-2 と項目 13)
- (2) 地域への発信・知見の共有(項目 14 と項目 6-1)
- (3) 魚皮衣の自然素材・紋様の再認識に基づく手づくり体験活動の企画(項目 8 と項目 12)
- (4) WeChat 公式アカウントにおける知見共有の「場」の創出・活用(項目 17)

これから、この四つのデザイン提案の導出と実施について概観する。

(1) 魚皮衣文化の共有の「場」の創出・活用

アンケート調査質問の項目 6-2 と項目 13 の結果から、近年、博物館や学校、ネットワーク、地域内で魚皮衣文化に関連する共有や広報活動がほぼなかったことが明らかになった。一方で、ホジェン族の人びとが今後、博物館や民俗館、学校で魚皮衣文化に関する学習活動に参加したいと回答した。このことから、今後、当該地域におけるホジェン族の人びとが魚皮衣文化を互いに学び、交流する空間を創出することが特に重要である。なお、地域内で影響力がある伝承者(制作技術を伝承する担い手)である尤文鳳氏と楊英琴氏への聞き取り調査を通して、2023 年 10 月に同江市における非物質文化遺産展示館で魚皮衣の制作に関する学習会を開催し、約 50 人が参加した。しかし、参加者は口頭で伝承者と交流する機会が 1 年に 1 回しかないため、魚皮衣とその制作技術を完全に理解することができなかったことが明らかになった。それゆえに、2023 年 12 月頃に、同江市非物質文化遺産展示館の館長、地域の伝承者、ホジェン族の人びとなど民間主体の参画・協働・支援に基づいて、展示館と尤文鳳氏の自宅を利活用することで、魚皮衣文化に関する知識共有の場を創出した。

また、創出した共有の場で多様な交流・伝承活動を行った。たとえば、初めて展示館を訪問した際、館長である李鼎仁氏が展示館の発展状況を紹介し、伝統的な魚皮衣文化の普及活動をサポートしてくれることを表明した。筆者は WeChat のグループを通じて、以前のアンケート調査で活動に参加を希望した被調査者やその家族を招待した。これにより、交流活動に参加を希望するホジェン族の人びとと、館長や伝承者の尤文鳳氏などの支援を得て、展示館で魚皮衣文化の認識を高めるデザイン提案の実施を口頭で共有し、意見交換を行った。また、一連の交流活動で 2019 年のアンケート調査結果を詳細に共有すると、参加者は魚皮衣文化の伝承が難しく認識度が低いことに共感した。そこで、2024 年 2 月の春節期間に三回の魚皮衣



館長の李氏が展示館の歴史を紹介した様子



展示館で行ったデザイン提案についての交流



2019年のアンケート調査結果の共有



2024年の春節に展示館で行った魚皮衣ショー



伝承者である楊英琴氏とその息子が魚皮衣制作の作り方を紹介



魚皮衣ショーの企画に関する交流と、魚皮衣ショーの動画の作成



図 6-21 共有の有効利用

魚皮衣ショーと文化伝習活動を企画した。このイベントは、当該地域の人びとに自作の魚皮衣を着る機会を提供するものである。この期間中、尤文鳳氏の自宅や展示館でリハーサルと交流を行い、最終的に正月に魚皮衣ショーを実施した。筆者と伝承者楊英琴氏、その息子が

魚皮衣文化の紹介を担当した。活動のなかで、筆者はホジェン族の人びとが着用している魚皮衣の紋様に現代的なものと伝統的なものがあることを発見した。より多くの人にこの問題を理解してもらうために、皆と協議した上で、魚皮衣のファッションショーの動画を一緒に制作した。この動画の共有を通じて、現代の紋様と伝統的な紋様の違いを人びとに認識してもらいたいと考えている(図 6-21)。

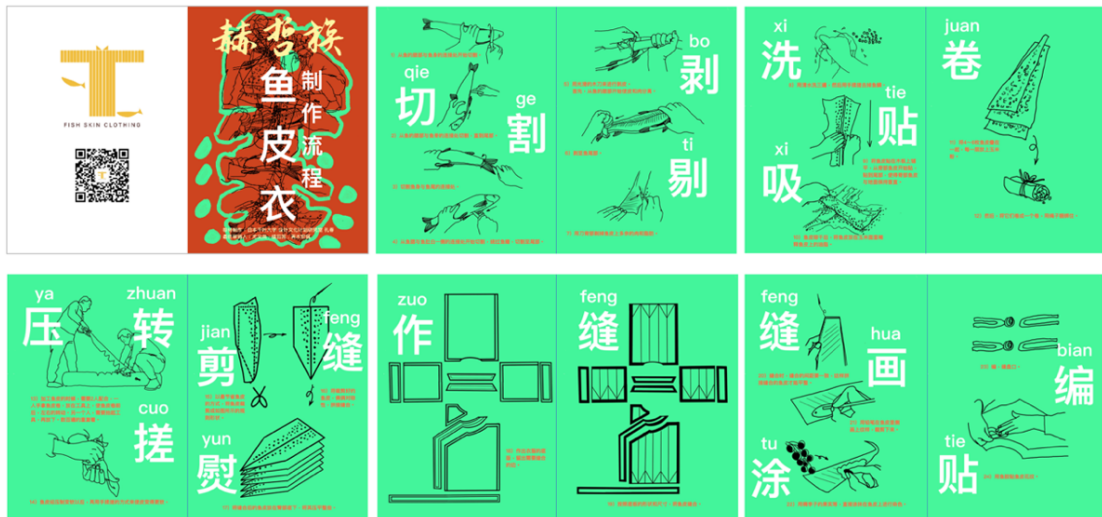


図 6-22 パンフレットの最終版(付録 pp. 216~218 を参照)



図 6-23 パンフレットの展示



図 6-24 スライド教材の最終版

(2) 地域への発信・知見の共有

アンケート調査結果では、地域文化振興において、魚皮衣の制作を学ぶ際に、交流と体験を伴いつつ紙の資料などの学習教材を使用したいという希望者が最も多かった(質問項目 14 により)。また、人びとが魚皮衣の歴史的変遷、種類、素材、色彩、紋様、制作手順、使用方法などについての知識が不足していることも明らかになった(質問項目 6-1 により)。したがって、これらの内容を整理・保存する作業が行われ、同時に、デザイン提案を通してデータでの再現も実施された。提案の総括は、以下の通りである。

2023年12月10日~2024年2月22日に地域の伝承者、同江市非物質文化遺産展示館の館長、CCTV(中国中央電視台)の番組『最美中国行』のメンバー、ホジェン族の人びとの参画・支援に基づく①魚皮衣の制作流れに関するパンフレットの制作・共有(図 6-22、図 6-23)、②現行展示館の魚皮衣の学習教室で使用する魚皮衣文化に関するスライドの制作・共有(図 6-

24)、③魚皮衣の制作流れに関する動画の制作・共有(図 6-25)



図 6-25 動画の最終版

主要内容は、以下の通りである。

①魚皮衣の制作に関するパンフレットと動画の制作と共有

・目的：今後、展示館や伝承者たちの自宅で行われる魚皮衣制作の学習活動で使用されるパンフレットや学習資料を提供する。

・制作と共有のプロセス：筆者は伝承者とホジェン族の人びととともに、尤文鳳氏の自宅でパンフレット制作について意見交換し、パンフレットを作成し、計 20 冊を印刷した。そのうちの一部分は伝承者たちと共有し、一部分は筆者が現地で実施した活動のなかで使用された(図 6-26)。特に、筆者と伝承者の尤文鳳氏をはじめとした一部の人は、魚皮衣の制作工程



魚皮衣に関する知識の共有・交流・意見の交換



展示館での制作物の展示とその使用の紹介

図 6-26 魚皮衣についての知識の共有とそのため制作物の展示

が複雑であり、時間が限られているため、魚皮衣制作に関心のある多くの人びとを、制作の全過程の体験に急遽招待するのは現実的ではないと考えた。そのため、招待者を3～4人のグループに分けて、魚皮衣の制作方法に関する1ヶ月間の学習活動(図6-27)を実施した。なお、その活動過程で、筆者は展示館の館長と尤文鳳氏、楊英琴氏の支援・協力を得て、CCTVのテレビ番組のスタッフと共に、魚皮衣の制作過程を録画した。このビデオは、館長と共有し、今後、尤文鳳氏などの伝承者が展示館で行う魚皮衣の制作教育活動に使用される予定である。同時に、尤氏の自宅でこのビデオをパンフレットと同様に体験者と共有した。

・**体験活動参加者**：張芹氏、敖蘭欣氏(未経験者)、徐中山氏(未経験者)

・**活動内容**：今年73歳の尤文鳳氏を主な講師として、3～4人のグループに分かれて1ヶ月間にわたり、魚皮の加工から魚皮衣の制作までの全工程を体験した。参加者の中には、魚皮衣の制作方法を全く知らなかった人も含まれている。

・**効果**：伝承者や体験者からのフィードバックにより、学習資料が存在することで伝承者が教育を行うのが容易になり、初心者でも制作プロセスを理解しやすくなったことが確認された。



魚皮を干す体験



手で魚皮を鞣す方法を学んだ様子



魚皮の裁断方法を学び、裁断された端材を使ってヘッドドレスをつくった様子



魚皮の組み合わせ・縫合・裁断を学んだ様子



魚皮衣の前身頃と後身頃などの縫製方法を学んだ様子

図 6-27 体験者が1ヶ月間にわたり魚皮衣の制作全過程を体験し、その技術を学んだ様子

②スライド教材の制作と共有

・目的：伝統的魚皮衣に関する歴史的変遷、種類、素材、色、紋様、制作手順、使用方法などの知識を向上し、今後の文化普及活動のための教材として使用することを目指す。

・使用者：展示館、伝承者、伝統的な魚皮衣の素材と紋様を活用する手づくり体験活動に興味を持っているホジェン族の人びとが主な対象となる。

・スライド教材の制作と共有のプロセス：まず、筆者は伝統的な魚皮衣に関する知識をまとめ、スライド形式で作成した。その後、現地で伝承者である尤文鳳氏と共有し、意見を交換した。次に、現地で実施された手づくり体験活動のなかで、伝承者と協力して、作成したスライド(図 6-28)や魚皮衣の制作工程の解説動画などの学習資料を、合計 29 人の参加者に共有した(図 6-29)。その後、参加者たちは伝統的な魚皮衣の紋様を活用してしおりづくり体験を行った。最後に、体験後の参加者に魚皮衣文化に対する再認識のアンケート調査が行われた。さらに、筆者と伝承者たちは、体験者たちが魚皮衣文化についてより多くの知識を得られるように希望しており、活動中に、筆者は魚皮衣に関する知識を共有できる二次元コードを載せた服をデザインし、制作し、伝承者たちに贈った。

・効果：参加した伝承者たちは、今後の各自の伝承活動でこの伝統的な紋様の知識を共有できる体験活動を活用する予定であると考えられる。

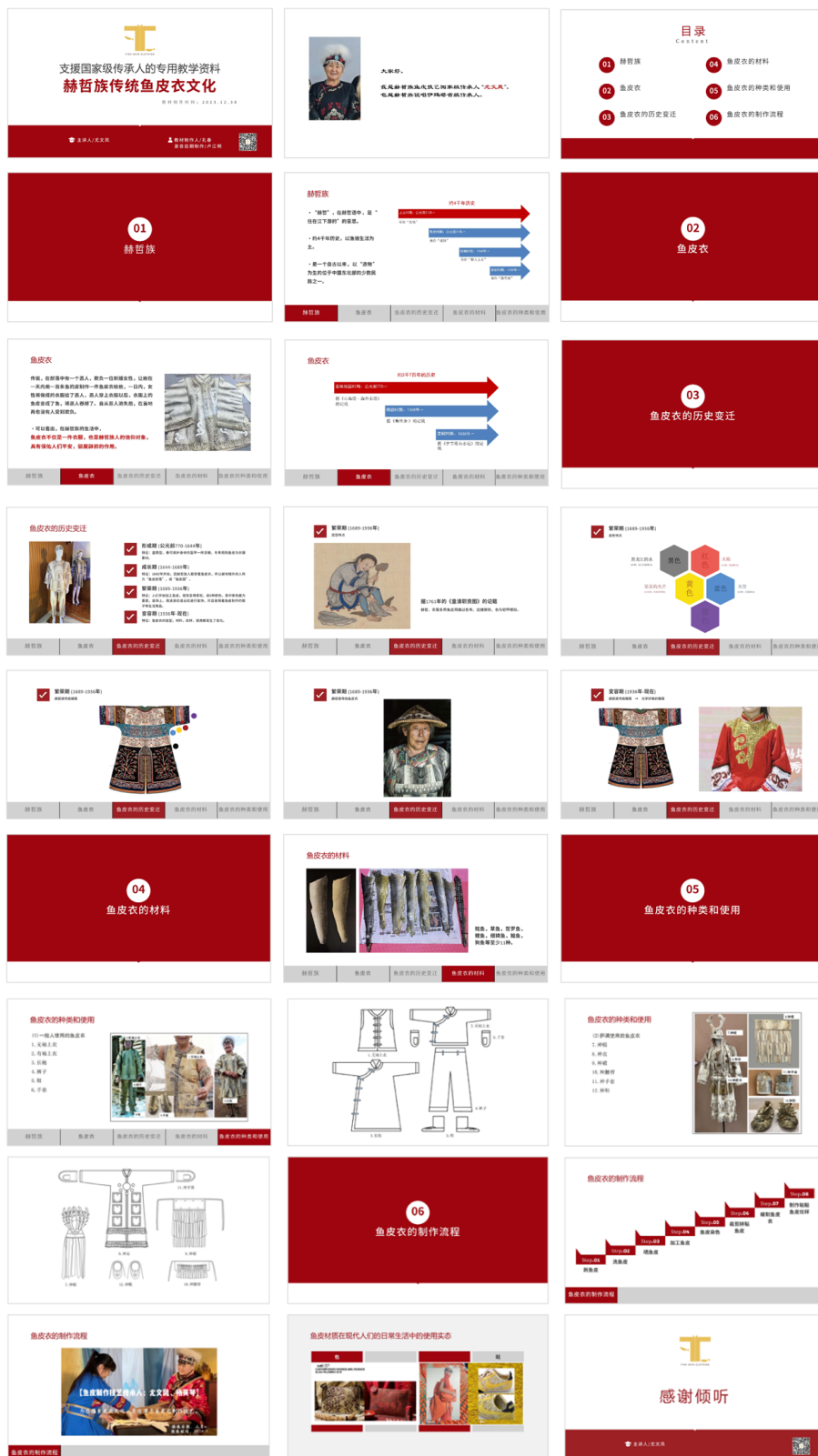


图 6-28 自動音声を再生可能なスライド教材の最終版の内容



図 6-29 スライド教材の共有の様子

また、下記は、詳細な実践活動のまとめである(表 6-3)。

表 6-3 地域への発信・知見の共有の実践活動

場所	時期	内容
同江市街津口村	2023.12.10	伝承者とホジェン族の人びと9人に魚皮衣文化に対する認識調査の結果を共有するとともに、口頭で意見を交換し、その内容を書きとった(付録 pp.212 を参照)。
	2023.12.12-12.14	伝承者とホジェン族の人びと6人とともに、尤文鳳氏の自宅で魚皮衣制作の流れに関するパンフレットの制作について交流した。
	2023.12.15-12.17	伝承者である尤文鳳氏などとともに、魚皮衣制作の流れに関するパンフレットの作成・印刷(計 20 冊)を行った。
	2023.12.18-12.20	伝承者とホジェン族の人びと9人とともに、尤文鳳氏の自宅で魚皮衣文化に関する自動音声を再生可能なスライド教材の制作について交流した。
	2023.12.20-12.22	伝承者である尤文鳳氏と意見を交換するとともに、魚皮衣文化に関する自動音声を再生可能なスライド教材を作成した。
	2024.1.1-1.2	展示館の館長、伝承者などの参画・支援に基づいて、CCTV の番組『最美中国行』のスタッフ6人、展示館の管理者2人、伝承者2人とともに、街津口村で魚皮衣制作の流れに関する動画を撮影・制作した(付録 pp.216 を参照)。
	2024.1.30-1.31	展示館で作成した動画やパンフレット、スライドなどの教材を、館長などの関係者に展示し、意見交換した。また、これらの教材は展示館で毎年行われる魚皮衣の伝承活動で使用される予定である。同時に、伝承者たちが自宅や工房などで開催する伝承活動中にもこの教材を使用する予定である。
2024.2.3-2.22	4回の手づくり体験活動で、筆者は尤文鳳氏やホジェン族の董菊紅氏など29人に、魚皮衣の制作工程に関する動画やパンフレット、魚皮衣文化に関するスライド教材を共有した。	

(3) 魚皮衣の自然素材・紋様の再認識に基づく手づくり体験活動の実施

アンケート調査結果では、魚皮衣の波紋と雲紋以外の紋様を知っている人は少なく(質問項目 8 により)、魚皮衣の制作工程において、魚皮の裁断・組み合わせと紋様の貼り付けを学びたい人数が最も多かった(質問項目 12 により)。この結果から、魚皮衣の紋様とその裁断・貼り付けに関する知識の共有・交流活動を今後強化していく必要があると考えられる。したがって、魚皮衣の紋様の形態について、現地でホジェン族の人びとと共有した。紋様の知見共

有に基づく具体的な方策の概要は、以下の通りである。

展示館の館長、伝承者、現地のホジェン族などの参画・支援を得て、2024年12月25日から3月6日にかけての間に、伝統的な魚皮衣の紋様を用いて魚皮のしおりや魚皮のイヤリングをつくるなど、4回の手づくり体験活動が実施された(図6-30、図6-31)。さらに、活動の前には、魚皮衣の紋様に関する認識と再認識などの紙質問の制作、手づくりの材料の準備、紋様のテンプレートの制作(図6-32)、紋様に関する説明書の制作(図6-33)、魚皮しおりの制作作業の流れに関する解説動画の制作(図6-34)などの作業が行われた。また、体験者が手づくり体験活動中に多様な動画を視聴することで魚皮衣文化についての理解を深めるために、伝承者と意見交換を行った後、WeChat公式アカウントを作成し、その二次元コードを付けた衣服(図6-35、図6-36)、バッグ(図6-37、図6-38)、名刺(図6-39、図6-40)をデザイン・制作し、そして体験活動で使用した。なお、デザインした10種類の名刺のうちの一つは、国家級伝承者である尤文鳳氏に採用された。



図6-30 人びとが手づくり体験活動に参加した様子



図6-31 完成品の展示



图 6-32 纹様のテンプレート

图 6-33 纹様の説明書の正面と背面

レポート



图 6-34 魚皮しおりの作り方に関する解説動画の最終版の一部



图 6-35 提案された伝承活動で使用する服



图 6-36 服に使用される図案デザインとその使用



图 6-37 提案されたバッグの様子



图 6-38 採用されたバッグを使用した様子



图 6-39 提案された名刺



图 6-40 決定した名刺



图 6-41 質問紙調査

「伝統的魚皮衣の紋様に関する認識調査」

2024年01月

このたびは、アンケート調査へのご協力、本当にありがとうございました。今回の調査では、特に伝統的な魚皮衣の紋様に関する皆様の認識についてお伺いすることが主な目的としていました。なお、今後、調査結果を皆様と共有するために、ご電話番号や WeChat 公式アカウントをご記入いただければ幸いです。アンケートの内容は以下の通りです。

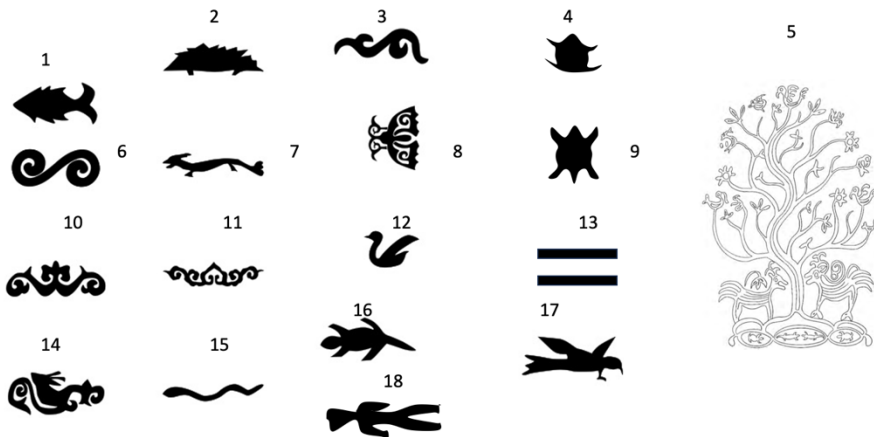
1. 民族：
2. 性別：
3. 年齢：
4. 職業：
5. ホジェン族の魚皮衣文化を知っていますか。

①十分に知っている ②大体知っている ③あまり知らない ④全く知らない

6. 伝統的な魚皮衣の紋様に対する興味を持っていますか。

①非常に ②やや ③どちら ④あまり ⑤全く

7. 以下の紋様のうち、知らない紋様を選択肢に×をつけてください。



・電話番号または WeChat：

お問い合わせは、下記までお願いいたします。

千葉大学大学院 孔 春

電話 (86)19520299691

メール 978957353@qq.com

図 6-42 質問紙

詳細な実施工程は、表 6-4 にまとめた。

表 6-4 手づくり体験の実践工程

場所	時期	内容
同江市街津口村	2023.12.25-2024.1.16	紋様に関する認識の質問紙調査(図 6-41、図 6-42)(回収 40 部)
	2024.1.17-1.20	紋様に関する認識の紙質問調査結果の分析・共有(付録 pp.213 を参照)
	2024.1.22-	紋様のデジタルデータ化
	2024.1.23-1.28	①紋様のテンプレートの制作 ・特徴:紋様に関する種類と形態を人びとと共有するために、収集した紋様をデータ化し、デジタルレコーディングで組版し、機械でプラスチック製の透かし彫りにして、体験活動の紋様のテンプレートとした。 ②紋様に関する説明書のデザイン ・特徴:紋様に関する意味を人びとと共有するために、データ化した紋様を活用し、紋様の説明書をデザインした。 ③手づくりの体験活動中に使用する服・ハンドバッグデザイン ・特徴:伝承者は今後の継承活動で、人びとと魚皮衣文化を持続的に共有するために、そして魚皮衣の魅力をより広く伝えられるように、作成した WeChat 公式アカウントの二次元コードを載せた服、ハンドバッグをデザインした。服とハンドバッグの正面には、「魚皮衣」という名称を活用し、デザインした図案を付けた。 ④伝承活動中に使用する名刺デザイン ・特徴:紫色はホジェン族の先祖が最も好んだ色である。筆者は尤文鳳氏と関連する歴史情報を共有し、最終的に紫色の名刺をつくることに決定した。
	2024.1.27	手づくりの体験活動に関連した平易な解説ビデオの制作
	2024.1.23-1.28	中国で唯一の国家級伝承者である尤文鳳氏の今後の伝承活動を支援するために、WeChat 公式アカウントの二次元コードを載せた名刺 10 種類をデザインした。そのうちの一つの案が尤文鳳氏に採用された。さらに、印刷した 200 枚の名刺を尤文鳳氏に贈呈した。
	2024.1.30-1.31	展示館にて手づくりの魚皮しおり、紋様のテンプレート、紋様の説明書、活動中に使用する服などの制作物の展示と交流
	2024.2.3 2024.2.17 2024.2.20 2024.2.22	4 回の「ホジェン族魚皮衣文化研学体験活動」と称した手づくり体験活動を実施し、制作物を使用し、魚皮衣文化の知見を共有した。交流体験活動のなかで紋様に対する再認識の紙質問調査を行った。(付録 pp.218~223 を参照) 一回目～三回目: 場所:同江市非物質文化遺産展示館、参加者:21 人 四回目: 場所:伝承者である尤文鳳氏の家族である楊英琴氏の自宅、参加者:8 人
	2024.2.26	将来、多様な伝承活動を持続的に進めるために、伝承者 10 人に紋様のテンプレート、紋様の説明書、WeChat 公式アカウントの二次元コードを載せた名刺・衣服・ハンドバッグなどを贈呈した。
	2024.3.6	より多くのホジェン族の人びとに魚皮衣文化に関する知識を伝達するために、解説ビデオを「魚皮衣文化伝播実験室」という名の WeChat のチャンネルで公開した。

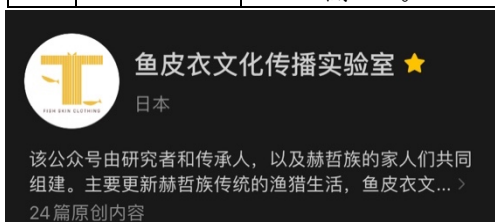


図 6-43 WeChat のチャンネルの様子



図 6-44 提案されたロゴマーク



図 6-45 決定したロゴマーク

(4) WeChat 公式アカウントにおける知見共有の「場」の創出・活用

アンケート調査では、78 人の回答者のうち、インターネットで魚皮衣制作を学んだ人はわずか 2 人であり、自由回答では魚皮衣制作方法に関する宣伝活動が不十分であるとの意見が提出された。したがって、今後はインターネットで魚皮衣の制作方法や関連知識の広報を強化する必要がある。これに基づき、2023 年 12 月 22 日に、9 人の伝承者、20 人以上のホジェン族の人びと、展示館の館長と意見を交換することで、「魚皮衣文化伝播実験室」という名の WeChat 公式アカウント(図 6-43)と WeChat グループを作成した。実験室の信頼性と魅力を伝えるために、6 種類のロゴ(図 6-44)をデザインし、参加者の意見を聞いて最終的に 1 つのロゴ(図 6-45)に決定した。

また、2023 年 12 月 22 日から 2024 年 3 月 11 日まで、当該地域のホジェン族により理解しやすい形式の動画を WeChat 公式アカウントで共有した。また、本研究では得られた知見や今回の活動情報などを 33 の記事と動画の形式を WeChat



公式アカウントで公開した。これらは「魚皮衣との物語」「ホジェン族の魚皮衣制作技術」「魚皮衣文化伝承の状況」「ホジェン族の伝統的な魚食文化」「ホジェン族のシャーマン信仰」「ホジェン族の伝統的な漁獵生活」「ホジェン族の伝統舞踊」という 7 つのセクションに分けられた(詳細な内容が付録 pp. 224~232 に添付された)。

たとえば、「魚皮衣との物語」(図 6-46)には、ホジェン族の尤文鳳氏、趙宝琴氏、李勤医氏などが、いつから魚皮衣の制作を学んだのか、誰から習得したのか、そして魚を全般的に活用した生活の知恵などが記録されている。「ホジェン族の魚皮衣の制作技術」では、魚皮衣の制作工程と道具、干し方、鞣し方などが記録されている。「魚皮衣文化の伝承状況」では、展示館の協力を得て、2024 年 1 月 6 日に筆者と伝承者が CCTV17 チャンネルの「超級農人秀」というバラエティ番組で、魚皮衣文化を広めるビデオの撮影活動に参加し、撮影過程で魚皮衣の制作流れも記録された(図 6-47)。また、2024 年 2 月 6 日に伝承者とホジェン族 16 人とともに企画した魚皮衣ショーのビデオが含まれている。そして、筆者はポストプロダクションを通じて、伝統的な魚皮衣と現代的な魚皮衣のスタイルと紋様を区別するために、映像に対して文字による説明を加えた。伝承者と現地のホジェン族の人びとの参加意識や信頼が徐々に高まるにつれ、展示館の館長、ホジェン族の尤文鳳氏、董継紅氏など、18 人と共に、展示館を活用し、2024 年の旧正月の 2 月 14 日、15 日、18 日に開催した「文化進万家、非遺過大年」イベントに参加し、魚皮衣ショーの形式で魚皮衣文化の交流活動に実施した(図 6-48)。

表 6-5 で示したように、以下の実践活動を行った。

表 6-5 ネットワークにおける知見共有の「場」の創出・活用の実践活動

場所	時期	内容
同	2023.12.22	「魚皮衣文化伝播実験室」という名の WeChat のチャンネルの作成、

江市街津口村		WeChat グループの設立
	2023.12.23	<p>伝承者たちとともに、「魚皮衣文化伝播実験室」という名の WeChat 公式アカウントで使用するロゴを作成した。</p> <p>・ロゴデザインの特徴：伝承者たちは、このロゴによって、ホジェン族の人のびとがかつて魚皮を使って衣服を制作したという特徴を表現できることを望んでいたため、筆者はこの提案に基づいて6つのロゴをデザインした。そのうちの一つの案が採択された。魚皮衣の形が多様であるため、最終的には、皆が百魚衣の伝説で言及された長袍の形を選択した。</p>
	2023.12.23-2024.3.11	<p>2023年12月23日から、2024年3月11日までに、知見の共有のために、地域の伝承者たち、ホジェン族の人たちとともに、33の記事と動画を作成した。それらを地域の知識として WeChat のチャンネルで作成した「魚皮衣文化伝播実験室」という公式アカウントで定期的に公開した(付録 pp.224~232 を参照)。</p>



図 6-47 2024年1月6日に伝承者たちと共に CCTV17 チャンネルの「超級農人秀」に参加した様子



図 6-48 展示館で録画した魚皮衣ショー



図 6-49 魚皮衣ショーのリハーサルの様子



図 6-50 2024 年の 3 月頃に魚皮衣の神服の制作技術とシャーマンの踊りを学んだ様子



図 6-51 2024 年 5 月頃に展示館で皆が布製の神服を着用し、シャーマンの踊りを踊った様子

4. 2. デザイン提案の試行評価および考察

実践したデザイン提案の評価を得るため、展示館の館長である李鼎任氏と陳麗傑氏、伝承者たち、ホジェン族の人びとに対し、質問紙調査や聞き取り調査を行った。その結果は、以下に示す通りである。

(1) 地域内でのホジェン族の人びとのコミュニケーションの活発化

同江市の展示館と尤文鳳氏の自宅、および WeChat グループと WeChat 公式アカウントを魚皮衣文化の知識共有の場として活用し、手づくり体験や魚皮衣ショー、魚皮衣文化の伝承・交流など、多様な活動を促進した。それとともに、地域内のコミュニケーションの活性化も実現した(図 6-49)。これにより、人びとが頻繁に集まり、意見を交換し、展示地域コミュニティの結束が強まった。たとえば、将来、館でより多くの人びとに伝統的なシャーマン用の魚皮衣を見せるために、筆者は 2024 年 3 月初めに WeChat グループのうちの 13 人との意見を交換し、人びとが尤文鳳氏からシャーマン用の伝統的な魚皮衣の制作を学んだ。同時に、



図 6-52 2024 年 5 月 1 日に展示館で魚皮衣の制作過程を再現する寸劇

ホジェン族のイマカンという語り物の伝承者である呉彩雲氏もこのイベントに参加し、全員にシャーマン踊りを教えることを担当した(図 6-50)。より多くの人びとに神服やシャーマンの踊りの魅力を伝えるために、2024 年 5 月 5 日、展示館の館長の支援のもと、皆が展示館で神服を着用し、シャーマンの踊りを披露した(図 6-51)。また、筆者によるアンケート調査結果の共有と制作物の紹介活動を通じて、人びとの魚皮衣制作の伝承に対する認識に影響を与えた。2024 年 5 月 1 日に、彼らは展示館の館長の協力のもと、自発的に展示館で魚皮衣の制作過程を再現する寸劇を行った(図 6-52)。このことから、筆者が当該地域におらずとも、現在の伝承者である尤文鳳氏が参加者たちを組織し、一連の魚皮衣文化の伝承活動を行うことができることがわかった。より多くのホジェン族の人びとに共有するために、筆者は、皆が WeChat グループで発信した能動的な継承活動の写真や動画を整理し、さらに動画化して、WeChat 公式アカウントで公開する作業を担当している。

(2) 魚皮衣とその制作技術への認知度の向上

4 回の手づくり体験活動でスライド教材などの制作物を使用する際に、体験者たちに対し、魚皮衣文化への再認識についての質問紙調査(図 6-53)を実施し、計 29 部を回収した。回答者の年齢は主に 60 代であった(付録 pp. 217 を参照)。「魚皮衣がややわかった」との回答が多くみられた(項目 4 により)。また、「今回の活動を通して、魚皮衣に関する種類、材料、色、制作、使用がわかった」と回答した人は 29 人であった(項目 5 によ



図 6-53 質問紙の調査

り)。伝承者たちは、関連スライドや紙の教材、動画教材があることで、これらを展示館だけ

でなく、当該地域のコミュニティーや家族内でも魚皮衣の文化継承活動を行う際に活用できると考えている(尤文鳳氏により)。そして、こういった教材を活用することは、高齢の伝承者が継承活動を行うのに便利であると同時に、学習者にとっても魚皮衣の魅力をより感じやすくなる(敖蘭欣氏、徐中山氏により)。

(3) 魚皮衣の素材・紋様への認知度・関心度の向上

ホジェン族魚皮衣文化研学体験活動にて、魚皮衣の知見の共有と手づくり体験イベントに関する質問紙調査を実施し、計 29 部を回収した。回答者の年齢は主に 60 代であった。自由回答には、「今後もこのような手づくり体験に参加していきたい」との回答が多くみられた(付録 pp. 232 を参照)。

また、聞き取り調査を通して、以下のように、この手づくり体験活動に対する見解が明らかになった。①伝統的な魚皮衣の紋様を収集・整理し、透かし紋様のテンプレートをつくることで、伝統的な魚皮衣の伝承活動や手づくりの魚皮のしおりなど、将来の体験活動をさらに促進できる。魚皮衣の文化を継承する素晴らしい方法である。(陳麗傑氏、女、40 代)

②魚皮のしおりの制作方法は比較的容易なので、魚皮のしおり体験は子どもたちの参加に適している。将来子どもたちと一緒にこの活動に参加するのが楽しみだ。(吳爽氏、女、30 代)

③しおりづくり体験は、今私が勤務している街津口村ホジェン族郷学校の小学生にとっても合っている、たとえば 6 月 1 日の「こどもの日」。私の学校でも、伝統的な魚皮衣の文化を広める目的で、生徒を組織してこのような活動に参加させることができる。(董継紅氏、女、50 代)

④伝統的な魚皮衣の紋様を集め、整理し、紋様テンプレートを作成することは、伝統的魚皮衣の紋様を保存するための良い方法である。私たち自身も、将来子どもたちや多くの若者たちに伝えるために、伝統紋様を整理し、保存していく必要がある。(高亜榮氏、張芹氏など、女、60 代)

⑤魚皮の紋様を活かし、魚皮衣の切れ端でつくった魚皮のイヤリングやしおりは、美しくても実用的である。日常的なアクセサリとして使えるだけでなく、魚皮衣の紋様に対する認識を深めることができる。良い手づくり体験活動にもなる。(王洪姍氏、女、60 代)

⑥ホジェン族の若者たちは、伝統的魚皮衣の紋様の種類と文化的特徴については漠然とした理解しか持っていない。このような手づくり体験は、伝統的魚皮衣文化をよりよく理解するのに役立つ(尤桂華氏、女、60 代)。

⑦伝承者として恥ずかしく思うのは、これまでは魚皮衣の制作工程の継承にしか注意を払わず、伝統的魚皮衣の紋様の種類や関連する知識をうまく整理してこなかったことだ。(王華氏、女、50 代)

なお、董継紅氏は 6 月 3 日前後に、街津口村赫哲族郷学校の先生として、学校に魚皮しおりづくりの体験コースを申請した。筆者は現地での体験活動で使用された解説動画をインターネットで董氏に送付した。また、体験イベントで使用する紋様テンプレートも董氏に合わせて選んで提供した。これらは今後、董氏が活動で使用する学習資料として再利用される(図 6-54)。



図 6-54 董継紅氏が小学校で行った魚皮しおりの手づくり体験コース

(4) 継承意識・家族の団結力の向上、文化のアイデンティティ意識の向上

WeChat 公式アカウントの制作と、ホジェン族の伝統的な魚皮衣文化のビデオ撮影・放送を通じて、ホジェン族の人びとが魚皮衣文化の継承に対する意識とアイデンティティが強化されたことがわかった。たとえば、2024年1月10日には、ホジェン族の尤赫赫氏(50代)が掲示板にメッセージを送り、魚皮衣文化に関連するビデオをより多く公開してほしいと希望した。2月15日には、董継紅氏の息子(30代)が魚皮衣文化の普及活動に参加したいとの意向を掲示板に残した。そして、2月19日には、尤文鳳氏のもう一人の弟子(40代)が、魚皮衣ショーのビデオに参加したい旨を述べた。尤文鳳氏の次男(40代)と姪(40代)、他の弟子(40代)たちも、ビデオを視聴することで、WeChat 公式アカウントをフォローしていた。

なお、WeChat 公式アカウントが開設されて以降、参加者は9人(伝承者)から35人以上(主にホジェン族)に増え、その中には伝承者やホジェン族の家族、親戚、友人、伝承者見習いに加え、董継紅氏の息子、董菊紅氏など、参加を心待ちにしていた当該地域のホジェン族の人びとも含まれている。こういった方法で伝承者とその家族、友人、当該地域のホジェン族の人びととの間に結束感と信頼感が培われてきた。

(5) 文化の魅力の地域外への発信

WeChat 公式アカウントで公開された動画の再生回数から見ると、「魚皮衣ショー」をテーマとした動画の再生回数が最も多く、5943回である。次に、「魚皮衣の制作の流れ」をテーマとした動画が続き、その再生回数は、2467回である。「手づくり体験活動」をテーマとした動画の再生回数は、1847回で、「魚皮衣との物語」をテーマとした動画の再生回数は、1539回である。このことから、上記のテーマ動画は、地域内外の人びとの関心を引いていることがわかった。このように、地域の知識共有を目的とした動画を公開することで、地域外の大学教員、大学生、社会人から関心を集めることができた。たとえば、1月12日には、百年巨匠のショートビデオの責任者が、魚皮衣文化のプロモーションビデオを共同制作したいと希望した。黒龍江省ハルビン市教育部の張広強氏は、2024年3月12日に筆者たちの WeChat 公式アカウントを通じて、筆者に連絡した。また、ハルビン工業大学、ハルビン農業大学、黒龍江大学

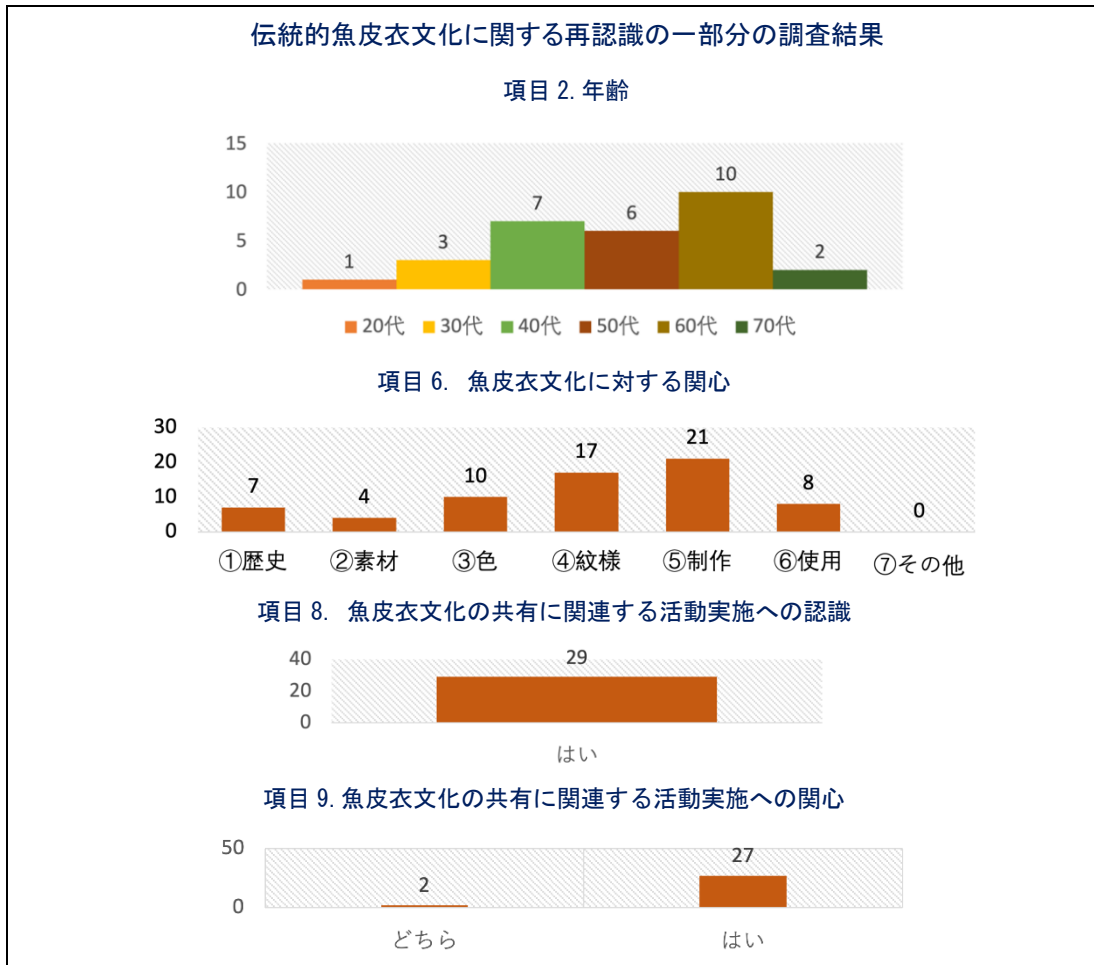


図 6-55 質問 2、質問項目 6、質問項目 8、質問項目 9 の単純集計の結果

3校は計 800 枚の魚皮を購入するために、当該地域の伝承者と連絡を取りたいと希望している。そして、4月2日には安徽新華学院の経済学専門の大学生邢育静氏、筆者たちと協力し、地域文化の振興を目指し、学校やインターネット上で魚皮製品の展示会を行いたい旨のメッセージを送った。4月3日には、山西伝媒学院の動画制作の専門の大学生たちが、魚皮衣文化のプロモーションビデオを共同制作したいと希望する旨のメッセージを送った。上述したように、WeChat 公式アカウントの作成と動画の公開により、魚皮衣文化の魅力を地域外に広く発信することができた。とはいえ、今回の実践活動を通じて、研究者としての個人の力の微々たるものを深く感じた。今後はより多くの専門家や研究者に対して、筆者たち全員の共同の努力によって、科学的な手法や各種の専門知識を活用して地域の自主的な振興を促進することを訴えかける必要がある。

4.3. 提案の実施評価に基づく今後の方策の導出

以上、本研究は内発的發展論に基づいて街津口村で長い時間をかけて形成され、伝承されてきたホジェン族の魚皮衣文化を再確認・再認識・再評価し、得られた知見を今後の自律的な地域づくりへと活用しようとした。本節では、今後、魚皮衣文化を活用しつつ、自律的地域づくりを持続的に進めるため、提案の実施中に得られた評価をまとめ、今後の第二段階の

方策と第三段階の研究課題をさらに明確にした。

4.3.1. 第二段階の方策の導出

今回のデザイン提案の実施中に行った伝統的魚皮衣文化に関する再認識の質問紙調査の結果、質問項目8および9に基づき、50代と60代の人びとの魚皮衣文化継承への意欲が高まったことがわかった(図6-55)。現在、街津口村におけるホジェン族の総人口は600人に満たない。そのうち、主に高齢者を対象に提案を実施した。しかし、今後、ホジェン族の各年齢層が魚皮衣文化を活用する地域振興を持続的に推進していくためには、さらに具体的な提案の方向性を明確にする重要であると考えられる。また、提案実施の評価としての動画再生回数の調査結果から、人びとが魚皮衣の物語や制作、手づくり体験活動に対する関心が顕著であることがわかった。加えて、提案の実施による魚皮衣文化に関する再認識の質問紙調査、項目6の調査結果から、体験者が魚皮衣の制作・紋様に深く興味を持っていることがわかった(図6-55)。これらを踏まえて、今後の提案方向をさらに明確にした。

今回のデザイン提案の評価を踏まえ、各方面の専門家や展示館の館長、伝承者、関係者と協力して、現地とWeChat公式アカウント上での知見共有の「場」と制作物の再利用を促進することで、2025年から2028年までの3年計画を以下の三点を策定したいと考えている。

(1) 「魚皮衣との物語」をテーマとした動画の制作の実施と公開放映

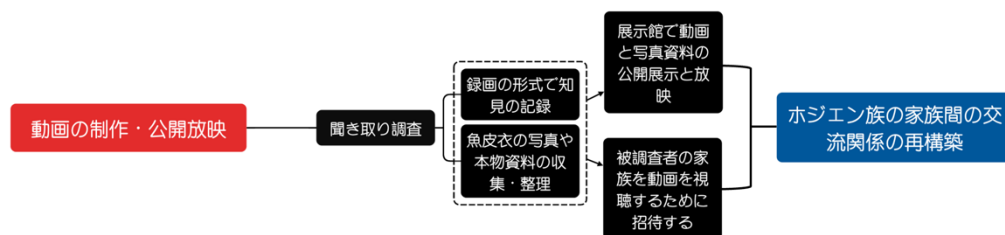
「魚皮衣との物語」をテーマとした動画の制作を実施し、現地とWeChat公式アカウントにおける知見共有の場でこの動画を皆に共有する。詳細な実施内容は、以下の通りである。

(1)実施開始日：2025年5月～

(2)実施地：同江市街津口村、同江市

(3)実施対象者：ホジェン族の老若男女

(4)実施目的：地域内部の交流と地域への愛着を深めると同時に、魚皮衣文化のアイデンティティを確立し、魚皮衣文化への関心を高め、魚皮衣の原点に立ち返る意識を醸成し、さらに地域内で魚皮衣文化への能動的な伝承意欲を向上させたい。そのために、かけがえのない地域資源としての「魚皮衣との物語」を地域活性化に資する共通知識として活用したいと考えている。



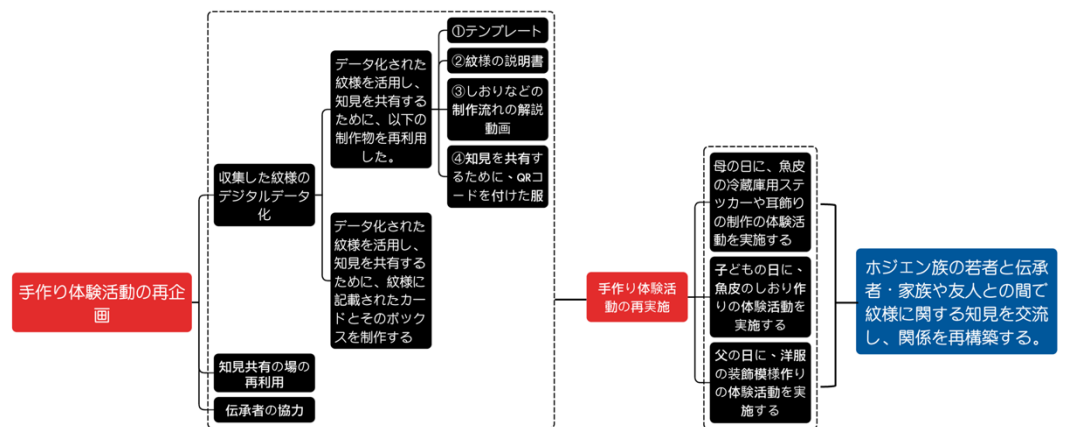
(5)実施内容：まず、街津口村における異なる年齢層のホジェン族の人びとに対して、「魚皮衣との物語」に関する聞き取り調査を行い、その内容を動画のテーマとして撮影し、記録・保存する。次に、昔の魚皮衣の写真や実物を撮影し、動画のなかで展示し、解説する。そして、ホジェン族の人びとに伝えるために、その動画を同江市の非物質文化遺産展示館などで活用する。さらに、収録に携わったホジェン族の人びとを、彼らの若い家族と一緒にその動画の鑑賞に招待する。

(6)期待される効果：同江市におけるホジェン族の人びとと街津口村におけるホジェン族の人びととのつながりを深める。高齢者に限らず、各年齢層の人びとが「魚皮衣との物語」をテーマとした動画制作に参加し、展示館でその動画を鑑賞し、懐かしさに浸り、家族と交流することで、魚皮衣文化への関心と魚皮衣文化のアイデンティティ、そして能動的な伝承意欲の喚起が形成される。

(2) 手づくり体験活動の再企画

前回の手づくり体験活動の実施対象は、主に 40～60 歳のホジェン族であった(伝統的魚皮衣文化に関する再認識調査、質問項目 2 により)(図 6-55)。提案の実施で得られた評価により、参加者の学習意欲が高く、若者の参加意欲が低いことが確認された(質問項目 9 により)(図 6-55)ため、手づくり体験活動を引き続き展開することを検討している。加えて、2019 年のアンケート調査結果から、現時点で若者の魚皮衣に関する知識が不足していることが明らかとなった。したがって、地域の小学生と中学生を対象に、その紋様のデジタルデータを活用して、展示館で1年間を通じて祝日に、魚皮の煙荷包のような形態のポーチ(図 6-56)やしおり、イヤリング、冷蔵庫用ステッカー、洋服の装飾紋様(図 6-57)をつくるという手づくり体験のイベントを計画している。詳細な実施内容は、以下の通りである。

- (1)実施開始日：2025 年 6 月～
- (2)実施地：同江市街津口村、同江市
- (3)実施対象者：ホジェン族の若者(学生)
- (4)実施目的：今後は、現地の伝承者とホジェン族の若者が交流を深め、参加頻度を増やし、子どもが自分の家族や伝承者との交流と相互作用を促進し、伝統的な魚皮衣とその紋様への認知度・関心度を向上させることを目標として以下のような計画をしている。



(5)実施内容：まず、5月の母の日には冷蔵庫用ステッカーやイヤリングづくり、6月1日の子どもの日にはしおりづくり、6月中旬の父の日には洋服の装飾紋様とポーチのつくりの体験イベントを開催する。次に、魚皮衣文化に関する知識を共有するために、筆者から地域の伝承者に提供した紋様のテンプレートや説明書、制作の流れを解説した動画、服を再利用する。それから、完成した作品に関連する紋様のカードとそのボックス(図 6-58)を体験者に贈る。

(6)期待される効果：体験活動での手づくりの種類や活動回数を増やすことで、若者が何度も体験活動に参加することが期待されている。縁起の良い紋様で作ったしおりなどのものを、人びとのお守りとして日常生活で使用し、その制作技術を継承していくことも期待されている。



12.5cm×12.5cm



図 6-56 煙荷包の形態を活用し、デザインしたポーチ



図 6-57 魚皮のしおり、イヤリング、冷蔵庫用ステッカー、洋服の装飾紋様



図 6-58 紋様のカードとそのボックス

(3) 魚皮衣づくりの「場」の再現と活用

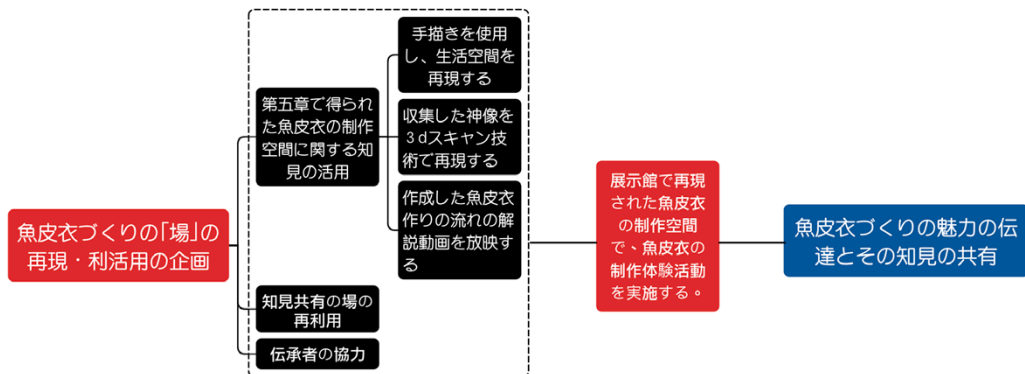
現在、同江市の非物質文化遺産展示館では、魚皮衣の展示エリアと継承教室しか存在しておらず、魚皮衣づくりの体験エリアがない。なお、文献調査と聞き取り調査により、かつての魚皮衣づくりでは、人びとが自然・神との緊密な関係がある生活空間を構築してきたことを明らかにした。しかし、現在、それに関する知見と魚皮衣の制作技術を知っているホジェン族の人びとが少ない(1回目のアンケート調査結果により、質問項目9)。したがって、展示館でかつての魚皮衣づくりの生活空間(場)を再現し、そこでの魚皮衣づくりの体験イベントを開催する。詳細な実施内容は、以下の通りである。

(1)実施開始日：2025年6月～

(2)実施地：同江市街津口村、同江市

(3)実施対象者：ホジェン族の人びと

(4)実施目的：現地調査により明らかにした魚皮衣の制作は、ホジェン族の「人」「自然」「神」「住居」が一体化した空間演出を反映した。その空間演出を再現することで、その知見を現在のホジェン族の人びとに共有することを目指している。



(5)実施内容：まず、手描き(図6-59、図6-60)を使用して、第五章で調査により明らかになった魚皮衣の制作空間の形態と構造を再現する。次に、展示館で魚皮衣の制作空間を再現する。また、かつて、この制作空間にさまざまな神像を3Dスキャン技術で再現し、配置する。それから、人びとの理解を促進するために、今回作成した魚皮衣の制作工程のビデオを展示館で上映し、作成した紙の教材を提供する。最後に、利用者が魚皮衣をつくる過程を体験しながら、多様な道具を使用することで、共同作業の楽しさと信仰の存在を感じることができるよう、人びとに上述の生活空間のなかで魚皮衣づくりの工程を体験してもらう。

(6)期待される効果：展示館で紋様づくりや魚皮衣制作の空間を再現することで、若者を招待し、この空間で魚皮衣の制作技術を体験しながら交流する予定である。この交流空間の構築を通じて、若者が『人』『自然』『神』『住居』が融合した居住空間で、身近な自然資源を活用したものづくりの生活の知恵を理解することを期待されている。

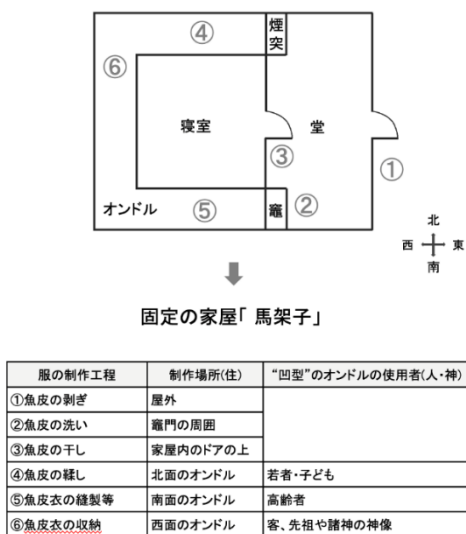


図 6-59 固定の家屋の平面図

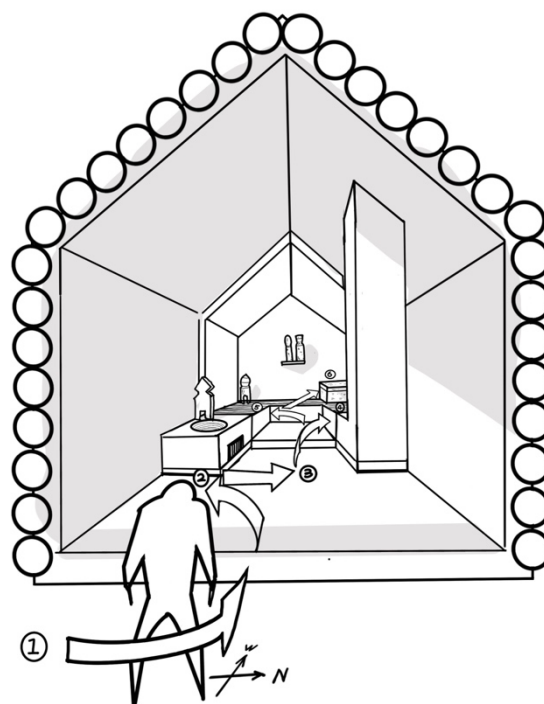


図 6-60 家屋の内部の形態と配置図の再現

・以上の提案を実施し、長期目標として以下を設定する。

- 1) 地域への再発信・魅力の再共有：多様なイベントで地域の魚皮衣の豊かな魅力を伝達する。
- 2) 地域資源との触れ合い：地域資源としての魚皮衣との触れ合いを通じて、ホジェン族の人びとに五感でこれらの魅力を感じることを促す。
- 3) 地域内での関係者の増加と意見収集の強化：より多くの人びとを巻き込み、地域の声をより広く集めることで、方策の質の向上を図ることができる。
- 4) 地域の持続可能性への貢献：地域資源としての魚皮衣文化の効果的な利用を重視し、地域内で持続可能な発展に向けた取り組みを推進する。

4.3.2. 第三段階の研究課題の導出

本研究では、内発的発展論の視点から、「魚皮衣」の文化的特質を明確化し、それらを抽出するため、ホジェン族特有の人・自然・神の共存に基づく資源循環型生活の知恵と価値を中心にまとめた。しかしながら、現代のホジェン族の若者が、長い時間をかけて構築されてきた「魚皮衣」の生活知恵を継承し使用することに関心が低いことは、社会的な課題であろう。この点については十分に論じられておらず、今後の研究課題として取り上げるべきである。今後の研究では、以下の3点に焦点を当てるべきだと考えられる(図 6-61)。

(1) 収集された伝統的な魚皮衣の各部位の紋様とその構造の研究

調査により、一般的魚皮衣の紋様は通常、衣服の正面にしか見られず、狩猟用の儀礼服や結婚服の紋様は主に背中に集中している。狩猟用の儀礼服がこのような構造になっているのは、動物が人を襲う時は後ろからが多いことを人びとが理解しているためだと言われている。

そのため、山に入って狩りをする際には、このような儀礼服を着用する。その紋様は人びとの安全を守る確保する信仰対象であるだけでなく、動物の襲撃を防ぐ役割を果たす。しかし、現在、若者の紋様とその構造に関する関心が低い。したがって、今後、魚皮衣の紋様とその構造に関する知見を主にホジェン族の若者に対して伝えて、地域資源の継承を具体的に提言していくことが今後の課題である。

(2) 収集された伝統的な魚皮衣の材料の内部構造と特性の研究

伝統的な魚皮衣は、材料の利活用を提言することで、今日の社会で実用的価値の可能性がある。本研究で明らかにしてきたように、魚皮衣の制作は1年を通して、地域の魚皮を資源として捉え利活用が行われてきた。また、昔の「魚皮衣」は、実用性と精神性の2つの機能から形成されてきた日常と非日常の服である。しかしながら、今日の生活においては、実用性のある「魚皮衣」の魚皮材料の利用が単一化の傾向にある。このことは、ホジェン族の人びとの魚皮材料の使用価値と、魚皮衣の制作技術への認識不足からなっており、魚皮衣の伝承が危機的となっている重要な原因の1つであると考えられる。そのため、今後、当該地域の魚皮衣文化に関心を持つ伝承者をはじめとしたホジェン族の人びととともに、魚皮衣の材料の内部構造とその防水性、保温性、引張強さなどの特性を中心として分析する予定である。このような取り組みを通じて、ホジェン族の人びとが魚皮の特性をより理解できることを目指している。そして、その特性を現地の若者と共有し、地域資源の継承に関連する提案を共同で導き出したい。

(3) 伝統的な魚皮衣の植物染料の技術の再現と実験的な分析

1回目のアンケートの調査結果から、魚皮の染色技術が消滅の危機に直面していることがわかった。中国政府から認定された唯一の国家級魚皮衣制作技術の伝承者である尤文鳳氏によると、自然環境の破壊により当該地域特有の魚皮染色に使われる植物が消失し、それによって魚皮植物染色技術が失われたという。また、染色技術の消滅がホジェン族の伝統的な魚皮衣の結婚服文化の衰退を促した要因の一つであると考えられている。さらに、ホジェン族の「婚俗」という結婚式の伝承者である呉玉梅氏によると、ホジェン族の「婚俗」はすでに非物質文化遺産に申請されているが、結婚式で使用される魚皮の婚服に関する文字記録はまだ存在していない。したがって、植物染色技術を復元するために、身近な果物の皮や野菜などを活用して魚皮の植物染色の実験を行う。最終的には、地域のホジェン族の人びとと研究結果を共有し、意見交換を行い、魚皮染色技術と婚服、婚俗に関連するコミュニティ活動を展開することで、ホジェン族の若者が地域の魚皮衣文化に対する認識を深め、地域振興を促進する。



図 6-61 今後の研究課題

謝辭

謝辞

本研究及び学位論文は、千葉大学デザイン文化計画研究室の植田憲先生、青木宏展先生の日頃からの格別なご配慮と丁寧なご指導で完成したものです。先生方に教えて頂いた専門知識と実践指導によって、私は博士論文に必要な知識を身につけることができました。そして、研究テーマの確定から文献資料の収集、論文のフレームの構築、研究計画、概要報告の準備、さらに論文初稿、最終稿の内容修正まで、各段階で先生から多くのご協力いただきました。特に本稿執筆の間、先生方と相談するたびに、参考として新しいアドバイスと提案を頂けたので、論文の内容を毎週改善し、より良いものへ高めることができました。そして数十回の修正を経て、ようやく論文の最終稿の内容にまでたどり着きました。本稿の執筆において、先生方の謙虚かつ厳密な学問的態度及び尊敬すべき品格を深く感じられました。先生方の励ましのおかげで、私は研究の道において前向きに進むことができました。この度は植田憲先生、青木宏展先生のご指導に深く感謝を申し上げたく存じます。

また、博士前期課程の際に、審査にあたって頂いた原寛道先生、佐藤浩一郎先生、および博士後期課程の際に、審査にあたって頂いた寺内文雄先生、原寛道先生、溝上陽子先生にも感謝を申し上げたく存じます。本稿の執筆に多くのご指導とご指摘をいただきました。特に論文の内容を充実させるために、貴重なアドバイスとヒントをいただきました。

現地調査にご協力いただいた街津口村のホジェン族の皆様は心より感謝いたします。親切な村民の皆さん、どうもご協力ありがとうございました。現地調査で皆様とともに交流し暮らしたのは、忘れがたい経験です。また、岡本国際奨学交流財団様から多大なご援助を賜りました。生活面において温かいご支援をいただき、心から深く感謝申し上げます。

いままで私の成長を暖かく見守ってくれた、両親の支援と信頼に心から感謝申し上げます。時には、私が意地を張ることもありましたが、寛大に受け入れてくれたことに深く感謝しています。大学卒業後、両親は私がデザイン分野でさらに学びを深めるという決断を支持してくれました。これによって、私は中国の母校での大学院進学や国有企業での仕事の機会を手放すことになりましたが、日本での数年間、研究室においてデザインが地域振興にどのように応用できるかを学び、デザイン学に対する理解を深めることができました。また、慣れない日本で一人暮らしをし、落ち込んでいた際に励ましの言葉をくれた叔父と叔母にも深謝します。同時に、厳しいコロナ禍で帰国が叶わず、家族と再会できない状況下でも、娘を世話してくれた夫と義理の両親に心より感謝しています。支え続けてくれた親族の支援があったからこそ、この重要な研究課題に集中し、博士論文を無事に完成させることができました。

最後に、再び植田憲先生と青木先生、研究室の仲間の皆様に感謝の気持ちを申し上げたく存じます。いつも協力していただいたことに、心より感謝を申し上げます。特に、

研究に関するご指導とご協力をいただいた研究室の方、そして、日本語の訂正をしていただいた千葉市国際交流協会日本語支援ボランティア先生に心から感謝申し上げます。

2024 年 9 月
デザイン文化計画研究室
孔春

付録

第一章の付録：

(1) 「ホジェン族の魚皮衣」に関する史書資料とその文字記載

- ・『山海経』(不明)：春秋戦国時代(紀元前 770～紀元前 221 年)には、人びとは魚皮服飾を着て、カモメを食べていた。
- ・『隋書・契丹伝』(魏徽、636 年)：唐朝(618～907 年)には、人びとは魚皮で服をつくり、キツネやヒョウの皮で帽子をつくり、貂を捕まえて生計を立てていた。
- ・『三朝北盟会編 政宣上帙三』(徐夢莘氏、1122 年)：宋朝(960～1279 年)には、人びとは秋と冬に、魚や牛、馬、豚、羊、猫、犬、蛇の皮を使って服をつくっていた。
- ・『釋氏籍古略』(釋覺岸、1286 年)：元朝(1271～1368 年)には、多くの戦乱があり、魚皮でつくられた服飾が戦場での鎧として使用されていた。
- ・『遼東志・卷九・外志』(任洛、1537 年)：明朝(1368～1644 年)には、人びとは直筒の魚皮服飾を着用し、冬でも夏でも魚皮を使用し、冬季にはカワカマスの皮を好んで使用していた。
- ・『寧古塔山水記』(張縉彦、1660 年)：魚皮部族では五穀を植えず、主に魚を食べ物とし、魚皮でつくられた服は暖かく、牛の皮でつくられた服のようである。
- ・『柳辺紀略』、『寧古塔雜詩』(楊寶氏、1689 年)：魚皮国……魚皮国では貉(犬)の皮は最高である。人びとは魚皮服飾を着て、犬を使って船を漕ぐ。
- ・『寧古塔紀略』(吳振臣、1721 年)：魚皮服飾はとても柔らかくて、なめした後に 5 色に染める。
- ・『遼左見聞録』(王一元、1722 年)：魚皮服飾には色々な紋様と彩色された装飾がある。魚皮でつくる(ウラ)靴を履く。
- ・『欽定盛京通志』(阿桂、1779 年)：スズキは同江と黒竜江の合流した所で生まれ、大きさは 10kg から 100kg である。その皮を剥いで、なめして身につける。
- ・『皇清職貢圖』(傅恒、1805 年)：男性は樺の皮でつくった帽子をかぶり、冬には貉(犬)や狐の皮でつくった帽子をかぶる。女性は兜のような帽子をかぶる。服は魚皮を使って、縁はカラー布を使い、銅の鈴を飾る。服は魚の鎧のようである。
- ・『嘯亭雜錄、和真艾雅喀』(昭連、1822 年)：当該地域の人びとは海辺に住んでおり、魚皮で服をつくり、漁で生計を立てる。
- ・『西柏利東偏紀要』(曹延傑、1883 年)：服にはルール(決まり)がある。紫色が大好きなため、袖口には 2、3 寸の紫色の花帯を帯びて、魚と獣の皮でつくった(ウラ)靴には魚皮でつくった紋様をつける。
- ・『東北辺防緝要』(曹延傑、1886 年)：魚皮衣は満州語で阿庫密魚皮衣と呼ばれる。(阿庫密は黒竜江一帯の原始森林の近くにある川の名前である。)
- ・『吉林通志・ホジェン風土記』(李桂林、1891 年)：1) 草や木でつくった建物のレイアウトは高低・長短などがあって、ふぞろいなことである。一般的に建物は草や木でつくった 1 階建の家に住んでいるが、富裕な人は動物の皮でつくった 2 階建の家に住んでいる。(1 階は住まい、2 階は食物貯蔵用) お酒が好きで、川魚を食し、鹿と魚の皮でつくられた服を着用する。子どもを産むときに、冷たい水で入浴する。女性は装飾が好きで、木でつくった祖先の似顔を敬い、1 年にいくつかの祭りをする。2) 暖かいときはなめし皮で服をつくる。3) 魚皮をなめして、やわらかい綿のようにする。着心地はとても丈夫である。4) 女性は巾着袋(中に小物類を入れ、口を緒でくるくるとした)ものや靴をつくるのが得意である。これは全部魚皮を使って、雲巻

き紋様で飾り、赤に染色し、とても鮮やかである。

- ・『光緒吉林通志』（長順、1891年）：魚を食べ物として、魚皮を服飾にする。……魚皮達子に住んでいる。……人びとはなめし皮で服飾をつくる……主に銛で魚を獲って、魚皮で張られたテントに住んでいる。
- ・『吉林紀事詩』（金陵、明林、1911年）：魚皮は獣の皮と同じくらいの柔らかさで、太陽の5種類の色が互いに照らし合わされ、特別な色彩の光は輪を形成している。
- ・『満洲金石志』（羅福頤、1933年）：漁獲を生計として魚を食し、その皮を使って服をつくる。
- ・『塞外雑識』（馮一鵬、1936年）：魚皮でつくった服飾を着用した人びとは、「魚皮達子」と呼ばれ、五穀を植えず、漁と狩猟の生活を送っていた。魚類が獸類より多かったため漁に網を用いず、漁の季節になると、人びとは灘の上に立ち、浅潮で跳ねている魚を木の棒で打った。傷を負った魚は水流に沿って下流に流れるため下流で塞き止めることで、山のように多くの魚を得ることができた。それらに塩を振って干し、半年貯蔵した魚を食用とし、残りは馬や犬、豚に餌として与えた。また、魚皮を材料として作成した衣服はとても美しかった。

(2) 同江市街津口村での聞き取り調査の概況

- ・5回の現地調査を行い、調査対象者数は合計31人ある。調査内容が表1-2に示すとおりである。
- ・調査の時期：2016. 9. 13～20、2018. 9. 20～31、2019. 1. 5～14、2019. 3. 1～16、2020. 11. 20～

31

表 1-2 聞き取り調査対象

調査対象	性別	調査内容
A1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 魚皮衣の素材の鞣し方 3) 神像の材料と制作方法 4) シャーマンと神服 5) 白樺の活用方法 6) 住居「地窖子」の内部空間配置・構造・サイズ 7) オンドルの内部構造など
B1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 白樺でつくった生活道具の制作方法と使用方法 3) 子どもの頃の漁獵生活に関する話 4) オンドルの使用方法 5) 白樺の樹皮画と魚鱗画の制作方法 6) 魚皮衣の素材であるチョウザメ皮の写真収集
C1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 魚骨画の制作方法 3) 住居「地窖子」の使用方法 4) オンドルの使用方法 5) 神像の写真資料の提供
D1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 魚皮衣の鞣し方、縫い方 3) 樺皮船の写真資料の提供 4) オンドルの実物資料の収集 5) 殺生魚という料理の食材の選び方、制作方法
E1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 神像(約8種)の実物や写真資料の提供

		3) 魚の骨でつくった神像、 4) 白樺でつくったスキーボード
F1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 住居「地窖子」に関する内容調査 3) 小学校の紹介(2020年のデータによると、学生は7人のみである。)
J1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 昔の漁獵生活、山神、昔の住居「地窖子」などに関する調査 3) 書籍資料の収集(「中国ホジェン族撮影集」、黒龍江教育出版社、肖殿昌 2019) 4) 食生活、シャーマン信仰、祭りなどに関する調査
H1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 冬の漁(筆者からの録画の制作) 3) 神像(洞口神など)、ゆりかご、住居「地窖子」、魚楼などに関する調査
I1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 昔の漁獵生活、樺皮船、魚皮靴、オンドル、昔の住居生活、ホジェン族の姓氏、犬橇などに関する調査
J1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 魚皮画と魚骨画の制作方法 3) 白樺でつくった生活道具、神像、住居「地窖子」、犬橇の制作方法、ホジェン語、シャーマンなどに関する調査
K1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査、 2) 食生活、シャーマンの踊り、白樺でつくった生活道具、神像、シャーマン用の神服などに関する調査 3) 民俗画(尤永貴の作品)の実物、たばこを吸う習慣、魚皮の鞣し方、オンドルと烏拉草の使用方法
L1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 魚皮衣の制作方法に関する調査
M1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査
N1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) 犬橇の使用方法、網の使用方法、昔の冬の漁生活、オンドル、神像、食生活 3) 白樺に関する生活道具の使用方法
O1 番	男	1) 冬の漁の記録
P1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
Q1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
R1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
S1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
T1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
U1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活に関する調査 2) シャーマン、結婚式、葬儀などに関する調査
V1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
W1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
X1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
Y1 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
Z1 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
A2 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
B2 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、魚皮衣生活などに関する調査
C2 番	女	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集 2) シャーマン、結婚式、葬儀などに関する調査
D2 番	男	1) 魚皮衣の実物や写真資料の収集、鮭の漁生活 2) シャーマンなどに関する調査
E2 番	女	1) 魚皮衣生活などに関する調査
注：調査回数は複数回あったため、調査対象の年齢は各章の調査対象表で示されたものに基づいていた。		

第二章の付録：

(1) 現地調査で収集した魚皮衣の本物や写真資料

①袖なし上着



R1 番所有

2016 年撮影



L1 番所有

2018 年撮影

②袖あり上着



B1 番所有

2020 年撮影



L1 番所有 2020 年撮影



A1 番所有 2019 年撮影



K1 番所有 2018 年撮影



R1 番所有 2016 年撮影



S1 番所有 2020 年撮影



C1 番所有 2018 年撮影

③ズボン



P1 番所有 2020 年撮影



C1 番所有 2018 年撮影



B1 番所有 2020 年撮影



R1 番所有 2016 年撮影



L1 番所有 2018 年撮影



S1 番所有 2020 年撮影



K1 番所有 2018 年撮影

④魚皮靴



V1 番所有 2016 年撮影



01 番所有 2020 年撮影



C1 番所有 2016 年撮影



P1 番所有 2020 年撮影



R1 番所有



2016 年撮影



魚皮靴を使用した様子

⑤長袍



D1 番所有 2016 年撮影



U1 番所有 2016 年撮影



R1 番所有 2016 年撮影



A1 番所有 2020 年撮影

(2) 狩獵用の儀礼服 2016年 黒竜江省民族博物館で撮影した写真



(3) 文献調査および現地調査によって収集した「魚皮衣」の写真資料



肖氏撮影



A1 番所有

肖氏撮影



L1 番所有

2018 年撮影



T1 番所有と家族

2020 年撮影



L 番が魚皮を鞣した様子 (30 年以前の写真)

2018 年撮影



L 番が制作した魚皮衣 (15 年以前の写真)

2018 年撮影

(4) 現地調査で収集した「魚皮衣の素材」の実物資料



図 2-1 魚皮衣の素材(魚)の一部 2020 年撮影

(左→右 : コイ、コクチマス、ソウギョ、スズキ、ガンユイ、カワカマス、チョウザメ、コクレン)



図 2-2 木の板に貼り付けて乾燥していた魚皮 2020 年撮影

(左→右 : コイ、コクチマス、ソウギョ、スズキ、ガンユイ、カワカマス、チョウザメ、コクレン)

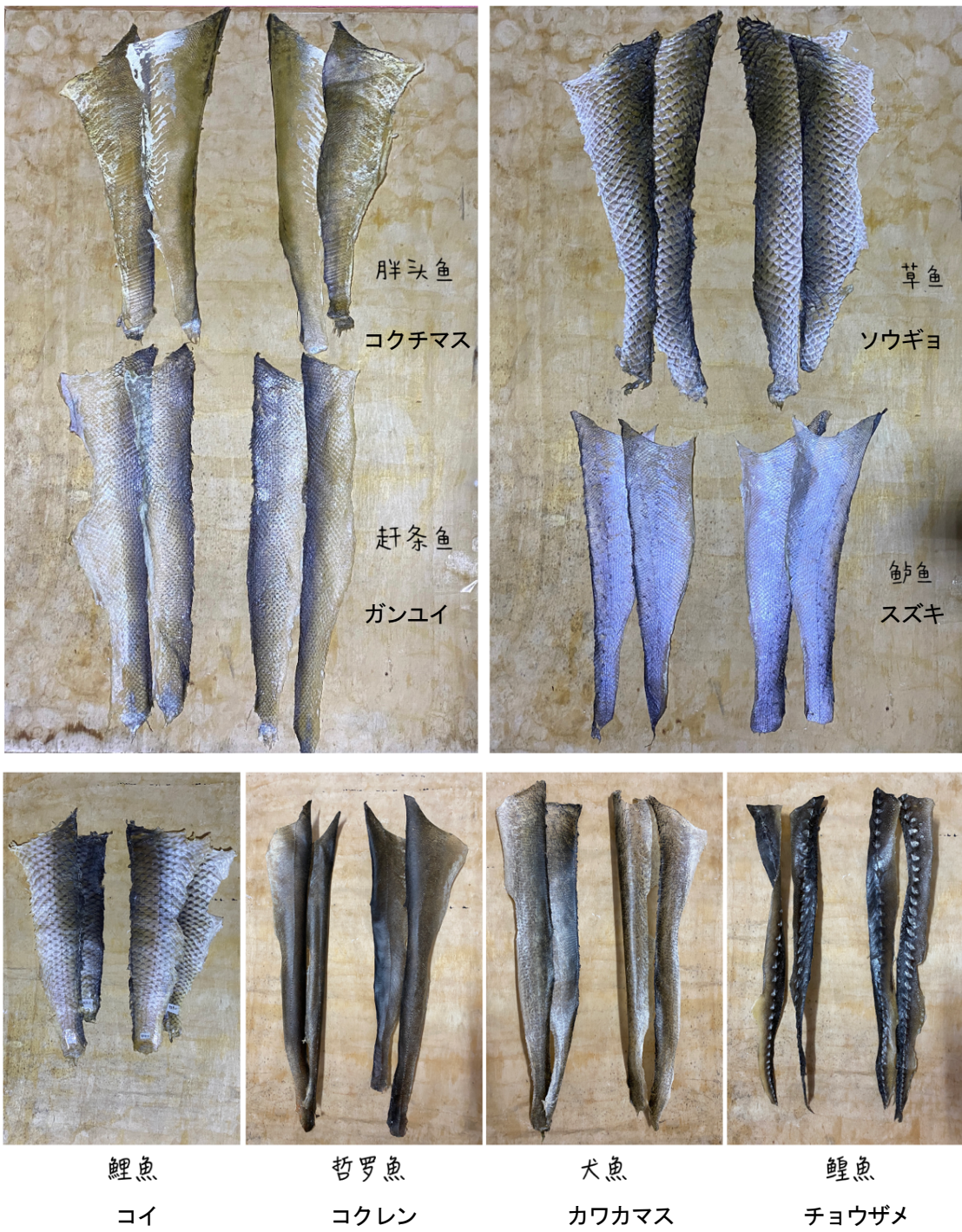


図2-3 乾燥した魚皮 2020年撮影

(5) 現地調査で収集した魚の皮以外の各部位とその活用



図2-4 家禽の飼料として使用された魚の鱗 2018年撮影



図 2-5 村民が収集した鯉の腹椎骨、間鰓蓋骨、上後頭骨 2016 年撮影



図 2-6 魚の前鰓蓋骨と棘条でつくる胡蝶の神像 2018 年撮影



図 2-7 魚の前鰓蓋骨、前上顎骨、棘条などをつくる樹や胡蝶などの神像 2018 年撮影

(6) 現地調査で収集した魚皮でつくる生活用品 (2016 年撮影)



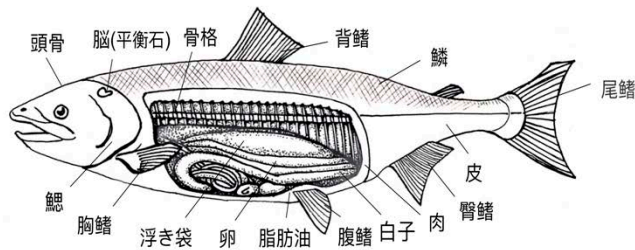
図 2-8 魚皮のつぼ



図 2-9 シャーマン用の神鼓

(7) 現地調査によってまとめた鮭の全ての部位を活用する知恵図・表

・ 例：鮭 (damaha) : a. 生息地 b. 魚皮衣素材



頭骨	脳部の平衡石	鳃	浮き袋	白子	卵	骨格	肉	脂肪油	皮(服)	皮(生活品)	鱗	鳍部
魚骨画	新生児のお守り	食	食	食	食	魚骨画、服のボタン、飾り物、食	食	防水功效(船、窓)	袖なし上着、上下2点セット、長衣、靴、帽子、肩掛け、袖帯、手袋、腹巻き、エプロン、ゲートル、烏喇靴等	皮窓、窓飾り、カレンダー、飾り物、でんでん太鼓、テント、船の帆、酒瓶、シャーマン太鼓、匂い袋、火袋、糸、神様、生食等	家畜のカルシウムを補う食材	食



鮭の肉: 「殺生魚」と「魚毛」料理



鮭の骨: 魚の骨工芸、飾り物



鮭の鱗: 家畜のカルシウムを補う食材

第三章の付録：

(1) 文献調査によって収集した葬儀と病気の治療儀式に関する民俗画



図 3-1 葬儀の魂送りの儀式



図 3-2 病気の治療儀式

- ・参考資料：ホジェン族民俗画、黒竜江省美術出版社、白庚勝、2006
- ・上記の図 3-1～図 3-2 で示した絵は、ホジェン族の尤永貴氏(1911 年生まれ)が 1988 年描いた民俗画である。

(2) 文献調査および現地調査によって収集した「木製の神像」の写真資料



図3-3 ホジェン族の諸神像 肖氏撮影 1995年

(左から右に：天の神、魔除けの神、事を管理する神、鷹の神、狩猟の神、
龍の神、川の神、風の神、悪魔を管理する神、火の神、
虎の神、吉星の神、先祖の神、地の神、樹の神)



図3-4 天の神像



图 3-5 吉星の神像



图 3-6 山の神像



图 3-7 川の神像



图 3-8 山峡の神像(男神・女神)



图 3-9 房山の神像(家を守る神)



图 3-10 狩猟の神像(猟師を守る神)



图 3-11 アイミの神像



图 3-12 悪魔を管理する神像

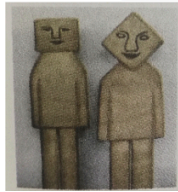


図 3-13 かまどの神像

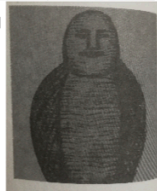
鑽洞神



洞口神



塔頭神



先祖神

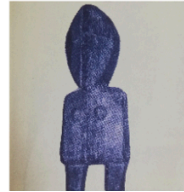


図 3-14 その他の神像(穴の神、穴口の神、塔頭の神、先祖の神)

第四章の付録：

(1) 文献調査によって収集した「ホジェン族の漁獵・狩猟生活」に関する写真や民俗画の資料

・参考資料：ホジェン族風俗画、黒竜江省美術出版社、白庚勝、2006

・下記の図4-1～図4-8で示した絵は、ホジェン族の尤永貴氏(1911年生まれ)が1988年描いた民俗画である。



図4-1 冬の漁



図4-2 鉞で漁をする様子



図4-3 鉤で漁をする様子

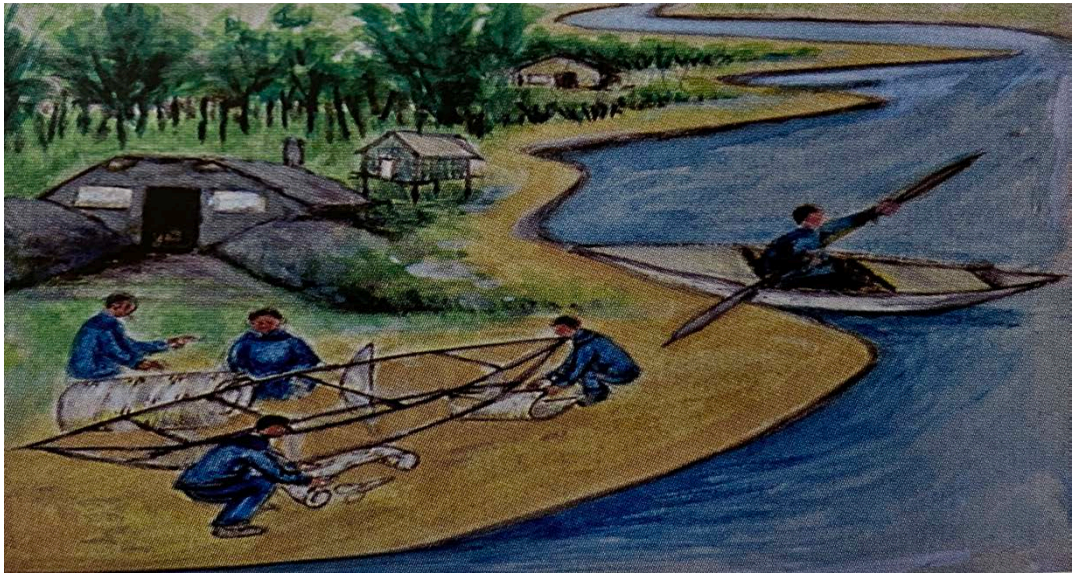


図4-4 船をつくる姿



図4-5 チョウザメを捕る姿



図4-6 (左) 男性の漁具や狩猟道具を触ることができない女性
(右) オンドルで魚皮靴を縫う女性



図 4-7 漁場で男性が凍魚片をつくり、年配の男性が冬の漁をする姿



図 4-8 冬に男性が白樺の樹幹でつくったスキー板を履いてノロを捕獲した姿

(2) 文献調査によって収集した「樺皮船の制作の流れ」の写真資料



図4-9 樺皮船を制作し、使用した様子 肖氏撮影

(3) 現地調査で収集した「漁具・家屋など」の写真資料



図4-10 犬そり(雪上の運搬具、移動手段) 2020年撮影



図4-11 氷穿子(左)と氷崩子(右) 2020年撮影



図 4-12 冬に網を下ろす際に使用する穿通棒 2020 年撮影



図 4-13 網を下ろす場所で木の枝でつくった目印 2020 年撮影



図 4-14 木材をしっかりと固定するために使用される道具 2020 年撮影



図4-15 ブランコ 2020年撮影



図4-16 ハシゴ(家屋の修繕などの際に使用する道具) 2020年撮影



図4-17 魚の貯蔵のための道具「魚楼」 2020年撮影



図 4-18 廃棄された「魚楼」 2020 年撮影



図 4-19 固定の家屋「馬架子」 2016 年撮影



図 4-20 臨時の家屋「地窖子」 2016 年撮影



図 4-21 廃棄された「地窖子」 2016 年撮影



図 4-22 臨時の家屋「地窖子」で魚を貯蔵する様子 2016 年撮影



図 4-23 シャーマン用の仮面 2016 年撮影

(4) 聞き取り調査によってまとめた白樺の全ての部位を活用する知恵表 4-1

各部位	樹幹									樹枝	樹の汁	樹の葉
種類	鼓槌	神像	パドル	臨時の住居	木鋸刀	空谷	薪	鏡の裏手	口弦琴	箭	飲み物	薪
類型	シャーマン		漁猟・狩猟		衣		食	住	音楽	狩猟	食	

各部位	樹皮																													
種類	鹿笛	ノロ笛	船	網の浮き	氷川	犬ぞり	スノーボード	擬餌鉤	釣り籠	腰刀の鞘	帽子	風葬用	樹葬用	鼓	仮面	揺かご	カレンダー	敷物	扇	絵箱	魚楼	壺	桶	椀	ケース	盆	皿	コップ	レードル	漏斗
類型	漁猟・狩猟										葬礼	シャーマン	赤子	住	衣 食															

・表 4-1 で示したように、白樺の樹幹は神像の素材として使用されるほか、その各部位をホジエン族の日常の「衣食住」と「漁猟・狩猟」の生活、および人生儀礼や祭りなどの非日常生活のなかでも利活用される。

(5) 現地調査によって記録した「稠李子餅の制作方法」



かまどの神祭り 街津口村民俗博物館で撮影 「稠李子餅」

図 4-24 供物や正月料理としての「稠李子餅」 2018 年撮影



図 4-25 魚毛とセアノサスの果実でつくる「稠李子餅」 2018 年撮影

第五章の付録：

(1) 現地調査で収集した魚皮衣づくりに関する写真資料



図 5-1 約 60 枚の鞣した鮭の皮 2019 年撮影



図 5-2 魚皮の裁断 2019 年撮影



図5-3 魚皮の裁断 2018年撮影



図5-4 魚の皮縫い 2019年撮影



図5-5 魚の皮の組み合わせ・縫い 2018年撮影



図 5-6 魚の皮縫い 2019 年撮影



図 5-7 紋様の貼り付け 2019 年撮影

(2) 現地調査で収集した皮鞣し道具「木鋸刀」



図 5-8 「木鋸刀」 D1 番所有 2018 年撮影



図 5-9 「木鋸刀」 左：L1 番所有、右：E2 番所有 2018 年撮影



図 5-10 「木鋸刀」 民俗博物館所有 2016 年撮影



图 5-11 「木鋸刀」 C1 番所有 2018 年撮影



图 5-12 「木鋸刀」 A1 番所有 2020 年撮影



图 5-13 「木鋸刀」 R1 番所有 2020 年撮影

(3) 現地調査で収集した「樺皮箱」



図5-14 2018年に街津口村で撮影した「樺皮箱」



図5-15 白樺の樹皮でつくるシカや胡蝶などの図柄で装飾されていた「樺皮箱」

(4) 調査資料によって構築した魚皮衣の制作過程とその道具の関係図



(5) 魚皮の加工に関する解説動画の作成



図 5-16 魚皮の乾燥方法に関する解説動画の作成



録画の収集・整理

1) 切り方 2) 皮を剥ぎ方 3) 残った肉を取り除き方 4) 皮を洗ひ方 5) 皮を干し方

図 5-17 魚皮の剥ぎ・洗淨・乾燥の方法に関する解説動画の作成



図 5-18 魚の皮鞣しの方法に関する解説動画の作成

終章の付録：

(1) 1 回目のアンケート調査での自由回答の設問 17

・質問項目 17：今後、伝統的な魚皮衣文化を伝承し活用する内発的地域振興に対して、ご意見について、ご回答ください。(回答者数 72 人)

- 1) 伝統的な魚皮衣文化を広く宣伝するべきである。
- 2) 伝統的な魚皮衣文化が伝承されるべきである。
- 3) 魚皮衣の制作方法が複雑で、将来、ホジェン族の若者がそれを学びたい場合でも、まずホジェン語を学ぶべきだと考える。その理由は、ホジェン族の言葉が文字をもたず、ホジェン族の若者がホジェン語を徐々に忘れていく可能性があるためである。また、現在では、ホジェン族の人口も少ないため、今後、私がホジェン族の一員として同民族の伝統的な魚皮衣文化を伝承していくことは重要なことである。
- 4) 魚皮衣の制作技術は非常に繊細かつ精彩に富むため、私たちはその制作技術を継承するとともに、次世代にその制作方法を伝えるべきだと考える。
- 5) 今後、魚皮衣に関する継承者を増やすことができると期待している。
- 6) なし
- 7) 魚皮衣文化の伝承者について、より若い継承者を育てる必要がある。
- 8) 魚皮衣が非常に魅力的なため、今後も人びとに継承されるべきだと考える。また、魚皮製の用品がより良く活用されるべきである。
- 9) 魚皮衣に関わる工房を設立するべきだと考える。その工房を通して、収入を得られるだけでなく、伝統的な魚皮衣文化を継承していくことも重要である。
- 10) 魚皮衣に関する若い継承者が増えることを期待している。
- 11) 魚皮衣に関する後継者の育成を希望している。
- 12) 政府から魚皮衣は非物質文化遺産として認定されているが、その制作方法を学ぶ広報活動が少ない。地方政府がこれに関する記録映画を作成し、公開した。これにより、街津口村地域外に住むホジェン族の人びとが、ネットワーク上でその制作方法を学ぶことができるようになった。しかし、人と交流し、学習する機会が少ない。今後、古来より伝わる同民族の固有の文化としての魚皮衣が継承されていくことを希望している。継承する前提として、まず継承者を保護し、良い伝習空間を提供して支援し、彼らがこの仕事に集中できるようにする。次に、定期的な講演を企画し、魚皮衣文化の広報を拡大する。さらに、WeChat、ショートビデオ、ライブ放送などの新しいメディアを利用して、魚皮衣の制作技術を広める。最後に、紙の資料や本を作成し、無料で配布する。
- 13) 魚皮衣は、ホジェン族の文化的価値を反映するだけでなく、現代のビジネスにおいてもその価値を創造し長く継承されていくべきだと考える。
- 14) 学校で魚皮衣の制作技術を学ぶ手づくりの教室を設置し、展示会を定期的に行うようにしたい。
- 15) 身の回りのホジェン族の人びとが魚皮衣文化を継承していくことが望ましい。
- 16) 魚皮衣が忘れ去られないように望んでいる。
- 17) 魚皮衣の伝承がより活発になり、その継承者が増加し、長期的に受け継がれていくべきだと考える。
- 18) ホジェン族の人びとがこのことにより関心を持つべきであり、政府もこれにより注力すべきである。
- 19) 魚皮衣文化を発展することを期待している。
- 20) 魚皮衣の制作技術を学ぶコースをより増やしてほしい。
- 21) 伝統的な魚皮衣文化を保護しつつ、それと同時に革新することを目指す。政府がこのことに注目することを希望している。また、彼らの熱意を結集するために、国家が魚皮衣文化の継承者育成を奨励することを

望む。

22 魚皮衣文化は伝承されるべきだと思う。

23) 魚皮衣は、ホジェン族の人びとが型紙を描くことから、飾り物の制作までさまざまな制作工程を経て、自らの手で制作して仕上げていく複雑な服飾である。そのため、これをホジェン族独自の文化として継承していくべきだと考える。

24) 現在、伝統的な魚皮衣文化が我々の世代で失うことができないように、政府には魚皮衣文化への注目を一層高め、教室を設けてさまざまな活動を企画・開催することを期待している。

25) より多くの人が文化遺産としての魚皮衣を好きになるよう、ホジェン族の人びとがそれを継承し後代に伝承していくべきである。

26) 魚皮衣は文化遺産に属し、継承され続けていく必要がある。

27) 魚皮衣文化について、より多くの人に周知することを希望している。

28) より多くの人が魚皮衣文化について知ることを希望する。

29) 魚皮衣文化が受け継がれるべきである。魚皮衣を作ることを好きな人が増えることを期待している。

30) 魚皮衣の伝統を消失させないために、魚皮衣の文化的特質を広く社会の人びとに周知し、それに関する各種活動を創出することが望ましい。たとえば、ワニの皮や牛の皮に比べて、魚の皮を服の素材とする利点は何か。今後、魚皮素材の利点を活かして適切な生活用品をつくることも重要である。

31) 人びとが子どもの頃から魚皮衣文化を伝承する意識を育てる必要があると考えている。

32) 魚皮衣が重要視されることを希望している。

33) ホジェン族の手づくりの文化としての魚皮衣の継承者が増えることを希望している。

34) 魚皮衣は、長い歴史を持つホジェン族の文化の重要なシンボルである。より多くの人が魚皮衣文化について知ってほしい。また、この文化や制作技術が継承されることを心から望んでいる。

35) 魚皮衣文化を、次世代に伝えていくべきだと考えている。

36) 魚皮衣文化の伝承について、積極的に推進すべきである。

37) 専門学校で魚皮衣文化の授業を実施することを期待している。

38) 伝承者への財政支援を強化するべきである。

39) 魚皮衣文化の保護に力を入れるために、学校で学生の課程として魚皮衣についての授業を推進するべきだと考える。

40) 若者は、文化遺産としての魚皮衣文化を伝承し、守るべきだと考える。魚皮衣文化の伝承はホジェン族の人びとの責任である。それを伝承することは、複雑かつ工夫が必要であるため、ホジェン族ではあらゆる人びとが小さな頃からそれを継承するべきだと考える。

41) 具体的な考えがない。

42) 魚皮衣の制作方法が受け継がれることを希望している。

43) ホジェン族の全員が魚皮衣の継承に参加できることを期待している。

44) 現在、ホジェン族の伝統的な物語というイマカンに関する学習場所があるが、魚皮衣に関してこのような学習場所があれば良い。また、教師や伝承者はそれを教えるべきである。政府はそれに注目し支援すべきだと考える。

45) 魚皮衣の制作工程をより多くの人に理解してほしい。

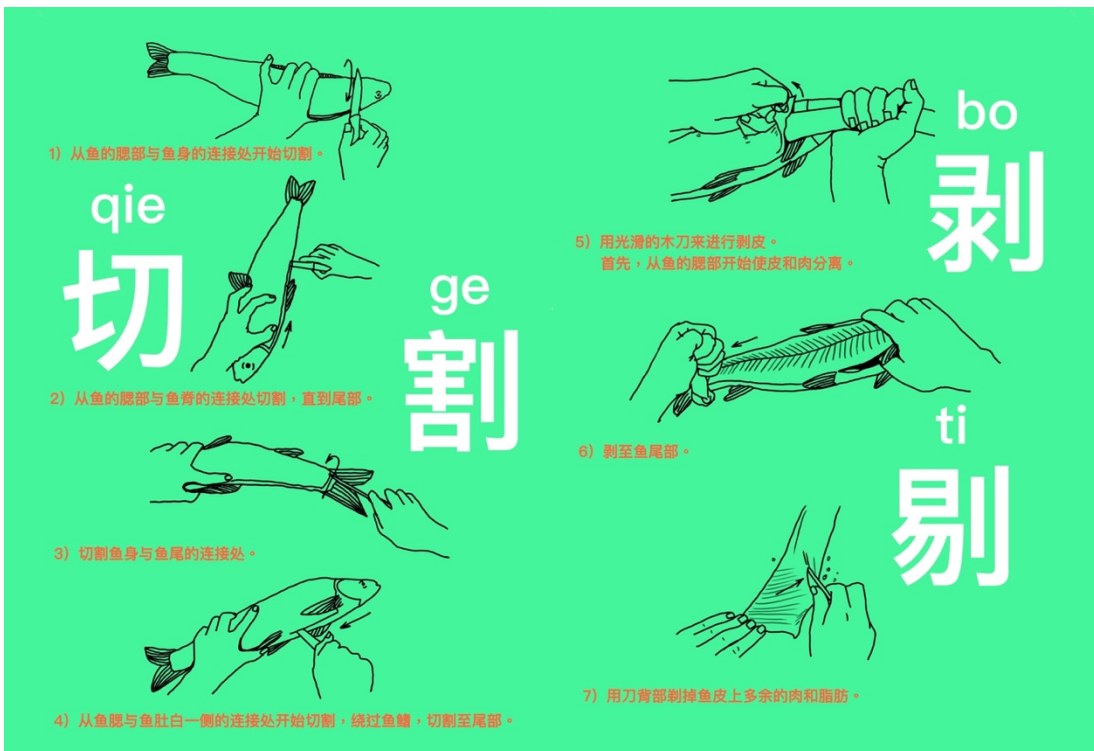
46) 魚皮衣の保護を強化することを希望している。

47) 魚皮衣を保護することを希望している。

48) 将来的には、ホジェン族の魚皮画もより多くの人に知ってもらいたいと考えている。それを自身の次の世代が忘れずに継承してくれることを願っている。

- 49) 伝統的な魚皮衣文化がこれからも受け継がれることを期待している。
- 50) 魚皮衣が時代に合えば着たい。結婚するときしか魚皮衣を着ておらず、普段はあまり着ていない。魚皮衣は時代の産物だが、現在の時代に合わなくなってしまった。
- 51) 魚皮衣がとても好きのため、受け継いでいきたい。
- 52) 魚皮衣文化をきちんと受け継いでください。
- 53) 魚皮衣を歴史上の文化遺産として絶やしてはいけない。
- 54) 私は、国家政府がより多くの魚皮衣の伝承者を保護し、支援して、より多くの人を育成し指導することを希望する。マルチセクターの複数のメディアが広報を行う必要があると考える。
- 55) 魚皮衣文化を次世代へ伝えたいと考える。
- 56) 魚皮衣の制作技術について、より多くの人に知らせることを希望している。
- 57) 魚皮衣文化の継承と発展は、中国の社会全体の人びとに注目されるべきだと考える。人びとは魚皮衣の制作技術を継承する必要性と重要性を認識する必要がある。また、昔から現在までに伝承されてきた魚皮衣の制作技術を失わせないことは、ホジェン族の全員の責任と義務である。
- 58) 魚皮衣文化が保護されることを希望している。
- 59) 魚皮衣文化がますます発展することを期待している。
- 60) 魚皮衣をより多くの人に知らせることを希望している。
- 61) 伝統的な魚皮衣の文化を忘れないでほしい。この文化をホジェン族の世代間で継承していくことを望んでいる。
- 62) 今後、魚皮衣文化が大きく発展するべきだと考える。
- 63) ホジェン族の魚皮衣は重要な文化遺産である。それを保護し、継承し続けるべきだと考える。政府が学習者に資金の支援を与える必要がある。また、それはより多くの人々が魚皮衣文化を学習したいという関心を向上させる良い方法である。
- 64) 伝統的な魚皮衣文化は、ホジェン族の文化を体現する。伝統的な魚皮衣文化は世代間で伝承されるべきだと考える。また、魚皮衣の保護には、国家と人びとからの注目が必要である。伝承者を育成する必要がある。
- 65) 魚皮衣はホジェン族の重要な文化の一つであり、先祖から伝承されてきた技術である。それを失わないために、継承し続けるべきだ。政府は魚皮衣の制作技術を保護するために一層努力する必要がある。より多くの人々が魚皮衣文化を継承していくべきだと考える。
- 66) 伝統的な魚皮衣文化は保護・継承されるべきだ。現在、私は継承者ではないが、ホジェン族の一員として、私の世代に伝統的な魚皮衣の文化を失わせることはできない。
- 67) 現在、継承者は高齢化しているため、魚皮衣の制作技術に関心がある若者には、この文化を引き継いでほしいと考えている。このような貴重な文化遺産を消失させるわけにはいかない。
- 68) 政府とより多くの人々が文化遺産である魚皮衣とその制作技術を重要視することを希望している。今後、皆がそれらを広く広報することを期待している。
- 69) 人びとが魚皮衣文化を継承し続け、守ることを希望している。
- 70) ホジェン族の文化を理解してもらうために、伝統的な魚皮の制作技術がより多くの人に伝わることを希望している。
- 71) 中国少数民族のうち、魚皮衣を身体にまとっている民族は、ホジェン族しかいない。ホジェン族である私たちはこのことを誇りに思っている。
- 72) 人びとの十分な保護を受ける必要があり、優れた伝承者を見つけることができれば、ホジェン族の魚皮衣文化は消失しないと考える。

(3) パンフレットの最終版



xi 洗



8) 用清水洗三遍，然后用手揉搓去掉鱼鳞。

xi 吸



tie 贴

9) 将鱼皮贴在木板上铺平，从背部鱼皮开始贴，贴到尾部，使得背部鱼皮与地面保持垂直。



10) 鱼皮晾干后，将鱼皮放在玉米面里稀释鱼皮上的油脂。

juan 卷



11) 将4~6枚鱼皮叠在一起，每一层放上玉米粉。



12) 然后，将它们卷成一个卷，用绳子捆绑住。

ya 压



13) 加工鱼皮的时候，需要2人配合，一人手拿鱼皮卷，放在工具上，使鱼皮卷前后，左右的转动。另一个人，需要抬起工具，再放下。数百遍的重复着。

zhuan 转

cuo 搓



14) 鱼皮经压制变软以后，再用手揉搓的方式来使皮变得更软。

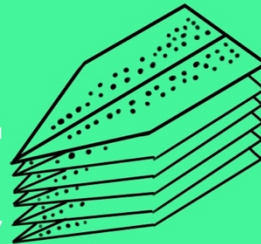
jian 剪

15) 以最节省鱼皮的方式，将鱼皮裁剪成如图所示的规则形状。

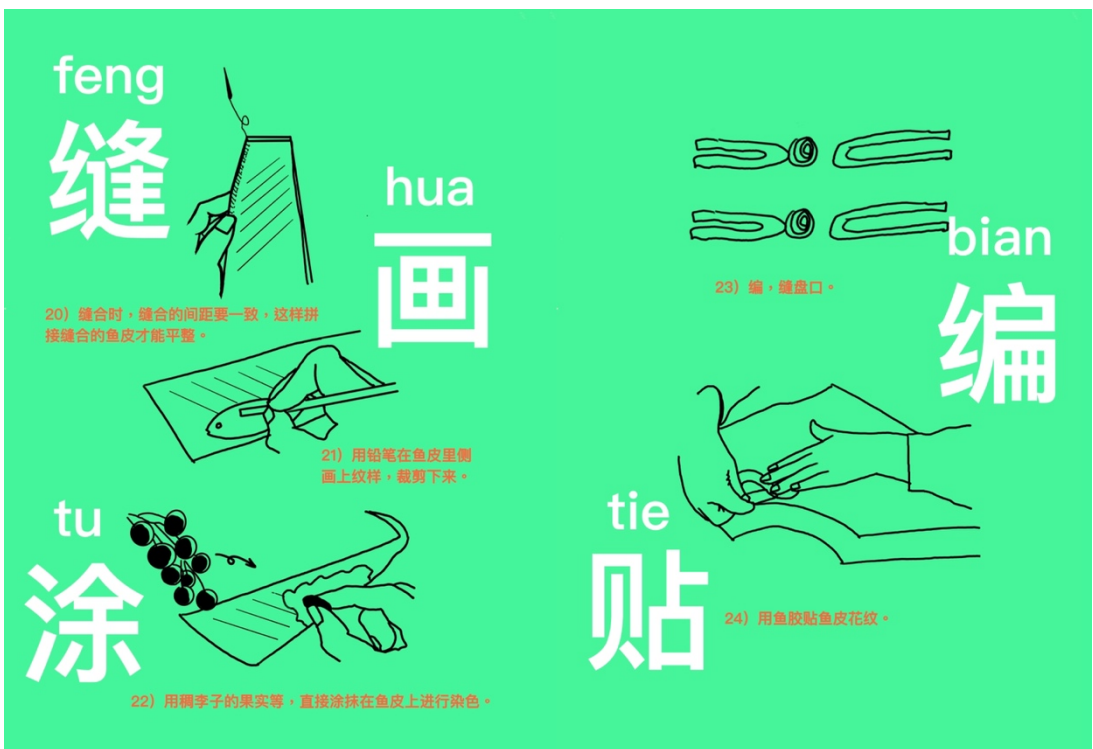
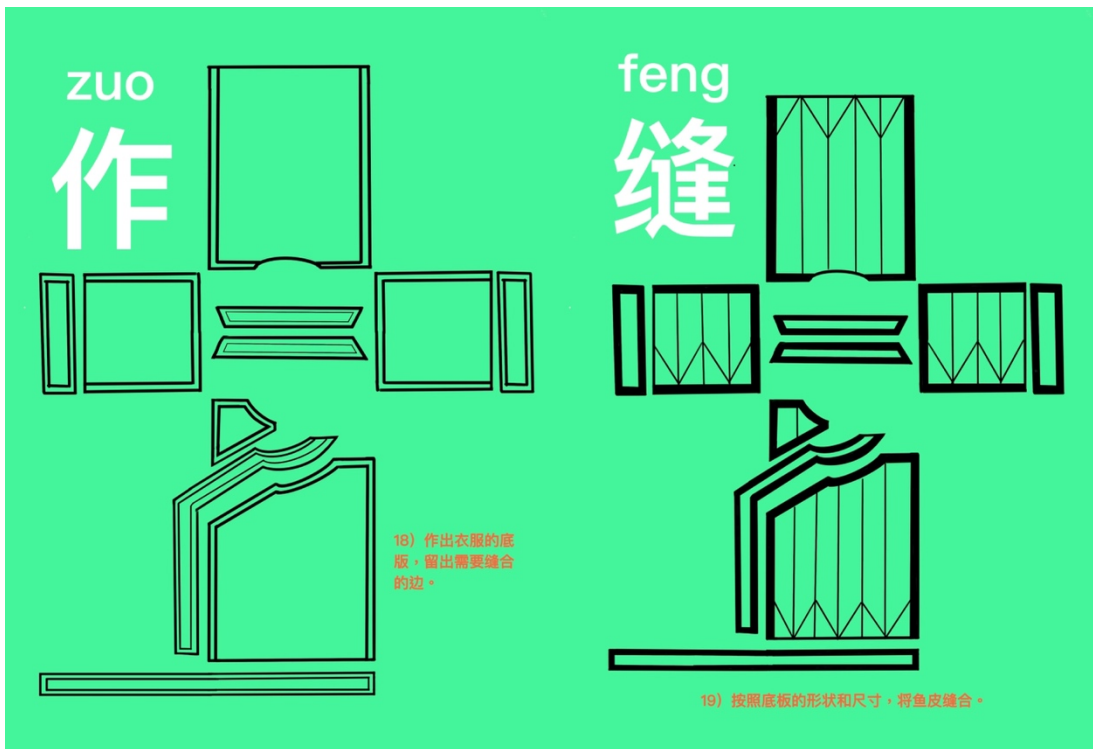
feng 缝

16) 将裁剪好的鱼皮，俩俩对称性，拼接缝合。

yun 熨



17) 将缝合后的鱼皮放在臀部底下，将其压平整些。



(4)

(4)-1: 魚皮衣文化に対する認識調査結果の共有のために作成したスライドの一部の内容

Research Report

研究课题汇报交流会

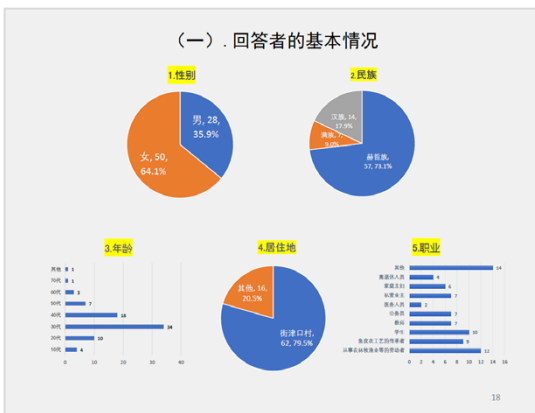
2016-2024

【赫哲族传统鱼皮衣文化】

主讲人/孔春

一、“人们对鱼皮衣文化的保全·传承的意向”的调查结果分享

(一)	回答者的基本情况
(二)	对于鱼皮衣, 及其纹样的认识
(三)	对于鱼皮衣制作的认识
(四)	对于学习鱼皮衣制作的意向
(五)	对于鱼皮衣使用的意向
(六)	对于学习鱼皮衣文化的意向
(七)	对于鱼皮衣文化的保全和传承的意向



考察结果:

- 1) 回答者78人, 今后, 都想去保全和传承传统鱼皮衣文化。
但是, 约40人不会制作鱼皮衣。
→今后, 加强有关学习制作鱼皮衣的体验或传习活动是有必要的。
- 2) 关于鱼皮衣的认识上, 非常了解的人只有27人, 主要了解鱼皮衣的制作和造型。
而, 在鱼皮衣的颜色, 种类, 非日常的使用上, 不了解人非常多。
→今后, 加强鱼皮衣的颜色, 种类, 非日常中的使用相关内容的交流活动是有必要的。
- 3) 今后, 对于学习鱼皮衣制作的活动中, 想参加的人最多, 43人。
主要想在博物馆, 民俗馆, 展览馆等地进行学习。
学习方式上, 主要通过传承人言传身教, 边体验制作, 边看相关资料的方式去学习。
并且, 人们对于鱼皮衣制作流程中, 鱼皮的裁剪, 拼接, 缝合, 纹样的染色和粘贴很感兴趣。
→今后, 利用当地博物馆, 展览馆, 作为学习鱼皮衣制作的体验交流活动的场所是有必要的。同时, 鱼皮衣制作相关的学习资料的制作也是有必要的。

考察结果:

- 4) 今后, 人们想了解鱼皮衣文化的制作流程, 历史变迁和纹样的人最多。
→今后, 除了加强鱼皮衣制作的交流, 传承活动以外, 加强其历史变迁和纹样相关内容的交流, 传承活动是有必要的。
- 5) 会制作鱼皮衣的人, 主要是从传承人和母亲那里学习到的。
即, 近年来传承人, 在鱼皮衣制作的传习活动中起着重要的作用。
→今后, 对于传承人的保护, 以及支援传承人的传承事业是有必要的。



●您对于传统鱼皮衣的纹样的认识?

以下的图案中, 哪些不是传统鱼皮衣的纹样?

(4)-2: 魚皮衣文化に対する認識調査結果の共有

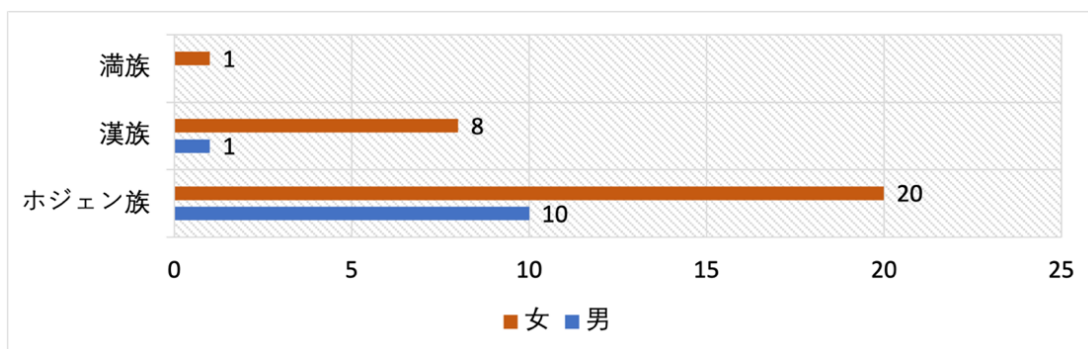


(4)-3: 口頭による意見陳述の整理

調査対象	年齢	性別	民族	職業	認知調査結果の共有に対する感想・意見
A 番	70 代	女	ホジェン族	魚皮衣制作の技術伝承者(国家級)	今回の交流活動を通じて、私と弟子たちも多くのことを学んだ。たとえば、魚皮衣文化の伝承に関する多くの課題や、皆が魚皮衣制作を学びたいというニーズを理解した。私たちはこのような交流活動が大変好きだ。なぜなら、それが魚皮衣文化の伝承の重要性をより深く理解させてくれるからである。
B 番	50 代	女	ホジェン族	魚皮衣制作の技術伝承者(市級)	被調査者の魚皮衣の制作に対する学習意欲を理解したことで、私たちは伝承活動に対して、より意欲的に取り組むことができる。そのため、私たちは伝承者として、調査結果に基づき、より適切な活動を共に企画する必要があると思う。
C 番	60 代	女	漢族	魚皮衣制作の技術伝承者(市級)	今回の交流活動を通じて、私たちはホジェン族の人びとの魚皮衣の制作に対する学習意欲をより深く理解することができた。今後、関連する伝承活動を企画し、制作技術をより多くの人びとに伝授する必要性を認識した。
D 番	60 代	女	漢族	魚皮衣制作の技術伝承者(県級)	魚皮衣の制作技術を継承することが急務であることを認識し、継承者として、それを伝承していくべきだと思う。
E 番	60 代	女	漢族	魚皮衣制作の技術伝承者(県級)	国家無形文化遺産の一つとしての魚皮衣文化の伝承における課題は、後継者不足の問題であり、ますます顕著になってきている。後継者不足の問題の解消に努めるべきだと思う。
F 番	60 代	女	漢族	魚皮衣制作の技術伝承者(県級)	伝統的な魚皮衣の制作技術は、時代に合わせながらも、私たちが続けている活動以上に強く守られ、受け継がれていく必要がある。
G 番	60 代	女	ホジェン族	魚皮衣制作の技術伝承者(県級)	調査結果を共有したことで、ホジェン族の魚皮衣の制作技術の継承を現在も人びとが大切にしていることが深く認識できた。今後、魚皮衣文化の伝承活動を積極的かつ持続可能に推進することが非常に必要である。私はその伝承活動に積極的に参加し、民族文化の伝承に貢献していきたいと思う。
H 番	50 代	女	ホジェン族	無職	今回の学習や意見交換を通じて、将来は魚皮衣の制作に関連する活動に積極的に参加したいと思う。
I 番	60 代	女	ホジェン族	無職	今回の交流は私に大きな影響を与えた。私は身をもって魚皮衣文化を伝承し、それを貫くべきだと思う。

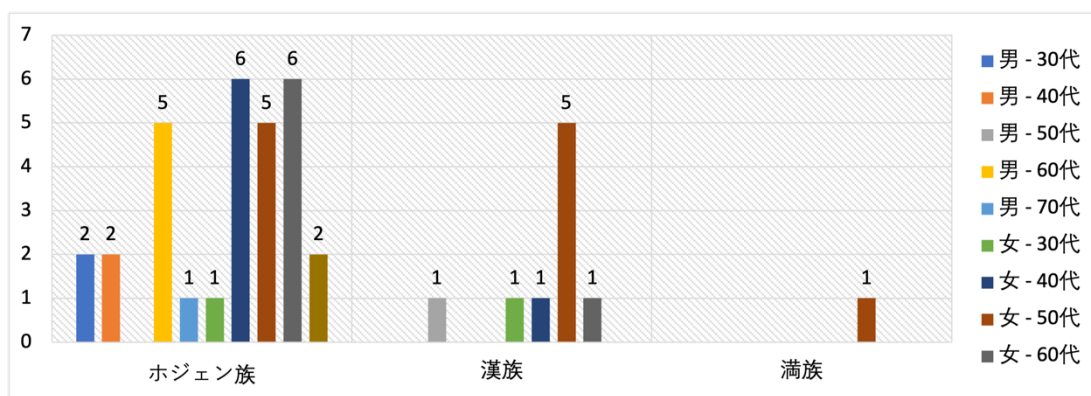
(5) 伝統的魚皮衣の紋様に関する認知調査
 (5)-1: アンケート調査結果(回収 40 部)

1) 項目 1. 民族と項目 2. 性別



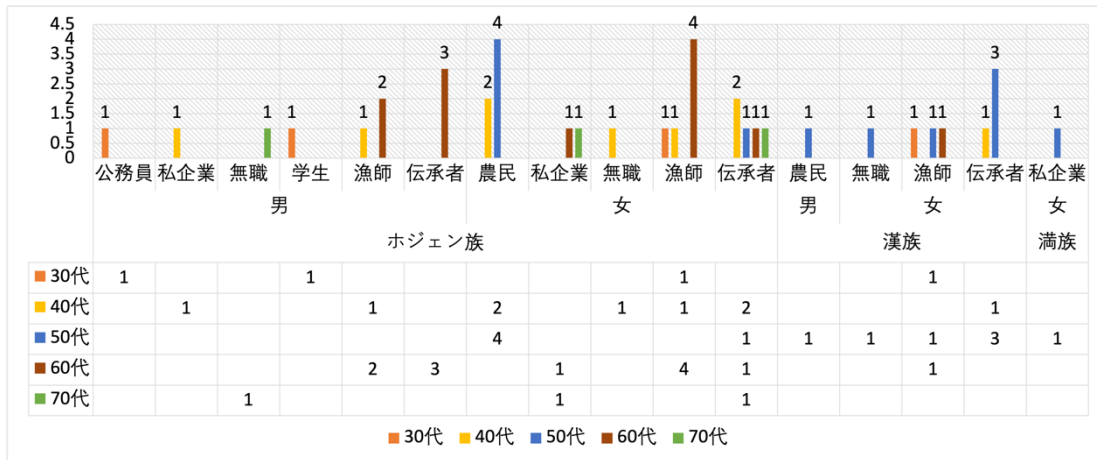
- ・回答者数は 40 人であった。民族別では、ホジェン族が最も多く、30 人であった。そのうち、女性が多く、20 人であった。
- ・一方、漢族が 9 人で、そのうち女性が多く、8 人であった。満族が最も少なく、1 人であった。

2) 項目 1. 民族・項目 2. 性別と項目 3. 年齢



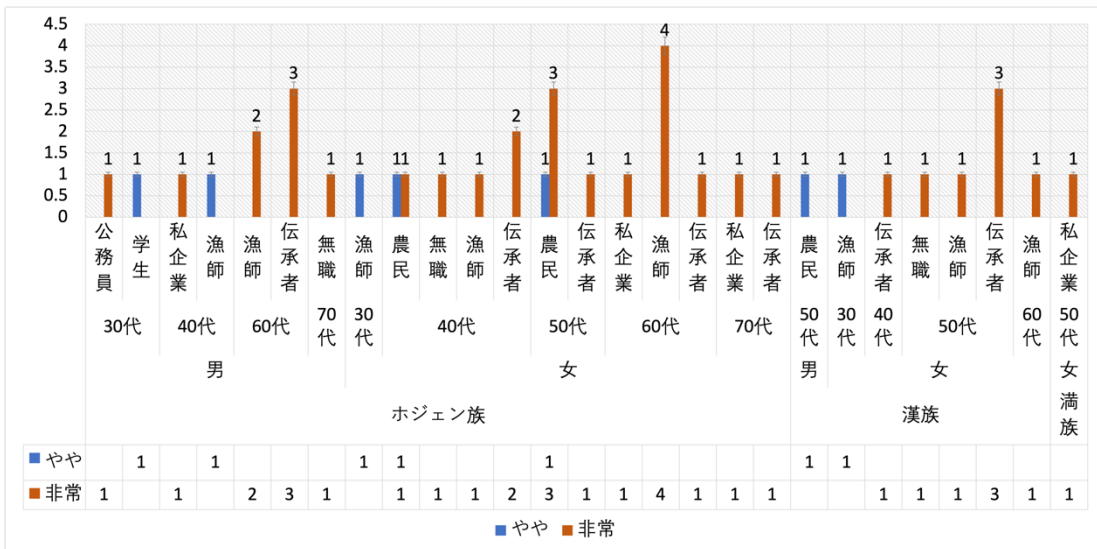
- ・回答者のうち、50 代の女性が最も多く、11 人であった。次いで、40 代と 60 代の女性がそれぞれ 7 人であった。
- ・ホジェン族の女性のうち、40 代と 60 代の人々が最も多く、それぞれ 6 人であった。一方、男性では、60 代の人々が最も多く、5 人であった。

3) 項目 1. 民族・項目 2. 性別・項目 3. 年齢と項目 4. 職業



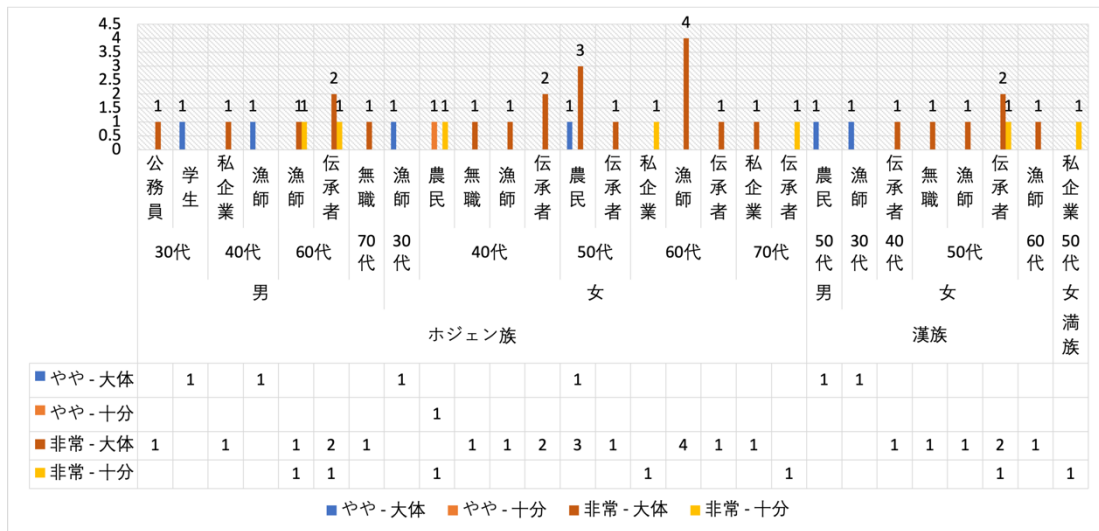
・職業別では、ホジェン族の伝承者と漁師の数が多く、それぞれ8人と9人であった。
 ・これらの職業では、女性の割合が比較的高い。女性の伝承者は5人で、年齢は40歳から80歳の間であった。一方、男性の伝承者は3人で、主に60歳前後であった。なお、漢族の女性の伝承者と漁師の数が多く、それぞれ3人と4人であった。

4) 回答者属性(1. 民族・2. 性別・3. 年齢・4. 職業)と項目 5. 魚皮衣文化に対する認識



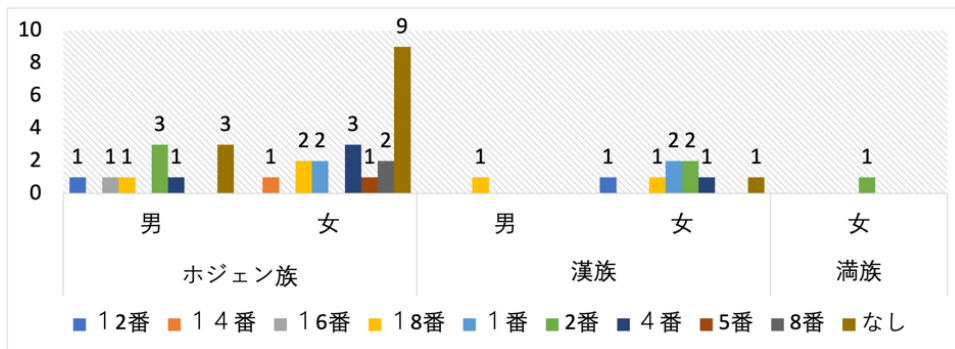
・魚皮衣文化に対する認識について、魚皮衣の紋様に非常に詳しいと回答したホジェン族のうち、60代の女性漁師が最も多く、4人であった。次いで、ホジェン族の50代の女性農民と60代の男性伝承者、および漢族の50代の男性伝承者で、それぞれ3人であった。

5) 回答者属性(1. 民族・2. 性別・3. 年齢・4. 職業)・項目 5. 魚皮衣文化に対する認識と項目 6. 魚皮衣の紋様に対する関心



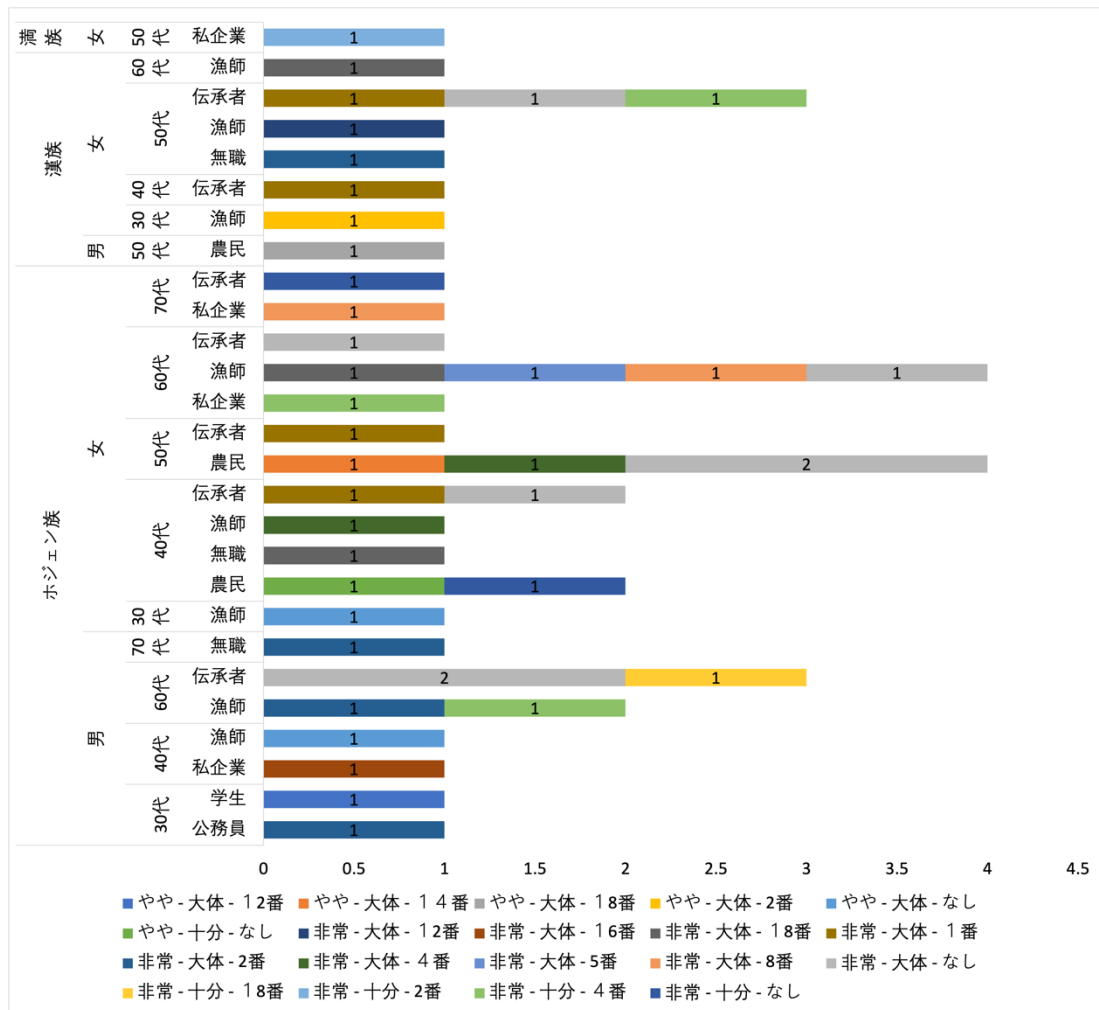
- ・紋様について非常に興味を持っていると回答した人のうち、魚皮衣文化をやや理解している人が大半であった。
- ・主に 50～60 代の人が該当し、そのなかでホジェン族の 60 代の女性伝承者が最も多く、次いで、ホジェン族の 50 代の女性農民がつづいた。
- ・紋様について非常に興味を持っており、同時に魚皮衣文化をやや理解している人は少なく、わずか 7 人である。主に、ホジェン族の 60 代の人が含まれるが、その職業は伝承者、漁師、私企業家であった。

6) 項目 1. 民族・項目 2. 性別と項目 7. 魚皮衣の紋様に対する認識



- ・回答者 40 人のうち、図で示した紋様を知っている人は 13 人であった。そのうち、ホジェン族の女性が 9 人、男性が 3 人、漢族の女性が 1 人であった。
- ・他の人びとは今回の交流・体験活動を通じて、1、2、4、5、8、12、14、16、18 番の紋様について、より深く理解した。しかし、2 番と 4 番、18 番については、理解していない人が多い。

7) 回答者属性(1. 民族・2. 性別・3. 年齢・4. 職業)・項目5. 魚皮衣文化に対する認識・項目6. 魚皮衣の紋様に対する関心と項目7. 魚皮衣の紋様に対する認識



- ・紋様に非常に興味を持っており、魚皮衣文化をやや理解している人のうち、図で示した紋様を全て知っている人は、ホジエン族の60代の男性伝承者と50代の女性農民であった。それぞれ2人であった。
- ・次いで、ホジエン族の40代と60代の女性伝承者、および漢族の50代の女性伝承者がそれぞれ1人であった。

(6) 魚皮衣制作の流れを撮影した様子



(7) 「魚皮しおりの制作の流れ」に関する解説動画

监制/鱼皮衣文化传播实验室

非遗文化与年轻人

非遗·亲子沉浸式手工体验，赫哲族传统鱼皮衣文化复兴！

监制/鱼皮衣文化传播实验室

非遗文化与年轻人

非遗·亲子沉浸式手工体验，赫哲族传统鱼皮衣文化复兴！

监制/鱼皮衣文化传播实验室

非遗文化与年轻人

非遗·亲子沉浸式手工体验，赫哲族传统鱼皮衣文化复兴！

首先，需要准备的工具有鱼皮边角料

00:55

其次是在鱼皮纤维的那一侧

00:43

然后用剪刀剪下画好纹样的鱼皮

00:28

非遗传承，自然造物。非遗保留着赫哲族传统服饰文化的原生状态，延续着赫哲族的生命智慧，蕴藏着赫哲族文化根源。在情感、思想、文化层面有着特有的育人价值。



(7)「魚皮衣ショー」の動画内容(参加者数：16人)



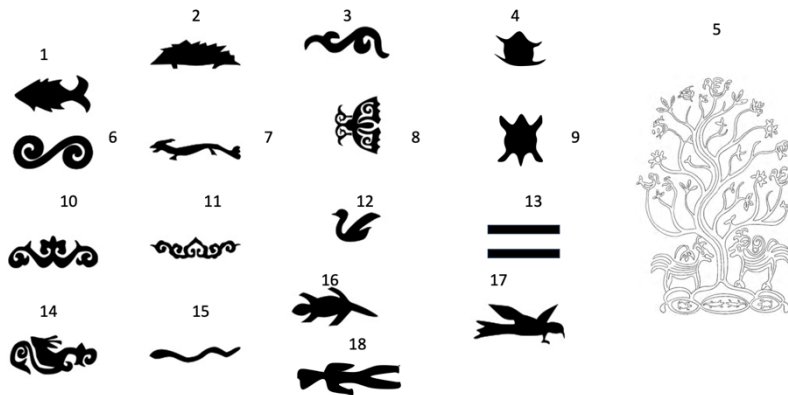
(8) 交流・体験活動で実施する伝統的魚皮衣文化に関する再認識調査(回収 28 部)

(8)-1: 質問紙

「伝統的魚皮衣文化に関する再認識調査」

このたびは、アンケート調査へのご協力、本当にありがとうございました。今回の調査では、特に伝統的な魚皮衣文化に関する再認識についてお伺いすることが主な目的としていました。なお、今後、調査結果を皆様と共有するために、ご電話番号や WeChat 公式アカウントをご記入いただければ幸いです。アンケートの内容は以下の通りです。

1. 性別 :
2. 年齢 :
3. 職業 :
4. ホジェン族の魚皮衣を知っていますか。 ①非常に ②やや ③どちら ④あまり ⑤全く
5. 今回の活動を通じて、魚皮衣文化についてどの側面がより理解できるようになりましたか。(複数選択可)
① 歴史 ②素材 ③色彩 ④紋様 ⑤制作方法 ⑥使用方法 ⑦その他
6. 今回の活動を通じて、魚皮衣文化のどのような側面により深い興味を持ちましたか。(複数選択可)
①歴史 ②素材 ③色彩 ④紋様 ⑤制作方法 ⑥使用方法 ⑦その他
7. 今回の体験活動を通じて、伝統的魚皮衣のどのような紋様がより理解できましたか。(複数選択可)



8. 魚皮衣文化に関する共有・交流活動や手づくり体験活動を開催する必要がありますか。

①はい ②どちら ③いいえ

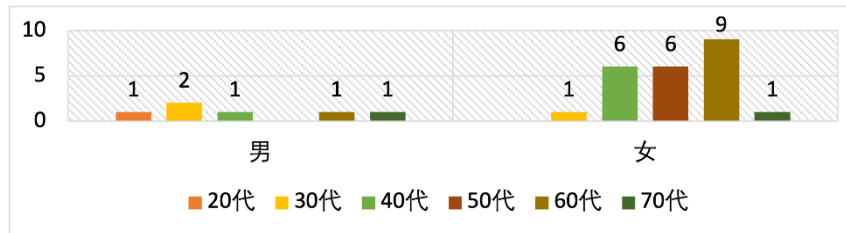
9. 将来、魚皮衣文化の交流や手づくり体験の活動に参加し続きたいですか。

①非常に ②やや ③どちら ④あまり ⑤全く

電話番号または WeChat :

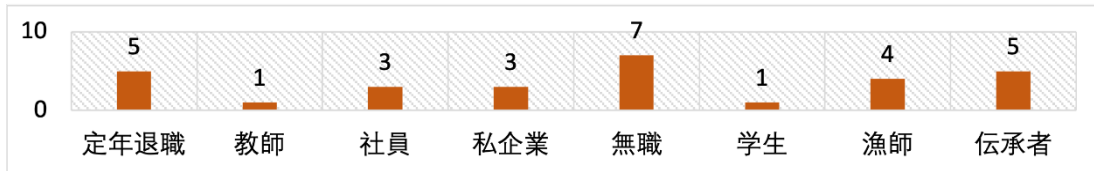
(8)-2: アンケート調査結果(回収 29 部)

1) 項目 1. 性別と項目 2. 年齢の関係調査



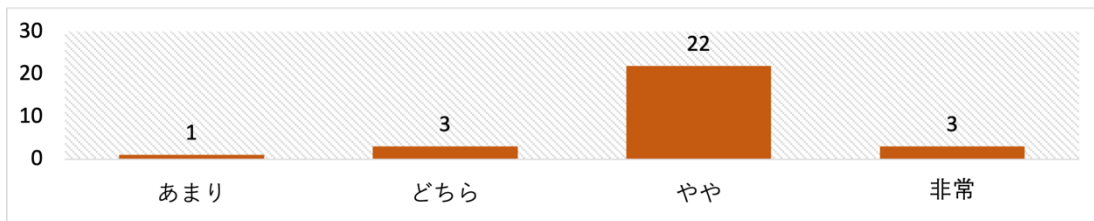
- ・今回の交流・体験活動に参加した参加者は合計 29 人で、そのうちホジェン族の女性が最も多く、23 人であった。
- ・参加者のうち 60 代の人最も多く、10 人で、女性の割合が最も高く、9 人であった。
- ・次いで、40 代と 50 代の女性がそれぞれ 6 人であった。

2) 項目 3. 職業



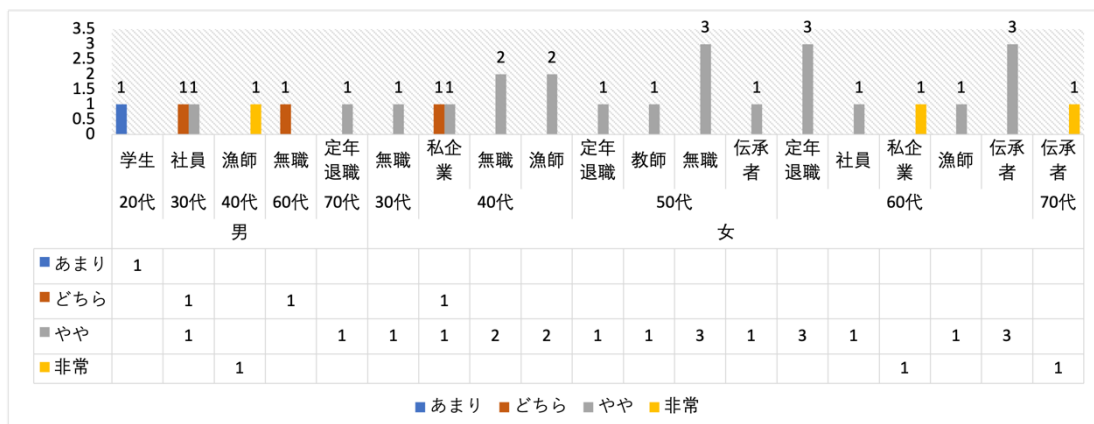
- ・職業別では、非労働者が最も多く、7 人であった。退職者は 5 人で、伝承者も 5 人であった。

3) 項目 4. 魚皮衣文化に対する認識



- ・魚皮衣の文化に関する一般的な理解者が最も多く、22 人であった。非常に理解している人はわずか 3 人であった。理解していない人は最も少なく、1 人であった。

4) 回答者属性 (1. 性別・2. 年齢・3. 職業) と 4. 魚皮衣文化に対する認識



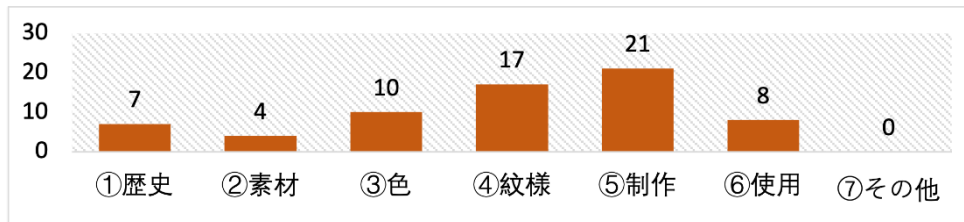
- ・一般的な理解者の中で、50 代の無職女性と 60 代の女性の退職者と伝承者が最も多く、それぞれ 3 人であった。

・非常に理解している人は、主に 60 代と 70 代の女性で、それぞれの職業は私企業家と伝承者であった。

5) 項目 5. 魚皮衣文化の共有に対する認識

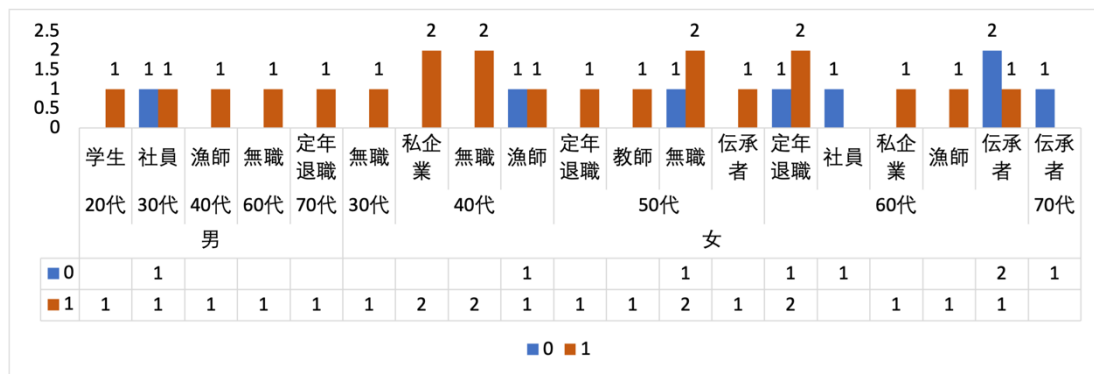
・今回の活動を通じて、参加者全員は魚皮衣文化に関する歴史、素材、色、紋様、制作、使用について理解を深めた。

6) 項目 6. 魚皮衣文化に対する関心



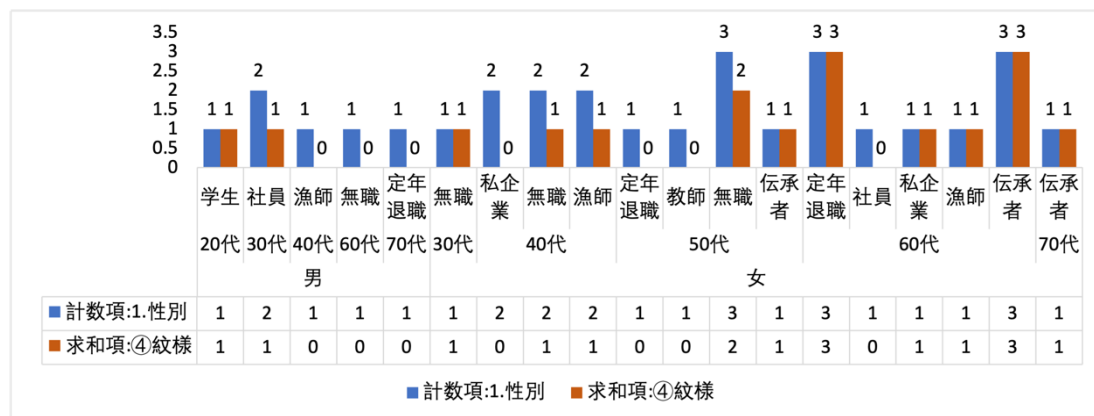
・魚皮衣の制作に興味を持つ人が最も多く、21 人であった。次いで、紋様に興味を持つ人が 17 人で、そして色彩に興味を持つ人が 10 人であった。

7) 回答者属性(1. 性別・2. 年齢・3. 職業)と項目 7-1. 魚皮衣の制作に対する関心



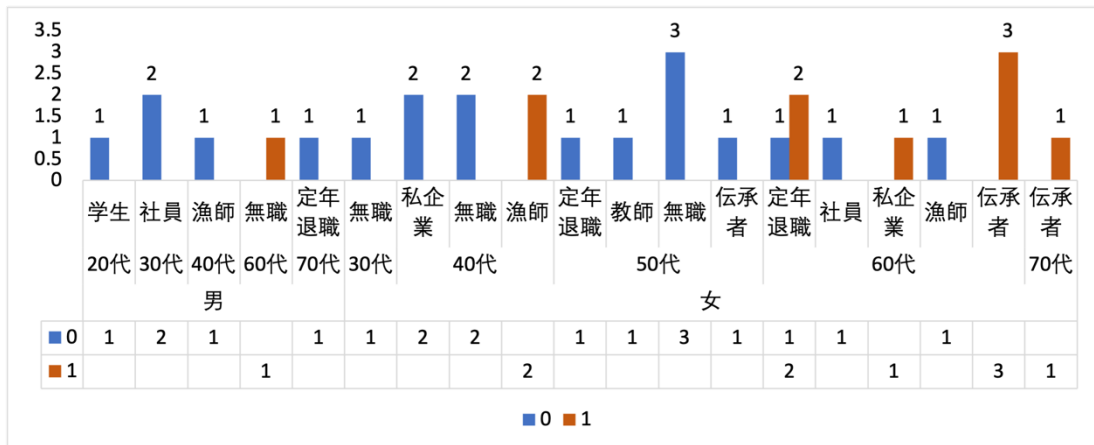
・魚皮衣の制作に興味を持つ女性が最も多い。主に 40 代の私企業家と無職の人、および 50 代の無職の人、60 代の退職者であった。

8) 回答者属性(1. 性別・2. 年齢・3. 職業)と項目 7-2. 魚皮衣の紋様に対する関心



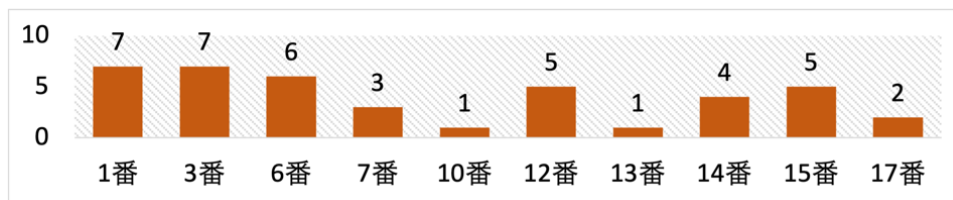
・魚皮衣の紋様に興味を持つ女性も多い。主に 50 代の退職と 60 代の伝承者であった。

9) 回答者属性(1. 性別・2. 年齢・3. 職業)と項目 7-3. 魚皮衣の色彩に対する関心



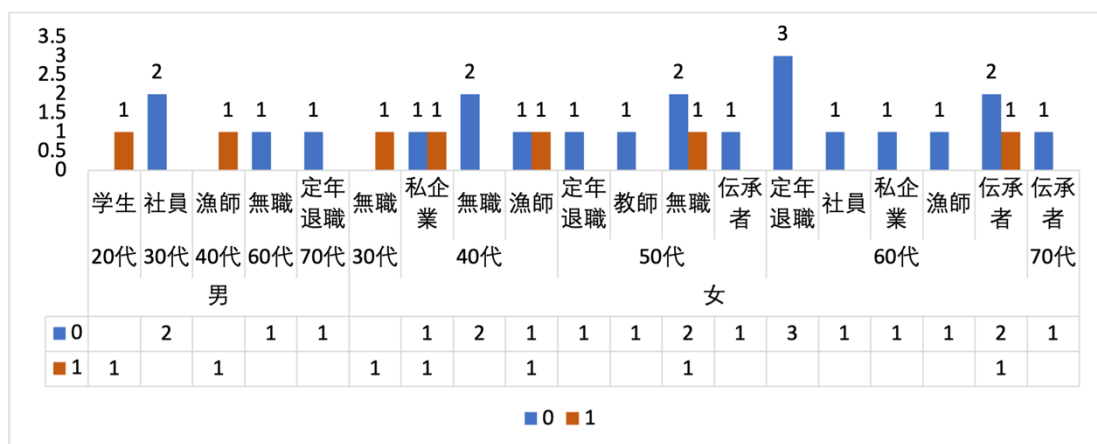
・色彩に興味を持っている人は主に 60 代の女性伝承者であった。次いで、40 代の女性漁師と 50 代の退職女性であった。

10) 項目 7. 魚皮衣の紋様に対する制作体験者属性



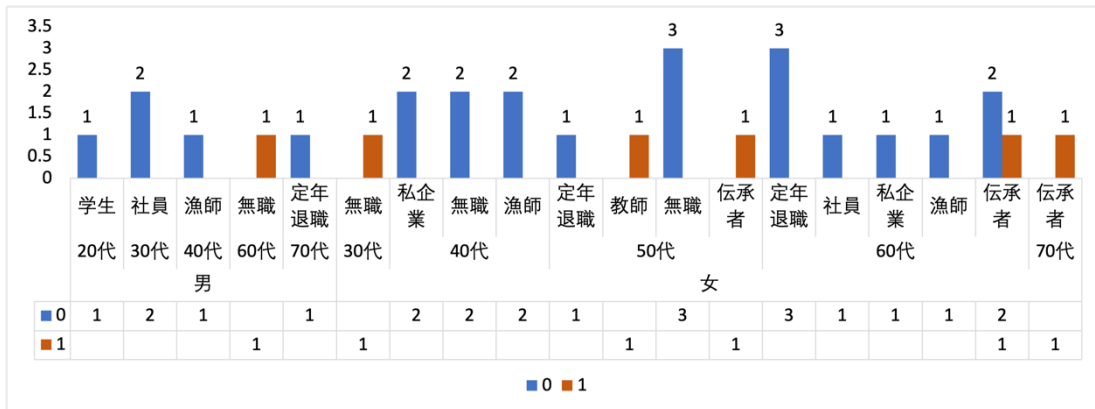
・その中で、1番と3番の紋様を活用した魚皮しおりなどの制作をしている人が、最も多く、それぞれ7人であった。次いで、6番と12番、15番である。平均して5人が紋様を活用して魚皮しおりなどを制作していた。

11) 項目 7-1. 1番の紋様の制作に対する体験者属性



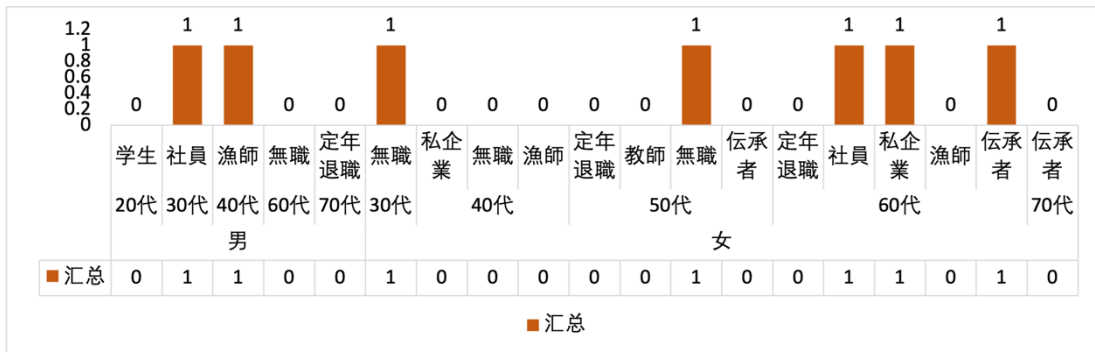
・1番の紋様を用いて魚皮しおりを制作している男性は20代から40代であった。女性は30代から50代、および70代であった。男性の中では、学生、漁師、無職者が主で、女性の中では、私企業家、漁師、無職、伝承者が主である。

12) 項目 7-2. 3 番の紋様の制作に対する体験者属性



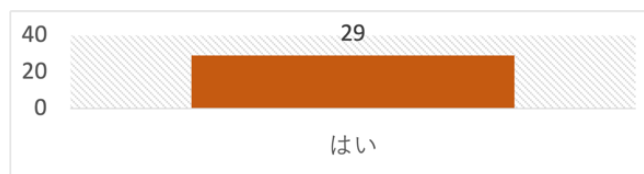
・ 3 番の紋様を用いて魚皮しおりを制作している人は、主に 30 代から 40 代の男性、および 30, 50 から 70 代の女性であった。男性の主な職業は会社員、漁師であった。女性の主な職業は伝承者、私企業家、無職者であった。

13) 項目 7-3. 6 番の紋様の制作に対する体験者の属性



・ 6 番の紋様を用いて魚皮しおりを制作している人は、主に 60 代の男性と 30 代から 70 代の女性であった。彼らの職業は無職または退職者、伝承者であった。

14) 項目 8. 魚皮衣文化の共有に関連する活動実施への認識



・ 参加者全員は、魚皮衣文化の共有に関連する活動実施が必要であると考えていた。

15) 項目 9. 魚皮衣文化の共有に関連する活動実施への関心



・ 今後、このような活動に参加したいと考えている人が 27 人であった。

(8)-3: スライド教材の内容を皆に共有した様子



(9) 記事と動画形式で WeChat 公式アカウントに公開した知見

1) 2023年12月24日に公開された記事では、魚皮衣制作技術の国家級継承者である尤文鳳氏が、家族や弟子たちとともに、12月23日、同江市のコミュニティのイベントに参加し、このイベントで「巴其蘭古ト」という名のホジェン族の伝統的な舞踊を踊ったことが記録された。踊りの間、彼らは自分たちでつくった布の服を着て、伝統的な占いで道具を持ち、川辺で見つけた貝殻でつくったアクセサリーを手首につけていました。このイベントに参加したことで、より多くの人びとがホジェン族の伝統的な踊りの魅力を感じており、そしてホジェン族の伝統的な舞踊の継承と普及に役立っていることがわかった。

跟随国家级鱼皮衣技艺传承人尤文凤老师，了解赫哲族传统鱼皮衣文化传承的实态

原创 二月 鱼皮衣文化传播实验室
2023-12-24 03:08 1人听过

10月23日上午8点整，笔者跟随尤文凤老师和她的7位徒弟们，来到电视台，通过交流，了解到以尤老师为首的赫哲族鱼皮衣文化传承人，自发加入同江市义工联合会，通过这样的平台，进一步让更多已经移居到同江市的赫哲族人了解到传统鱼皮衣文化。

通过一日的询问调查，并对于目前，赫哲族的传统鱼皮衣等文化的传承的各种实态进行考察。

由于在街津口村居住的一部分赫哲族人们，已经移居到了同江市，所以，为了在社区中，也能够向赫哲族人们宣传传统的鱼皮衣文化，尤老师和她的徒弟们，从本月开始自发且义务的参与了社区义工活动中。

今日，尤老师和她的7位徒弟们在同江市电视台，为明日的汇演紧张的彩排中。

很荣幸跟着尤老师参与社区活动中，了解了目前传承人们在鱼皮衣文化传承活动中的实际样态。

尤老师和她的徒弟正在讨论，如何将染了色的鱼皮衣修缮一下。尤老师说，因为她的徒弟们对于修缮方法掌握的不熟练，所以，这一重任交给了尤老师。

意外收获了萨满用桦皮制作的占卜用具相关知识。《过去赫哲族的占卜用具》上面装饰的是在江上捡来的贝壳，上面装饰的铜铃是萨满腰带上装饰的大铜铃的缩小版。在萨满鱼皮服饰中，铜铃起着招神招魂的作用。

就地取材的贝壳

萨满占卜用具

赫哲族的萨满信仰，从千年前赫哲族的部落生活开始，尤军毅曾说过，过去萨满信仰是部落首领管理整个部落时的一种手段。而通过我们的研究考察，萨满信仰也是体现赫哲族人利用自然，敬畏自然的一种表达方式。

早上6点半出发，登门拜访了中国唯一一位国家级鱼皮衣技艺传承人，尤老师的家中。

72岁的尤老师和她的徒弟们，虽身单力薄，却自发的，用自己的方式去向大家传达赫哲族的传统鱼皮衣等文化。

快传承人我们吧！我们愿全，传承即将消失的传统鱼皮衣文化。

2) 2023年12月27日に公開した記事では、筆者が12月26日に、尤文鳳氏と、これまでに現地調査から得られた魚皮衣に関する知見を交流した情報と、これまでに尤文鳳氏が行った

魚皮衣文化に関する伝承活動の様子が記録されていた。尤文鳳氏は2007年に中国政府によって魚皮衣制作技術の国家級継承者に認定された。現在までに、家族では、次男の妻と子、そして三男の妻も魚皮衣制作技術を継承している。さらに、過去5年間で尤文鳳氏は、少なくとも30人以上の弟子を受け入れている。また、非物質文化遺産展示館で、過去にホジェン族が使用していた伝統的な道具について筆者に紹介した。たとえば、テーブル、椅子、椀、魚を入れるための道具、樺皮船、狩りの際に使用される仮の住宅、そして魚を捕るための柳の枝で作られた道具などである。

以尤文凤老师为代表的赫哲族老人们对于传统生活文化传授实态的考察笔记

原创 二月 鱼皮衣文化传播实验室
2023-12-27 15:44 2人听过

近日，笔者在跟随尤文凤老师记录日常她在鱼皮衣传承活动的实态之余，抽空与尤老师交流，并分享了近年来，笔者从文献资料与现地考察过程中收集的有关鱼皮衣的知识。

同时也希望以这种方式来感谢，之前帮助过我的尤老师，以及当地的赫哲族的叔叔阿姨们。





3) 2023年12月10日に、筆者が1回目のアンケート調査結果について、同江市展示館の館長、継承者、ホジェン族などの9人に共有し、意見を交換した後に、皆の支援に基づき、今後、ホジェン族の人びとに伝統的な魚皮衣に関する交流の機会を創出するために、2024年2月の魚皮衣のファッションショーを企画した。2023年12月28日に公開した動画で、伝承者を含めるホジェン族の人びとが展示館で魚皮衣のファッションショーをリハーサルした様子が記録された。

4) 2023年12月11日に、筆者はこれまで聞き取り調査によって把握したシャーマンニズムというホジェン族の信仰について尤文鳳氏と情報を共有した。尤氏は、はじめての非物質文化遺産である魚皮衣の制作技術継承者として2007年に中国政府から認定された。そして、尤氏と交流した内容は動画形式でWeChat公式アカウント上に公開された。たとえば、かつて、シャーマンが祭祀で魚皮衣の神服を使用した後、それを西側の部屋の壁に掛けることがあった。その部屋には生理中の女性や子どもが入ることが禁止されていた。さらに、西側の部屋は神像を奉納し、神聖な空間として誰も住むことが許されていなかった。

5) 2023年12月13日に、筆者はこれまで聞き取り調査によって把握したシャーマン用の占いで道具とその材料の入手方法、制作方法、使い方について、尤文鳳氏などの継承者から具体的な話を聞いた。そして、以上の内容が2023年12月30日に動画形式でWeChat公式アカウント上に公開された。たとえば、この道具は、かつて、シャーマンが日常的に山で狩る鹿の肩甲骨でつくられたものであった。現在、狩猟が禁止されたため、豚の肩甲骨がそれに代わった。使用方法には、通常、この道具は火で焼かれ、亀裂が出現すると、その亀裂からホジェン族の吉凶を判断することができる。そして、3回目の火で焼いた後に、直接願い事をすることができるとされた。

6) 2020年1月に、筆者は現地調査によってホジェン族の冬の漁法や道具、その使用方法を把握し記録した。そして、以上の内容は2024年1月1日に動画形式でWeChat公式アカウント上に公開された。たとえば、冬の漁法のひとつは、凍った川で漁網を使って魚を捕る方法である。この場合、冬、ホジェン族は氷を割るために氷穿子などの特有な漁具を使用し、魚を入れるための道具や、魚を運ぶための犬そりやスキー板などの道具も使われることがある。

7) 筆者は文献調査および現地調査によって収集した神像について、これまで当該地域において神像を制作できる唯一の孫玉林氏と彼の家族に共有し、かつてのホジェン族の漁獵生活と山や川、馬などの神との関係について彼らに聞き取り調査を行い、記録した。また、以上に述べた内容は2024年1月2日に動画形式でWeChat公式アカウントに公開された。かつてのホジェン族の人びとは、身の回りで見られる自然物を神格化し、これらの神を生活の守護神とみなし、木で神像を制作し、さまざまな神に敬意を払いながら、さまざまな願いを込めて祈りを捧げ

た。



8) 今後、魚皮鞣しの方法をより多くのホジェン族に伝えるために、筆者はこれまで尤文鳳氏に対する聞き取り調査において記録した魚皮を鞣す道具とその使い方などを、2024年1月6日に動画形式でWeChat 公式アカウント上に公開した。

9) 2024年1月6日に筆者が継承者たちとともに中央テレビ番組(中央電視台 CCTV17)に参加し、魚皮衣の制作技術とその伝承情報を紹介した。以上の内容は2024年1月7日に動画形式でWeChat 公式アカウント上に公開した。

10) 尤文鳳氏の親族が使用している魚皮衣は長い間適切に保管されていなかったため、硬化してしまった。そのため、筆者はこれまでの調査で学んだホジェン族の魚皮衣のなめしの伝説を尤氏と共有した。伝説によれば、ある女性が夫と口論になり、そばにあった棒で夫の背を叩いた結果、魚皮衣が柔らかくなったと言われていた。筆者たちは、魚皮衣を棒で叩いて実験した結果、本当に柔らかくなったことが確認された。したがって、より多くのホジェン族に伝えるために、今回撮影した動画は2024年1月7日にWeChat 公式アカウントに公開された。

11) 2024年1月9日に公開したビデオでは、中央テレビの番組の収録のために、魚皮の陰干をする方法について、筆者が尤文鳳氏とともに事前に中央テレビ番組(中央電視台番組 CCTV3)のスタッフ6人と動画を共有した。また、より多くのホジェン族の人びとに情報を伝えるために、以上の内容を動画形式で2024年1月9日にWeChat 公式アカウント上に公開した。

12) 筆者は、これまで調査した魚皮衣に関する内容を、以前に被調査者である魚皮画の伝承者と称される李勤医氏と共有した。話し合う際に、最近、彼が妻である王春艷氏と一緒に魚皮を干す作業をしていることがわかった。また、彼らの魚の皮干しの過程を録画した。今後、より多くのホジェン族に魚皮の干し方を伝えるために、その動画を2024年1月9日に公開した。



13) 2018 年に、街津口村でホジェン族の伝統的な魚料理である「魚刨花」の制作方法を、孟繁柳氏から学んで記録した。また、より多くのホジェン族の人びとに伝えるために、筆者は当時に撮影した動画を 2024 年 1 月 11 日に WeChat 公式アカウントに公開した。



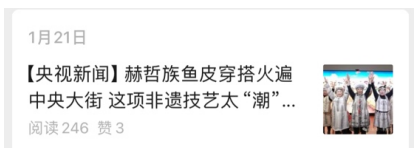
14) 今後、より多くのホジェン族の人びとに魚皮衣文化の魅力を伝えるために、筆者は展示館の館長と継承者と意見を交換し、展示館で毎年行う魚皮衣文化の伝承交流活動を企画した。また、今後、73 歳の継承者である尤文鳳氏が展示館で行う伝承交流活動を支援するために、筆者は中央テレビ番組 CCTV3 のスタッフ、展示館の館長、尤文鳳氏と楊英琴氏の協力・支援に基づき、2024 年 1 月 10 日に、尤文鳳氏と楊英琴氏が共同で魚皮衣を作る全工程を実演する様子を記録した。これは尤文鳳氏が使用する動画の教材として利用される予定である。また、この記録動画は 2024 年 1 月 11 日に WeChat 公式アカウントで公開された。



15) 1966 年の文化大革命の始まりと共に、ホジェン族のシャーマニズムという信仰は消滅の危機に直面した。たとえば、ホジェン族の家庭で、神像などを供えることが禁止された。そのため、人びとはそれを地中に埋め、自然に還した。また、シャーマンの神服も大きな影響を受けた。したがって、筆者は、イマカンという物語の伝承者である吴彩云氏、吴宝臣氏に幼少期に経験したシャーマニズムに関する出来事の話についてインタビューし、それを動画で記録した。同時に、ホジェン族の若い世代に対してシャーマニズムという信仰の周知を図るため、インタビューの動画は 2024 年 1 月 12 日に WeChat 公式アカウントで公開された。



16) 筆者はこれまで聞き取り調査を通じて、かつて、ホジェン族が家の中で壁に魚皮を干すなれがわかった。しかし、調査地でこのような生活様子を見たことが少ない。2018 年、孟繁柳氏の家で壁に魚皮を干す様子を見たことがある。聞き取り調査を通して、生計を立てるために、毎年、家で壁に魚皮を干し、魚皮画を作ることがわかった。かつての人びとが壁に魚皮を干す生活様子をより多くのホジェン族の人びとに知ってもらうために、筆者は撮影した動画を 2024 年 1 月 21 日に WeChat 公式アカウントで公開した。



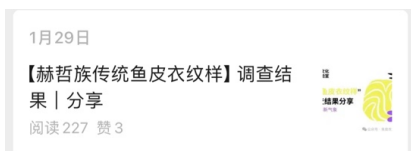
17) 2024 年 1 月 21 日に筆者と継承者たちが 2024 年 1 月 6 日に共に参加した中央テレビの番組収録に関する中央新聞の報道が WeChat 公式アカウントに転載された。



18) 2024年1月23日に筆者は展示館の館長と継承者たちが共同で企画した伝統的なホジェン族の結婚式の儀式を演じる活動に参加した。また、より多くの人びとがホジェン族特有の結婚式の魅力を感じるために、筆者は記録した内容を動画形式で1月24日にWeChat公式アカウント上に公開した。



19) ホジェン族の信仰の実態をより多くの人びとに伝えるために筆者は、現地調査の際に記録した、尤文鳳氏がかつて制作した神服を孫たちに着せた際に、人物が撮影できなかったという話などを2024年1月28日にWeChat公式アカウントに公開した。



20) 2024年1月29日に公開した記事には、筆者が1カ月にわたって行ったホジェン族の伝統的な魚皮衣の紋様に関する質問紙調査の分析結果が記されていた。



21) 昔の魚皮衣に関する生活様式について、より多くのホジェン族の若者がこれを理解するために、筆者は60代の趙宝琴氏に対する聞き取り調査を行った。また、2024年1月31日に公開した「魚皮衣との物語」という動画では、60代の趙宝琴氏が、20歳以降、尤文鳳氏の母親である尤翠玉氏から魚皮衣の制作方法を学び、その技術を自身の2人の息子に伝えた話などが記録されていた。



22) 筆者は尤文鳳氏への聞き取り調査を通してホジェン族の人びとが正月につくる伝統的な魚料理を記録した。たとえば、チョウザメの煮込み、干し鮭の炒め物、殺生魚、鮭の卵の漬物、コイの骨の揚げ物などがある。これらの伝統的な魚料理は、ホジェン族の食文化の一部だけであるだけでなく、ホジェン族の人びとが漁業資源を十分に活用する知恵をも反映している。以上の内容は動画形式で2024年2月2日にWeChat公式アカウントに公開された。



23) ホジェン族の伝統的な魚皮衣の形態、紋様などをホジェン族の若者含む多くの人びとに伝えるために、2024年2月9日に、筆者は撮影した継承者とホジェン族を含む16人が参加した魚皮衣着替えショーをWeChat公式アカウントで公開した。



24) ホジェン族の人びとや継承者たちと、その他の人びとが交流する機会を創出し、ホジェン族の伝統的な魚皮衣の魅力をより広く伝えるために、筆者は同江市展示館の館長、継承者たち、ホジェン族の人びとと協力して魚皮衣のファッションショーを企画した。2014年2月13日にホジェン族の人びとと継承者たちなど9人が自身で縫った魚皮衣を着用し、展示館で展示した。それと同時に、継承者である楊英琴氏と彼の息子がファッションショーの開催場所周辺で人びとに魚皮衣の制作方法を教えた。また、当日のファッションショーの様子は動画形式で2024年2月14日にWeChat公式アカウントに公開された。



25) 2024年2月16日に公開した「魚皮衣との物語」動画では、継承者である尤文鳳氏が、幼い頃、母である尤翠玉氏から魚皮衣の制作方法を学んだ経験が記録されていた。たとえば、尤氏は6歳頃から、母親の素材加工作業を手伝い始め、13歳までに母親を見て魚皮衣の縫製方法を会得した。その過程で母親は魚皮衣の制作方法を伝授するだけでなく、ホジェン族の伝説を語っていた。尤氏にとって、その時代は最も幸せな時であり、母親と一緒に魚皮衣を作る時間が特に思い出深いものであった。そして、尤氏が語る魚皮衣の制作技術の伝承についての感想も動画に記録された。



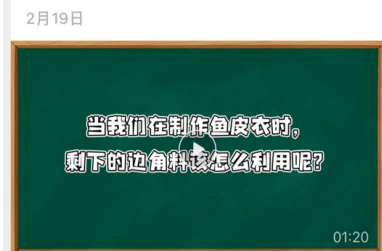
26) 2024年2月17日に公開した動画で、継承者である尤文鳳氏は魚皮を有効活用する方法について語った。



27) 2024年2月18日に公開した動画では、魚皮衣の制作技術の伝承や魚皮の染色技術、靈魂が存在するという信仰などが記録された。



【我和鱼皮衣】的故事 (2) 结尾篇
观看 323



【非遗文化与年轻人】之【鱼皮书签体验活动/策划讲解小课堂】
观看 124 赞 4 1个朋友赞



【非遗文化与年轻人】之【鱼皮书签制作流程 | 讲解小课堂】
观看 221



【2024年 | 首次赫哲族鱼皮衣文化研学体验活动圆满落幕】
观看 234



赫哲族非遗文化，鱼皮衣文化守护人们
观看 244

28) 2024年2月18日に公開した「魚皮衣との物語」動画で、継承者たちは伝承事業に関する感想や後継者の不足などの問題について話していた。

29) 2024年2月19日に公開した動画では、かつて魚皮の端切れが窓飾りやカレンダーなどの素材として使用されたが、現在はそれ以外にも、しおりなどの素材として利用できることが紹介された。

30) 筆者は継承者、ホジェン族の人びとと交流することで、今後、企画した魚皮のしおりの制作方法に関する解説動画を作成した。また、2024年3月6日に公開したビデオでは、魚皮のしおりの制作方法を紹介した。

31) 2024年3月8日に公開した動画には、「ホジェン族の魚皮衣文化伝習・(しおりの制作)体験活動」が開催された際に筆者が撮影した活動の写真が収録されていた。

32) 筆者は聞き取り調査を通じて、展示館の館長、継承者たち、および魚皮衣文化の継承を支援しているホジェン族の人びとが近年行っている、魚皮衣文化の継承に関する活動の情報を得た。これらの内容は、動画形式で2024年3月10日にWeChat公式アカウントに公開された。



33) 2024年3月11日に公開した動画では、筆者が継承者たちと中央テレビの番組の収録に参加した様子が記録された。たとえば、筆者は継承者たちと共に、屋外のマイナス25度の天候で魚皮衣を着用し、1時間立ち続けた。



図 6-1 筆者とホジェン族の人びとがホジェン族の結婚式の公演に参加した様子



図 6-2 旧正月に展示館で行われるイベントで、魚皮衣の制作技術の交流会の様子



図 6-3 中国中央テレビ (CCTV17) の番組に参加した様子



图 6-4 活用した中国 SNS (WeChat チャンネル、TikTok、bilibili)

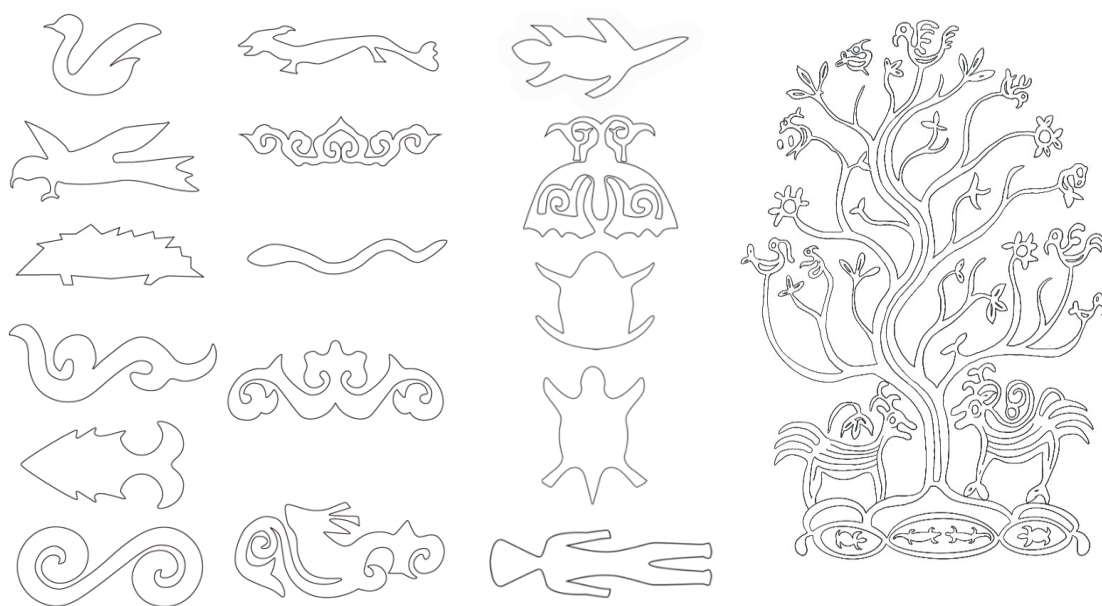


图 6-5 魚皮衣の紋様の形態を残すために、それをベジェ曲線で書き写した

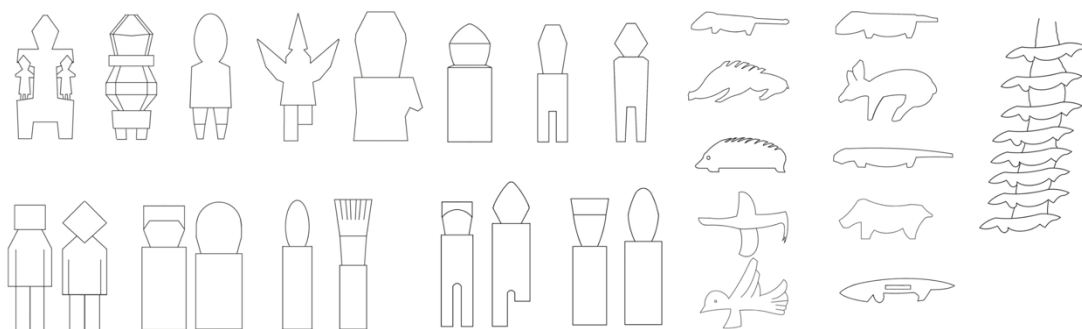


图 6-6 神像の形態を残すために、それをベジェ曲線で書き写した

本審査発表の原稿

1.こんにちは、今回は「中国の少数民族ホジェン族の伝統的服飾衣の文化—黒竜江省同江市街津口村における魚の利に基づく生活文化」について発表いたします。デザイン文化研究室の孔春と申します。よろしくお願いたします。

2.まず、ホジェン族の魚皮衣についてご紹介いたします。こちらの写真をご覧ください。魚皮衣は、ホジェン族の人びとが昔から、生活の中で使用してきた服飾であり、身の回りに生息する特定の魚の皮を一枚一枚加工して縫製し、構成されており、前身頃や袖口を縁起のよい魚皮の模様で飾ったものです。

3.次に、ホジェン族についてご説明いたします。ホジェン族とは、約4千年の歴史を持つ漁獵民族です。写真の通り、清朝時代から、部族の名が「ホジェン族」と呼ばれ、これは「川の下流に暮らしている人」という意味です。

4.調査によると、1945年には、戦争や疫病によりホジェン族が消滅の危機に瀕していました。現在では全国に約5千人がいます。しかし、中国少数民族で依然として人口が非常に少ない民族の一つです。

5.ご覧の通り、かつて、ホジェン族の人びとは、男女や家の内外を問わず、労働の時には魚皮衣を着用していました。特に、厳しい自然環境に適応するためには工夫が必要で、外の寒さから人びとの身を守るために魚皮衣を制作しました。写真では、男性が冬に、ノロの皮でつくられたコートと魚皮衣を組み合わせ着用している様子が見られます。

6.しかし、近年、急激な都市化の進展に伴い、中国の農村人口が急速に都市に流出し、農村地域の間人関係が希薄化し、生活様式が変容するとともに、地域内の伝統的文化を知ることが非常に困難になっています。地域資源としての伝統文化の消滅を防ぐには、今後、農村地域で生活する人びとが伝統文化を再確認・再認識する必要があると考えられます。

7.本研究の対象地域におけるホジェン族の伝統的服飾である魚皮衣の文化も例外ではありません。人びとがこれまで、魚皮衣に多様な紋様を飾ることでより良い漁獵生活を祈願してきたことから分かるように、魚皮衣はホジェン族の伝統的生活文化において不可欠なものです。

8.しかし、1966年以後、文化大革命によってホジェン族の狩猟生活が禁止され、通過儀礼や祭祀などが批判され破壊されました。その結果、狩猟用の礼服や婚服などがほぼ消滅しました。これにより、若者の伝統的な紋様に対する認識が薄れ、新しい紋様が伝統的な紋様を取

って代わりました。また、魚皮衣の制作技術を知っている人も激減したため、化学繊維の使用が増加しました。つまり、伝統的な魚皮衣の文化が消滅の危機に瀕しています。

9.こちらの写真をご覧ください。ホジェン族の人びとが着用する多様な魚皮衣が見られます。若者が使用するのには、新しい紋様で飾られた魚皮衣です。また、化学繊維でつくられた服も存在します。このような状況においては、伝統的な魚皮衣の類型、素材、紋様、制作などを記録し分析し、その特質を明確化した上で、得られた知見をホジェン族の人びとと共有することが喫緊の課題であると考えられます。

10.したがって、本研究の目的は、魚皮衣とその使用、制作について調査し、記録することで、伝統的な魚皮衣の文化的特質を明らかにすることです。さらに、内発的発展論の観点から、魚皮衣文化を活かす地域振興の指針を導出することを目指しています。

11.本研究の方法は現地調査、聞き取り調査です。2016年から現地調査を5回実施し、現地やオンラインで聞き取り調査を79回行いました。昔は、現地の人びとが亡くなると魚皮衣が副葬品として埋葬される慣習がありましたが、現在では使用者が減少し、希少品として保存されています。そのため、147点の魚皮衣と25点の魚皮衣の神服の実物や写真資料を収集しました。そのうち、48点の伝統的な魚皮衣と15点の伝統的な神服を確認しました。さらに、それらの形態や類型、素材、紋様、使用方法、制作方法を調査し、記録しました。以上の調査結果を踏まえて、伝統的魚皮衣の特質を明確化し、内発的地域振興の指針を導出しました。

12.続いて、研究対象地域を紹介します。ホジェン族は、昔から中国の黒竜江省にある3つの川が合流する地域に暮らしています。現在、五つの定住地があります。本研究の対象地域は、政府から「ホジェン族の故郷」と認定された街津口村です。

13.こちらは村落風景です。同村は、三方を山に囲まれ、北部には黒龍江が流れており、ホジェン族にとって貴重な資源で埋め尽くされた地域です。

14.しかし、昔、地勢や気候の影響で、この地域では交通が不便であり、五穀を栽培できないため、それがホジェン族の自給自足の漁獵生活文化の形成を促しています。同村はロシアとの国境に位置し、歴史的には戦争や災害が多発した地域です。

15.現在は、ホジェン族の人口流出に伴い、全村のホジェン族の人口は500人のみです。

16.こちらが先行研究です。まず、魚皮衣に関する史書20冊を参考することで、魚皮衣が2千年以上の歴史を有していること、そして、魚皮衣の歴史の変遷や姿などを把握しました。

17.たとえば、この史書における絵画では、200年前に、魚皮衣を着用したホジェン族の女性が木製の道具で魚皮を加工している様子や、犬そりに乗った様子を見ることができます。また、絵に書かれた説明文字によって、女性が着用した魚皮衣の一部分の形態的特徴が分かります。

18.一方で、書籍や論文を調べた結果、魚皮衣を生活文化の側面から扱った先行研究は管見の限り見当たりませんでした。

19.したがって、私は現地調査で魚皮衣の写真や実物資料を収集し、記録しました。これらの魚皮衣の形態はさまざまで、魚皮衣の種類が豊富であることが見て取れます。

20.ホジェン族の伝統的な魚皮衣がどのようなものであるかを明確にするために、現地で魚皮衣の使用者31名を対象に聞き取り調査を実施しました。

21.記録した魚皮衣の使用方法に基づいて、48点の伝統的魚皮衣と15点の伝統的神服を確認しました。

22.それらの使用法を分析すると、日常生活における魚皮衣は9つの類型に分類されます。なかでも、人びとの認識を踏まえ、魚皮衣に手袋やたばこを入れる煙荷包などの小物類も含むものとします。

23.また、非日常生活における魚皮衣の神服は6つの類型に分類されます。神服に神手袋も含むものとします。神服はホジェン族の一員としてのシャーマンが非日常生活に、祈禱師として着用する魚皮服飾で、神具と認識されました。

24.これより以下、論文構成の説明に入りますが、論文構成はこちらのようになっています。

25.時間の都合上、今回はひとまず日常生活における伝統的魚皮衣に絞って説明します。

26.まず、収集した48点の日常生活における魚皮衣の素材とその特質を紹介します。

27.聞き取り調査によると、魚皮衣の素材として加工される魚類は鮭やコイなどの11種類であり、哺乳類は鹿とノロの2種類であることがわかりました。魚皮衣の素材は合計では14種類あります。今から、収集した魚皮衣を事例として取り上げながら、その素材を紹介します。

28.この事例はホジェン族の尤さんと彼が着用している魚皮衣についてです。この袖あり上着は、1983年から彼が鮭の皮でつくったものです。

29.尤さんは子どもの頃から母親を手伝って魚皮衣をつくり、母親とコミュニケーションを取りながらその技術を習得しました。結婚後は子どもに技術を伝えるために、夫が秋に捕獲した鮭の皮を用いて、この袖あり上着とズボンを制作しました。鮭皮は魚皮衣の主要な素材の一つであり、収集した日常生活用の魚皮衣の素材の中で、35点の魚皮衣は鮭皮を使用しています。これからは、服の素材である鮭について説明します。

30.鮭はホジェン語で「ダマハ」と呼ばれ、これは「定時に川に回帰する魚」という意味です。成熟した鮭は、海から一気に遡上し、現地の松花江に到着するまでに禁食するという習性があります。これにより、この鮭の皮は脂が少なく、強度が高いため、労働服としての袖あり上着やズボンなどの素材に適していると認識されました。

31.写真のように、毎年の白露の時期に、男性は白樺でつくった銚と船を用いて鮭の漁に出かけます。現地の伝承によると、かつて、唐の皇帝が食糧難に直面し、神に祈ると、白露の時期に鮭が現れました。兵士が鮭を食べると力が倍増し、戦いに勝利しました。それ以来、部族では毎年白露には、必ず鮭の神に感謝し、大漁を祈るための祭りを行います。このように、素材である鮭はホジェン族にとってきわめて重要な生活資源であるとともに、信仰の対象ともなるなど、鮭がなければ、人びとは安定した生活を得られなかったといっても過言ではありません。

32.こちらは呉さんが着用する袖あり上着です。この上着の素材はカワカマスです。話によると、鞣したカワカマスの皮の繊維は非常に長く、保温効果が高いため、冬用の袖あり上着とズボンの素材とされました。

33.かつて、男性は1月にカワカマスを捕獲していました。カワカマスは現地の寒さに適応できる冷水魚の一種であるため、その皮は寒さを防ぐ特性があると認識されていました。

34.こちらは尤さんが冬に履く靴です。彼は、曲がった棘があり、硬い鱗を持つチョウザメの粗い表皮の特性を、冬用の靴の底の素材として活かして、強力な滑り止め効果を実現しました。

35.チョウザメは川底に長年生息し、現地の魚類のなかで体が最も大きく、魚の首領と認識されており、ホジェン語で「アシン」と呼ばれます。毎年の8月に捕獲されます。

36.現地調査では、ホジェン族の人びとの間では、大量の魚類を捕ることは禁じられ、小さな魚類が捕れても放すという共通認識があることがわかりました。また、毎年3月と11~12月は休漁期と決められます。これらの約束事からは、当該地域の多様な魚類の持続的な繁殖と成長を保護する一方で、ホジェン族の漁獵生活の習慣、それらに対する意識が持続的な循環

の体制を構築する礎となってきたことがわかります。

37.また、漁場にさまざまな禁忌があります。たとえば、妊婦が漁場に行くこと、漁場で冗談をいうことなどは、川や魚の神に対する侮辱であるとされ禁止されます。このような厳格な約束事の下で漁獵生活が持続的に継承されてきました。

38.魚皮衣の素材のまとめに入ります。伝統的な魚皮衣は、一年にわたり漁獵や狩獵で得たさまざまな魚の生態を観察し、現地の自然環境に合う素材を選択してつくられました。それらの素材には人間の体を守る機能があります。また、鮭をはじめとした代表的な素材は、重要な生活資源だけではなく、生活を安定させるための信仰の対象の一つです。魚皮衣の素材の育成と活用の過程において、この素材は人と人の中に知恵の共有・交流を促すとともに、素材の入手に関する約束事にみられる「人と自然との共生」の意識を形成しました。

39.続いて、日常生活における魚皮衣の制作とその特質を紹介します。

40.現地調査によると、魚皮衣の制作工程には、皮の加工から、魚皮衣の制作、修繕までの少なくとも9つの工程があり、その制作過程や工具の使用によって、現地の人びとは社会活動の経験と知恵を通じて自然と共生し、身近な資源を最大限に活用していることがわかりました。これからそのことを事例によって説明します。

41.こちらは魚皮の加工の事前準備になります。現地調査では、家屋の壁に魚皮を乾かしている姿を見かけました。こちらの写真をご覧ください。壁に干した魚の皮で何着の魚皮衣を作れると思いますか？写真に写っている約80枚の魚皮で、女性用の上着とズボンのセットを制作できるそうです。かつては、女性は生涯家族の服をつくる必要がありました。一着の服をつくるには多大な時間と手間がかかるため、どこの家でも、近くに住んでいる親戚同士で互いに自発的に手伝うことが慣いとなりました。

42.皮の剥ぎを行うのは、たいていが屋外でした。一日目の昼食時になると、女性が親族に感謝するために、皮を剥いた魚の肉を切って、ホジェン族の「タラハ」という料理をつくって、親族をもてなしました。毎日の労働が終われば、翌日忙しくない女性は、二日目にも手伝いに来てくれます。こうして、女性たちが互いに助け合い、魚皮づくりを通して学び合いながら暮らしてきました。

43.また、女性は皮を剥ぎながら、残った鮭の肉を家族が冬の飢えをしのぐための食糧として乾かし、残った鱗や骨を洗って干します。

44.これらの鱗は女性の帽子の装飾に用いられました。また、7歳以上の子どもたちにはカルシウム補給のために揚げて食べさせました。

45.残った鮭の耳石は鮭が回遊する際に方向感覚を制御する重要な部分であり、乳幼児が歩行の練習などをする際の安全を守るものとされていたため、鮭の耳石でつくったお守りを乳幼児の手足につけました。

46.鮭の骨や皮は幼児の聴覚感度を高めるための玩具の素材とされました。音源の識別は自然環境での漁猟生活において非常に重要なスキルだと認識されていたためです。

47.取り出した鮭の卵は、三粒で1つの卵に相当する栄養価があると考えられるため、塩漬けして保存し、普段は幼児に食べさせます。

48.また、鮭の肋骨や皮をも魚皮衣の縫製用具である針やシンブルなどとして利用されました。

49.こうして、当該地域の人びとは、図のように、鮭の各部分は魚皮衣づくりの工程の中にも、

50.それ以外の日常生活にも、自然からいただいた神聖なものとして、無駄なく活用されてきました。

51.当然、鮭の各部位をもちいて、つくられた郷土料理も多くありますが、今回は時間の都合上、かつあいします。

52.こちらは皮剥ぎの作業になります。皮剥ぎに使用される道具は、狩猟用の刀と、再生可能な白樺の樹幹でつくった木刀です。特に、皮を剥ぐ際に皮を破かないよう、専用の木刀で頭から身までの魚皮と魚肉を分けます。

53.次に剥がれた魚皮を水に入れ、木灰水をひと匙入れ、油分を取り除きます。

54.以前は、白樺の枝や皮などを調理や暖を取るための薪として利用していましたが、そうして産出した木灰を集め、水に入れてさらに煮ると、アルカリ性の天然洗剤水が生成しました。

55.体験から、皮鞣しには工夫と時間がかかることが必要だとわかりました。かつて、家族の男女や親子2人が協力して、白樺の樹幹でつくった「木鋸刀」で皮の繊維を鞣しました。一枚の魚皮に対して数十回の鞣し作業が必要であり、1着の魚皮衣を作るためには、鞣し作業だけでも約1ヶ月かかりました。魚皮が木綿布のように柔らかくなったら、服を縫製できます。

56.図のように、人びとは一枚ずつの魚皮を対称的に組み合わせることで袖あり上着を縫製しました。また、縫製する際に切り取った端材をさまざまな用途に再利用しました。

- 57.たとえば、残った端材は、頭飾りの素材として用いられ、
- 58.もしくは、日常生活で月日を計算する伝統的なカレンダーの素材とされました。
- 59.魚皮衣が労働中に破れた場合、女性たちは一生涯にわたって端材を用いて、その衣服を修繕し続け、穴がどこにあると縫い繕いました。
- 60.さらに、端材は魚皮の紋様の素材とされます。
- 61.かつて、女性が衣服に紋様を貼るために、チョウザメの浮き袋で糊をつくりました。この糊は口に含み、少し溶かしてから使うものでした。
- 62.以上の魚皮衣の制作過程は、白樺の樹幹でつくった伝統的な家屋で行われます。
- 63.写真の通り、この家屋の中のオンドルは上から見ると“凹型”をしており、北面のオンドルは若者の寝る場と、若者が魚皮衣の縫製方法を学ぶ場です。南面のオンドルは高齢者の寝る場と彼らの魚皮衣縫製の場です。ホジェン族で魚皮衣の縫製は主に冬に行われます。かつて、親族の高齢者が一緒に南面のオンドルに座り、魚皮衣を縫製しながら、この技術を伝え合いました。
- 64.女性たちは縫い上げた服を綺麗に畳んで、西面のオンドルにあり、虫除けの効果のある樺の皮でつくられた箱に収納します。
- 65.西面のオンドルは祖先や神を祈る場でした。この箱の中には白樺の樹幹でつくられた約48種類の神像も収納されています。四季を通して、昼には神像を奉納し、夜には箱に入れて保存します。ホジェン族にとって、魚皮衣は、神像と同様に神聖で最も貴重なものでした。
- 66.魚皮衣の制作のまとめにはいります。上述のように、ホジェン族は、魚皮衣の素材を加工する準備過程において、自然資源である鮭を無駄なく活用するように工夫し、特有の「衣食住」の文化を形成するとともに、鮭の一物全体活用の知恵を見出してきました。ホジェン族が特有の「鮭の一物全体活用」を維持・継承することは、資源循環型のものづくりを実現させるための重要な要素の一つです。
- 67.また、魚皮衣の素材の加工技術は、自然との共生に基づき、人びとの協働を通して形成されてきたものです。さらに、漁猟生活と共に世代間で多様な知恵を交流・伝承する媒体としての役割を果たしてきました。それゆえ魚皮の加工過程と道具の使用には、ホジェン族が身の回りの魚や白樺などの自然資源として大切にし、無駄なく利用する生活の知恵を確認する

ことができました。また、家屋「馬架子」は、「人」「自然」「神」「住居」が融合した居住空間ということができ、したがって、魚皮衣の制作工程は、生活空間と強い結びつき有し、自然と共生するとともに、身近な自然資源の全てを活用する「ものづくり」を実践してきたものといえます。

68.続いて、日常生活における魚皮衣の使用法について紹介します。

69.ご覧の通り、収集した袖あり上着は9点ありますが、いずれも老若男女が日常的に着るものであり、

70.男性用の襟は開襟で左右対称ですが、女性用の襟は斜襟で非対称です。

71.袖あり上着に飾られた紋様には波紋、雲紋、葉紋などがあります。

72.これは袖あり上着の代表事例です。こちらは尤さんが20年前、母親の教えを心に刻み、自分の古着を孫娘が着られるように作り直したものです。話によると、かつて、着古した服は柔らかく着心地が良いため、それを着用した子どもは健康に育つと考えられていました。そのため、子どもは生後100日以降から7歳になるまで、四季を通じて着古した袖あり上着を着用しました。3歳になると、子どもが歩き始めるため、大人は自分の古着でつくった魚皮のズボンと靴を子どもに履かせました。

73.また、大人は子どもの健康な成長を願って、子どもの上着には波紋や雲紋をよく使用しました。これは、自分たちを含む生命が、身の回りの雲と川の間で循環する水から恩恵を受けていると認識されていたためです。自然の循環がより良い漁獵生活をもたらし、生命を延長すると考えていたからです。

74.これは呉さんが使用する袖あり上着です、彼の話によると、彼は子どもの頃から病弱な体質だったため、家族は彼の上着に葉紋を縫い付けていました。これは、親が子どもに強い生命力が宿るよう祈願する象徴です。ホジェン族では、病気になりやすい子どもは動物の魂を引き寄せやすい体質であると認識されていました。呉さんは両親への思いを表すために27年前から葉紋を自身の上着にも使用しています。

75.これは収集した5点の袖なし上着の実物資料です。いずれも、筒状の身頃で、襟がなく、

76.子どもと女性が着用する夏服です。

77.これは付さんが使用する袖なし上着です。この袖なし上着は鮭の皮を繫げたもので、前身

頃と後ろ身頃から構成されます。前身頃には波紋があります。ご覧の通り、子どもが7歳になると、漁獵や魚皮衣づくりなどの技術を両親から学ぶ必要があります。そのため、子どもが労働中に湿疹などの疾患にかかるのを防ぐために、両親は兄や姉などの年長者が着られなくなった袖なし上着を子どもに着せ、仕事を手伝わせました。子どもたちは、親の背中を見て、憧れの気持ちが芽生えたといえます。

78.また、孫さんによると、袖なし上着は、男性が着用することはありません。これは男性が山や川辺で労働する際に身体が露出すると神霊への不敬とみなされたためです。

79.ホジェン族では、子どもの魚皮衣は、一般的に両親が着られなくなった服からつくっていました。年長の子どもの体が大きくなると、彼らの服を年少の子どもが受け継いで着用しました。そして、結婚適齢期となる17歳頃まで着続け、結婚後は、その古着を自身の子どもに着用させました。ここでも、自然から授かったものを無駄なく利活用する人びとの生活の知恵がうかがえます。

80.収集した5点の長袍は、既婚女性が着用する労働服でした。いずれも、斜襟で、直筒の袖、腰の下部が扇型です。

81.これは孟さんが結婚した後、妊娠を願いながら、妊娠中に使用するために縫製した長袍です。長袍は既婚の女性のみ着用するものです。ご覧の通り、長袍はホジェン族の百魚衣の伝説に関連しています。これによると、ホジェン族では、新婚の女性が100匹の魚の皮でつくった服を着用することで、魚の神の保護を受けることができると信じられています。したがって、魚皮衣は人間を守る神聖な役割を果たすものとされていました。

82.これは齋さんの婿が齋さんのためにつくったひょうたん形の煙荷包です。煙荷包には巻草紋を飾ります。この紋様は、既婚女性が家族とともに来世へ転生できるよう祈るために、煙荷包や服に飾りました。

83.結婚適齢期から始まり、女子がそれを結婚の約束の印として男性に贈ると言われています。未婚の女性は男性の家族のために煙荷包をつくり、結婚式に嫁入り道具として贈ります。また、嫁ぎ先の男性の家族に敬意を表すために、つくった煙荷包を用い、結婚式で煙を詰める儀式を行います。

84.これは48点の日常生活における魚皮衣の紋様の類型です。

85.以上の紋様の役割への考察から、人びとが日常生活における魚皮衣とその紋様をものづくりの知恵として世代間で持続的に使用することで、長寿、健康、転生などといった紋様の意味についての共通の認識が構築されたことがわかりました。

86.人が亡くなると、生前に着用した紋様が飾られた魚皮衣などが副葬品とされました。

87.これは、家族が死者の尊厳を守り、また、死者が来世でも生前と同じように幸せな生活を送れるのに祈願するためです。

88.以上により、魚皮衣の使用の特質を明確にしました。魚皮衣とその紋様の使用は、ホジェン族の生と死の循環という人生観と密接に関連しており、

89.ホジェン族の固有の生活文化を伝承する媒体であり、そして家族内、家族間、生者と死者の関係を構築する媒体でした。

90.つまり、ホジェン族全員が主体となって、地域内での共同作業を通じて身近な自然資源を無駄なく利活用し、共同儀式の催しや共通認識を持つことにより、地域資源としての魚皮衣を最終的に自然に還していました。すなわち、人・自然・神の共生に基づいた資源循環型社会を実現していました。

91.ここから結論の部分に入ります。

92.本研究では、魚皮衣の制作・使用などの側面を考察することで、魚皮衣の2つの文化的特質を抽出しました。一つ目は、「特定の素材や類型、紋様を有する魚皮衣は、厳しい環境でホジェン族の体を守るものだけではなく、神聖なものとしても存在する祈願の媒体」であったということです。また、魚皮衣は、ホジェン族の特有の「生命の循環」という人生観、「万物には霊が宿る」という自然観を反映していました。つまり、魚皮衣はホジェン族のアイデンティティを象徴するものです。

93.二つ目は、「伝統的な魚皮衣は、その制作・使用を通して、地域内のホジェン族の社会関係を構築し、深化させることに役立つだけでなく、コミュニケーションを活性化させる重要な要素としても機能していた」ということです。また、魚皮衣は地域内で人、自然、神の共生に基づく、資源循環型社会の構築においても中心的な役割を果たしていました。

94.以上の魚皮衣の2つの文化的特質に基づいて、私は2019年に魚皮衣文化に対する認識状況についてアンケート調査を行いました。アンケートの回収数は78枚です。単純集計、クロス集計、共起ネットワークによる分析をすることで、

95.被調査者の属性、

96.魚皮衣の諸相、

97.その制作、

98.紋様などに対する認識や関心の現状とその要因を明確化しました。

99.以上の調査結果を踏まえ、考察した魚皮衣文化の伝承の現状について説明します。9割の被調査者は、魚皮衣の色、種類などの諸相をほとんど認識していません。それは主に40代以下のホジェン族の女性です。また、2割の被調査者が魚皮衣の制作について知識を持っており、それは主に伝承者です。認識度が低い要因として、一つ目は、若者の親の世代が魚皮衣文化に対して不十分な認識しかもっていないことです。二つ目は、文化交流活動の不足です。しかし、人びとは、魚皮衣の諸相をよく知らないものの、魚皮衣の制作の流れ、制作の学び場や方法、紋様、使用方法に対する学びについて関心を持っています。

100.総じて、村落からの人口流出に伴って人間関係が希薄化している一方で、人びとが魚皮衣の知識をほとんど知らない現在においては、魚皮衣が有する文化的特質とそれに関する知識を人びとと共有する必要があります。したがって、以下のデザイン提案を導出し実施しました。1つ目は、魚皮衣文化に興味を持つ人が持続的に利用可能な知識の共有と交流の場を創出することです。2つ目は、調査で得られた知識を整理し、資料として現地の人びとと共有することです。3つ目は、手づくり体験活動を通じて、魚皮衣の素材と紋様に含まれる文化的特質を現地の人びとと共有することです。第一段階で期待される成果は、デザイン提案の実施を通して、ホジェン族の魚皮衣文化に対する認識と関心を向上させることです。

101.これから、提案の実施について説明します。これは、昨年、現地の展示館の館長や伝承者と協力してつくった知識共有の場です。そこでは、以前のアンケート調査で活動への参加を希望した被調査者やその家族を招待しました。この展示館で魚皮衣文化への認識を深めるデザイン提案と行い、魚皮衣に関する知見をみんなと共有するとともに、4回の手づくり体験の活動を実施しました。

102.これは展示館の館長と伝承者の支援を受けて、魚皮衣制作の全過程を録画したものです。手づくり体験活動でこの動画を見せることで、参加者は、魚皮衣の制作過程で形成された白樺の利活用の生活知恵や、チョウザメ糊の作り方、魚皮衣の作り方を学びました。

103.また、この動画を魚皮衣文化に関するスライド教材にも組み込み、魚皮衣の制作方法に関するパンフレットも制作し、皆と共有しました。特に、スライド教材を用意することで、人びとに魚皮衣の歴史、素材、色、種類、造形、使い方、作り方を伝えました。

104.また、魚皮の端材を活用して、伝統的な紋様の図案を施したしおりやイヤリングを制作する体験活動では、

105.この紋様のテンプレートや紋様の意味を書いた説明書を共有し交流することで、人びとはホジェン族の特有の生命の循環という人生観と「万物には霊が宿る」という自然観に対する認識を向上しました。

106.こちらは参加者が完成させた作品で、紋様と切り取った端材を無駄なく活用しています。この体験活動を通して、参加者は資源の利活用の知恵に気付きました。伝統的な紋様を活かしてつくったしおりをお守りとして次世代に継承してほしいと述べました。

107.以上のような参加者の感想と、この体験活動で再度実施したアンケート調査結果を踏まえ、若者の魚皮衣文化に対する継承意識を喚起したいというみなさんの希望が明確になりました。そのため、以下のデザインを考案しました。次回ではそれらの提案を実施する予定です。

108.たとえば、今回の活動に参加した人びととともに、展示館で紋様づくりや魚皮衣制作の空間を再現することで、若者を招待し、この空間で魚皮衣の制作技術を体験しながら交流する予定です。この交流空間の構築を通じて、若者が「人」「自然」「神」「住居」が融合した居住空間で、身近な自然資源を活用したものづくりの生活の知恵を理解することを期待されています。

109.また、体験活動での手づくりの種類や活動回数を増やすことで、若者が何度も体験活動に参加することが期待されています。さらに、縁起の良い紋様でつくったしおりなどを、人びとのお守りとして日常生活で使用し、その制作技術を継承していくことも期待されています。

110.ここまで、伝統的な魚皮衣の類型や材料、紋様、使用、制作などの特質を考察し、魚皮衣文化の伝承の現状を考察しました。また、人びとの魚皮衣に関する認識や関心を高めるために、第一段階としてデザイン提案を実施しました。第二段階では魚皮衣制作の伝承支援を行う予定です。しかし、本研究をもって必ずしも充分とはいえません。今後は、魚皮衣の使用が地域資源循環型生活の重要な要素であることへの理解を促すために、以下の3つを研究課題とし、得られた知見を地域の人びととさらに共有したいと考えています。たとえば、今回の調査では、若者が魚皮衣を使用したいと思う一方で、防水性といった素材の特性に対する理解が薄いことがわかりました。したがって、今後、材料の特性などの研究を通じて、人びとが材料学の観点から魚皮衣の使用特性をより理解できるようになることを期待しています。

111.今後のあり方への提言として、第一段階の提案実施の過程で、現地の住民に魚皮衣の文化的特質の一部を共有することができました。今後も、魚皮衣の伝承者やその文化の継承意

欲を持つホジェン族の人びとなどと協力し、第二段階の提案実施を推進して、地域活性化をより促進したいと思っています。具体的には、文化資源としての魚皮衣の特質を生活者と共有する活動の支援強化や、若者向けの文化振興教育の充実を図りたいと思っています。これらの文化の特質を認識することで、自然と調和した生活への理解を深め、資源循環型社会の実現を推進できると期待しています。

112.たとえば、かつてのホジェン族は循環型社会の実践者でした。そして魚皮衣の制作と使用は、循環型社会を形成する重要な要素でした。さらに、魚皮衣の紋様や素材の使用は、ホジェン族特有の人生観と自然観を反映していました。生活者がこれらを再認識することで、魚皮衣の制作と使用を再び日常生活に取り入れる意識や意欲を喚起し、心豊かで、多様な「もの」、「こと」、「ひと」が繋がり合い支え合い、活力ある社会を築くことを願っています。

113.以上です。ご清聴ありがとうございました。

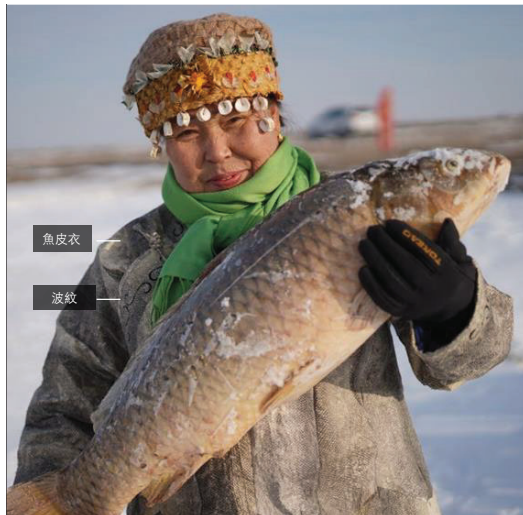
本審査発表スライド



中国の少数民族ホジェン族の伝統的服飾「魚皮衣」の文化：
黒竜江省同江市街津口村における魚の利活用に基づく生活文化

デザイン文化計画研究室 孔春

1



魚皮衣

波紋

魚皮衣を着用するホジェン族 2018年撮影

「魚皮衣」

ホジェン語で「イマハ・ナサニタラガラ」と呼ばれ、
ホジェン族の人びとが昔から、生活の中で使用
してきた服飾であり、
身の回りに生息する特定の魚の皮を一枚一枚
加工して縫製し、構成しており、
前身頃や袖口を縁起のよい魚皮の模様で飾っ
たものである。

2

「ホジェン族」

・約4千年(縄文時代の晩期)の歴史を持つ漁獵民族
である。

・清朝の時代(1636年)から、部族の名が「ホジェン族」と
呼ばれ、これは「川の下流に暮らしている人」という意味で
ある。



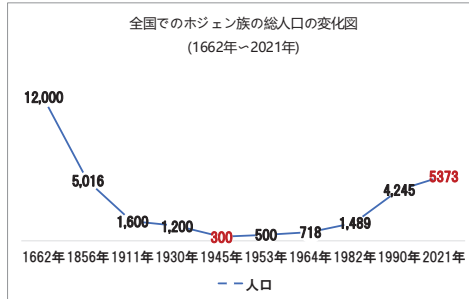
時代によって変遷した部族の名の図 筆者作成
出典: 赫哲族簡史

3

「ホジェン族の人口」

・1945年には、戦争や疫病などによりホジェン族の総人口が300人にまで減少し、一時に民族が絶滅の危機に瀕していた。

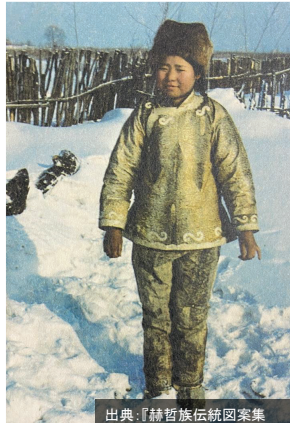
・現在、全国で約5373人いる(2021年により)
 ・中国少数民族で依然として人口が非常に少ない民族の一つである。



筆者作成 (中国統計年鑑-2021により)

4

「魚皮衣使い方」



出典:『赫哲族伝統図案集』

魚皮の袖あり上着とズボンを着用する女子



出典:『赫哲族伝統図案集』

魚皮の脚絆やノロ皮のコートを着用する男性

5

研究背景

急速な都市化の進展

農村人口の急速な流出

農村地域の人間関係の希薄化

農村地域の生活様式の変容

伝統的文化への認識の困難

生活者が伝統文化を再確認・再認識することが急務である

6

「かつて、生活文化における魚皮衣」



2016年被調査者尤秀云氏から提供

魚皮衣を着用し、漁網を修繕する姿

・多様な紋様を飾ることでより良い漁獵生活を祈願し、ホジェン族の伝統的生活文化において不可欠なものである。

7

研究背景

文化大革命時期(1966年-)

ホジェン族の狩獵生活が禁止され、通過儀礼や祭祀などを批判され破壊された

狩獵用の礼服や婚服などの服飾の消滅

服飾にある伝統的な紋様への認識の薄さ

制作技術の消滅、服飾の素材の変容

伝統的な服飾「魚皮衣」の文化が消滅の危機に直面している

8

近年、「烏貢日(意味: 吉祥)」競技スポーツ大会に着用する魚皮衣



魚皮衣の類型、素材、紋様、制作、使用などを記録し分析し、その特質を明確化した上で、得られた知見をホジェン族の人びとと共有することは喫緊の課題である

2024年撮影 被調査者尤柱華氏から提供

研究目的

①魚皮衣とその使用、制作についての調査、記録を通して

魚皮衣に内包される文化的特質の明確化

②内発的發展論の観点

魚皮衣文化を活用する地域振興の指針の導出



魚の皮を陰干する姿 2019年撮影

研究方法

1. 文献調査

・史書20冊
・書籍4冊
・学術論文5篇

魚皮衣に関する史書、書籍および学術論文に基づき、魚皮衣の歴史の変遷などの概要を把握

2. 現地調査

・2016.9-2020.11
・計5回

147点の魚皮衣と25点の魚皮衣の神服の写真・実物資料を収集し、そのうち、48点の伝統的な魚皮衣と15点の伝統的な魚皮衣の神服を確認

3. 聞き取り調査

・2016.9-2023.3
・79回

計31名の魚皮衣の使用者を対象とした聞き取り調査を実施し、確認した伝統的な魚皮衣とその神服の形態、類型、素材、紋様、使用方法、制作方法を記録

4. 考察

・1~3に基づき

伝統的な魚皮衣の特質を抽出した

11

「研究対象地域」



中国黒竜江省



同江市街津口村

- ・中国東北地方の黒竜江省にある黒龍江、松花江、ウスリ江の3つの川が合流する地域。
- ・現在、ホジェン族の五つの定住地のうちの一つである。
- ・1984年に、政府から「ホジェン族の故郷」と認定された。

12



・2019年に、政府から「伝統的な自然村落」と認定された。

- ・西・南・東の三方が街津口山に囲まれ、北部には黒竜江と松花江の支流水系が流れている。
- ・村の名前は、ホジェン語で「ガイジン」と呼ばれ、「黄金のような資源で埋め尽くされた地域」を意味している。

13

「街津口村」



- ・交通が不便であり、五穀を栽培できない地域である。
- ・ロシアとの国境に位置し、歴史的には戦争や洪水、雪害などの災害が多発した地域である。

最低平均気温 -25°C の月が5カ月以上(11月～3月)に達する。

14



・総面積：43 万 m^2 、山林の面積 25.5 万 m^2 、水域面積 8.2 万 m^2

- ・総人口：3667人、ホジェン族の人口：516人(2022年により)

15

先行研究

文献資料：史書20冊、書籍5冊、論文20篇

年	著作名	著作者	内容
紀元前453	山海經 海外東経	不明	人びとは魚皮服飾を着て、カモガを食べていた。
636	隋書 契丹伝	魏徵	人びとは魚皮で服を作り、キツネやヒョウの皮で帽子をつくり、鬚を揃ませて生計を立てていた。
1122	三朝北野宮権記巻上鉄三	後醍醐天皇	人びとは靴と衣類、魚や牛、馬、豚、羊、鶏、犬、蛇の皮を使って靴をつくっていた。
1288	釋氏譜古語	釋尊	冬の朝霜があり、魚皮でつくられた服飾が船場での贈り物として使われていた。
1537	遼東志 卷九外志	任洛	人びとは漁網の魚皮服飾を着用し、冬でも夏でも魚皮を使用し、冬にはカワカマスの皮を針で縫って使っていた。
1680	奉天塔山水記	張維翰	魚皮部族では五穀を捕えず、主に魚を食べ物とし、魚皮でつくられた服は暖かく、牛の皮でつくられた靴のようである。
1689	寧古塔紀略	楊寶	魚皮部族では冬は魚皮を縫って靴を履き、夏は魚皮を縫って靴を履く。
1721	寧古塔紀略	吳興邦	魚皮部族は冬は魚皮を縫って靴を履き、夏は魚皮を縫って靴を履く。
1722	遼東聖朝録	王一元	魚皮部族は冬は魚皮を縫って靴を履き、夏は魚皮を縫って靴を履く。
1779	欽定盛京通志	阿桂、董	スズキは阿桂と董の江の合流した所で生まれ、大きさは10kgから100kgである。その皮を剥いで、なめして使っていた。
1805	皇清職貢圖	傅楷	女性は兜のような帽子をかぶる。服は魚皮を使って、縁はカラ一布を使い、網の飾を飾る。服は魚の骨のようである。
1822	龍興雜記 和音文類聚	阿保	清は地味の入江は漁網に付く。魚皮で靴をつくり、漁で生計を立てる。
1833	西柏利東陽紀要	曹福輝	服にはルール(決まり)がある。紫色が大好きなので、袖口には2、3寸の紫色の花帯を巻いて、魚と靴の皮でつくった靴には魚皮でつくった靴紐をつける。
1838	寧古塔紀略	曹福輝	魚皮は遼東州で製造された魚皮と別れる。
1891	吉林通志 市鎮志 魚土記	李科社	魚皮を剥いで、なめして使っていた。善心機は冬でも夏まである。
1891	光緒吉林通志	長順	人びとはなめし皮で服飾をつくる……主に網で魚を獲って、魚皮で縫った靴に縫い込んでいた。
1911	吉林紀事詩	金陵、明林	魚皮は靴の皮と同じくらい柔らかく、太陽の5種類の色が互いに照らし合わされ、綺麗な色合いを呈している。
1933	遼東金石志	羅福颐	漁網を生計として魚を食し、その皮を縫って靴をつくる。
1936	遼東雜記	馮一蘭	魚皮でつくった服飾を着用した人びとは、「魚皮達子」と呼ばれ、五穀を捕えず、漁と狩猟の生活を送っていた。

「魚皮衣」に関する史書とその内容 筆者作成

①
魚皮衣が2千年以上の歴史を有しており、
魚皮衣の歴史の変遷や姿などを把握した。

16

・1805年の『皇清職貢図』の絵画記載にみる「魚皮衣使い方」

・女性の衣服は多く魚皮を用い、大襟には麻布の装飾が施され、裾には鈴が飾られている。



魚皮衣を着用したホジェン族の女性が魚皮を加工する姿



魚皮衣を着用したホジェン族の女性が犬ぞりに乗る姿

17

文献資料：史書20冊、書籍5冊、論文20篇

代表カテゴリと数	書籍(1934~2013年)		論文(2006~2017年)	
	書名	発行年	題名	発表年
民俗学と民族学	・松花江下游の赫哲族	1934		
美学と芸術学	・文飾図案和造形芸術・赫哲族巻 ・赫哲族伝統図案集錦 ・赫哲族魚皮芸術	2008	・赫哲族魚皮服飾特色研究	2006
		2011	・探究古来の「魚皮部」・赫哲族魚皮服飾	2009
		2013	・赫哲族魚皮服飾及制作工藝の伝承発展	2009
			・赫哲族魚皮服飾芸術発展研究	2013
工芸	・漁家絶技・赫哲族魚皮制作技術	2008	・赫哲族魚皮服飾元素在现代服飾設計中的応用研究	2015
			・赫哲族魚皮服飾芸術研究	2016
			・从赫哲族服飾看三江平原的造物文化	2009
			・赫哲族魚皮服飾和制作工藝研究	2013
			・黑龍江省民族博物館館藏的赫哲族魚皮袍	2014
			・赫哲族魚皮衣:服飾和社会変遷	2014
商品化、観光化のデザイン応用			・赫哲族魚皮服飾文化-以非遗传承人尤文鳳为研究对象	2015
			・赫哲族魚皮服飾的造型和裝飾工藝研究	2017
			・赫哲族魚皮服飾旅行産品の营销策略	2009
			・赫哲族傳統魚皮服飾特色的創新設計研究	2015
・魚皮材料服用性創新実用研究	2016			
・赫哲族魚皮服飾商品化開發淺議	2016			

魚皮衣の民俗学、美学、芸術学、デザイン応用について注目された。

▼
筆者の研究課題

「魚皮衣」に関する生活文化の側面の研究

18

「使用法による魚皮衣の分類」

(1) 日常生活における魚皮衣 48点

種類(合計)	番号	類型	魚皮衣	計
日常生活における魚皮衣(43点)	1	袖あり上着		9
	2	袖なし上着		5
	3	長袍		5
	4	ズボン		9
	5	靴		5
	6	脚絆		9
日常生活における小物類(15点)	7	手袋		5
	8	煙荷包		3
	9	火鉢袋		2

22

「使用法による魚皮衣の神服の分類」

(2) 非日常生活における魚皮衣の神服 15点

種類(合計)	番号	類型	魚皮衣の神服	計
非日常生活における魚皮衣(13点)	1	神帽		3
	2	神衣		3
	3	神裙		2
	4	神腰帯		3
	5	神靴		2
非日常生活における小物類(2点)	6	神手袋		2

23

論文の構成

序章 第一章 背景、目的、方法、調査地域

「魚皮衣」の歴史の変遷

本論 第二章 日常生活にみられる「魚皮衣」の特質

第三章 「魚皮衣」の神服の特質

→ 使用の特質

第四章 「魚皮衣」の素材の入手方法の特質

→ 制作の特質

第五章 「魚皮衣」の制作技術の特質

終章 「魚皮衣」の文化的特質

その文化を活用する地域振興の提案実施と指針の導出

24

「魚皮衣の類型」



25

01

「日常生活における魚皮衣の素材の類型とその特質」

26

1 伝統的な魚皮衣の素材
素材の類型：14種類



魚類



哺乳類

鮭、鯡、カワカマス、コクチマス、スズキ、チョウザメ、コクレン、コイ、ソウギョ、レンギョ、ポウウオの皮の11種類の素材	鹿の筋、鹿の腹の毛、ノロの皮の3種類の素材
--	-----------------------

27

1 伝統的な魚皮衣の素材

事例1の紹介



2018年撮影



1983年に縫製された魚皮衣(袖あり上着)

尤文鳳氏 今年73歳

28

1 伝統的な魚皮衣の素材

労働の際に着る袖あり上着とズボンの本体の素材 : 鮭(62点中35点、約56.5%)



袖あり上着



ズボン

- ・尤文鳳氏は、子どもの頃から母親を手伝って魚皮衣を作り、母親とコミュニケーションを取りながらその技術を習得した。
- ・結婚後は子どもに技術を伝えるために、夫が秋に捕獲した鮭の皮を用いて、この袖あり上着とズボンを制作した。

29

1 伝統的な魚皮衣の素材

労働の際に着る袖あり上着とズボンの本体の素材

定時に川に回帰する鮭



「秋、捕獲した鮭」
2023年にオンラインで聞き取り調査を行う際に、
尤軍氏から提供

- ・名称: 「ダマハ」と呼ばれ、これは「定時に川に回帰する魚」という意味である。
- ・生息の特性: オホーツク海から逆流に遡り、母川である松花江に到着するまでに禁食するという習性がある回遊魚。
- ・素材の特性: 皮は脂が少なく、引っ張り力が強い。
- ・皮の機能: 優れる耐久性

30

1 伝統的な魚皮衣の素材
鮭が持つ意味

安定した生活を確保する上で重要な生活資源と信仰の対象



2021年にオンラインで聞き取り調査を行う際に、尤文風氏から提供

・鮭と唐の皇帝の伝説

かつて、唐の皇帝が食糧難に直面し神に祈ると、白露の時期に鮭が現れた。兵士が鮭を食べると力が倍増し、戦いに勝利した。

・毎年の白露、秋鮭の漁の前に、鮭の神に感謝し、大漁を祈るための祭りをを行う。

・素材の入手方法：白樺でつくる船や筏で入手する

31

事例2の紹介

冬用の袖あり上着やズボンの本体の素材：カワカマス（62点中3点、約4.9%）



袖あり上着 呉福勝氏所有 2018年撮影

カワカマス皮

カワカマス皮の繊維

・素材の特性： 鞣したカワカマスの皮は比較的繊維が長く厚い

32

事例2の紹介

冬用の袖あり上着やズボンの本体の素材

零下30度以下の寒冷地に適応できるカワカマス



「冬、捕獲したカワカマス」
2023年にオンラインで聞き取り調査を行う際に、尤軍氏から提供

・最も速く泳ぐとされているため、「クチン」と呼ばれ、これは「暴風」という意味である。

・生息の特性： 1月に捕獲した零下30度以下の寒冷地に適応できる冷水魚。

・皮の機能： 寒さを防ぐ特性がある

33

事例3の紹介

冬用の靴の底の素材: チョウザメ(62点中2点、約3.2%)



- ・素材の特性: 曲がった棘があり、硬い鱗を持つチョウザメの粗い表皮
- ・機能: 強力な滑り止め効果

34

事例3の紹介

冬用の靴の底の素材

現地の魚類のなかで体が最も大きいチョウザメ



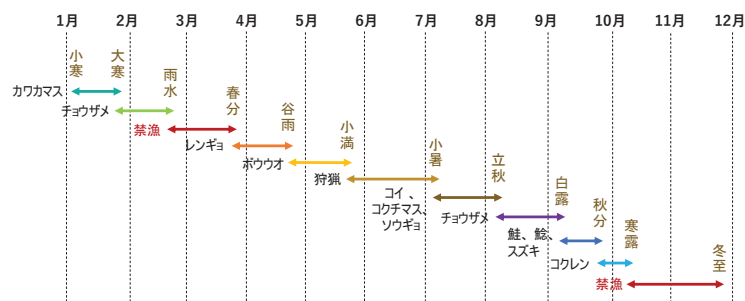
- ・生息の特性: 川底に長年生息する大型魚。
- ・「アシン」と呼ばれ、これは「首領」という意味である。
- ・8月に捕獲された。

35

1 伝統的な魚皮衣の素材

素材の保全・育成

「共通認識」



- ・魚の持続可能な利用を維持するために、毎年3月と11～12月 は休漁期とされてきた。
- ・成長過程と考えられる比較的小型の魚は捕獲が厳禁とされる。

36

1 伝統的な魚皮衣の素材 素材の保全・育成

「約束事」



①妊娠した女性が漁場に行くこと、漁場で冗談をいうことなどは、川の神に対する侮辱であるとされ禁止されている。

②家族が亡くなった人がいたら漁場の近くの屋外にある焚き火を跨いでから漁をする。

37

小結論:伝統的な魚皮衣の素材の特質

1) 伝統的な魚皮衣は、一年にわたり漁猟や狩猟で得た様々な魚の生態を観察し、現地の自然環境に合う素材を選択して作られた。
それらの素材には、人間の体を守る機能がある。
また、鮭をはじめとした代表的な素材は、重要な生活資源だけでなく、生活を安定させるための信仰の対象の一つである。

2) 魚皮衣の素材の育成と活用の過程において、この素材は人と人の間に知恵の共有・交流を促すとともに、素材の入手に関する約束事に見られる「人と自然との共生」の意識を形成した。

38

02

「日常生活における魚皮衣の制作とその特質」

39

魚皮衣の制作の流れと必要な道具



地域資源の活性化

40

①魚皮の加工の事前準備

地域資源の活性化の事例：鮭の利活用



家屋の壁に鮭皮を乾かす姿 2019年撮影

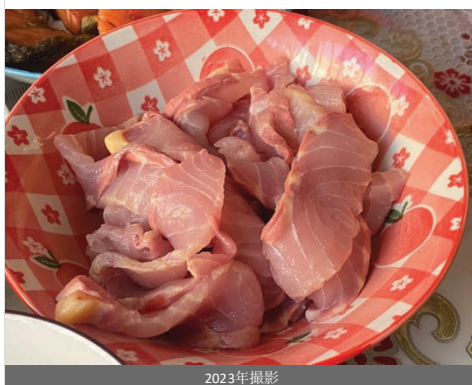
■ 鮭の皮の役割：服の材

・上着とズボンのセットの制作には、男性が約40匹の成熟した鮭を捕獲し、女性はそのなかの80枚程度の皮を加工する必要がある。

・女性は生涯家族の服をつくる必要があった。一着の服をつくるには多大な時間と手間がかかるため、どこの家でも、近くに住んでいる親戚同士で互いに自発的に手伝うことが慣いとなっていた。

41

■ 鮭の肉の役割：親族に感謝するための食材



2023年撮影

「タラハ」(中国語：殺生魚)という料理

皮の剥ぎを行うのは、たいていが屋外である。

一日目の昼食時になると、女性が親族に感謝するために、皮を剥いた魚の肉を切って、ホジエン族の「タラハ」という料理をつくって、親族をもてなす。

毎日の労働が終われば、翌日忙しくない女性は、2日目にも手伝いに来てくれる。こうして互いに学び合い、魚皮づくりを通して交流し、助け合いながら暮らしてきた。

42

■ 鮭の肉の役割：家族が冬の飢えをしのごための食糧



2018年撮影

鮭の肉を乾かしている光景



2018年撮影

鮭の鱗を集める光景

43

■ 鮭の鱗の役割：帽子の装飾材料、7歳以上の子どもの成長に必要なカルシウム補給食材



2023年撮影

鮭の鱗で装飾する帽子

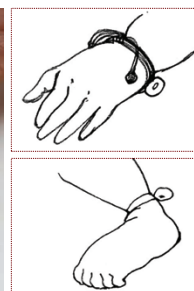
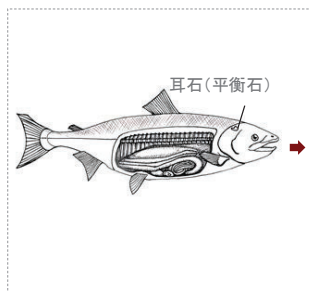


2018年撮影

揚げた鮭の鱗

44

■ 鮭の耳石の役割：乳幼児の歩行の安全を守るお守り



• この小さい骨(耳石)は、魚の方向感覚をコントロールする役割である。

• 赤ちゃんのお守りとして、生まれる時に与える。

• 赤ちゃんの手足を付ける。

45

■ 鮭の骨や皮の役割：1歳を越えた幼児の聴覚の発達を促す玩具の素材



鮭の皮や骨、白樺でつくった玩具(てんてん太鼓) 2018年撮影

46

■ 鮭の卵の役割：1歳を越えた幼児の成長に必要な栄養補給



尤文鳳氏がつくった鮭の卵の塩漬け 2024年撮影

47

■ 鮭の肋骨や皮の役割：魚皮衣の縫製用具



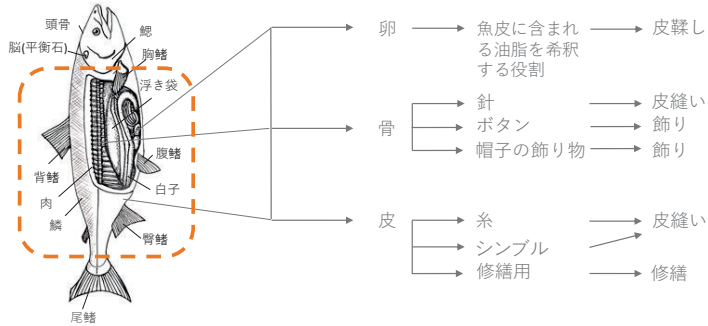
針 2018年撮影



シンプル 2023年撮影

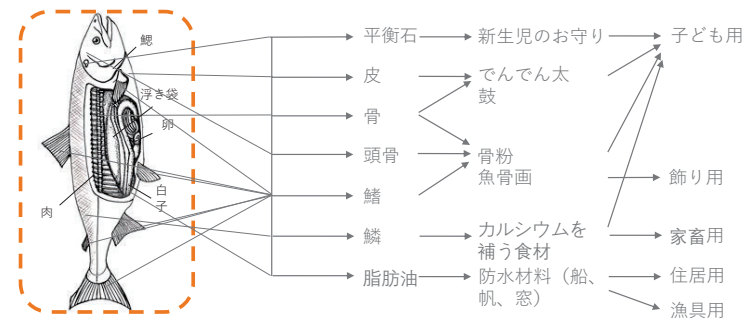
48

1) 魚皮衣の制作



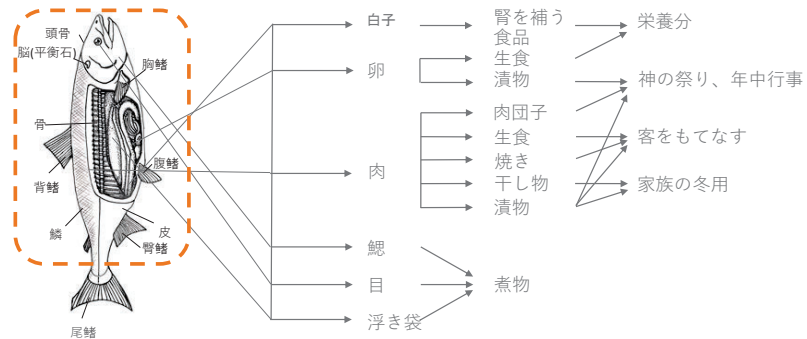
49

2) 日常的な生活用品



50

3) 日常と非日常生活に関する「鮭の食」文化



51

(2)魚皮の加工
地域資源の活性化の事例：白樺の利活用

■ 皮剥ぎ



皮剥ぎの姿



狩猟用の刀



白樺の樹幹でつくった「木刀」

52

■ 皮洗い



「木灰水」で皮を洗う姿



天然洗剤をつくるために「木灰」を集めた

53

「白樺を無駄なく再利用する過程」



夏の白樺の葉や枝、樹皮、樹幹を採集した



白樺の葉や枝などを竈門で調理や暖を取るための薪として利用された



竈門の中で収集した木灰を水と共に煮ると、アルカリ性の「木灰水」が生成した

54

■ 皮鞣し



皮鞣しの姿

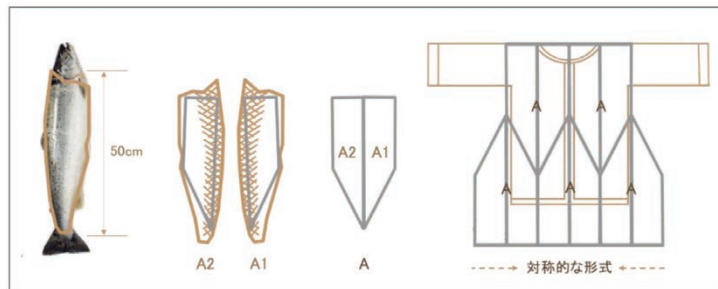


白樺の樹幹でつくった「木鋸刀」

55

(3)魚皮衣の縫製

地域資源の活性化の事例：端材の利活用



・縫製方法：人びとは一枚ずつの魚皮を対称的に組み合わせて服を縫製した。

56

(3)魚皮衣の縫製

地域資源の活性化の事例：魚皮衣の端材の利活用

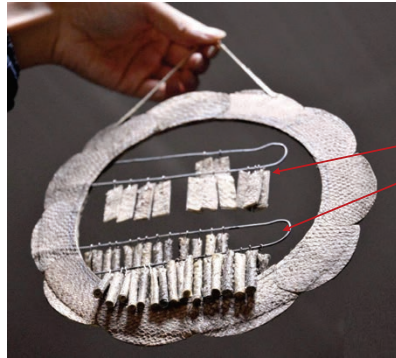
■ 魚皮の形の手入れをする際に残った端材の役割：頭飾りの素材



魚皮の形を手入れし、残った端材を頭飾りの素材として再利用した姿 2024年撮影

57

■ 魚皮の形の手入れをする際に残った端材の役割: 伝統的なカレンダーの素材



「1年は12ヶ月」
「1ヶ月は30日」
という特有の時間の認識

伝統的なカレンダー 2018年撮影

58

■ 魚皮の組み合わせ・裁断をする際に残った端材の役割: 魚皮衣の修繕の素材



魚皮の組み合わせ・裁断をする姿 2024年撮影



修繕した魚皮衣 2018年撮影

59

■ 魚皮の組み合わせ・裁断をする際に残った端材の役割: 魚皮衣の紋様の素材



チョウザメ糊を使用する姿 2024年撮影

60

■ 紋様貼りに使われた「チョウザメ糊」



チョウザメの浮袋でつくる糊を口に含む姿 2024年撮影

61

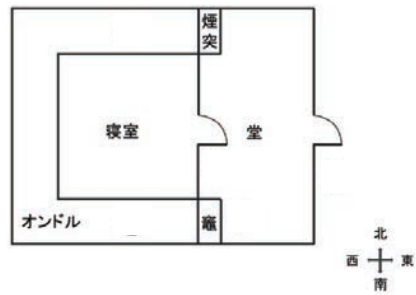
(3)魚皮衣の縫製

地域資源の活性化の事例：白樺の利活用

■ 魚皮衣の制作の空間



白樺の樹幹でつくった固定の家屋「馬架子」
2016年撮影

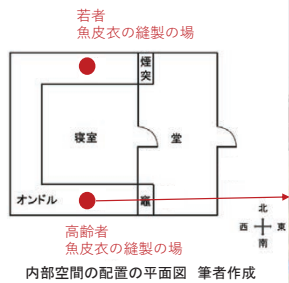


内部空間の配置の平面図 筆者作成

62

■ 北面と南面のオンドルの利用

・ 魚皮衣の縫製の場



内部空間の配置の平面図 筆者作成

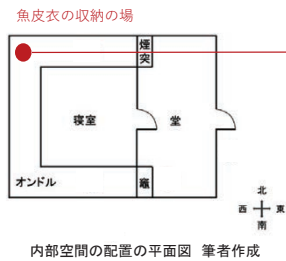


2018年街津口村で尤文風氏提供
親族の高齢者が家屋の南面のオンドルに座り、魚皮衣を縫製する姿

63

■ 西面のオンドルの利用

- ・ 魚皮衣の収納の場
- ・ 「樺皮箱」: 白樺の樹皮の利用

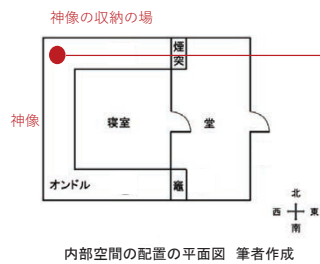


防水性と虫除け効果がある「樺皮箱」

64

■ 西面のオンドルの利用

- ・ 神像の収納の場
- ・ 神像と同様に神聖で最も貴重な魚皮衣



白樺の樹幹や樹皮でつくった「神像」と「樺皮箱」 65

小結論: 伝統的な魚皮衣の制作の特質 1

- 1) ホジェン族は魚皮衣の素材を加工する準備過程において、
自然資源である鮭を無駄なく活用するよう工夫し、
特有の「衣食住」の文化を形成するとともに、
鮭の一物全体活用の知恵を見出してきた。

ホジェン族が特有の「鮭の一物全体活用」を維持・継承することは、
資源循環型のものづくりを実現させるための重要な要素の一つである。

66

小結論:伝統的な魚皮衣の制作の特質2

2)魚皮衣の素材の加工技術は、自然との共生に基づき、ホジェン族の人びとの協働を通して形成されてきたものである。さらに、漁獵生活と共に世代間で多様な知恵を交流・伝承する媒体としての役割を果たしてきたのである。

3)それゆえ魚皮の加工過程と道具の使用には、ホジェン族が身の回りの魚や白樺などの自然資源として大切にし、無駄なく利用する生活の知恵を確認することができた。

4)固定の家屋「馬架子」は、「人」「自然」「神」「住居」が融合した居住空間ということができ、そこで行う魚皮衣の制作工程は、生活空間と強い結びつき有し、自然と共生するとともに、身近な自然資源の全てを活用する「ものづくり」を実践してきたものといえよう。

67

03

「日常生活における魚皮衣の使用とその特質」

68

3 収集した日常生活における魚皮衣の使用

袖あり上着:「ガハラ」9点



69

袖あり上着

男性用と女性用に分けられたもの



70

袖あり上着の紋様



71

袖あり上着

新生児や子どもの健康に有用な素材としての大人用の袖あり上着



文鳳氏所有 (付思形氏の祖母、今年70代)



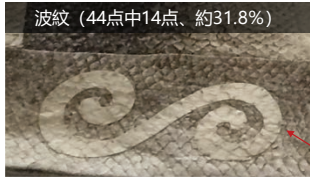
2018年楊実琴から提供
祖母の着古した魚皮衣の素材でつくる鮭皮の袖あり上着を着用する付思形氏

72

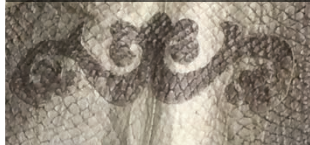
波紋・雲紋

延命長寿を祈願する媒体

波紋 (44点中14点、約31.8%)



雲紋 (44点中13点、約29.5%)



天と川の神に対する尊敬の象徴



袖あり上着を着せる尤文鳳氏の孫息子、使用開始年: 2002年

73

葉紋(44点中 5点、約11.4%)

強い生命力を祈願する媒体



呉福勝氏所有(今年60代) 使用開始年: 1997年



葉紋

74

3 収集した日常生活における魚皮衣の使用

袖なし上着:「マクアツ」 5点



王琳瑤氏所有 2016年撮影



付思形氏所有 2016年撮影



尤秀云氏所有 2016年撮影



趙宝芹氏所有 2018年撮影



尤文鳳氏所有 2018年撮影

75

袖なし上着(5点)

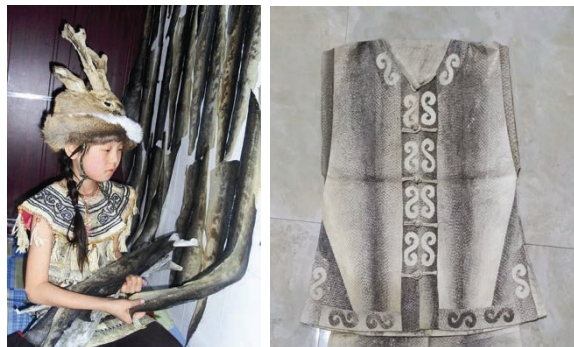
子どもや女性向けの夏服



76

袖なし上着

子どもが労働中に湿疹などの疾患にかかるのを予防する媒体



袖なし上着を着用する付思形氏が干した魚皮を取る姿

付思形氏所有 2016年撮影

77

袖なし上着

山や川で男性が自然と神霊への敬意を表した

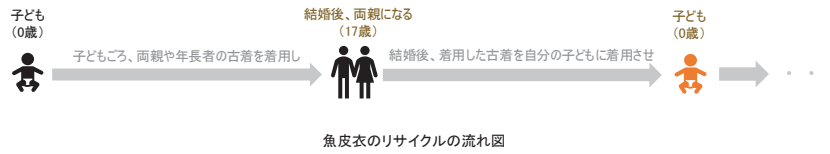


鉾で魚を捕獲する孫玉民氏、今年60代

- 男性が袖なし上着を着用することはない。
- それは男性が山や川辺で労働するため、その際に身体が露出すると神霊への不敬とみなされたためである。

78

家族内や親族内で循環的に使用された魚皮衣



- ・子どもの魚皮衣は一般的に両親が着られなくなった服からつくるものであった。
- ・年長の子どもは体が大きくなった場合、彼らの服を年少の子どもが受け継いで着用した。
- ・人びとはそれらを結婚年齢となる17歳頃まで着続け、結婚後はその古着を自身の子どもに着用させた。

自然からのいただきものを無駄なく活用する人びとの生活の知恵の構築

79

3 収集した日常生活における魚皮衣の使用

長袍:「オモギオン・チャムチ」5点



楊英琴氏所有 2019年撮影 孟繁春氏所有 2016年撮影 吳彩云氏所有 2016年撮影 尤秀云氏所有 2016年撮影 尤文鳳氏所有 2020年撮影

80

長袍(5点)

魚の神による庇護としての魚皮衣



孟繁春氏所有 2016年撮影 使用開始年:1995年

『百魚衣』の伝説

ある新婚の女性が当該地域の意地悪な男性にいじめられ、100枚の魚の皮を使って1日で長袍をつくるように言われた。翌日、新婚の女性は縫製し仕上げた服をその男性に贈った。その男性は、この服を着用した後、死んでしまった。100枚の魚皮によってつくられた服が、100匹の魚に生まれ変わった。

81

煙荷包(3点)

生命の転生を祈願する媒体



斎艶華氏所有 2020年撮影 使用開始年:1975年

- ・特徴: 瓢箪の形をしており、上部に紐が2本付されている。
- ・巻草紋: 生命の転生を祈願する象徴である。

82

煙荷包(3点)

家族内で互いに尊重する関係を構築する媒体



新婚の女性が男子の祖母にタバコを詰めた様子

- ・使用方法: 結婚適齢期(15歳または17歳)から始まり、女子がそれを結婚の約束の印として男性に贈る。結婚前、未婚の女性は男性の家族のために煙荷包を作り、結婚式に嫁入り道具として贈る。

83

3 収集した日常生活における魚皮衣の紋様の類型



84

3 日常生活における魚皮衣の紋様の役割



・人々が日常生活で魚皮衣の紋様をものづくりの知識として世代間で持続的に使用することで、長寿、子孫繁栄、健康、豊漁、豊猟、厄除け、転生、そして強い生命力などといった紋様の意味についての共通の認識として構築された。

85

魚皮衣の使用

葬儀の副葬品としての魚皮衣



86

魚皮衣の使用

死者に対する生者の祈願を反映した

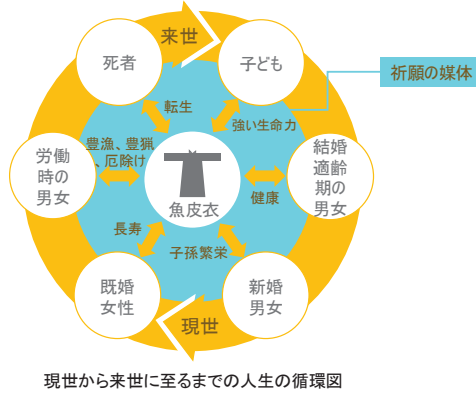


・家族が死者の尊厳を守るとともに、来世でも生前と同じように魚の庇護を受け、幸せな生活を送れるように祈願する。

87

小結論：魚皮衣の使用の特質1

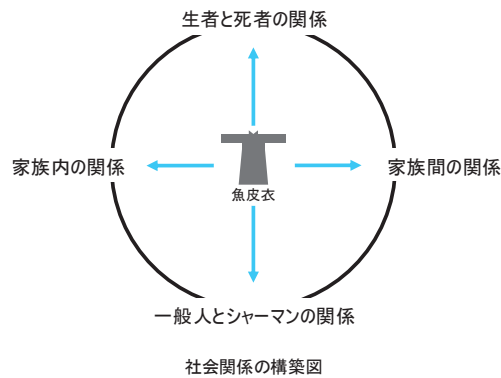
ホジエン族の「生と死の循環」という人生観を反映した



88

小結論：魚皮衣の使用の特質2

ホジエン族の社会関係を構築する媒体



89

小結論：魚皮衣の使用の特質3

ホジエン族全員が主体となって、
地域内での共同作業を通じて身近な自然資源を無駄なく利活用し、
共同儀式の催しや共通認識を持つことにより、
資源としての魚皮衣などを最終的に自然に還していた。

すなわち、人・自然・神の共生に基づいた資源循環型社会を実現していた。

90

04

「伝統的な魚皮衣の文化的特質とデザイン提案」

91

結論：伝統的な魚皮衣の文化的特質

1) 特定の形態や素材、紋様を有する魚皮衣が、
厳しい環境でホジェン族の**体を守る**ものだけでなく、
神聖なものとして存在する**祈願の媒体**であった。

また、ホジェン族の特有の「生命の循環」という**人生観**や
「万物には霊が宿る」という**自然観**を反映していた。

つまり、魚皮衣は当該地域の**ホジェン族のアイデンティティ**を象徴するものである。

92

結論：伝統的な魚皮衣の文化的特質

2) 伝統的な魚皮衣は、その制作・使用を通して、
地域内のホジェン族の社会関係を構築し、深化させることに役立つだけでなく、
コミュニケーションを活性化させる重要な要素としても機能していた。

また、地域内で**人、自然、神の共生**に基づく、
資源循環型社会の構築においても中心的な役割を果たしていた。

93

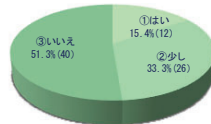
(2) 調査結果3

単純集計、クロス集計の結果図

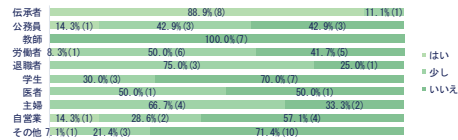
■ 魚皮衣の制作に対する認識

- ・8割以上を占める被調査者は、魚皮衣の作り方を知らない。
- ・その職業は主に学生、教師、主婦、医者である。
- ・魚皮衣文化の伝承者は、他の職業の人びとよりも魚皮衣の制作に対する認識が深い。

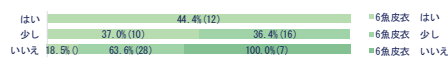
項目9、魚皮衣を制作できますか。



項目5(職業)と項目9(制作への認識度)の帯グラフ
($p=0.000<0.001$)



項目6(認識度)と項目9(制作への認識度)の帯グラフ
($p=0.000<0.001$)



97

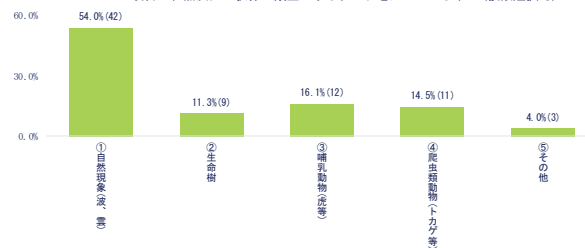
(2) 調査結果4

単純集計の結果図

■ 魚皮衣の紋様に対する認識

- ・8割以上を占める被調査者は、波紋と雲紋以外の紋様に対する認識が非常に薄い。

項目8、魚皮衣の紋様の類型のうち、どれを知っていますか(複数選択可)



98

(3) 調査結果のまとめ

■ 魚皮衣文化に対する認識や関心の現状とその要因

(1) 認識

- ・9割の被調査者は、魚皮衣の色、種類、使用方法、紋様、歴史、造形をほとんど認識していない。
主に40代以下のホジエン族の女性である。
- ・2割の被調査者は、魚皮衣の制作について知識があり、
主に政府から認定された伝承者や年長の女性である。

(2) 低い認識度の現状の要因

- ・若者の親の世代が魚皮衣文化に対して不十分な認識しかもっていない。
- ・政府などの関係者による学習施設と文化交流活動の支援が不足していることも問題である。

(3) 関心

- ・魚皮衣の制作の流れ、その学びの場や方法、紋様、使用方法に対して関心を持っている。

99

(4) 調査結果に基づく第一段階の指針の導出

現状：人間関係の希薄化、魚皮衣の低い認識度

■ 第一段階の指針：魚皮衣文化に対する認識と関心を向上させる

■ 第一段階のデザイン提案：

- (1) 魚皮衣文化の共有の「場」の創出・活用
- (2) 地域への発信・知見の共有
- (3) 魚皮衣の素材・紋様の再認識に基づく手づくり体験活動の企画

100

■ 提案の実施

- (1) 魚皮衣文化の共有の「場」の創出・活用 → (2) 地域への発信・知見の共有

場所1：同江市非遺文化展示館



- ① 展示館で魚皮衣文化の認識を高めるデザイン提案に関する交流
- ・対象：展示館の館長、伝承者、興味を持つホジェン族の人
 - ・年齢層：40代以上
 - ・参加人数：18人

場所2：国家級伝承人尤文鳳氏のお宅



- ② 魚皮衣に関する知見の共有、4回の手づくり体験の活動の実施
- ・対象：伝承者、興味を持つホジェン族の人
 - ・年齢層：40代以上
 - ・参加人数：29人

101

■ 提案の実施

■ 魚皮衣の作り方に関する解説動画の作成・使用



- 魚皮衣の作り方に関する解説動画の制作
- ・参加者：館長、伝承者など
 - ・参加人数：8人



制作の流れの動画内容



- 体験活動での制作の流れに関する動画の共有の姿
- ・参加者：伝承者、興味を持つホジェン族の人
 - ・参加人数：29人

- ・共有の内容：魚皮衣の諸相、制作の流れ、白樺の利活用の知恵、チョウサメ糺の作り方など

102

■ 提案の実施

■ 他の制作物の作成・使用



魚皮衣の文化を共有するために作成したスライド教材

共有内容: 魚皮衣の歴史、素材、色、種類、造形、使用方法、制作方法



魚皮衣の文化を共有するために作成したパンフレット

共有内容: 魚皮衣の作り方

■ 提案の実施

(3) 魚皮衣の素材・紋様の再認識に基づく手づくり体験活動の企画

■ 実施回数: 4回、参加者数: 29人



収集した魚皮衣の端材が体験活動の中で利用された姿



人びとが手作り体験活動に参加する姿

■ 提案の実施

- 活動に使われた制作物
- 共有内容: ホジェン族の特有の「生命の循環」という人生観、「万物には霊が宿る」という自然観などの知識

①紋様のテンプレート



②紋様の説明書の正面と背面

				龙纹 祈雨 辟邪	蛇纹 祈福 早日康复	鹰纹 祈福 守护心灵	鸽子纹 祈福 向神许愿
				卷草纹 来世生活幸福	云纹 祈福 长寿	刺霞纹 祈福 守护心灵	叶纹 来世生活幸福
				鹿纹 祈福 大丰收	蝴蝶纹 祈福 子孙繁荣	波浪纹 祈福 长寿	鱼纹 祈福 平安健康
				蝙蝠纹 祈福 早日康复	熊纹 祈福 辟邪	龟纹 祈福 早日康复	青蛙纹 祈福 向神许愿

■ 提案の実施

■ 参加者の感想



完成品(イヤリング、しおり)の展示

・この体験活動を通して、参加者は**資源の活用**の知恵に気付いた。

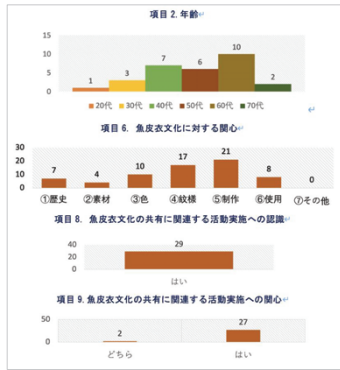
・伝統的な紋様を活かして作ったしおりを**お守り**として**次世代に継承**してほしいと述べた。

106

(5)提案の実施評価に基づく第二段階の指針の導出

■ 知見共有に対する認識に関する調査結果

- ・参加者が魚皮衣の**制作・紋様**に深く興味を持っている(項目6により)
- ・**40代以上**の**人びと**の魚皮衣文化**継承への意欲**が高まった(項目2、項目8~9により)。



■ 第二段階の指針: 若者の魚皮衣文化の継承意識を喚起する

■ 第二段階のデザイン提案:

- (1)「魚皮衣との物語」をテーマとした動画の制作の実施と公開放映
- (2)手づくり体験活動の再企画
- (3)魚皮衣づくりの「場」の再現と利活用

107

■ 第二段階: 制作技術の伝承の支援

■ 事例:

- (2)手づくり体験活動の再企画
- (3)魚皮衣づくりの「場」の再現と利活用



魚の制作工程	制作場所(注)	「田舎」のオンドルの運用(制人:制)
①魚の解体	縁側	
②魚皮の洗い	縁側の奥側	
③魚皮の干し	家屋内のフロア上	
④魚皮の刺し	北東のオンドル	若者→子ども
⑤魚皮衣の縫製	南西のオンドル	縫製機
⑥魚皮衣の収納	南西のオンドル	箱、矢張り機等の押入れ

・対象: 30代以下の若者

固定の家屋の平面図



・期待される結果:

紋様づくりや魚皮衣制作の空間を再現することで、若者たちが魚皮衣の制作技術を体験しながら、交流し、「人」「自然」「神」「住居」が融合した居住空間で身近な自然資源の全てを活用する「ものづくり」の生活の知恵を学ぶことを期待している。

108

■ 事例：

(2) 手づくり体験活動の再企画



魚皮のしおりやイヤリング、煙荷包の形を活用し制作するパウチ、冷蔵庫用ステッカー、洋服の装飾紋様

・期待される結果：

手作りの種類と活動回数を増やすことで、若者が何度も体験活動に参加することを期待している。
さらに、意味を持つ紋様で作ったしおりなどを人々のお守りとして日常生活で使用するとともに、その文化の特質を継承していくことを期待している。

109

(6) 第三段階の指針の導出

■ ここまで行った研究課題

①伝統的な魚皮衣とその神服の類型や材料、紋様、使用、制作とその特質を考察し、魚皮衣文化の伝承の現状を考察した。

②第一段階の提案の実施：人々の魚皮衣に関する様々な知識の認識と関心を高めるために、第一段階のデザイン提案を実施した。

③第二段階では魚皮衣制作の伝承支援を行う予定である。

■ 第三段階の指針の導出

④第三段階で使用の特質への認識向上に向けた指針を実施する予定である。

- (1) 伝統的な魚皮衣の各部位の紋様とその構造の研究
- (2) 伝統的な魚皮衣の材料の内部構造と特性の研究
- (3) 伝統的な魚皮衣の植物染料の技術の再現と実験的な分析

期待される成果：
魚皮衣の使用を通じて地域の資源循環型の生活づくりの再構築と認識の向上を促す。

110

■ 今後のあり方への提言

- ・ 第一段階の提案実施の過程で、地元の住民に魚皮衣の文化的特質の一部を共有することができた。
- ・ 今後も、魚皮衣の伝承者や文化に興味を持つホジェン族の人びとと協力し、第二段階の提案実施を推進して、地域活性化をさらに促進したいと考えている。
- ・ 具体的には、文化資源としての魚皮衣の特質を生活者と共有する活動の支援強化や、若者向けの文化振興教育の充実を図りたいと考えている。
- ・ これらの特質を認識することで、自然と調和した生活への理解を深め、資源循環型社会の実現を推進できると期待している。



冬、魚を運搬する道具「大ぞり」を使用する姿

111

■ 今後のあり方への提言

- ・ 例えば、かつてのホジェン族は循環型社会の実践者であった。
魚皮衣の制作と使用は、循環型社会を形成する重要な要素であった。
魚皮衣の紋様や素材の使用は、ホジェン族の特有の人生観と自然観を反映していた。
- ・ 生活者がこれらを再認識することで、魚皮衣の制作と使用を再び日常生活に取り入れる意識や意欲を喚起し、心豊かで、多様な「もの」、「こと」、「ひと」が繋がりが合い支え合い、活力ある社会を築くことを期待している。



魚皮衣の制作方法を学ぶ姿

112

